



悪しき夢、幾度見ても身に負わじ

「……なんだ、それ？」

「おまじない、わるいゆめをみないようにっていうやつ。それで、とくべつにそのおまじないをとなえてくれるひとを、ゆめのもりびと、っていうんだよ。ゆめをまもってくれるひとっていいみなんだって」

「ふーん、じゃ、おまえの、その、もりびとは？」

「……まえは、おかあさんとおとうさんがふたりでやってくれてたんだけど、いまは……」

「……じゃあ、おれがなる」

「え？」

「おれがなって、おまえをまもってやるよ」

「ほんと？ じゃあ、わたしも、このもりびとになって、まもってあげるね」

「ああ、やくそくだ、ゆき」

「うん、やくそくだよ、こう」

* * *

ひどく懐かしい夢を見た。ずっとずっと小さい頃の夢。

六花（りっか）は数度瞬きをすると、ゆっくりと起きあがった。そして、寝台から出ると軽く伸びをしてから着替えだす。

ここはとある小さな島国の王が抱える軍のうち、第一軍の兵達に与えられた宿舎の一室だ。そんな場所に彼女、六花がなぜ寝泊りしているのかと言え、それは彼女がその第一軍の兵士だからだ。

二人で住むのに少し広いくらいのこの部屋には、ちょうど部屋を二つに分けるように柄つきの布がカーテンのようにかかっている。六花が着替え終わり、腰にベルトを巻こうとしていると、そのカーテンの向こうから声がした。

「雪、開けていいか？」

年若い男の声だ。そして、雪、という呼びかけに六花は当然のように答える。

「ああ、いいぞ」

その答えを受けて、カーテンがざっと音を立てて開いた。

そこに立っていたのは無駄なく筋肉の付いた青年だった。年の頃は十七、八といったところか

。「おはよう、光（こう）」

「ああ、おはよ」

六花が顔だけを向けて挨拶すると、光、と呼ばれた青年も小さく目を細めて返してきた。そして、まじまじと六花の姿を眺めてから苦笑交じりの笑みを浮かべる。

「何だ？」

六花が訝しげに尋ねると、彼は彼女自身を指差す。

「いや、相変わらずその格好なんだな、と思って……」

この国の通常の女性の服装は、丈が長く体の線があまり出ないワンピースか、同じく体の線がわかるかわからないか位のブラウスのような上着に、ズボン、もしくはスカート、というような

もので、あまり体系や素肌が表に出るものではない。

が、六花が身に付けているのは、体にぴたりとした膝の上程の丈のズボンとブラウスで、さらに腰には幅広のベルトをしている。これは剣を吊るすためのものだ。

「いつものことだろ？」

「や、そりゃそうなんだけど……」

慌てて目を泳がせる彼を見て六花は目を細める。

「なんだ、なんか文句でもあるのか、光流（みつる）」

問いかけると彼、光流は観念したように溜息をついた。

「別に文句があるわけじゃない。ただ、……たまには女らしい格好をすればいいのにと思っただけだ」

言ってしまうってから、ばつが悪そうにそっぽを向く光流に、六花はあきれたように言葉を返す。

「あんな格好してたら思うように動けないじゃないか」

「わかってる」

すねたような声音に軽く笑って、六花は光流を促す。

「ほら、準備ができてるなら行くぞ。遅刻でもしたら隊長にどやされる」

* * *

六花と光流が初めて会ったのは、六花が六歳、光流が七歳の時だった。そしてその日は、六花の両親の、葬式の翌日でもあった。

六花の父は第一軍の隊長で、国王のお気に入りだった。そして母の方も六花を産んでからは引退してはいたものの、元は第一軍に属する女兵士だったのだ。

この国は小さいながらも豊かで作物にも資源にも恵まれ、他国との関係も良好だ。

だから軍の仕事は、王族や城の護衛と町の治安維持が主である。そして今の国王は民の信任も厚く、部下にも恵まれていた。

しかし、今から遡ること十年前。一度だけ、謀反が起きたことがあった。

前王が急死し、当時即位して間もなかった国王の暗殺を企てた者がいたのだ。企てたのは、この国に古くから伝わる伝説や慣わしを否定し、自分たちで神を作りあげて信仰していた一派だった。

その一派は自分達をまとめている長がこの国をも治めるべきだ、と考えたらしい。一人の刺客が召使に変装して城内に紛れ込み、一日の仕事を終え書斎から出て来たところの新王を狙った。

ちょうどその場には国王と会談していた六花の父と、父の忘れ物を届けに来ていた母がいた。咄嗟に父がその剣を自分の剣で受けたが、あいにく相手は二刀流だった。父が相手の剣を受け、もう片方はまっすぐ国王に向かっていく。母は反射的にその身を盾にして彼を守った。そのあと父と刺客は剣を交えていたのだが、結局相討ちとなってしまったのだ。

六歳にして孤児となってしまった六花に国王は、申し訳ないことをした、許してくれと謝った。この国の最高位に就く者が年端も行かぬ子供に頭を下げたのだ。

だが、六花にはすべてが現実味のないことにしか思えなかった。家に帰ればいつも通り母が笑

顔で出迎えてくれ、夕方になれば父が帰ってきて、笑って抱き上げてくれるような気がした。もちろん、それがありえないこともわかっていたが。

そうして通夜が行われ、葬式が行われとせわしなく家に人が出入りし、六花は悲しみに浸って泣く機会を逃してしまっていた。参列した者は皆それがわかっていたので、黙って六花を抱きしめては帰っていった。

国王や父の同僚が六花を引き取ろうと申し出てくれたが、六花はそれを断り、それまで家族で住んでいた宿舎にそのまま住まわせてくれるように頼んだ。彼らは快く引き受けはしたものの、たった六歳の子供が一人になることをひどく心配した。だが、一人で大丈夫かという問いに平気だと答え、六花は近所にある浜辺に向かった。とにかく、一人になって思い切り泣きたかったのだ。

しばらく泣き続け、ようやく顔を上げた頃には空も海も夕暮れに染まっていた。

その時に何故その気になったのかはわからない。もしかしたら予感のようなものがあったのかもしれない。

普段行くことを禁じられている岩場に、彼女は足を向けた。その岩場の周辺は波が高く、また水深も結構あるので、危険だから近づくなと言われていた。だが、この時彼女はふいにその言いつけに背いてみる気になったのだ。そして、苦勞して登り、岩の上に立った六花は辺りを見回して信じられないものを目にし、硬直した。

小柄な、彼女と同じ位の背丈の人影が、岩に引っかかっていた。気を失っているらしく、今にも波にさらわれそうだった。大人を呼びに行こうかとも思ったが、その間に波にさらわれれば命は無いだろう。いや、もしかしたらもう。そこまで考えて六花は首を振った。

もう人が死ぬのはいやだ。

そう思って人影の傍まで移動し、必死で引き上げた。六歳の子供にはかなり無理があったが、死なないで欲しいと思う心が普段よりも力をくれた。

そうやって引き上げて見ればそれは六花と同じ年頃の少年で、ぐったりとしてはいたが息はある。この辺りでは見かけない顔だ。流石にこの岩場から少年を抱えていくほどの力は六花にないが、そろそろ潮が満ちてきてしまう。置いて行くことはできなかった。なので。

「ねえ、起きて、起きてよ、起きろっ！」

できる限りの大声を上げて、彼の体を揺さぶる。何度か繰り返したところで、ようやく反応があった。

「う……」

小さく呻き声を上げたかと思うと、少年はゆっくりと瞼を開いた。しばらく焦点が定まらず視線をさまよわせていたが、やがて自分の顔をのぞき込んでいる六花をぼんやりと見返してきた。

「お前は……？　なんで、泣いてるんだ？」

これが六花と光流の出逢いだった。

その後、六花は少年をなんとか立ち上がらせ、寄り添って支えながら歩いて帰った。しかし、宿舎にたどり着くと同時に、彼はぱたりと倒れてしまった。六花が慌てて近くの人を呼びに行き、自分の部屋の寝台まで運んでもらった時には、彼は高熱を出していた。

それから三日間、少年は眠り続け、再び目を覚ました時に彼は、自分に名前以外の記憶をすべ

て失ってしまっていたのだ。

仕方が無いので宿舎に住ませようという話になった時、六花が連れて来たという事と二人の年が近い事、そして何よりも本人達の強い希望により、二人は一緒に住むこととなった。

それから十年経ち、今に至るのである。

* * *

第一隊では毎日、朝食の前に軽く鍛錬をする事になっている。

六花と光流が稽古場に着いた時、隊長以外には誰も来ていなかった。

その隊長は二人の姿を見ると何も言わずに視線だけで、先に始めろと言ってきた。幼い頃から稽古場に入出入りをしてきた二人と隊長の付き合いは長い。だから言葉で言われなくても、なんとなくわかる。

「いくぞ、六花」

光流の掛け声を合図に二人は同時に走り出し、稽古場を出て行く。ランニングが終わってから、鍛錬に入るのがこの稽古場での掟だ。

ちなみに家では雪、光と呼び合う二人だが、稽古場などの仕事の場では六花、光流、と本名で呼び合う。一応のけじめをつけるためだ。咄嗟の時などにはそれがなくなる事もあるが。

何故二人がこんな呼び方をしているかという、実は結構単純だったりする。

初めて六花が光流に名前を教えたとき、六花というのは雪という意味なのだと教えたら、じゃあ呼びやすいから雪と呼ぶ、という事になり、光流が教えたときは最初に字を書いて見せたので六花が誤って、こう...と読んだのだ。二人とも、他の者に変わった名だと言われる事が多々ある。

それはさておき。

二人が走り終わり稽古場に戻ってくると、他の兵士たちも続々と集まってきてランニングに入ろうとしていた。皆、二人を見るとそれぞれ声を掛けてくる。

「おはよう、今日も早いなお二人さん」

「よう、相変わらず仲がいいなあ、お前ら」

「ああ、おはよう」

「そりゃ、ガキの頃から一緒ですから」

掛けられた声にそれぞれ答えながら、二人は己の得物の準備をする。

余談だが、この第一隊に女兵士は六花一人だ。女が兵士になってはいけないなんて決まりはないし、現にほかの隊にも何人かいる。が、やはり男に比べて数は少ないし、力や体力の差もあるので、実力的に一番上となるこの隊に上がってこれる女性はなかなかいないのだ。

しかし、六花はこの隊の隊長以外の兵士の中では一位、二位を争う実力の持ち主だ。幼い頃から稽古場に入出入りしていた、ということも関係しているかもしれないが、ほとんどは本人の努力と才能の賜物だろう。ちなみに六花と争っているのは、今彼女の隣にいる光流だったりする。

早朝練習は基本的に自主練だ。たまに隊長からこれをやれ、と指示される事もあるが、そんなことはごくたまに。要は自分に必要な鍛錬を、一日の一番初めにやっておけということだ。

そのため、二人が自主練を開始しようとしていた矢先、いきなり隊長が集合を呼び掛けた。

「.....なんだ？」

「さあ……」

そんな会話を交わしつつ集まると、全員集まったのを確認した隊長が口を開いた。

「最近、日野神乃伝言者（ひのかみのでんごんしゃ）一派の動きが活性化してきている、との情報が入った。皆、心して鍛錬に望むように。何かあった時はこの第一隊が一番に動く事になるだろうからな」

告げられたのはそれだけだった。皆いささか緊張した面持ちになったが、普段通り、それぞれの鍛錬に戻っていく。

そんな中、六花は一人動けずにいた。いや、日野神乃伝言者一派の動きが活性化してきている、の後からは隊長の言葉さえ耳に入っていなかった。

日野神乃伝言者、それは十年前に謀反を起こし、六花の両親を殺した刺客を送り込んできた一派の名だ。

その名前だけがぐるぐると回り、頭の中が真っ白になって何も考えられなくなっていると、ふいに左手が誰かの手に握られた。慌てて思考を呼び戻し隣を見ると、光流が心配そうな眼差しでこちらを見ている。視線で「大丈夫か」と問われたのに頷き返して、彼の手を握り返す。そうして大きく息を吐き出すと、握られている手に少し力が加わって軽く引かれた。

「ほら、やるぞ、今日は手合わせをするんだろ」

「う…ん……」

なんとか声を絞り出して、空いている場所を探す。この状態で手合わせをしてもすぐに負けるなと思ったが、それを言葉にすることはなかった。

朝食を終えて再び稽古場に戻る道すがら、六花の心はなかなか晴れなかった。

敵を討とうとは思わない。そもそも、直接両親を殺した相手は父によって討たれているし、ただ他の神を信仰しているだけならば、それはそれでいいと思う。

しかし、そういう想いと名前を聞いた時に感じる感情は話が別だ。こういう時、胸に広がるのは憎しみなどではなく、両親を失ったときに感じたのと同じ深い絶望と、どうしたらいいのかわからないという困惑だった。

そして、光流はそれを知っている。彼女が両親を失ったのと入れ替わりのように出会い、それ以後の彼女をずっと見てきたから。そのため、余計に心配させてしまうことも多い。

だが、もしもまた謀反などを企むというのならば、全力で向かい討つつもりでいる。これ以上自分の大切な人達を奪われる気は毛頭なかった。

という思考がずっと脳内を占めていたため、六花は自分の前に人が立ったのに気が付かなかった。突如、額に痛みが走る。

「つつ…！」

見ると、光流があきれ半分心配半分という表情でこちらを見ていた。どうやら彼に額を指弾されたらしい。

「おいおい大丈夫か、雪」

「うるさい」

思わず減らず口で返してしまう六花である。

改めて周りを見回してみると、すでに稽古場に戻ってきていた。それなのに彼が雪、と呼んだということは、よっぽど自分の気が散じていたのだろう。これが彼ではなく何かの刺客だったら、十中八九命が奪われていた。完全な失態だ。

「これから試合をやるとき。今日は自由に組んでいいってことだけど、一緒にやるか？」

「もちろん」

即座に返すと、彼は安心したように笑った。ちゃんと意識が戻ってきたからだろうか。

試合というのは、鍛練の一環としてたまに行う二対二で行うトーナメント式の実力試しのようなものだ。一試合ごとの時間制限は無く、相手が降参するまで続けるため、時間がかかる。恐らく午後もこれで終わるだろう。個人の實力はもちろん、仲間との連携も重要だ。組む相手を指名されることもあるが、今日は自由にしていいらしい。そして、六花と光流が組むと向かう所敵無しになる。この時ばかりは相手に隊長が入っていても、二人の連携の方が若干勝るのだ。

そして試合が始まった。

昼食を含む休憩時間が過ぎ、試合が再開される。六花と光流は順調に勝ち進んでいた。

このままいくと決勝で隊長と当たることになりそうだ、などと他の者の試合を見ながら二人で話していると、一人の青年が話し掛けてきた。

「あっ、あの、さっきはすごかったです。どうしたら、あんなに強くなれるんですか？」

それは最近第一隊に上がってきたばかりの、二人と同じ年頃の者だった。名は確か、勇也（ゆうや）といったか。敬語なのは先輩という意識があるからだろうか。彼の組はずでに負けているはずだ。

二人は顔を見合わせてから言った。

「たぶん、毎日鍛練を欠かさない事、かな」

「俺達だって、元から今ほど体を動かさせた訳じゃないしな」

「じゃあお二人は、休みの日にも鍛練なさっているのですか?!」

驚いたように声を上げる勇也に苦笑しつつ頷く。

「まあ、手合わせを一回位はするという程度には」

「それから、別に敬語じゃなくてもいいぞ。数少ない同年代だからな」

光流の言葉に一瞬目を見開いた勇也は、それからとても嬉しそうに笑って、頭を下げた。

「ありがとうございます！」

それからしばらく三人で話していたが、六花と光流の順番がきたので二人は立ち上がった。勇也が後ろで「頑張れ」と言ってくれるのに頷き返して、六花は確認するように自分の得物を見下ろす。彼女の得物は細身の剣だ。ちなみに光流の得物は長剣である。

二人が試合場の真ん中辺りまで来ると同時に、相手の二人組みもそれぞれの位置につく。どちらもそれなりに腕の立つ者達だ。得物は片方が槍で、もう片方が普通の剣である。

「始めっ！」

号令がかかって試合が始まる。が、光流と六花は動かない。得物を構えることもなく、相手を見ているだけだ。

相手の二人組も少しの間二人を凝視していたが、やがて耐え切れなくなったのか、地を蹴った。そのままそれぞれの得物を構えて槍の方が六花に、剣の方が光流に突進してくる。しかし、それでも二人は動かない。

ぎりぎりまで相手を引きつけてから、相手が間合いに入る直前でようやく二人は横に飛び退り、そこで初めて剣を抜いた。六花は、相手が振り向きざま横殴りに払ってきた槍を剣で受け、そのまま跳ね上げた。そして相手が体制を崩しているうちに後ろへ下がり、相手から離れる。光流は光流で、相手が振りかぶってきた剣をそのまま弾き飛ばして後ろに下がり、六花と背中合わせ

となる位置に立つ。

相手が体制を立て直すのを見ていた六花は、後ろで光流がわずかに身じろぎしたのを感じて小さく微笑した。周りで見ている者にはわからない、背中を合わせているからこそわかる合図だ。

それから一呼吸を数える間に六花と光流の位置が入れ替わる。それまで六花と対峙していた相手に光流が、光流の相手には六花が向かう形になった。端から見たら突然入れ替わったような二人に相手はもちろん、周りで息を詰めて見ていた者達も啞然としている。

その隙に二人は同時に地を蹴った。六花はそのまま相手に詰め寄り、いきなり間合いに入っただけですぐには対応できない相手の得物を叩き落す。そして、剣を閃かせると相手の首元に刃を当てた。

光流は相手が咄嗟に払った槍を避け、相手の背に回りこんで膝を崩させ首に刃を当てる。六花とほぼ同時だ。

「降参だ」

相手が負けを認めると、二人はすぐに剣を収める。そして四人で互いに礼をすると、周りから歓声が上がった。

その後は、他の者達の試合が長引いて夕食の時間までに終わらず、結局決勝までいかに終わってしまった。王軍では夕食の後には正規の練習は無し、ということになっている。やるなら自主練でやれということだが、普段の練習がきついのでやるものはあまりいない。ちなみに食事は食堂で取るので時間厳守だ。

「久しぶりにお前達と本気でやり合えと思ったのになぁ」

隊長が本当に残念そうに言うので、六花と光流は顔を見合わせてしまった。チームワークは軍一と謳われる二人だからなるとかなるだろうが、やはり相手は隊長。本気でやり合うとなるとかなりきついものがある。決勝までいかになくて良かったかもしれない。思わず本気でそう思ってしまった二人である。

食堂の食事は主に兵士の妻や娘が作る。別にそうしなければいけないと決まっている訳ではないし、料理人を目指している男子も修行の意味も含めて作ったりしているが、やはり女性が圧倒的に多い。花嫁修業も兼ねて、ここで働いている若い娘も沢山いる。そして、彼女達は六花の悩みの種だったりするのだ。

「ねえねえ光流君、今日のこのお魚の煮付け、私が作ったんだけど、おいしい？」

「ああ、結構いけるよ」

「ねえ、光流さん。明日、お休みでしょう。市がたつんだけど、良かったら一緒に行かない？」

「悪いな、明日はちょっと用事があるんだ」

容姿もそれなりにいいし、人当たりもいい。そして第一隊でも首位を争う実力の持ち主。

そんな光流に想いを寄せる少女は少なくない。しかし本人はまったく気にせず、いつも六花と一緒にいるので、叶わないとあきらめる者も多い。だが、中にはあきらめきれずに、六花に嫉妬心を募らせる者もまた、少なくないのだ。今のところ、嫉妬の挙句にひどいことをされたということは無いが、あからさまな敵意を向けられるのはあまり嬉しくない。

「六花、一緒に湯殿行こう？」

ちょうど食べ終わった頃、数少ない親友の一人である優奈（ゆうな）が声を掛けてきた。

「わかった」

光流に一言断ってから席を立ち、優奈と共に食堂を出て、湯殿に向かう。

脱衣場で服を脱いでいたら、浴場から声が聞こえてきた。

「何で光流君は、あんな女らしくも無い乱暴そうな人とくっついてる訳！？ 納得いかない！！」

その言葉を聞いた瞬間、六花の手が一瞬止まった。優奈が気遣うような視線を向けてくるのに、大丈夫、と首を振り、視線を落とす。

少しして、二、三人の同年代の少女たちが出てきた。浴場に他の人影は無いから、先の声を上げたのはこの内の一人だろう。六花の姿を認めるとばつが悪そうにお互いを見交わす。そしておずおずと声を掛けてきた。

「あの、さっきの...」

「ん、なにかあったのか？」

わざと今来たばかりでわからないという振りをすると、少女たちはほっとしたようにして、なんでもないと首を振った。そっか、と返してそのまま浴場に向かう。後ろから優奈が追ってくるのを感じたが、振り返る気にはなれなかった。

体を洗って浴槽に浸かると、優奈が心配そうに顔を覗き込んできた。

「大丈夫？」

「ああ」

すると、優奈は少し怒ったような声音で断言した。

「私は六花が女らしくないとか乱暴だなんて、思ったことないからね」

驚いて顔を上げると、今度は泣きそうな顔をして優奈は続ける。

「だって女らしいだの男らしいだのって、多少振る舞いのことが入ったって、結局どれだけ人に優しくなれるかだと思うもの。私は六花がとっても優しいことを知ってる。それも表面上の優しさじゃなくて、ちゃんとその人のことを思って注意したり、怒ったりできる、本当の優しさだって。それを女らしくないだの乱暴だの、まったく失礼しちゃうわ」

その言葉を聞いて、六花は思わず苦笑してしまった。そう言っている優奈の方がよっぽどその言葉に当てはまる。

もう出るという優奈を、もう少し入っているからと先に帰して、六花は視線を落とした。そうしていると自然、自嘲が漏れる。

「女らしくない、か」

優奈がああ言ってくれるのはとても嬉しいけれど、やっぱり自分はそんなに女らしいとは思えない。乱暴だということにも実は頷けてしまう。が、他人にそれを言われると、やはり結構傷付くものがあるのだ。

「そもそも光は、私のことを女だと思ってないしな...」

彼からすれば六花は、同居人であり戦友であり幼馴染だ。あと夢の守人も入るか。

本来夢の守人というのは、相手が悪い夢を見ないようにと願う人を言い、それは大抵恋人や夫婦がお互いになる。子供が幼い頃には両親が二人でなったりもする。

だが六花と光流がその約束を交わしたのは本当に幼い時で、そんなことは知らなかったし、どちらにせよお互いがお互いの拠り所だったのだ。今でもそのままなのは、未だに一緒に暮らしているし、お互いを頼りにしているのは変わらないからでそこに恋愛感情はない、はずだ。少なくとも光流はそうだろう。六花を女として見ているような素振りを、彼は見せたことがないのだから。わかっているけど少しだけ寂しい。一緒にいられるこの位置は、同時にこの位置から動けなくさせる。それもいつまで続くかわからないが。

「まったく、らしくないな」

考えても埒のあかないことだとわかっているのに。溜息を一つついて両頬をぴしゃりと叩く。自分しかいない広い浴場に、その音は思いのほか大きく響いた。

誰かに呼ばれたような気がして、六花は目を覚ました。もう結構遅い時間だ。それこそ、街中が眠りについているような深夜。

何故、と思った瞬間、部屋の中央にかかっているカーテンの向こうから苦しそうな声が聞こえてきた。

「光？」

そっと呼びかけても返事はない。起き上がってカーテンに手を掛ける。

「光、開けるぞ？」

一応断ってからざっと開ける。そこには、うなされている光流の姿があった。かなり苦しそうだ。起こした方がいいだろうと判断して、六花は光流の体を揺さぶった。

「おい、光、起きろ、光流！ 光っ！！」

最後の方はかなり乱暴に揺さぶると、光流はゆるゆると瞼を開けた。そして、ぼんやりと六花を見つめる。

「...雪？」

次第に意識がはっきりしてきたのか、軽く瞠目すると、ぱっと起き上がった。そしていきなり六花の手を取ると、強く握り締める。

「え、おい、光？」

六花が驚いて声を上げると、ゆっくりと顔を上げてまじまじと見つめてから、ポツリと呟いた。

「.....ゆ...め？」

そう問いかけてくる瞳に怯えの色を読み取って、六花は頷いた。きっと、とても嫌な夢を見たのだろう。そう思って空いている方の手を伸ばす。その手で光流の目を覆って、小さくかつできるだけ優しく呟いた。

「悪しき夢、幾度見ても身に負わじ.....」

光が嫌な夢を見ませんように、次は良い夢を見られますように。そう念じながら何度か呟いていたが、なかなか手を離さない。いつもなら何度か唱えると、安心したように笑って見せるのに。怪訝に思って顔を覗き込む。

「大丈夫か？」

「.....ああ」

視線を合わせると、深呼吸をするように息を吐き出して小さく笑うが、それでも手を離そうとしない。浮かべた笑顔も泣き顔に近いように見える。それを見て六花は軽く溜息を吐いた。

「わかった、一緒に寝よう」

彼女がそう言うとき光流は大きく目を見開いたが、すぐに何うような表情を見せる。

「.....いいのか？」

「今日だけだからな、じゃないとお前、眠れなさそうだし」

そう言って微笑を浮かべてみせると、彼はどこか安心したように頷いた。それを確認して六花は光流の隣に入り込み、そのまま横になった。すぐに光流も横になる。

実は二人共、一緒に寝るということにまったく抵抗を感じていない。それもそのはず、五年前

まではずっと一緒に寝ていたのだ。もともと部屋には寝台が二つあったのだが、両親を亡くしたばかりだった六花も記憶を失くした光流も、大人用の寝台に一人で寝るのはどこか心細かったのである。

別れて寝るようになったのは、近くの宿舎に寝泊りをしている隊長が、さすがに体つきが変わってくる頃だから、と部屋の中央にカーテンを掛けてくれたためだった。本当はその時、どちらかが違う部屋に移るべきだと言われたのだが、それには頑として首を縦に振らなかった二人である。

その後もどちらかが悪夢にうなされたりして寝付けなくなったりすると、一緒に寝たりすることが何度かあった。と言っても添い寝をする程度なのだがしかし、今回は違った。

光流は横になると、ふいに六花を抱きしめてきた。そのまま、すがりつくように彼女の肩に顔を埋める。驚いたのは六花の方だ。

「え、ちょっ、光?!」

「……」

慌てて呼びかけても返事をしない光流を一瞬突き飛ばそうかとも思った六花だったが、すぐに彼の腕がかすかに震えているのに気がついた。少し身じろぎをしてから、そっと問い掛けてみる。

「...どんな夢を見た？」

その問いを受けた途端、彼の腕に力が籠る。少し苦しいのを我慢して答えを待っていると、しばらくしてからようよう、光流が口を開いた。

「……が……だ…め」

小さく掠れ気味で、耳元で言われなければ絶対に聞き取れないほどの声で紡がれた言葉に、六花は大きく目を見開いた。

——お前が死んだ夢

確かに光流はそう言った。普段からは想像もつかない頼りない声音で、搾り出す様にそう呟いたのだ。

そうか、と小さく呟くと、六花は彼の頭と背に手を伸ばした。自分などよりもずっと広いのに今は小さく思える背をしっかりと抱きしめて、幼子をあやすように頭をぽんぽんと叩く。そして先ほどよりも強く念じながら、悪夢を祓うというまじないを唱えた。

「悪しき夢、幾度見ても身に負わじ」

しばらくそうしてから、ゆっくりと口を開く。

「大丈夫だ、私はちゃんとここにいる」

「……」

「ちゃんとお前の傍にいるから」

「…ん」

やっと返ってきた反応にほうっ、と息を吐いて今度はあきれたように言ってやる。

「馬鹿だな、私がお前を置いて、逝く訳ないだろう」

すると小さく苦笑しつつも顔く気配がした。同時にそれまでずっと籠められていた腕の力が弱くなる。やっと落ち着いたらしい。

それを確認した途端、六花は猛烈な眠気に襲われた。気配から察して光流も同様だろう。おやすみ、と小さく呟いたのを最後に、六花は眠りに落ちていった。

次の日、二人は砂浜を歩いていた。時刻は昼頃。今日は六花の両親の命日で、郊外にある墓地に行く途中なのである。

ぽつぽつと取り留めのないことを話していた二人は、区切りのいいところで話すのをやめる。端から見れば、話すことがなくなったように見えるだろう。だが。

「雪、気付いてるか？」

「ああ」

先程から、ずっと誰かに見られているような気がする。それも、まるでこちらの際を伺っているようだ。気のせい、ということもあるかもしれないが、二人同時に感じているのなら間違いはないだろう。そう思っていた矢先だった。

「うおおおお！！」

突然、雄叫びを上げながら、近くの茂みから一つの影が飛び出してきた。手に銀色に鈍く輝く剣を一振り握っている。その影はそのまま、二人に向かって突っ込んできた。

咄嗟に六花は剣を引き抜いて受け、その人物の、奇妙に表情の削ぎ取られた顔を見て啞然とした。

「勇也！？」

それは確かに、昨日屈託なく話し掛けてきた青年だった。光流も瞠目して勇也を見つめている。

その隙を、相手は見逃さなかった。力任せに剣を振り上げ、六花の剣を跳ね飛ばす。続いてきた攻撃を避けている間に、彼女の剣が遠くの岩場に音を立てて転がったのが見えた。

そのあとに勇也がまた振りかぶった剣を、光流が受け止める。今度は光流の方が力が勝るので、跳ね飛ばすことはできない。が、まるで何も考えていないかのようにがむしゃらに突っ込んでくるので、切り倒すわけにもいかずにすべて受け流している。

「おいっ、勇也！ どうしたんだ！？」

光流が少々声を荒げて聞いても答えもしない勇也を訝ったが、実力で光流が負けるわけがない。そこを彼に任せて、六花は自分の得物を取りに行こうとした。

その瞬間、視界の隅を何かきらめくものが掠める。慌てて振り向くと、懸命に勇也に呼び掛けている光流の背後に忍び寄る影があった。光流はまだ気付いていない。が、気付いたとしても彼は勇也の力任せの攻撃を受け続けている。避けられない。そう思った時にはもう体が動いていた。

今まさに彼に向かって突進してきた影と光流の間に滑り込んで、相手が持っていた短刀を自分の体で受け止める。胸部の辺りに衝撃が生じて、次いで灼熱の痛みが襲ってきた。

剣があれば反撃できたのに。痛みで朦朧としてくる意識の中で、ぼんやりとそんなことを考えた。

「雪っ！！」

真っ暗になった視界の中で微かに耳に届いた声を聞いて、ほうっと息をつく。

唯一自分をそう呼ぶ彼が無事で、良かった。

六花の意識はそこで、闇に吞まれていった。

* * *

「おいっ、勇也！！」

必死で勇也に呼び掛けていた光流は、自分の得物を取りに行っただけの慣れ親しんだ気配が、

急に背後に滑り込んできたのを感じた。

「ゆ…」

何事かと思って振り向くのと、六花の体が大きく揺れたのはほぼ同時。そのまま彼女の体は力なくくずおれた。

「雪っ！！」

悲鳴にも似た声を上げた光流は、目を閉じたまま動かない彼女の向こうに、見知らぬ男の姿をみとめた。その男も驚いたように六花を見つめていたが、やがて光流を眺めやるとにたりと笑った。

「まったく、恋人想いだなあ？ わざわざ自分が盾になるとは」

何が起きたのか、それまで理解がついてきていなかった光流は、その言葉ではっと我に返り、六花を抱き上げてぎっと相手を睨みつけた。

「お前は何者だ？」

低く問いかけても、男は笑ったまま答えない。そしてその時になって光流は初めて、勇也の攻撃が止んでいる事に気がついた。彼がいた方を見やると、勇也は表情を削ぎ落とした顔のまま、男の方を見ていた。まるで指示を待っているとでも言うかのように。

それを見て光流ははっとする。風のうわさで聞いた事があった。あの、日野神乃伝言者の一派の中に人の心を操る術を扱う者がいると。

この男がその術者で勇也は操られているのだとすれば、昨日あんなに親しげにしていた青年がいきなり襲ってきたことや表情がまったく無い事の説明がつく。するとそんな光流の考えを察したのか、男は口を開いた。

「ああ、俺は日野神乃伝言者の一人だ。長の命令でお前達を殺しに来たのさ」

そう言うと男は勇也に合図を送る。それを認めて光流はちっと舌打ちをすると、腕の中の六花を見下ろした。まだかろうじて息はあるものの、それも時間の問題だ。ふと、昨日見た夢が脳裏を掠める。このままでは死は免れない。それだけは。

そうしている間にも勇也が襲いかかってくる。光流は六花を抱いたままかわすと、自分の得物をしっかりと握り直した。片手が塞がったままでは分が悪いが、術者がいるので下ろす訳にはいかない。もう一度振りかぶってきた勇也の後ろに回りこみ、柄で思い切り首筋を殴って気絶させる。

そしてそれまで傍観していた男に向き直ると、そっと六花を下ろした。男はただ笑って見ている。と、何かを呟いてから突然地を蹴って突進してきた。腰に挿していたらしい剣を抜いて横殴りに振ってくる。光流は後ろに跳び退ろうとして、足が動かないことに気付いた。術を掛けられたようだ。攻撃をなんとか屈んで避けると相手の足に切りつけ、動きが鈍った所で鳩尾に思い切り柄を突き込むと、男はそれで動けなくなる。同時に足が自由になった。

するとそこに騒ぎを聞きつけたらしい第一隊の者達が駆けつけてきた。その者たちに後を任せ、光流は大急ぎで六花を医師の所に連れて行った。

それから三日が過ぎた。術者は拘束され、牢屋に閉じ込められているらしい。話によると、王を討つにはまず第一隊の腕の立つ者を殺さなければ、ということだったらしい。勇也はあの後正気に戻り、操られていた間の記憶がまったく残っていないということだった。彼のためにはその方が良いだろう。

六花の受けた傷はかなり深く、ぎりぎりで急所を外してはいるし、短刀が刺さったままだった

ので出血は少なかったが、損傷がひどく死の一步手前というところだった。医師はこの三日間が峠だと言った。そしてそれを越えても、五日以内に目覚めなければ助かる見込みがない、とも。

光流は六花が寝ている寝台の横に座り込んで、黙って六花の左手を握っていた。早く起きてくれと、切に願いながら。目を覚ます気配のない横顔を見つめながら唇を噛み締める。先日見た夢が脳裏に焼きついて消えてくれない。

夢の中で彼女は血塗れになって倒れた。傷ついていくのを目の前で見ているのに、不可視の壁に阻まれて助けに行けなくて。彼女が倒れると同時に壁は消えて、慌てて抱き起こしたが既に遅かった。徐々に冷たくなっていく身体と雪よりも白い肌がやけにリアルで、目覚めてから思わず彼女を離せなくなるほどだった。

いつもより低い体温や血の気を失った肌が夢の中の彼女を思い起こさせて、必死で打ち消そうとしては失敗するということを繰り返していた。目覚めてから彼女がくれた言葉を何度も何度も反芻させて。

——ここにいる、お前の傍にいるから

——お前を置いて、逝く訳ないだろう

そう言ってくれたのがずっと昔のような気がして、心にぽっかりと穴が開いてしまったようだ。その名の通り雪のように儚く消えてしまいそうで、それを考えるだけでも胸が塞がったように呼吸が苦しくなる。でも。

「……信じてる」

傍に居てくれると言ってくれたその言葉を。お前が約束を違えたことはないから。だから、早くその声を聞かせて、笑ってみせてくれ。

初めて出逢った時からずっと一緒だった、何があっても守ろうと決めた大切な人。逆に守られることも多いけれど、ならば自分はそんな彼女に何をしてやれるだろう。

そこまで考えて、ふと幼い頃にした約束を思い出す。悪夢を祓うというまじないだが、同じ悪しきものなら死神も祓ってくれるだろうか。そう考えて彼女の手を自分の額に当てて目を閉じると、そっと呟く。

「悪しき夢、幾たび見ても身に負わじ」

どうか、雪が戻って来てくれますように。

ただひたすらにそれだけを願う。やがてその想いが通じたのか、それまで身じろぎすらしなかった六花の臉が震えた。

* * *

六花は暗闇の中にいた。自分の手すら見えず、ひどく寒くて寂しい場所だ。なんでここにいるのかもわからない。だが動く気にもなれずに座り込んでいた。すべてがぼんやりとしていて、考えることすらも億劫だ。

どれほどそうしていただろう。不意に声が聞こえた気がして辺りを見回してみる。なんと言っているかよくわからないが、何度も呼ばれているようなので立ち上がって歩き出した。そうしてその声がひどく苦しそうなのに気が付いた途端、焦燥感が胸を締め付ける。

早く行かなければ。約束したのだから。……誰と？

そう考えて愕然とした。思い出せない。そうしている間もずっと声がしているのに、行かなければと思うのに、わからなくて焦りだけが募る。

これは誰の声だろう。よく知っているはずなのにどうしても思い出せない。

そう思った時、今までよりもはっきりと、その声が聞こえてきた。

「悪しき夢、幾たび見ても身に負わじ」

ああそうだこれは、この声は。

光の、声だ。

ゆっくりと瞼を開くと、ひどく心配そうな顔が覗き込んできていた。

「こ...う...？」

声を絞り出すと、光流の顔がくしゃりと歪む。それを見てぼんやりと、あの時とは逆だなあ、と思った。

「馬鹿」

小さく言われて、ごめんと呟いた。きつととても心配させてしまった。すると光流は困ったように笑う。

「戻って来てくれたから、いい。あと、ありがとな」

それはきつと、かばったことに対してだろう。

ん、と小さく頷くと、今度は優しく笑って立ち上がる。

「じゃあ医者を呼んでくるから、ちゃんと起きてろよ」

それから一ヶ月して、六花はやっと動けるようになった。激しい運動はまだ無理だが、歩く位ならなんとかなる。そこで、結局行けなかった墓参りに行くことになった。

「で、なんで今日はその格好なんだ？」

光流は心底不思議そうに尋ねてくる。今日の六花の服装はふんわりとしたブラウスにスカートだ。

「お前が着ろって言ったんだろうが」

ずいぶんと前のことだが。光流は軽く目を見開いて、そうか、とどこか嬉しそうに返してきた。何が嬉しいのだろうか、よくわからない。が、あんまり気にしないことにする。

見上げると、空がとても高い。穏やかな晴天だ。ちらりと横にいる光流を見やって、六花は思った。

(こんな日がずっと続けばいいのに)

実は光流も同じことを考えているのだが、彼女はそれを知らない。が、想いは一緒だ。

どうか、大切な人に災いが降りかかりませんように。そして願わくば、その隣にずっといられますように。

——悪しき夢、幾たび見ても身に負わじ

ある夜の二人

「なあ光(こう)、かくれんぼって知ってるか？」

「...雪、俺を馬鹿にしてんのか？ 鬼がいてそれ以外の奴が隠れているのを探す、子供の遊びだろ。ガキの頃によくやったやつ」

「そう。じゃ『心のかくれんぼ』は？」

「.....は？ なんじゃそりゃ？」

「私もさっき友達から聞いたんだ。相手の気持ちが視えそうで視えなくてもどかしい時に、まるで『心のかくれんぼ』だ、と思ったそうさ」

「.....要は相手は何を考えているかがわからない、ってことか？」

「ちょっと違う気もするけど...、まあそれに近いだろうな」

「そうか。...で、それがどうしたんだ？」

「いや、その話を聞いた時に、じゃあ人間は幾つになってもかくれんぼをしているんだな、と思ってさ」

「...お前の話は飛躍しすぎでよくわからん。なんでそうなるんだ？」

「子供の頃は相手の気持ちがわからないからもどかしい、なんてことあんまりないだろう？」

「ああ、そういうのは大人になるほど増えてくるからな」

「だから、子供の時は遊びのかくれんぼをよくやって、成長するにつれてそっちをやらなくなる代わりに『心のかくれんぼ』をするようになるんだなあ、と思ったんだ」

「それで、人間は幾つになってもかくれんぼをしている、と？」

「ああ」

「.....で？」

「でって？」

「それで終わりか？」

「そうだけど。ほかに何か？」

「.....いや、わざわざそれを言うためだけに俺の安眠を妨害したのかと思っただけだ」

「ずっと前から約束してたのに、なんで忘れられるんだ!？」

「だから謝ってるだろうが!!」

扉をノックしようとした矢先にそんな怒声が聞こえたため、その青年はぴしりと固まった。彼はこの部屋の住人の片割れである光流(みつる)に用があって来たのだ。この、仲がいいことでとても有名な光流と六花(りっか)の部屋に、だ。

それなのに、これはどうしたことだ？

青年は一瞬、部屋を間違えたかと思った。だが、聞こえてくるのは間違いなく本人たちの声だ。彼は衝撃のあまり、思わずそろそろと数歩後退した。

次の瞬間。

「もういい! お前なんか知らない!!」

バタン、とものすごい勢いで扉が開き、少女が飛び出していった。六花だ。

その後姿を目で追いながら、青年はぼんやりと昨日の彼らの様子を思い返していた。軍の稽古場では特に変わったことはなかった、はずだ。いつも通り二人一緒に手合わせだの技術の練習だのをしていて、彼はそれを見ながら友人と「あの仲の良さと強さには恐れ入るよな」とか「本当に恋仲じゃないのかって噂、どこ行っても聞くよな」などと話していたのだから間違いない。それなのに、これはどうしたことだろう。

ゆっくり視線を移すと、部屋の中には光流が所在無げに立ち尽くしていた。そして彼は廊下に突っ立っている青年を見ると、決まり悪そうな顔をする。そのまま尋ねてきた。

「どうしたんだ？」

「いや、ちょっと用があって来たんだけどな、.....そっちこそ何があったんだよ？」

逆に尋ね返すと、無言で部屋に招き入れられて、椅子を勧められた。光流が用を先に聞くと言うのを、たいしたことじゃないから、と断って促す。

「ちょっと、ケンカした」

「そんなの見りゃわかる。理由は？」

すると光流は困ったように溜息を吐いて、頭をかきながら話し出した。

「.....明日、休みだろ。ずっと前から一緒に出かける約束をしてたんだけどな」

「ああ」

「俺、昨日すっかりそれ忘れてて、別の予定入れちゃったんだよ」

それは確かに怒るだろう。しかし、六花との約束が先だったのだから、後の方を断れば良いのではないだろうか。そう思って言ってみると。

「隊長相手だから無理」

「...なるほど」

第一隊に所属している者で隊長に頭が上がる者などいない。そして孤児である光流と六花は育ててもらった恩があるため、特にその傾向が強いのだ。それなら仕方ないわな、と納得した青年はふと思いついて言ってみた。

「そういや、あんな感情的になった六花って、初めて見たような.....」

「だろうな、軍ではあいつ、あんま感情出さないようにしてるし。でも、俺もあそこまで激しいのは久しぶりに見た」

「ってことは軍以外ではもっと出してるんだ？」

「そりゃな、軍で出さないのは感情に囚われると周りが見えなくなるからだし」

「……そうか」

暗に「二人でいる時は」という意味を込めたつもりだったが、効かなかっただけらしい。気を取り直して続ける。

「にしてもお前らでもケンカなんてするんだな」

噂になるだけあって、普段から見てもこの二人は仲がいい。はっきりいって意外だったが、

「そうか？ いつものことだぞ？」

光流は平然と言った。そこで「いつも」の頻度を聞くと、十日に一回は必ずすると言う。ケンカするほど仲がいいというのはこの二人のためにあるような言葉だ、と青年はぼんやりと思った。

「まあ、普段はもうちょっと穏やかなんだけどな……」

「よっぽど楽しみにしてたんじゃないかねえの？」

「ただの買い物だぞ？」

「…それでもそういうもんなんじゃないかねえのか、女心って」

「……よくわからん」

まあな、と溜息を吐いてから、はたと思い当たって青年は目を見開いた。慌てて光流の方を見る。

「おい、そういやこんなことしていいのかお前。六花追いかけてなまじいんじゃないのか？」

言いつつ、我ながら間の抜けたことを言っていると思った。これで余計に二人の仲がこじれたら半分近く自分のせいだ。嫌な想像が次々と脳裏を駆け巡る。その中でも一番恐ろしかったのは、昨日のような光景がもう二度と見られなくなってしまうことだった。しかし焦っているのは青年のみで、光流は淡々と言う。

「そうだな、そろそろ行った方が良くもな」

「って、場所は！？」

六花が飛び出して行ってから、もうずいぶん時間が経っている。これでどうやって追いかけるというのだろう。だが、光流は慌てるでもなく扉に向かいながら言った。

「雪が飛び出してって行く所なんて決まってる。それに仲直りの仕方なんてお互いよくわかってるから気にするな」

そのまま彼は出て行ってしまった。呆然としている青年を部屋に残したまま。青年はのろのろと口に手を当てた。

気のせいだろうか。六花を「雪」と愛称で呼んだあの瞬間、光流の目がふっと優しくなったように見えたのだ。

青年は盛大に溜息を吐いた。焦って心配した自分が馬鹿に思えてくる。あの二人は付き合っただけなんかないし、たった今ケンカしていた筈なのに、何故だろう。

最後に惚気(のろけ)られた気がした。

片手を繋いで

とある王国の王直属の軍は、実力順に第一隊、第二隊……という風に分かれている。その中で王族の近衛軍の役割も持つ第一隊には、一つの奇妙な決まりごとがある。曰く、使い走りを決める時は特例でない限り「剣を投げて決めろ」と。

(なんだそりゃ)

その罰ゲームの内容を聞いた時、光流と六花は同時にそう思った。そして、そんなのでいいのか、とも。

時間は少し前に遡る。

この日は鍛錬が終わった後に、隊の中でささやかな宴会が行われることになっていた。そのためある店を貸切で予約していたのだが、その店主に「鍛錬が終わったら全員が来る前に連絡がほしい」と頼まれたそう。そこで誰がその使いに行くかを定めることになった。

通常第一隊ではこういう時、「一人ずつ鞆に入った剣を上にはり投げて、地面に落ちたときの切っ先の方向を当て、外れたものに行く」という、やたらと面倒臭い方法で決める。もちろん外す者の方が多いのだが、軍の使い走りは人数がいる場合が多いのでこれでいいらしい。ちなみにこの方法を使うことに決めたのは、使い走りの候補になることのない隊長である。本人曰く、「自分の得物を思い通りに動かせることは大切だから」だそう。

しかし今回の使いは一人で十分、どうするのだろうか、と皆が思っていると隊長が言った。

「当てた奴が行けばいいだろう」

普段「当てる奴」らである光流と六花はこれを聞いてうんざりと溜息を吐いた。わざと外せばすむことだが、隊長は言いながらぼつちりとこちらに視線を向けてきた。「おまえ等が行け」と。逆らえばどうなるかは、孤児のため隊長に育てられた二人が一番よく知っている。

そして結果、当てたのは三人だった。光流と六花ともう一人、最近入ったばかりの青年だ。青年は結果が出た瞬間きょとんとしていたが、すぐに「じゃあ自分が」と申し出た。隊内一番手二番手に行かせるつもりは毛頭ないらしい。隊長も特に依存は無いようだった。だが、すぐにこんなことを言い出した。

「じゃあ、光流と六花はなにか罰ゲームな」

その言葉に沸いたのは周りの者達である。普段この二人が負けて罰ゲームということにならないため、なにをさせるかにとっても興味があるようだ。すると隊長は続けて言った。

「何をやらせるかは皆で話し合っただけで宴会までに決めろ。じゃあ解散」

光流と六花は顔を見合わせて溜息を吐いた。

(絶対この人面白がってるよな。)

所変わって宴会会場。まだ来ていない光流と六花の話題に、ほかの者達は大いに盛り上がっていた。隊で一番強くて仲のいい男女だ、させるものによってはこの後ずっとからかえるかもしれない。むしろからかうことを前提に話し合っただけで決めた。

そこへ話題の二人が一緒に入ってきた。入り口のところで上着を脱ぎ、まっすぐこちらに向かってくると並んで席につく。周りに注目されていることなどお構いなしだ。単に諦めているだけなのだろうが。

そこで一連の流れを楽しそうに見ていた隊長が口火を切った。

「よし、じゃあ始めるか。まずは罰ゲームの発表からだな。おい、代表者」

「はい！ 皆で話し合った結果、二人にやってもらう罰ゲームは『明日のこの時間までずっと手を繋いでいること』になりました！！」

周りからわっと喚声と拍手が起こる。何が来るのかと身構えていた当の本人達が拍子抜けしたような表情になったことや、隊長が苦笑したことには残念ながら誰も気がつかなかった。

「ちなみにこの『ずっと』というのは本当にずっとです。明日は休みだから隊務に支障は出ないし、宿舎でも特例で二人は同室だから問題無いということになりました。便所だけはいくらなんでもきついだろうから、その時にはこの紐の両端をお互いに持つように。あとは例外無し。それからちゃんと監視が交代で付くから、インチキはできません。じゃ、今から開始！！」

代表者がそう言うと光流と六花は黙ってお互いの手を握った。そのままその手を食卓の上に置く。そうして宴が始まった。

宴会と言っても、たまに誰かが隠し芸を披露する以外は皆で騒ぎながら飲み食いするだけだ。その中で光流は右手を、六花は左手を繋いでいる。二人とも右利きなものは、いつも剣を右で扱っているのを見ているため皆知っている。だからどうやって食べるのか、興味津々だった。要はあの「あーんして」を期待していたのだ、が。

「いただきます」

光流は左で、六花は右で平気な顔をして食べ始めた。これには隊長以外全員が目を剥いた。そのうちの一人がおずおずと問い掛ける。

「光流お前、左利きだっけ？」

「いや？」

否定した彼に周りが叫ぶ。

「じゃあ何で左で食べてるんだよ！？」

すると光流は涼しい顔をして答えた。

「そこの人にガキの頃に、『兵士はいつどんな怪我をするかわからないんだから、どっちかの手に偏りを持たせるな』って仕込まれた」

そう言って隊長を指差す光流の手を指差された本人が、人を指差すな、と叩き落す。隣では六花が苦笑していた。

「ってことは六花も？」

「もちろん」

つまり二人揃って両利き、ということだ。これで楽しみが一つ減った、と皆は溜息を吐いた。

それから延々と宴会は続き、終わった頃にはほとんど真夜中に近い時間となっていた。外はかなり気温が下がり、上着無しでは大変寒い。この国は季節に関係無く、夜はとても冷えるのだ。

店から出る時に周りはそのことに気がついた。手を繋いだままでは上着は着れない、と。どうするつもりか、と本人たちを見ると、二人は上着を手を持っているものの着ていなかった。そのまま外に出る。皆に見られながらぽつぽつと会話を始めた。

「寒い」

「だな、宿舎まで走るか」

「了解」

そう言って周りに会釈したかと思うと、合図も無しに同時に走り出す。焦ったのは今夜の監視役に選ばれた、二人と一特に光流と仲のいい青年だ。彼は二人の部屋に泊まることになっているのだ。しかもここは街の中央で、城の敷地内のはずれにある宿舎とはずいぶん距離がある。

「お、おい！！」

慌てて走り出すが、すでに二人の姿は遠い。光流はともかく六花は女性で体力などに差があるはずなのだが、全速で走ってもなかなか追いつかない。そして、結局宿舎まで追いつくことはなかった。

青年が息も絶え絶えで二人の部屋に入ると、二人はちゃんと手を繋いだまま並んで二つある寝台の内の一つに腰掛けていた。あれだけの距離を走ったというのにけろりとしている。さすがだ、というよりも恐ろしい。

「お前等、化け物か」

「なんだこのくらいで」

「このくらいって距離じゃねえぞ」

あきれたように言った光流を信じられない思いで睨むと、六花が可笑しそうに笑いながら付け足した。

「私達は小さい時、隊長にこの倍の距離を毎日走らされてたんだ」

「……げえ」

そんなの考えたくもない。恐るべし、隊長。子供に容赦のかけらもない。

「まあ、それは置いといて。お前、どっちで寝る？」

「は？」

質問の意味がわからず、青年は光流を見つめた。すると光流は自分の向かいの寝台を指しながら説明し始める。

「そっちが俺ので、こっちがこいつの。俺達はこれじゃ一緒に寝るしかないから、もう片方にお前が寝るの。まさか一晩起きて見張るわけじゃないだろう？」

「……光流ので寝ます」

さすがに一晩起きる気はないし、女性の寝台を使うのも気が引けるのでそう答えた。

「わかった、じゃもう寝るか。もう真夜中だし」

光流がそう言うと、六花が手を伸ばして灯りを消した。そのまま光流が布団に潜り込むと六花もそれに続いて、繋いだ手が上にくるような体勢になった。あまりに自然なその動作を呆然と見ていた青年は、気づいて慌てて声をあげた。

「って、お前等着替えは！？」

「これでどうやって？」

六花の問いにはっと我に返る。確かに、上着も着れなかったのに着替えられるわけがない。考えてみれば自分だって着替えを持ってきていない。まあいいか、と納得して、自分も光流の寝台に潜り込んだ。横を向くと二人が寝ているのがよく見えた。

(…にしても、なあ)

確かにこの二人と一緒に寝る展開を皆で期待していたのだが、ここまであっさりやられると少し、いやかなり物足りない気がする。

(仮にも男と女、だろ...)

もう少し恥らうとかしてもいいような気がするのだが。そうしたらからかえるのに。そんなことを考えながら青年は眠りについた。

結局、次の日も似たような感じで過ぎていった。どうもこの二人は片手が塞がっていても相手がずっとすぐそばにいても、特に不自由しないらしい。むしろ見事なまでの息の合いようを見せつけられて、監視役になった者達は半ば感嘆し、半ばあきれたという。結局、この話題についてはからかうことはできない、というのが周りの者の結論だった。ここまで平然とやるからに

はからかっても平然としているだろう、と。それを聞いた隊長は、やっぱりな、と頷いていたらしい。

そして、実はこんな会話があったことは誰も知らなかった。

明け方、六花が目を覚ますと彼女は光流に抱きしめられていた。監視役の青年が熟睡しているのを確認すると、慌てて光流を起こす。

「光(こう)、光」

「ん……、雪？」

幼い頃からの愛称の方が自然に出てくるのが、こういう時よくわかる。そう思いながらも六花は囁いた。

「光、さすがにこれはまずいだろう」

「…いつものことだろ？」

「そうじゃなくて。見られたら面倒なことになるから」

確かに普段だったら六花も起こしたりしない。実のところ、二人は五年前までずっと一緒に寝ていたのだ。今ではそんなことはないが、それでもたまに悪夢を見たりすると一緒に寝る。その時にこういう体勢になることはよくあるので特に気にしない。が、人に見られるとなると別だ。

「ああ、そうだな」

それは光流も同感なので、ぱっと六花の背中に回していた手を外す。それでももう片方の手は繋いだままだし、特に必要性を感じないので離れることはない。これは別に異性として意識していないということではない。

光流も六花もこの関係がただの幼馴染というには普通じゃないことくらいわかっているし、さらに言えば実は想い合っていて、そのことにお互いに気づいていなかったりする。それでも。

傍にいたことが当たり前すぎて、そういう感情をも超えたところで無条件に安心してしまうのだ。

だからこそ、こんなことが平然とできる訳だが。

「そういやさ」

ぽつりと光流が呟いた。六花が目線で答えると、光流は面白そうな、それでいて優しげな瞳を向けてきた。

「お前、夜中どんな夢見てたんだ？」

「え？」

「寝言で俺を呼んだだろう。その後もなんか言ってたし」

「…なんて？」

「んー、『傍にいて』って」

途端にその夢を思い出したようで六花が真っ赤になる。

「……絶対に教えてやらない」

光流はその顔を見て小さく噴き出した。

名の前にあるもの

名前とは不思議なものだ。本来は個を識別するためだけのものであるはずだが、それをどう呼ぶかによって受ける印象がまったく違う。

それが特別な呼び名ならなおのこと。

ある麗らかな晴天の昼過ぎ。

王軍第一隊の二番手、六花(りっか)は優奈(ゆうな)を訪ねていた。ただ今、和やかなお茶会の真っ最中である。

「はい、六花」

差し出された焼き菓子を受け取って、六花は淡く微笑んだ。

「ああ、ありがとう」

「どういたしまして」

律儀に礼を言う親友に優奈も微笑み返す。

肩にかかる黒髪を結び上げ、強気な印象を与える顔立ちで、女だてらに軍で一位二位を争う六花と、腕の良いお針子で、腰より長い美しい銀髪に、どこことなく儂い雰囲気を持つ優奈。一見すると容姿も性格も正反対のこの二人は大の仲良しだ。普段も休みの日などによく一緒にお茶を飲んだり、出掛けたりしている。

だが、今日は一ヶ月ぶりの再会だ。

のんびりとお茶を啜ってから優奈が口を開いた。

「ねえ、連続放火犯、まだ捕まらないの？」

心配そうな面持ちをする彼女に、六花は肩をすくめてみせる。

「それがまったく。十日に一度は放火しているのに目撃者が一人もないし、火をつけられる場所もバラバラで予測がつかなくてね。最初の放火からもう二ヶ月、普段街の警護にあたって第二第三の奴等だけじゃ手が足りないって、私たちも駆り出されるようになってから一ヶ月。ここまで何もわからないのも珍しい、というより正直腹が立つ」

少しくらい尻尾を出せ、と眉間に皺を寄せて毒づく六花に優奈は苦笑した。彼女がここまで無茶苦茶なことを言っている原因は、責任感の強さで五日間ほとんど寝ずに走り回っていたから、だけではないだろう。まあ、そのおかげで見かねた隊長が今日を強制休日にして、優奈は六花に会えたわけだが。

「まだ光流(みつる)とすれ違いっぱなしなの？」

六花の幼馴染であり、ルームメイトである、彼女に一番近い人間であろう青年の名をあげると、六花は渋い顔をして頷いた。

いつもならくじだろうが何だろうが、ありえないくらいどんな時でも一緒になってしまう六花と光流は、今回に限ってすべてバラバラなのだ。理由は簡単。第一隊の一番手と二番手を一緒にしていたら、戦力の差がとんでもないことになってしまうからである。本人たちもそれは重々承知している。だがここまですれ違うことになるとは、というのが本音だろう。

「.....この一ヶ月、ほとんど会話らしきものをしてない」

せいぜい五日に一度、道ですれ違うか、片方が休みに入る時にもう片方が出ていくのが重なって、挨拶代わりに名を呼ぶことができたなら良い方だ、と六花は溜息をついた。普段一緒にいる

ことが当たり前だったので、離れている時間がとても長いような気がするのだ。こんな時に、やはり自分には彼が必要なのだと痛感する。依存し過ぎだろうかと思っていると、優奈が不思議そうに尋ねてきた。

「名前を呼ぶの？ 挨拶の代わりに？」

そんなに不思議なことだろうか、と内心思いつつも六花は頷く。

「挨拶もしないわけじゃないけど、まず名前かな。挨拶する暇もない時が多いし」

「って、いつものあの愛称？」

「そう」

ふーん、と納得したように優奈が口を噤んだので、六花はお茶を啜って菓子に手を伸ばそうとした。が、次の優奈の問いで思わずその手を止めてしまった。

「ね、好きな人に愛称で呼ばれるってどんな感じなの？」

「……え？」

完全に動きが止まって、ようやくそれだけ返した六花に優奈は吹き出した。好きな人云々はともかく—もちろんそっちにも興味があったが、この国には愛称で呼ぶという観念があまりないため、それはどんな感じなのかを聞いたかっただけなのだが、この反応。明らかにただの幼馴染ではしないような言動も、それに対する「付き合っているのか」という質問の返答も平然としてのけるくせに、相変わらずこの親友は自分との時だけこの手の話に弱い。端から見れば立派な恋人同士なのに、本人達に聞くと「違う」という返事、しかもお互い片思いだと思っているあたりが笑いに拍車をかける。

しばらくくすくす笑っていると、硬直から抜け出した六花が半目を向けてきた。

「優奈」

「ごめんごめん。じゃあ好きな人かどうかはともかく、愛称で呼ばれるのってどんな感じなの？」

普段の隊務中は、はじめをつけるためと本名なのに、挨拶代わりだけは絶対に愛称の理由もついでに教えて、と微笑む彼女に、六花は脱力しかかった。なんだか聞かれていることはあまり変わっていない、気がする。それでも一応答えようと、少し考え込みながらも六花は口を開いた。

「…愛称で呼んだりするのは癖というか、私達の場合はそっちの方が呼びやすいから、かな。お前が私のことを六花と呼ぶのだって、ある意味愛称と言える気がするし……」

「じゃあ、本名で呼ばれるのと変わらないの？」

優奈の質問にまた少し考えて、六花はいや、と首を振った。

「少なくとも光(こう)に呼ばれる時は、って呼ぶ時もだけど、本名だとなんとなくだけ違和感があるな。たぶんむこうも一緒だと思う。……そうだな、なんかしっかりしろよって感じがこもってる、ような気がする」

要は呼び方によって入る気持ちが違うんだらうな、と六花が言うと、優奈は納得したような顔をした。そして続きを促す。

「だから今は愛称なんだ。じゃあ挨拶代わりの時は？ その時は愛称で呼ぼうって決めたりしたの？」

「いや、そんなこと考えたこともなかったよ。気がついたらそうなってたし。……ああ、でも」

そこで言葉を区切って、六花は遠くを見るような目つきをする。

「しばらく離れてた後に会った時、名前を呼ぶとその離れてた時間があるっていうぎこちなさって言うのかな、それが無くなる気がするんだ。愛称だと特に」

まあ、それは私と光がしょっちゅう一緒にいるせいもあるかもしれないけど、と六花は笑った。その、何のためらいもなく愛称が出てくる素直さが可愛くて、優奈もつられて笑う。と、その時。

コンコン、と扉を叩く音がした。

六花と優奈は思わず顔を見合わせる。この時間の来客というのはかなり珍しい。どうぞ、と優奈が声を掛けると、扉がゆっくりと開いた。

「やっぱりここにいたか、雪」

開口一番六花にそんなことを言ったのは、今まで話題に上っていた光流(みつる)だった。よお、と優奈に会釈する彼は、どう見ても仕事の途中で抜け出てきたように見える。

「光、どうした？」

六花が訝しげに聞くと、光流は彼女に向かって手を差し出す。そこには紅色の髪結び紐が乗っていた。普段六花がしているものだ。ちなみに今は山吹色の紐で結っている。

「お前、これ忘れて帰っただろ。隊長に渡されたんだ」

「ああ、ないと思っていたら忘れてたのか。朝探してたんだ、ってまさか、わざわざこれを届けに抜けてきたんじゃないか……？」

眉を寄せる彼女に光流はまさか、と肩をすくめる。

「俺も隊長に強制休暇取らされたんだ。帰って寝ろ、明後日まで来るなってな。ちなみにお前もそうだ」

「は？ 二日も休まなきゃいけないほど私は柔じゃないぞ」

思いっきり顔をしかめる六花に、それまで傍観していた優奈は声をかけた。

「まあまあ、いいじゃない。休める時に休んでおけてことでしょう。どうせ犯人に目星がつからすぐに駆り出されるんだろうし」

それより光流も一緒にお茶しましょ、と促して、自分は光流の分のお茶を用意する。

その途中で「よくここがわかったな」「当たり前だ、どれだけ一緒にいると思ってるんだよ。お前がしそうなこと位わかる」などという会話の後、光流の「雪、じっとしてろ」という声が聞こえたので、何をしているのかと優奈が目を上げると、光流が六花の髪を紅色の紐で結び直していた。六花はおとなしくされるがままになっている。光流の手付きはまるで普段から六花の髪を結っているかのように鮮やかだ。

それにしても。

(確かに六花には山吹より紅のほうが似合うけど……、わざわざ結び直す必要があるのかしら？)

別に乱れていた訳でもないのに、と考えてから、彼女は目を瞬かせた。

(まさか本当に毎日光流が結ってて、でもここの所会えてすらなかったから結いたかっただけ、とか……?)

ぼんやりと二人の方を見ると、結び終わった光流が満足そうに目を細めている。

案外そうなのかもしれない。

なんとなく呆れた気分でお茶淹れを再開した優奈は、先程の六花との会話を思い出して頬が緩むのを感じた。

愛称で呼ばれる気分は本人達にしかわからない。それでもそこに込められている想いは聞いている者の胸の奥まで温かくするような気がした。

例えば傍にいるということ

六花は不機嫌だった。勤務中なので必死に押し殺してはいるが、それでもこれ以上ないほど機嫌が悪かった。

そして、同時に困惑してもいた。

原因である二つの人影を遠くに眺めながら、彼女は溜息をつく。

この王国の人事異動の日である五日前、六花と光流は王軍第一隊の副隊長に昇進した。十六歳と十七歳の若さにしては異例どころか前代未聞ではあるが、実力は十分だと滅多に人を誉めない隊長が太鼓判を押したらしい。

そして同時に王から勅命が下った。曰く、「最近城下町で多発している放火と同時に、密かに王族が狙われているという噂が広まっている。そこで放火犯が捕まり噂の真偽がわかるまで、隊務を離れ我が娘を守ってほしい」と。

その王の言葉を思い出しながら、六花は眉を寄せた。そのまま近くにある木に寄りかかり、腕を組む。

今、彼女は王宮内の庭園にいた。あちこちの茂みで季節の花が咲き乱れ、その間を煉瓦で作られた小道が通っている。そして、その小道をずっと行った所に光流と王の娘、すなわち王女がいた。御年十四歳の少女は光流に何事かを楽しそうに喋っている。六花の幼馴染でありルームメイトである青年は、時折頷きながら黙って微笑んでいた。それが、六花の癪に障るところだった。

三日前まではまだまじだったのだ。五日前に初めて対面した時に光流に一目惚れしたらしい王女は、それでも最初の二日間は光流にも六花にも公平に接していた。だが二人の様子を見ているうちに、どうやら六花を警戒したらしい。三日目からはあからさまに六花を遠ざけるようになり、今日はとうとう下がっていると言われた。こちらは臣下なので、命令だと言われれば聞かない訳にはいかない。が、王からの勅命がある手前、完全に下がってしまう訳にもいかずに二人の姿が見える所で控えている、というのが現状だった。

「……光の馬鹿野郎」

ぽつんとした呟きは緩やかな風に吸いこまれていった。

* * *

光流は考えていた。目の前の王女には失礼にならないように返事だけはしていたが、話の内容はかなり聞き流している。彼の頭を占めるのは全く違うことだった。

ちらりと離れた所に控えている六花を窺う。木に寄りかかって腕を組んでいる姿は、傍目から見れば絵に描いたように様になっている。なっちはいるのだが。

あれは相当機嫌が悪い。責任感の強い彼女のことだから、命令とはいえ、ちゃんと任務を果たせないのが嫌なのだろう。王女が自分だけを傍に置きたがる理由もうすうす勘付いているこちらとしては、代わってもらいたい位だが。あれでは機嫌が直るまでしばらくかかりそうだ。

そう結論付けた光流は、溜息を吐きそうになって慌てて自制した。いけない、目の前にいるのは王女様だ。そう思った瞬間。

「ちょっと光流！」

「は、はい」

慌てて返事を返すと、王女は心持ち拗ねたような表情で質問をする。

「光流は今の話、どう思います？」

「……え？」

しまった、六花に気を取られて話を全く聞いていなかった。するとそのことが伝わったのか、王女は少し顔をしかめる。

「ちゃんと私の話聞いていましたか？」

「……申し訳ありません」

今度ははっきりと拗ねた顔をして、王女は今話していたのであろう内容を繰り返す。

「ですからね、夢の守人は夫婦や恋人同士がなるものでしょう。それなのに、何故子供の守人は親が、しかも両親揃ってなるのでしょうか？」

「夢の守人、ですか」

夢の守人とはこの国に古くから伝わる習わしで、相手が悪い夢を見ないように、と願う人のことを指す。相手が悪夢を見てしまった時に、その夢を祓うまじないもある。そして、守人が願える相手は一人のみだ。

以前自分がしたものとはほぼ同じ問いを受けて、光流はそっと微笑んだ。

「……それは一番その人に身近じゃないと、悪夢を見た時に祓えないからじゃないでしょうか。それに両親はそれぞれの守人であるから、もう一人分は願えません。だから二人で半分ずつ、合わせて一人分を願うのでは？」

その言葉を聞いた王女は成る程と納得しかけたが、すぐに眉を寄せた。

「でもそれでは恋人同士はどうなるのです？ 同じ家に住んでいないのなら、悪夢を見てすぐに祓うことはできないでしょう？」

「この場合の身近は、単に近くにいるということではないのでしょうか」

「え？」

「それならそれこそ誰にでも祓うことができます。そうではなくて心が最も近い、もっと言うなら寄り添っている者がいて初めて、祓うことができるのではないのでしょうか」

「そんな話は初めて聞きました。」

「でしょうね。俺も受け売りですけど最初に聞いた時は感心しました」

「……心」

王女はゆっくりとそう呟くと一度目を閉じ、やがて何かを決心したように目を開いた。

「貴方と六花は恋人同士なのですか？」

意表を突かれた光流は目を見開き、小さく苦笑した。

「突然ですね」

「いいから答えてなさい。これは命令です」

「……恋人同士ではないですよ」

* * *

夕暮れの帰り道、六花は未だ懨然としたまま、だかだかと歩を進めていた。光流はその横を黙って歩いている。ちなみに王女の夜間の護衛は女官達が行うそうだ。

城の敷地のはずれにある隊の宿舎に帰るには一度敷地から出る方が早い。しばらく足早に歩いていると人がごった返す市に辿り着いた。さすがに速度を落とした六花に光流の声が掛かる。

「雪」

幼い頃からの愛称で呼ばれて振り向くと、光流は通りの端の方を指差した。

「ちょっとそこで待ってる」

それだけ言うと、六花を残して彼はさっさと何かの店に入ってしまった。何の店かは人に紛れて見ることができない。滅多に寄り道などしないのに珍しいと思う反面、何も言わずに行ってしまったのが気に食わない。六花は溜息をついて下を向いた。

今日の自分はどうかしている。普段ならこんなに感情に支配されることなどないのに。

そんなことを考えていると、いきなり目の前に赤い物が突き出された。慌てて顔を上げると光流が果実を差し出している。

「ほら、お前これ好きだろ。これ食って機嫌直せ」

「……ん」

六花は受け取ってまじまじと果実を眺める。どうやらこれを買ってきてくれたらしい。気遣ってくれたのに苛立っていた自分が情けなかった。小さくごめんと言うと、頭をぽんと叩かれる。光流はそのまま六花の手を掴んで歩き出した。引かれるままに歩きながら六花は手にした果実を一口かじった。口の中に甘酸っぱい味が優しく広がる。

「光」

「ん？」

「ありがとう」

声がする。たくさんの人の声。知っている人も知らない人も皆同じことを言っている。お前の親は王を守って日野神乃伝言者に殺された、立派だと。そして可哀想に、と。目の前には死装束を纏った両親が横たわっている。どうすればいいのかわからない。悲しいはずなのに涙が出てこない。ただ、不安と寂寥が胸を押さえつけているようだった。

暗闇の中で六花ははっと目を開けた。体中が嫌な汗をかいているのがわかる。手足が冷え切っていてひどく寒かった。目を閉じると今の夢が蘇ってきそうで怖い。緊張で軋む体をゆっくりと起こして、寝台から抜け出す。外の新鮮な空気を吸いたくて窓に近づいた。開けようと手を伸ばした瞬間。

「雪？ どうした？」

部屋を二分するカーテンから光流が顔を覗かせた。窓辺に突っ立っている六花の表情を見るなり大股で近寄ってくる。

「どうしたんだ、顔真っ青だぞ。……悪い夢でも見たのか？」

六花は小さく頷いて、でもと続けた。

「大丈夫だから。起こして悪かつ」

「そんな顔して何言ってやがる」

六花の言葉を一刀両断して、光流は彼女の顔に手を当てた。

「しかもこんなに汗かいて。冷え切ってるじゃねえか」

「……でもほんとに」

「雪」

六花がなおも言い張ろうとすると今度は両手で顔を固定される。光流は頭一つ分ある身長差のため少し屈んで、六花の真正面から見つめてくる。それ以上言うと怒るぞとその目が語っていた

。「俺は、お前の何だ？」

問われて六花は瞳が揺れるのを感じ、一度目を閉じた。彼の問いに当てはまる言葉はいくつかある。幼馴染、ルームメイト、戦友、そして。

「夢の、守人」

そう言って目を開けると、彼はふっと微笑んだ。

「だったら役目を果たさせろ」

とにかくそのままじゃ風邪を引くから着替えて来いと促され、言われた通りにする。

終わると自分の寝台の向かいにある光流の寝台に潜り込んだ。すでに戻っていた光流は入ってきた六花を何の抵抗もなく抱きしめる。そしてそのままあやすように頭をぽんぽんと叩く。幼い頃からの習慣だ。しばらくそうして六花の体が少しずつ温まってきた頃、光流が口を開いた。

「で、どんな夢を見たんだ？」

「.....お父さんとお母さんが死んだ時の夢」

「.....そうか」

六花は光流の胸に顔を押し付けた。まだ、目を閉じるのが怖い。そこに光流が唱えるまじないが聞こえる。

「悪しき夢、幾度見ても身に負わじ」

その言葉を聞いた途端、それまで強張っていた六花の体から力が抜ける。大きく息を吐き出すと光流が言った。

「雪、泣きたい時は泣け」

十年前、両親を亡くした直後の、出会ったあの頃と全く同じ言葉は、六花の涙腺を緩ませるのに十分だった。

* * *

翌日の午後、王宮内の王女の部屋にて光流は彼女の護衛兼話し相手を務めていた。

今日から六花は午後のみ普段の隊務に戻っている。彼女は午前睡眠をとり、王女の夜の護衛につくことになったのだ。なんでも王女自身が王に「夜に女官たちだけでは心もとないので、光流と六花を昼と夜に分けてほしい」と頼んだそう。王は納得し、その申し出を快く了承した。故に今この部屋にいるのは王女と光流のみだ。

先程から王女が話しているのは、五日後に王が自ら訪ねることになっている隣国の王家についてだ。なんでもそちらには彼女と同年の第二王子がいて、近々二人を引き合わせようという動きがあるらしい。今回王がわざわざ赴くのも、その王子の人柄などを実際に会って確かめるため、というのが目的の一つになっているという。

「ですからね、お父様があちらを気に入った場合、好きになるどころか会ったこともない人と一緒になれ、と言われる可能性もあるのです。私はそんなのごめんだと突っぱねるつもりなのですけど」

「はあ、それは大変ですね」

適当に相槌を打ちながら窓の外を見た光流は、西の空が橙色に変わろうとしているのを見て内心で安堵の息をついた。もうすぐ自分の勤務時間は終わる。王女には申し訳ないと思うが、自分の気持ちは別にあるのにこうもあからさまに好意を向けられるというのは、正直かなりきつかった。

「ね、光流はどう思います？」

「え？」

光流は困惑した。今回はちゃんと話を聞いていたが、質問の意図が全くわからない。

「ですから、……もし私とその王子と結婚することになったら、光流はどう思います？」

……どう思うと聞かれても、というのが光流の正直な感想だった。おそらく王女は自分から否定の言葉を聞きたいのであろう。だが彼はそんなこと思わないし、むしろおめでたいことだと思う。しかしそう言えば彼女は傷付くだろう。どうしたものか。

光流が答えあぐねている時だった。一人の兵士が走りこんできた。

「申し上げます！」

驚いてそちらを見ると、そこにいたのは息を切らせている第一隊の青年だった。第一隊は現在放火魔捕獲のため、街を巡回しているはずだ。

「先程街で長屋が放火され、大規模な火災になっております。またその付近で放火魔と思われる男が暴れております。兵が総出で捕らえようとしても術を使うのか近づけず、また剣も相当使えるようで苦戦しております。王女様は何かあった時すぐに連絡がつくように、このお部屋から決して出てはならない、と王様が仰せでございます」

青年はそこまで一息に喋ると、苦しそうに息をついた。王女は知らされた内容に目を丸くしている。

一方青年に労いの言葉をかけようとした光流は、突然背筋を氷塊が滑り落ちたのを感じた。心臓がどくと、不自然に跳ね上がる。嫌な予感がする。が、それは青年の話によるものではない。では何だ。

答えを探そうと視線を泳がせ、窓の外の街がある方向を見た途端、光流の脳裏を昨夜窓辺に佇んでいた六花の姿がよぎる。

「……雪？」

小さく呟いた瞬間、彼の中でそれは確信に変わった。六花の身に何か起こった、もしくは起ころうとしている。

光流はぱっと身を翻すと、青年を問い詰めた。

「おい、その放火の現場にゆ、六花もいるんだよな！？」

「あ、ああ、いたはずだ」

光流のあまりに真剣な剣幕に気おされてか、彼はどもりながらも頷いた。その答えを聞いた光流は走り出そうと足に力を込め、寸前で自分の任務を思い出す。一度王女を振り返り、呆然としている彼女を見とめると今度は青年に目を向ける。彼はそれなりに腕が立つ方だ。その一瞬で光流は覚悟を決めた。

「悪いが、彼女を頼む」

「は？」

啞然としている青年をそのままに、光流は走り出そうとした。が。

「待って！」

我に返った王女に引き留められる。

「私の護衛は貴方でしょう。それを」

「申し訳ありませんが、任務を放棄します。貴女のごことは彼に任せます。戻ってきたら罰でも何でも受けますので、今は行かせてください」

何の迷いもなく言い切った光流を王女は不可解そうに見つめる。

「せめてなんでか教えてください」

「六花に何かありました」

王女が息を呑んだ。

「何故そんなことがわかるんです？」

「ただの勘です。でも俺の勘はあいつに関する事だけは外れたことがないんです」

「だから何故っ、そんなにも彼女の事を気にするのです！？ ただの幼馴染でしょう！！」

悲痛な面持ちで叫んだ王女に光流は冷静に答える。

「俺はあいつの夢の守人です、そしてあいつも俺の守人です」

「……え？」

放心したように王女は言葉を詰まらせる。

「で、でも、だって、恋人同士じゃないって、」

「確かに恋人同士ではありません。ですが、六花は、雪は俺の恋人です」

言葉を失って彼を見つめる王女に、光流はいっそ残酷なまでに畳み掛けた。

「俺も雪も孤児同士なので、お互いになろうと子供の頃決めました。だから俺はあいつの夢の守人ですが、本当はあいつの夢だけじゃなく体も心も守ろうと、その時自分自身に誓いました。俺はずっとそのためにあいつの傍にいます。これだけは譲れません」

「私は……」

王女は一度下を向くと、泣きそうな顔で顔を上げた。

「私は貴方をお慕いしています。これからも貴方に傍にいてほしいと思ってます。私では駄目ですか？」

光流は一瞬言葉に詰まった。だがすぐに真っ直ぐに王女を見つめて返事をする。

「申し訳ありません」

すると彼女は溜息をついて、涙を流しながら微笑んだ。

「わかりました。行ってください」

その言葉に光流は一礼をすると、身を翻して駆け出した。

王宮を飛び出した光流は、町の西の方角に煙が上がっているのを認めた。そのままそちらに走っていくと、彼とは反対の方向へと人々が逃げていく。ただの火事ならば野次馬が集まる場所だが、放火魔が暴れているというのが知れ渡っているのだろう。

現場付近まで来た時、光流は違和感を感じた。隊の者が総出になっていると聞いたのに、辺りがやけに静かだ。もう周りに仲間の姿が見えてもおかしくないのに、それらしい人影はない。放火魔を捕まえていないならそのために、捕まえたなら火を消すために、皆が尽力を尽くすはずなのにどうしたのか。そう考えながらも現場の長屋の前まで来て、光流はぎょっとした。

炎の熱風が吹き荒れる中、何人もの男達が倒れていた。怪我をして血を流している訳ではない。それなのに、屈強な兵士達はお互いに折り重なるように倒れている。光流はざっと見渡してその中に六花がないのを確認すると、近くの一人の様子を見た。どうやら意識がないだけのようだ。だが、どこにも外傷は見当たらない。そのことに光流はぞっとした。ここにいる全員を何がこんな形で昏倒させたのか。果たしてそんなことができるのか。そこまで考えた時、光流の視界の隅に人影が映った。

はっとそちらに顔を向けると同時に、相手も光流に気付いたようだった。それは男だった。年の頃はいまいぢわからないが、光流はその妙に印象に残らない顔に見覚えがあるような気がした。どこで見たのかまでは思い出せない。だが味方じゃないのは確かだ。そう確信して光流が剣を

抜いた時だった。

「……やっと見つけた」

男はぼつりと言って笑った。それはこんな表情を人間ができるのかと思うほどに、歪んだ笑みだった。

「見つけた……？」

光流が訝しげに呟くと、そうだと男は頷いた。

「探していた。お前達を」

「俺、達……？」

「ああ、お前と、あの忌々しい女だ。お前達のせいで俺は牢屋に閉じ込められた。一時とはいえ、あの御方の意志から外れてしまった。我ら日野神乃伝言者の主、日野神様のな！！」

その言葉で記憶が蘇り、光流は目の前にいる男が誰なのかを理解した。光流と六花は数ヶ月前の休暇に、この男に襲われたことがあるのだ。主の命とかで二人を殺そうとしたこの男は、術を使って第一隊の一人の兵士を操ってきた。そして結果、なんとか捕らえはしたものの、六花は光流を庇って大怪我をし、生死の境をさまよった。

「そうか、お前あの時の術師か。道理で隊の腕利き連中がぶっ倒れてるわけだ。わざわざ復讐に来たのかよ。まったく、牢屋の警護の連中は何してやがる」

そう軽口を叩きながらも、光流は内心焦っていた。男の狙いは自分と六花だ。ならば、自分よりずっと前からこの近辺にいるはずの彼女はどのようにしているのか。まだこの男に遭遇していなければいいが。

「ふん、牢屋なんぞ、ほとぼりが冷めた頃に人形を身代わりに見立てて抜けてきたわ。警護の奴らは俺がいないことにすら気付いちゃない」

そう言って術者は嘲りの表情を浮かべる。

「馬鹿な連中だよ。あの女と同じようにな」

その瞬間、光流の心臓がどくんと跳ねた。

「……てめえ、雪に何をした？」

「ああ？ 知ってどうする。どうせお前もここで死ぬのに」

「答える！ あいつに何をした？！」

術者は明らかに平静を失っている光流を見やると、ふんと鼻で笑った。

「ほとんど火の海になった中にガキが取り残されてるってんで、真っ先に中に入って行ったよ。ちょうど良いから術で火勢を強くして、出口を塞いでやったのさ。もう助からねえよ」

光流は自分の中で何かが切れる音を聞いた。一気に彼の纏う空気が変わる。それに気付いたのか術者は何か呪文を唱え始めた。恐らく動きを封じる類のものだったのだろうが、光流にはその時間だけで十分だった。

軽く十歩以上離れていた相手の間合いに一瞬で入り込むと、何の迷いも無く剣を振るう。驚愕の表情のまま、術者は倒れて動かなくなった。

「……あの時、てめえを切っておけば良かった」

* * *

六花は焦っていた。辺り一面は火の海、そして彼女の腕の中にはすでに意識のない子供がいる。早くこの場から脱出しなければならないのに、不自然な程どこにも火勢の弱い所が見つからないのだ。ここが建物のどの辺りなのかも、よくわからない。

「参ったな……」

ちらりと自分の腕の中を見下ろす。煙を吸わないようにと口元に巻いてあげた布は、煤で元の色を留めていない。早くこの子を親元に届けてあげなければ。

そうは思うものの周りの火はどんどん勢いを増すばかりだ。しかも建物自体が倒壊を始めたらしく、柱が倒れるような音も聞こえてくる。このままでは二人とも命はない。

「…こうなったら……」

そう呟いて、六花は剣を抜いた。ざっと周りを見渡して、床ではなく柱と壁が燃えている所を見つける。しっかりと子供を抱え直すと、天井を支える柱には当たらないように壁を十字に切り裂いた。燃えて脆くなった壁にたやすく亀裂が入る。六花はその亀裂のちょうど交差した部分を思いっきり蹴り飛ばした。火傷は覚悟の上だ。

そうして開いた穴の向こうを覗き、そちらの方が火勢が弱いのを確かめると、その穴をくぐる。出た空間は今いたのと似たような部屋のように、出口に繋がりそうなものは見受けられない。

「くそっ……」

毒づいた六花が一步踏み出した途端、それまで弱かった炎がいきなり勢い付く。驚いて立ち止まる六花の周りを、また炎が取り囲む。まるで炎自体に彼女を通さないという意志があるかのようにだった。

気を取り直し、とにかく先程のように活路を開こうと六花が辺りを見回した時、勢い付いたのと同じくらい突然、何かが欠落したように火勢が弱まった。

「……なんなんだこれ」

意味がわからないながらも、とりあえず先に進もうと六花が踏み出した時だった。

背後でびしりという音がした。慌てて振り向くと、先程くぐってきた穴の脇の柱が傾こうとしている。火勢が強まった時に一気に燃え上がったのだろうか。六花はとにかく避けなければと横に動き、目に入ったものに愕然とした。

天井を支える柱が傾いたことで天井にも亀裂が入り、小さな破片がはらはらと落ちてきていた。柱が倒れれば燃えている天井も一緒に落ちてくる。そうなればこの部屋全体が潰されてしまう。

なんとか脱出する方法はないかと壁際近くまで行くが、扉らしきものは何もない。そうこうしているうちにさっきよりも大きい音がして、仰向くと天井が落ちてくるのがひどくゆっくりと見えた。

もう駄目だ、と本能が告げている。六花はぐっと目を瞑り、子供を庇うように抱き込んだ。脳裏に一人の青年の姿が浮かぶ。声が、聞こえた気がした。

ごおおんという轟音が鳴り響く。天井が落ち、部屋が潰れた様子を六花は呆然と見ていた。気がつくと六花は誰かに子供ごと抱きかかえられている。ゆっくりと振り向くと、光流が引きつった顔でそれまで六花が見ていた場所を見ていた。

「光……？」

小さく呟くと光流が視線を向ける。彼女をまじまじと眺めると、ほっとしたような怒ったような表情を作った。

「……雪、大丈夫、じゃなさそうだな」

言われて自分の体を見下ろしてみると、腕と足のあちこちに火傷がある。そこまで確認して初めて、六花は自分が何故助かったのか、という疑問に達した。

もう一度、自分が最初に見ていた方を見るとそこには壁に開いた穴がある。そして、その向こうにあるはずの部屋は瓦礫で潰れていた。辺りを見回すと、火の手は上がっているもののそれほ

ど強くはない。どうやらここは、先程までいた部屋の隣らしい。そう判断して六花は思い出す。もう駄目だと目を瞑った時に、天井が落ちてくる音とは違う音がして、彼女は誰かに引っ張られたのだ。恐らく光流が壁に穴を開けて、そこから彼女をこちらの部屋へ引っ張りこんだのだろう。

得心がいった六花は、更なる事実気付いてぎょっとした。

「光、王女様の護衛は...」

「説明は後だ。とにかく外に出るぞ」

彼はそう言って立ち上がり、六花の手から子供を取り上げると、彼女の手を引いて走り出した。

* * *

翌日、光流は王と謁見していた。王女護衛の任を放棄した罰を受けるためだ。勅命を無視、しかも王族の護衛を放棄したのだから、最悪死刑を言いつけられてもおかしくないと覚悟の上だったのだが。

「咎めはなしとする」

そう言い放った王に光流も付き添っていた隊長も驚愕した。光流は慌てて反論しようとする。

「で、ですが.....」

「光流が行かなければ犯人は逃げ、隊の優秀な兵達が大勢命を落とす所だったと聞いている。しかもその犯人が例の噂を広げていたという情報も入ってきている。犯人を切った件も、軍規にある例外に当てはまる。また、護衛を外れる際もちゃんと腕の立つ兵を残してから行った、そのため何も心配はいらなかった、だから光流を罰してくれるな、と当の王女が言ってきた。これでは罰しようがないな」

「.....はい、ありがとうございます」

「礼を言うのはこちらの方だ。.....六花の両親は十年前、私を守るために命を落とした。それなのにあの子にこんなに早く死なれては、天国の二人に申し訳が立たん。よくぞ守ってくれた」

その言葉に光流は黙って頭を下げた。そこへ、王はもう一つ、と付け加える。

「お前の腕を見込んで頼みがある。今度の隣国への訪問に護衛として付いてきてほしい。隊長一人では多勢に無勢ということもあり得るが、あまり大勢護衛を連れて行くとあちらにも失礼に当たるからな。お前なら腕も確かだし、問題ないと思うのだが」

光流はその言葉に一瞬逡巡した後、口を開いた。

「.....追加は私だけですか？ 六花は...？」

「ああ、六花も本当は連れて行きたいところだが、第一隊の隊長、副隊長を全部連れて行くとなると、こちらの警護が手薄になるからな。六花には引き続き王女の警護として残ってもらおうと思っている。昨日の怪我も出発までに完治するかわからんしな」

「.....承知致しました」

そして五日後の夜、光流は甲板に立って海をぼんやりと眺めていた。王に付き添って船で旅立ってから一日が過ぎている。

「んなシケた顔して、お前が何考えてるか当ててやろうか？」

声に驚いて光流が顔を向けると、隣に隊長が立っていた。彼と六花の育ての親は呆れたような

視線を寄す。

「隣国に行ったら、滞在期間は一ヶ月半。あちらの首都までの行き帰りを合わせたら、帰り着くまでに三ヶ月はかかる。その間ずっと六花と離れてられるのか。そんなところだろ。そういえばお前達、十年前から今まで一回も、三日とずっと違う所にいたことないもんな」

「う、……はい」

すっかりお見通しだ。光流は溜息をついた。

「今まで雪に何かあったら、なんかこう、虫の知らせみたいなのがあったんで、すぐに傍に行きました。でも、隣国にいたらそういう訳にもいかないし、そもそもそんなに離れてたら勤も働かないかもしれない。そう思ったら……」

そこまで言って視線を落とす光流に、隊長は大げさに溜息をついた。

「お前なあ、六花だってガキじゃないんだから、って言っても聞かないよな。でもな、六花に敵う奴なんてほとんどいないんだぞ。王女様の護衛してたら、自分から無茶するようなことはそんなにならないだろうし」

「わかっちゃいるんですけど……」

「出てくる時に絶対に無茶はするな、と六花に釘を刺してきたんだろ？」

「はい、そりゃもう十回位。雪は馬鹿にするなって言っていましたけど」

「だったら六花も心がけはするだろ。じゃあ大丈夫だ。それにな、たぶんお前らに限ってお互いの危険に勤が働かないなんてことないと思うぞ」

「何の根拠があるんですか、それ。大体お前らって……」

「何だ知らなかったのか。六花も昔っからお前に何かあった時、勤が働いてるみたいだぞ。何回かいきなりお前の所に行くのを見てるし、だいたい当たってる。そんな奴らに限って働かないなんてことないだろ。ま、これは俺の勤だけだな」

「……じゃ、俺は隊長の勤を信じます」

「おう、そうしとけ」

* * *

六花は溜息をついた。ついてから、王女の御前だった事を思い出し、口を押さえた。

「……心配ですか？」

不意に声を掛けられて六花は目を見開く。それまで庭の散策を楽しんでいたはずの王女が目の前にいて、さらに驚いた。王女はその様子を見て苦笑する。

「光流が心配ですか？ でも隊長殿もいるのなら大丈夫だと思いますが」

「……わかってはいるのですが」

そう苦笑を返すと王女が沈痛な面持ちを浮かべた。六花は何故王女がそんな顔するのかがわからず慌てる。

「あの、何かお気に触ることをしてしまいましたか？」

「……いえ」

光流たちが旅立ってすでに二月半が経ち、その間に六花と王女は年が近いこともあり、ずいぶん打ち解けていた。王女は光流を諦めたようで、彼らが旅立ってから六花に好意的に接してくれている。六花も、もともと彼女の気性が嫌いな訳ではなかったので、そのことが嬉しかった。だからこそ、そんな顔を王女にしてほしくなかったのだが。

「私のせい、ですね」

「はい？」

意味がわからず聞き返すと、王女はついとあらぬ方を向き、そのまま話し始める。

「お父様が隊長殿だけでは何かあった時に対応しきれないかもしれない、と思われた。それは私がそう仕向けたからです」

「え……？」

「最初護衛は隊長殿のみと決めていたお父様に、『あちらの国を疑う気はありません。でももし私とあちらの王子様とのことをよく思わない者がいたら、それが地位のある者だったら、大勢の人間を使ってきたりはしないでしょうか。そうなった場合、いくら腕が立つと言っても隊長殿だけで大丈夫でしょうか。私はそれが心配です』と進言しました。隊長殿もそれを聞いて、確かにと納得しました。だから急に護衛が追加されたのです」

「……でも、その護衛に光流を付ける事に決めたのは王様でしょうか？ だったら」

「それも私が仕向けたのです。大勢護衛を連れて行けば向こうに失礼だから、腕の立つものを一人追加するべきだ、と。この場合、あの時点での光流と怪我をしていた貴女だったら、当然光流を連れて行くだろうと考えたから……」

「でもそれは王様のことを案じたから、では」

「違います。……嫉妬、したからです。貴女に。知っているでしょう？ 私は光流が好きでした。でもあの火事があった日、彼は貴女を助けに行くことを選びました。たぶん、命を捨てる覚悟で。私は敵わないと知って、悔しかったんです。すべてが終わった後、彼が犯人を切ったと聞いた時は、人を殺せる人なのだと怖くもなりました。でも、それでも悔しかった。だから、せめてもの意趣返しに貴女達を引き離してみたかったのです」

「そう、ですか」

「ええ。でも、それは間違いでした。今でもまだ、光流のことは好きです。でも私が好きなのは貴女と一緒にいる光流なんです。私は羨ましかっただけなのだと、私が欲しかったのは物語に出てくる様な騎士で、貴女と一緒にいる光流はそれにふさわしく見えたからなのだと、この二月半で思い知りました。……ごめんなさい」

六花は目を見開いて聞いていたが、王女が話し終わると、それなら、と口を開いた。

「私もお詫びしなければいけません」

「え？」

きょとんとしてこちらを向いた王女の前に膝き、六花は頭を垂れた。

「緊急事態であったとはいえ、光流は王女様の護衛を勝手に離れました。そしてその原因は私です。原因を作ってしまったことに対して、また彼の同僚としてお詫び申し上げます」

「……立ってください。貴女が詫びる事ではありません。それに跪くなんて、騎士のやることです。女性の貴女が」

「私も騎士ですから」

王女の言葉を遮って、六花は顔だけを上げた。続けるのは彼女の信念だ。

「私は誰かに守ってもらうだけ、というのは性に合わないんです。それよりもその人の隣で共に戦いたいし、誰かを守りたい。そう思って兵士になりました。先程人を殺す人は怖い、とおっしゃりましたが、私も軍規第四条『現行犯を捕まえる際、生け捕りが極めて困難、または捕らえたことでさらに被害が増す可能性がある場合のみ、犯人を殺害することを許可する』に従い、何人か切ったことがあります。その分人の命の重さは承知しているつもりです。私達の仕事はそういう仕事です。騎士というのは何かを守ろうと戦い、命の重さを知る者のことだと聞きました。女らしくないと言われてようが何だろうが、それなら私は騎士でいようと思います」

王女は目を見開いていたが、やがてぼつりと言った。

「なら、私の見立ても間違っていないのですね。貴女も、そして光流も立派な騎士だわ」

「ありがとうございます」

もう一度頭を垂れてから、六花は立ち上がる。そしてもう一つ、と続けた。

「何か誤解しているようですが、私と光流は別に恋人同士ではないですよ。光流が私に向ける感情はたぶん、家族に向けるようなものだと思います。私達はお互いに孤児で、しかも光流には家族の記憶がないので。光流が私を守ろうとしてくれるのは、きっと家族を失いたくないからだと思います」

そう言った六花を王女は困ったような呆れたような顔で見つめた。

「本気でそう思っているのですか？」

「え？ はい」

きょとんとする六花に、今度は少し悲しそうな顔で王女は問いかける。

「貴女も家族だと思って光流と接しているのですか？」

今度の問いには苦笑して首を振る。

「光流、光は私の恋人です」

「………そうですか」

啞然と六花を見つめていた王女は、呆れたように溜息をついた。

「夢の守り人は心の一番近い者同士がなるというのは本当なんですね」

その言葉に六花は驚愕した。

「なんでそれを知っているんですか？」

「何故って、光流に教えてもらったのだけど。そういえば彼も受け売りだって……」

不思議そうに答えた王女は、あ、と声を上げた。

「もしかして彼に教えたのが貴女？」

「はい、もう十年位前に。それは死んだ母が考えて、教えてくれたんです。まだ覚えてたんだ……」

最後はほぼ独白で六花は答えた。

* * *

光流が三ヶ月の旅路から帰り着いたのは日が暮れた後だった。早く会いたくて、六花がいるはずの宿舎へと急ぐ。結局この三ヶ月で彼の勤が働くことはなかったのだが、それでも少し不安だったせいもある。

自分達の部屋の前までたどり着くと、少し上がっていた息を整えた。それからこんこん、と扉を叩く。自分の部屋なのだからそんな必要はないのだが、なんとなくだった。だが、いつまでたっても反応がない。もう一度叩いて反応が返ってこないのを確かめると、光流は扉を開けた。

中は真っ暗だった。寝ているのかとも思ったが、まだそんな時間ではない。明かりをつけると、やはり誰もいなかった。こんな時間にどこかへ行ったのだから、それとも。

そこまで考えた時、がちゃりと扉が開いた。ぱっと振り返ると、六花が目を見開いて立っている。

「……光、帰ってきたのか」

「今ちょうどな。お前、こんな時間までどこ行ってたんだ？」

ああ、と六花は扉を閉めながら答える。

「王女様と話してたらこんな時間になってた。明日から普段の隊務に戻るから、なんか名残惜しくて」

「そうか。……あんまり心配させるな、馬鹿」

すると六花は明らかに気分を害した風に言い返す。

「馬鹿はないだろう。大体光は心配性過ぎ」

「お前が普段から無茶ばっかするのが悪い」

「王女様の護衛を放り出した奴に言われたくない」

そこで言葉を切って十秒ほど睨み合った二人は、同時に吹き出した。笑いながら光流が拳を突き出すと、六花もそれに合わせる。

「おかえり、光」

「ただいま、雪」

こつん、と合わせた拳が鳴る音がした。

ごろつき共の夢の後

「おい姉ちゃん」

皆が寝静まった頃の時間帯、ほとんど人通りのない住宅街。そんな状況でいきなり声を掛けられた六花は、思わずため息を吐きたくなった。

「んな時間に、若い女が一人で出歩いてちゃ危ねえぜ」

そんなことを言いながらも、にやにやという形容がぴったりな、下心丸出しの笑いを顔に浮かべて男は近づいてくる。立ち止まってそちらを見やった彼女は内心で、危ないのはためえの方だと毒づいた。

「しょうがねえから送ってやるよ。家はどこだい？」

男はさも親切気に言いながら、彼女の肩に腕を回そうとする。その腕をすりと避けて、六花はそいつと向き合った。

「生憎だが、工作中だ」

彼女はそう言って、帯刀している剣をかちやりと鳴らして見せた。

六花が所属している王軍第一隊は、王族の近衛軍も兼ねている。そこに「最近治安が非常に悪いため、手を貸して欲しい」と、夜間の城下巡察援助の要請がきたのは三日前。

普段、城下の警護を務める第二隊、第三隊の両隊長が揃って王に申請し、王から第一隊隊長に命が下った。このような正式な手続きがなされるのは滅多にない事で、通常人手が足りない時は各隊長間で必要な人数だけを貸し借りする。正式な手続きを踏むという事は王の耳にも入れておきたいという事で、つまりそれだけ事態が緊迫しているのだ。

確かにこれは問題だなと、あからさまにぎょっとした男を牽制しながら六花は思った。

なにせ時間が遅いとはいえ、暗い路地裏ならともかく家々が立ち並ぶ大通りとも言えるべき場所で、女をかどわかそうとする輩がいるのだ。それも今日だけで、彼女がこの手の者に声をかけられたのは二度目である。その者は有無を言わせず六花の手を引こうとしたため、その時彼女の数十歩後を歩いていた隊の仲間連行された。

「……お前、まさか、『王軍の氷華』か？」

「……………は？ 氷華？」

驚きに目を丸くしている男が呟いた言葉を聞きとがめて、六花はきょとんとした。

軍に所属している女性は全軍合わせても多くはなく、彼女はその全てと知り合いである。だが、その中にそんな名前の人物はいない。ちなみに第一隊における女性は十六歳の六花ただ一人である。

「私はそんな名前ではないし、そもそも軍にそんな名前を持つ人間はいない。何かの間違いだろう」

六花がそう言うと、男はふいに確信に満ちたような顔つきになり、首を振った。

「氷華ってのは本名じゃねえ、俺等の中での通り名だ」

「通り名？」

そう言われても、聞いたことがない六花は首を傾げるしかない。

「なんでも、軍の一番強い隊には屈強な男達に混じってただ一人、氷の様に冷たい程強く、華の様に美しい女がいるってな。その気の強さといい、お綺麗な顔立ちといい、お前のことじゃねえかと、俺は思うがね」

「.....そんな通り名も評価も初めて聞いたが、確かに王軍第一隊に属している女は私一人だ。わかったら、見逃してやるからとっとと去れ」

声を掛けただけなら引立てるには及ばないからと告げたのだが、男はにやりと笑って動かない。それどころか、いきなり強く口笛を吹いた。そして、啞然としている六花に向けて吐き捨てるように言う。

「三日前に俺の仲間が五人、一度に軍に捕らえられてなあ。その時相手は女一人だけだというのに次々と昏倒させられたそうだ。そんな芸当ができるのは『王軍の氷華』しかいないっつうのが俺等の見解でな。違うか？」

「.....確かにあったな、そんなことが」

巡察の援助が始まったその日のことだ。六花は今日と同じように一人で歩いていて、五人の男に襲われた。向こうは女と見くびったのだろうが、いかんせん相手が悪すぎる。十六歳という若さと女性でありながら、彼女は軍で一位、二位を争う実力の持ち主なのだ。一応呼子の笛で助けも呼んだのだが、応援が来る前に全てが終わってしまったというのが事の真相である。

「仲間をやられたから仕返しをさせろ、と？」

そういうことかと六花が睨むと、男はわかっているじゃねえかと言わんばかりに目を細めた。同時に、通りに繋がる路地のあちこちから、こちらに向かってくる足音がした。先程の口笛は仲間を呼ぶためのものだったらしい。

「いくら『王軍の氷華』つたって、十人相手はきついだろ？」

男がそう言い終わる頃には、通りには幾人もの男が立っていた。最初の男が言った通り、合わせて十人。確かに一人で相手をするには分が悪すぎる。

そう判断した六花は、助けを呼ぼうと首から吊るしているはずの呼子に手を伸ばす。が、先程別の男を連行して行った仲間に貸してしまった事を思い出した。思わず小さく舌打ちをした六花は覚悟を決める。助けを呼べないなら、一人で何とかするしかない。逃げるという選択肢は彼女の矜持が許さなかった。

ふいに、同じく第一隊に属する幼馴染の顔が脳裏をよぎる。軍内一位、二位の実力を六花と争う彼は三日前の事件の後、散々彼女に対して、無茶をするなど怒っていたのだ。この分だとまた怒られるな、と六花はそっと苦笑した。

「こいつがかの有名な『王軍の氷華』さまだ。仲間の恨み、果たしてやろうじゃねえか」

最初の男は仲間にもう言いながら、懐から抜き身の短剣を取り出した。その言葉に六花を見る目つきが変わった他の男達も、手に手に棍棒やら剣やら、何かしらの武器を構えている。対する六花の得物は細身の剣だ。

が、軍法という法律により、たとえ犯罪者であっても余程の事がない限り、軍の兵士が一般人を殺すことは許されない。

六花が己の得物を抜くことなく男達を見返していると、場に一瞬の沈黙が流れる。雰囲気似合わない優しい風が吹いて、頭の高い位置で結われた六花の髪を揺らした。そして。

「うおおおおお！」

雄叫びを上げながら四人の男が六花に切り掛かってきた。得物が振り下ろされる前に動いて回避した彼女に、今度は別の三人が襲い掛かる。内の二人の武器はあまり太くない棍棒だった。六花は剣を抜きざま、その棍棒を男達の手元近くで叩き切り、もう一人の得物は剣を斜めにして受

けることで流す。攻撃を受け流された男は勢い余って体制を崩し、その首筋に六花の手刀を受けて昏倒した。

「まずは一人」

そう呟きながら彼女は剣を鞘に収める。下手に抜いていると、条件反射で急所を切りつけかねないからだ。

そうしている内に、今度は二人の男が前後から切り掛かってくる。六花はわずかに速かった前方の男の、得物を振り上げたためにがら空きになった腹を回し蹴りで蹴り飛ばし、その勢いで体の向きをくるりと変える。いきなり向き直った彼女に怯んだ相手は、剣を収めたままの鞘で頭を殴られ気絶した。

蹴り飛ばした男も動けなくなっていることを確認した六花は、残りの七人を見回した。短剣を持つ者が一人、剣が四人、残りの二人は先程棍棒を切られた為に丸腰だ。

「さて、次は誰だ？」

六花がそう言って笑ってみせると、挑発されて頭に血が上ったのか、丸腰の男が一人と剣を持った男が二人、計三人が襲い掛かってくる。殴りかかろうとした男を避けてその鳩尾に拳を叩き込み、六花は残りの二人が振り下ろした剣の間をすり抜けて、その背後を取る。そして自分の剣を抜いて、二人の足を一太刀で切りつけた。

が、剣を振り切った次の瞬間、彼女はその腕を掴まれた。はっとして振り返ると、短剣を持った男が彼女の二の腕を掴んでいる。しまったと思ったが、もう遅い。どんなに腕が立つといっても、男と女では力の差があり過ぎるのだ。さらに、剣を持った残りの二人が近づいてくる。

「さすがに『氷華』さまでも、利き腕を取られちゃ何もできねえだろ？」

にたりと笑う男を睨みつけて、六花は取られた方の手に握っていた剣をわざと落とした。腕を取っている男はそれを見て彼女が諦めたと思ったらしく、向かってくる仲間に視線を移す。そのことを確認した六花はいきなり、その男に背中を向けてしゃがみ込んだ。そしてそれまで剣を扱っていたのは逆の手で剣を拾うと、その体勢のまま近づいてきた男達の足に切りつける。油断していた彼らは成す術もなく攻撃を受け、痛み立っていられなくなった。

「っの女(アマ)、両利きかよ!？」

彼女の腕を掴んでいる男は引きつったような叫びを上げ、闇雲に短剣を振り上げた。恐らくは狙いなど定めていないその短剣は、しかしまっすぐ六花の肩口めがけて振り下ろされる。腕を取られているため動けない彼女がそれでも無理矢理に身体の位置をずらしたのと、刃が彼女の肌を切り裂き始めたのはほぼ同時。

そして。

「雪!!!」

色を失った呼び声と剣が鞘走る音が響いたのも同時だった。

六花の腕を掴んでいた手から力が抜け、男はばたきとその場に倒れた。その背には倒れる原因となった一太刀分の切り傷がある。

そして倒れた男の向こうには、剣を振り切った形で息を切らせている幼馴染の姿があった。

「光(こう).....」

六花が小さく愛称で呼びかけると彼、光流(みつる)はゆっくりと剣をしまい、近づいてきた。その姿に彼女はあることに気付いてはっとする。慌てて倒れた男の傷を確認する彼女に、光流は事も無げに言った。

「大丈夫だ。死ぬ程深くは切っていない」

その言葉通り、ちゃんと手当てを施せば致命傷にはならない程度の傷ではある。

ほっと息をついた六花は、そういえばあと一人、丸腰の敵がいたことをやっと思い出した。その割にはやたらと静かである。不思議に思って振り返ってみると、その男は腰をぬかした状態で座り込んでいた。しかもその体勢のまま気絶している。どうやら、そんなに胆の据わった人間ではなかったらしい。

そんなことを六花が思っている内に、光流が彼女の前に立った。

「六花、腕、見せてみる」

感情が込められていないその声と、常の愛称である雪ではなく六花と呼ばれたことに、彼女は思わず逃げ出したくなった。

怒っている。ものすごく怒っている。

この一つ年上の青年の幼馴染をやってもう十年にもなるが、ここまで彼が怒ったのを見たのは初めてかもしれない。

だが逃げ出す訳にもいかないのだから、黙って言われた通りにする。

彼女の利き腕には、短剣が突き刺さった後に男が倒れるに従って動いたため、少し歪な形の切り傷が形成されていた。出血はそれなりにあるが、傷自体は大して深くないため動かせないということはない。一月もすれば傷跡すら残らないだろう。

光流はその傷をまじまじと見つめた後、懐から白い布を取り出して彼女の腕に巻き始めた。応急処置の止血だ。六花は黙ってされるがままになっている。

「……お前」

もうそろそろ巻き終わるといふ頃に光流が口を開いた。六花はゆるゆると顔を上げるが、彼は自分の手元を見ているため目が合うことはない。

「俺が三日前に言ったことを覚えてるか？」

「……………絶対に、無茶はするな」

六花が答えた途端に光流がこれ以上ない程強く睨んできた。同時に布が結び終わる。

「じゃあなんでこんな事態になるんだっ！？ 十人を一人で相手するなんて、無茶どころか無謀もいいところだろうがっ！ おまけに今度は呼子も吹かないで！ 俺が来なかったらこんな怪我じゃすまなかっただろ！ どうするつもりだったんだっ！？」

一気にまくし立てられて、六花は俯いた。正論だ、言い返す余地も資格もない。

「……ごめん」

「謝るんなら自粛しろっ！」

そこまでがなってから、光流は溜息をついた。六花がゆっくりと顔を上げると、苦渋に満ちた顔がある。もう一度謝ろうと口を開いた時、彼女はぐいっと引き寄せられた。

「え？ 光？」

驚いて声を上げる六花の肩に、光流がとんと頭を乗せた。少しくぐもった声が耳の近くで聞こえてくる。

「……頼むから、もうこんな無茶しないでくれ。お前に何かあると、俺の寿命が縮む」

その声があまりにも苦しそうだったため、六花は何も言えなかった。

その後、光流が持っていた呼子で応援を呼び、その辺に転がっていた十人の男達を留置場に運んだ。彼らは目覚めて傷の手当てが終わり次第、裁かれることになる。

六花は男達を運び終わった後に、新入りの兵士に声を掛けられた。ちなみに光流は別室で隊長と話している。

「光流さんの勘ってすごいですねえ。俺、一緒に歩いてたんですけど、いきなり『雪？』って呟いて、走り出しちゃったんですよ。たら六花さん、本当に危機一髪だったんだもの」

やたらと感心している少年兵を適当にあしらいながら、六花はふと思い当たった。

自分がどんなに言われても無茶をしてしまうのは、心のどこかで彼が必ず来てくれると信じているからではないだろうか。

それは信頼でもあるが、依存でもあり、甘えでもある。別の面でも色々と光流に依存している自覚がある六花は少々反省した。そして、彼にあの苦しそうな顔をさせないためにも、これからはできるだけ無茶は控えよう、と心に決めたのだった。

真綿のごとく緩やかなる

ここはとある島国の王国。比較的気候もよく、資源にも恵まれているこの国を治めている王には、御年十四歳になる娘がいた。これは、その王女にまつわるお話。

「だ、か、ら、どーして会った事もない人と結婚なんてしなければならないんですか！？　そんなの私、絶対に嫌です！」

ある麗らかに晴れた日の昼下がり、王宮内の王の執務室には甲高い声が響き渡っていた。その声の主は第一王位継承者である王女鈴音。ただ今父親である現国王に、自分の将来の重要事項について抗議中なのである。

「なにも今すぐ結婚しろと言っている訳じゃない。お前もあちらも十四歳でまだ若いから、許婚にするに留まっているだろう。実際に式を挙げるまではまだ何年もあるんだから、その間に親交を深めればいいじゃないか」

そう言っていきり立つ娘に穏やかに返しながら、王は微笑んだ。

「この間会ってきたが、なかなかいい子だよ。容姿も良いし、剣の腕もそれなりに立つそうだ。それに何より、とても優しい」

「それは全部お父様の印象じゃないですかっ！　私は自分の結婚相手くらい、自分で見極めます！」

肩を怒らせてそう言い切った鈴音に、王は穏やかに返す。

「そうか、じゃあそうすればいい」

「はい？」

まさかあっさり引き下がられるとは思っていなかった鈴音が聞き返すと、王は穏やかに、あくまで穏やかにそれも微笑み付きで、爆弾発言をしたのだった。

「明日の午後、その彼がここに着く事になっている。二ヶ月ほど滞在することになっているから、その間に見極めればいいだろう？」

「なんですってー！？」

この王国の第一王位継承者にして現国王の一人娘である鈴音に、隣国の第二王子との縁談が持ち上がったのは、彼女の十四歳の誕生日である。

お祝いも兼ねて、と送られてきた隣国の使者の話によると、ゆくゆくは王国を背負う命運にある王女に、我が王子を婿入りさせてはどうだろうか、同い年だから気心も知れるだろうし、国務の補佐もできるであろう、ということらしい。

王も一人娘の今後をそろそろ考えなければ、と思っていたところだった。先方からの申し出ではあるが、この国にしてもこれ以上の縁談はない。王族なので身分も釣り合うし、この縁によってますます隣国との結びつきも強くなる。政治上ではなんら問題ない。

だが、だからといって王も自分の娘を下手な性格の持ち主にやりたい訳では決してなかった。だが、その人柄については、先月王自身が隣国に赴いた時に、実際に本人に会ったことで解決した。

王がその王子をいたく気に入ってしまったのである。

冗談じゃないのは鈴音本人だ。どれだけ周りの誰もが納得していても、いきなり見ず知らずの相手と結婚しろなんてごめんである。そういう訳で抗議したのだが、今度はいきなり明日、相手があるという。どうやら事前に伝えれば反対すると思っただけで、王は鈴音にのみ伝えていなかったのだから。そんなこんなで、彼女は大変機嫌が悪かった。

翌日。

王宮は隣国からの客を迎えていた。公式の訪問ではないため、極々慎ましやかな歓迎の宴が開かれている。

食事をしながらも、鈴音は先程から自分の右隣、主賓の席に座る少年を盗み見していた。

確かに顔はいい。最初に軽く挨拶を交わして以来話していないが、性格も特に悪くなさそうだ。

しかしやっぱり好みではない、と彼女は思う。悪いところはないのだが、これといって惚れ込むところもなさそうなのだ。はっきり言って、どうして父親があんなに気に入っているのかわからない。

「どうかしましたか？」

そんなことをつらつらと考えていて、食べる手がお留守になっていた鈴音を訝ったのであろう、彼女の思考の大半を占めていた人物が声をかけてきた。

「いっ、いえ……」

鈴音は慌てて否定すると、少しぎこちないながらも手を動かすことを再開した。まさか、貴方が自分の好みと合わないなと思っていました、と答える訳にはいかない。

少年は少しの間、不思議そうに彼女の顔を見ていたが、やがて自分も食べ始めた。時折、自分の左隣、鈴音の向かいに座っている王と言葉を交わしながら。

結局その宴の中で、彼と彼女が交わした会話はそれだけだった。

宴の後、鈴音はその少年に王宮内を案内することになった。もちろん王の取り計らいによるものだ。いつも通り穏やかに、しかも本人の目の前で案内してあげなさい、と言われてしまえば彼女に拒否権はない。

「……で、こちらが二つ目の庭園です。一つ目の庭園はもう時期が終わってしまいましたが、この花は今月から来月にかけてが見頃です」

半ばやけくそになって説明をする彼女に、少年は時折相槌を打つ程度で、自分から口を開くことはない。やりにくいことこの上なかった。

「それで、この道をまっすぐ行くと一つ目の庭園に、そちらの道を行くと内庭園に繋がっています」

「……あの」

いきなりかけられた声に、さっさと次に行こうとしていた鈴音は驚いて立ち止まってしまった。まさか立ち止まるとは思っていなかったのだろう、少年は彼女の背中に思いっきりぶつかってしまう。

「わっ！」

「きゃう！」

勢い余って転びかけた鈴音は変な悲鳴を上げてしまった。ぱっと口を抑えた彼女を見て、後ろ

の少年は堪え切れなくなったように吹き出す。笑われたことで恥ずかしさが増した鈴音は、思わず叫んでしまった。

「あ、貴方がいきなり声をかけたからじゃない！」

叫んでしまったから、はっとする。しまった、感情的になって敬語も何も忘れてしまった。慌てて見れば、叫ばれた方も驚いて目を剥いているではないか。

しかし鈴音が謝ろうと口を開いた時、彼はまた笑い出した。思わずむっとしてしまう彼女を見て、少年は目に涙を溜めながらも口を開く。

「悪かったよ」

「.....それはぶつかったことに？ それとも笑ったこと？」

未だに笑いを堪えている彼に、謝ろうと思っていたことなど忘却の彼方に追いやることにした鈴音はつっけんどんに聞いた。

「両方。ああ、でもさ」

「何よ」

「喋り方、そっちの方が合ってるよ。さっきのよそよそしい敬語なんかより、ずっといい」

何故か一人で納得している少年の言葉に一瞬詰まった鈴音は、ふいと目を逸らして呟いた。

「そんなの、お互い様よ」

「で、さ」

もうすっかり敬語をやめたらしい少年は、改めて真剣な目でこちらを見つめてくる。

「なんて呼べばいい？」

「はい？」

いきなり何を言い出すのだろう、と目を見開いた彼女に彼は平然と続けた。

「普通に鈴音さん？ それとも何か愛称とかある？ あ、そもそもこっこの国に愛称とかがあってあるのか？」

矢継ぎ早な質問に、そういうことかと納得した鈴音は、今度はきちんと答えることにする。

「ああそうね、この国ではほとんど愛称は使わないわね。.....まあ、使ってる人もいるけど」

最後の方だけやけに暗くなった彼女の語調が気になったのか、目の前の少年が首を傾げる。それを見て、彼女はなんだかおかしくなった。この際だから話してしまおうか。

「好きだった人がね、使ってたの、愛称」

「.....君に？」

穏やかな問いに首を振り、それならどんなにいいだろう、と鈴音は目を伏せた。

「その人の幼馴染。一つ違いで十年前からずっと一緒にいる二人で、どう見たってお互い好き合ってるのに本人達がまったく気づいてないの。そのくせ、事件があった時に私の護衛をしていた彼は、ってああ、二人とも兵士なの。で、彼は自分の直感でその人が危ないって思って、飛び出してっちゃったの」

「って、護衛の任を放棄して？」

驚いたように聞き返す少年に頷き返して彼女は自嘲した。何故会ったばかりの、それも一応仮にも許婚に、こんなことを話しているのだろう。だが止めることはできなかった。

「そうしたら本当に彼女は絶体絶命で、しかもその他にもたくさんの兵士が、彼が行かなければ命を落としていたの。だから結果としてはお咎めなしだったけど、彼は飛び出した時点でどんな罰も受ける覚悟だったでしょうね。そんなことよりも、彼女を失うことの方が怖かったのよ」

「.....それは」

それきり言葉が続かない少年に、鈴音は取り成すように笑ってみせた。

「完全に私の片想い。言ったでしょ、好きだったって。もうとっくに諦めたわよ」

そうしてから、はたと最初の質問を思い出す。誰にも話さずにおこうと、それでも誰かに聞いて欲しいと思っていたことを聞いてもらったのだから、ちゃんと答えなければ。

「私の呼び方は...」

「鈴音」

「え？」

答えようとしていたところを遮られて、鈴音は目を丸くした。彼は今、なんと言った？

「鈴音って呼ぶよ。何か付けるのもいいかもしれないけど、愛称っていう言葉がそんな顔させるんだろ。なら、させたくないし。付けるとしても、その話が笑ってできるようになってからだな」

そう言ってふわりと微笑んだ少年の顔を直視できなくて、鈴音は目を逸らした。なんだかやたらと胸の辺りが苦しい。でもそれはなんとなく、嫌な感じではなかった。

紛らわすように彼女は口を開く。

「じゃあ私は.....」

その後には彼の名前を続けようとして、鈴音は愕然とした。最初に挨拶した時に聞いた筈なのに覚えていない。きっと考え事をしていたので、耳の右から左に抜けてしまったのだろう。固まってしまった彼女の様子からそれに気付いたのか、少年はふっと苦笑した。

「空也だよ。空気の空に也(なり)でくうや。空気のようにさりげなくも必要とされる人に、そして空気のように大切な人の傍にられる人になりなさいって意味らしい」

へえ、と感嘆する鈴音に、空也は覚えた？ とわざとらしく聞いてくる。それを無視して彼女は歩き出した。

「次行くわよ」

ひどいなあと笑いながらもついてくる彼を横目で見ながら、彼女はそっと呟いた。

「空、也」

「ん、呼んだ？ 鈴音」

「なんでもないわよ」

先程とは打って変わって、あれこれと話しかけてくる空也に相槌を打ちながら、鈴音はそっと空を見上げた。

きっと彼は、名前通りの人になるだろう。空気のように傍にいて、必要とされる人に。

それから約二ヶ月間、王宮では毎日のように空也を怒鳴りつける鈴音の姿があった。だが、彼女がどんなに怒鳴りつけようがひどいことを言おうが、いつも空也は苦笑しながら、それを甘んじて受けている。そしてそのことで調子が狂う鈴音はいつの間にか、他愛もない昔話や滅多に人に見せない弱みを彼に話しているのだ。だから最後の最後ではいつも、空也の方が勝ってしまう。

鈴音はそれが悔しいと思いながらも、嫌だとは思っていない自分がいることを知っていた。そして初めて名前を呼ばれたあの時に感じた苦しさが、次第に強くなっていることも。

ゆるやかにゆるやかに。

まるで真綿に締め付けられるように。

それでも嫌だと感じない自分が、鈴音は嫌いではなかった。

街角

「待ちやがれ泥棒！」

待てと言われて待つ訳がねえだろ。俺は戦利品である林檎を片手に人ごみの中を駆け抜けた。この通りを抜けて路地裏に飛び込んだら追っ手を撒ける。作戦は完璧で、上手くいく筈だった。いつも通りなら。

「わっ！」

もうすぐ目的の路地裏が見えるという所で、誰かがいきなり俺の腕を掴んだ。全力疾走していた俺は転びかけ、腹立たしいことにその力強い腕に支えられる。ぱっと顔を向けると腕の主は若い男で、その隣には同じ年頃の女もいた。そして最悪なことに二人とも帯剣している。軍の間人だ。さらに追っ手が追いついてきた。これで俺は確実に突き出される。

「……いくらだ？」

「は？」

間抜けな声を出したのは俺と追っ手の両方だ。今、この男はなんと言った？

「こいつが盗った、…林檎か、いくらだ？」

男はそう言ってなんと金を払った。追っ手の方は金がもらえれば俺に用はないから、そのまま去っていく。意味がわからず唖然としている俺に女が話しかけてきた。

「お前、名前は？」

「……ねえよ、んなもん」

物心ついた頃から一人で、ずっと路上で生活していた俺は、名前も無ければ自分の年も知らない。ついでに字も読めない。そう伝えると、二人は顔を見合わせた。

「年は、……十歳位か？」

「まあそんなとこだろ。名前が無いのは不便だな。つけるか」

どうでもいいがこの二人、やけに喋り方が似ている。そう思っていたら、いきなり男に抱き上げられた。

「よし、良い秋で、秋良だな」

「え？ あきら？」

「そ、お前の名前。今日は秋晴れだからな。お前の面倒見てくれるとこ、探してやるよ」

我が身を越えていくものへ

「ぶとうかい!？」

久しぶりに同じ宿舎内の養い子兼部下達の部屋を訪れ、爆弾発言をした俺は、予想通りの素っ頓狂な声に満足した。

「ああ、舞踏会だ。王女様直々のお招きなんだから、絶対参加だぞ」

「.....あの」

光流(みつる)が遠慮がちに声をあげてから、困惑顔で六花(りっか)と顔を見合わせる。彼が言いたいことを汲み取ったらしい彼女が問いを続けた。こういうところは相変わらず息がぴったりだ。

「ぶとうかいって戦う方じゃないですよね？」

「当たり前だ。踊る方に決まってるだろ」

間髪入れずに返すと、途端に二人は嫌そうな顔になる。まあ、育てた俺が戦いしか能がなかったせいで、こいつらにもそれしか教えてこなかったからな。おかげで史上初と謳(うた)われる程若い、十七歳と十六歳の副隊長が二人生まれたが。剣を持つこと以外ほとんど知らない奴等にいきなり踊れって言えば、この反応も無理ないか。

「んな嫌がんなって。上の連中に顔売っとけば後の出世にも役立つぞ」

一応そうは言ったものの、こいつらが出世なんかに興味ないのはわかりきっている。この二人が剣を振るうのはお互いを守るためだし、何より俺自身、そんな権力を欲しがるような人間に育てた覚えはない。

「そんなもの興味ありません」

案の定、光流が苦虫を噛み潰したような顔で、知っているでしょうと言いたげに睨んできた。六花も黙ってはいるが気持ちは同じだろう。

こういうところは本当に昔から変わらない。立場がただの育ての親から兼上司に変わっても、一向に。

そう実感できることがなんとなく嬉しくて、思わず笑みがこぼれた。

「何笑ってるんですか？」

不審そうに眉を寄せる六花に聞かれたが、敢えて黙殺することにする。あまりにも予想通りの反応が可愛かったからなんて言ったら、二人揃ってしばらく仕事以外では口をきいてくれなくなるだろうから。

「日時は祭最終日の夕方からだからな」

それを聞いた光流が顔をしかめた。

「見回りはどうするんですか？」

十日後に迫った祭は、年に一度、五日間続けて行われる。この祭は国を挙げての大行事のため、王のお膝元である城下町はそれはもう、大いに賑わうのだ。

そして毎年、羽目外しすぎる者が少なからず出る。ちょっとした小競り合い程度なら可愛いが、周囲を巻き込んでの流血沙汰は流石にまずい。そこでそれを防ぐという理由から、王軍が隊ごとに見回りをする事になっている。特に最終日の夜は調子に乗りすぎる馬鹿者があちらこちらで出るため、軍内の精鋭部隊である俺率いる第一隊が見回りを担当するというのが恒例だ。と言っても、俺は身分上、城で開かれる王主催の舞踏会に出席しなきゃいけないから、毎年見回りには参加していないが。

「隊長副隊長が全員抜けていいんですか？」

「まずいな」

「っ、じゃあどうするんですか!？」

六花の問いに至極当然のように頷いてみせると、養い子達は詰まるどころまでぴったり揃えて叫んだ。……こいつらの何がすごって、本人達がこの息の合いように何の疑問も抱かないことだよな、といささか場違いなことを考えながらも、とりあえず落ち着けと手振りで伝える。

「だから、第二隊の副隊長達に助っ人に入ってもらうことにした。お前らは四日目の第二隊の見回りに、その二人の代わりに入れ。もう話はつけてあるから」

そう言う二人は不承不承ながらもだろうが、頷いた。

それを確認した俺は必要なことは伝えたと思い、扉に向かう。だが、そこでふと気がついて振り返った。

「そうだ、お前ら」

まだ何かあるのかと言いたげな目でこちらを見やる二人に、俺は意地悪く笑いながら、だが半分本気で忠告した。

「当日は正装だぞ。特に六花、そんな男っぽい格好は厳禁だからな。ああ、それからたとえ風邪ひいたって連れて行くから、ばっくれようとか思うなよ」

後から俺はこの発言を後悔することになる。

祭二日目の朝、俺はまた光流と六花の部屋にいた。

「……お前ら、本当にわざとじゃないだろうな？」

部屋の真ん中に座っている俺の視線の先には、揃って熱を出して寝込む二人がいた。両端の壁に寄せられた寝台からいつもより覇気の無い声が返ってくる。

「違います」

「ていうか、そんな器用なことできません」

「じゃあなんで風邪ひいたんだ？ しかも二人同時に」

普段病気知らずの、しかも昨日まではぴんぴんしていた奴らがいきなり熱を出したら疑いたくもなる。

「たぶん、昨日川に飛び込んだからです」

光流の言葉に昨日部下の勇也から受けた報告を思い出す。

「ああ、あの子供が川に落ちたってやつか。でも、俺は光流が飛び込んだとしか聞いてないぞ。なんで六花も一緒に寝込んでるんだ？」

「二人、いたんです」

「は？」

六花が返してきた言葉の意味がわからずに聞き返す。

「川に落ちた子が。勇也が報告に走っていった後に、光(こう)が泳いでた方向とは、別の所にもう一人、流されてるのが見つかって」

「で、お前も飛び込んだ、と。確かにこの寒空の下でそんなことすりゃ、熱も出るわな」

彼女の方が症状が重いのか、辛そうにしゃべるのを遮って、俺は溜息をついた。

「どうでもいいが、お前ら、まだその愛称使ってたんだな。仕事中は言わないからもうやめたのかと思ってた。光流が光で、六花が……？」

「雪です。十年も使ってるから、もう抜けません」

仕事中はかなり意識して変えてるんです、と光流が苦笑しながら答える。

「十年、か」

それは俺がこいつらの面倒を見てきた年月でもある。記憶喪失で海岸に流れ着いていた七歳の光流と、六歳にして両親を失った六花。二人とも年の割にはしっかりしていたから、手を焼いたことはほとんど無い。ただ一点、いつまで経っても一緒にいたがることを除けば。

「……そういえばお前ら、なんでいつも一緒に風邪ひくんだ？ 別々にひいたこと無いよな？」

看病するのはいつも二人分だった。どうせなら一緒に寝てろ、と同じ寝台に寝かせたことも一度や二度ではない。流石にもうやらないが。

「あー、それは……」

思い当たることがあるのか、光流が目を泳がせる。六花の方を見ると、こちらは苦笑していた。

「なんだお前ら。まさか、実はいつも一緒に寝てました、なんて言わないよな？」

「……そのまさかです」

冗談のつもりで言ったのだが、真顔で肯定され、俺は驚きを通り越して呆れてしまった。

「あー、俺の記憶が正しければ、お前らが最後に寝込んだのは確か五年前で、その時お前らは十二と十一だったはずなんだが。ってことは、そんな年になるまでずっと一緒に寝てたってことか？ まさか今もなんて言わないよな？」

「……………たまに」

今度こそ絶句した俺の顔を見て、六花がぷっと吹き出した。まあ、笑う元気があれば回復も早いだろう。……じゃなくて。

思わず現実逃避した思考を無理矢理戻して、俺は二人の顔を見比べた。十年の月日は確実に子供だった二人に変化をもたらし、光流は精悍な顔立ちの青年へ、六花は勝気な印象を与える美人へと成長している。兵士としても大変有能で、常識だってそれなりにある、はずだ。そして二人に自覚は無いのかもしれないが、こいつらは確実に互いを好き合っている。少なくとも、ただの幼馴染として見れない位には。それなのに一緒に寝れるのか？

「お前らがそういうのに抵抗を感じないのは知ってたがな、いい加減自覚してくれ。一応男と女なんだぞ？ 本当は部屋だって分けなきゃいけないところを黙認してるってのに」

「……わかってますよ」

小さく呟かれた声は綺麗に揃っていたから、二人分の声が聞けたのは俺だけだろう。とりあえず保護者として言うことは言った。ここまできたら、もう当人達の自由にしないだろう。俺は盛大な溜息を一つついて立ち上がった。

「俺はもう行かなきゃいけないから、おとなしく寝てるんだぞ。また夜にでも顔出すからな。四日目の見回りまでには治せよ」

「わかってます」

今度ははっきりと揃った声に手を振って、俺は二人の部屋を後にした。

結局彼らは四日目の朝に回復し、その日の見回りもちゃんとなしていた。

そして舞踏会当日の午後、俺は二人を迎えに部屋まで行った。中に入ると、二人で住むには少し広い部屋の真ん中から片側の壁を包むようにカーテンがかかり、部屋を二分している。こちら側の寝台には、すでに準備を終えた光流が手持ち無沙汰そうに座っていた。普段の機動性を重視した格好を見慣れているせいか、正装した彼は少し大人びて見える。本人は全く気にしていな

いが、普段から年頃の娘達に人気がある理由がわかる気がした。

「六花は、まだ着替え中か」

彼女がいるであろうカーテンの奥を見やり、そしてカーテンそのものに目を留める。これは五年前に俺が取り付けたのだ。部屋を別々にすることに頑として首を振らなかった二人に、ならせめて着替える時と寝る時くらいは閉めろと言って。

「なあ、光流」

カーテンの向こう側に聞こえない位の声で呼びかけると、光流がこちらを向いたのがわかった。俺はカーテンを見つめたまま続ける。

「その年になってもまだ、このまま一緒にいいのか？」

何がとは言わないが、先日の話もあるし、これでわかるだろう。光流は俺から視線をずらし、ぽつりと呟いた。

「このままが、いいです。できれば、ずっと」

「.....お前、ずっとって」

その意味がわからないほど子供ではないだろう。そう言おうとして光流に目を向けた俺ははっとした。光流の視線は正面のカーテンに注がれている。正確にはその向こうにいる六花に。まるでまぶしいものを見るように細められた、その眼差しの優しさに俺は思わず息を止めた。

「雪が、あいつが一番泣きそうな顔をするのは、いつも悪い夢を見た後なんです。でも、今にも泣き出しそうな、すごく頼りない顔するくせに、絶対に泣こうとしない。というか、無意識に我慢して泣けないんだと思います。で、そういう時に無理矢理にでも泣かすのが、いつのまにか俺の役目みたいになってるんです」

そんな話は初めて聞いた。十年間育ててきて、こいつらのことは何でも知っている気でいたが、そんなことはなかったらしい。そんな俺に構わず、光流は独り言でも言うかのよう、けど、と続けた。

「部屋が分かれば、それはできなくなります。雪が一番辛い時に傍にいられなくなる。俺はあいつを守りたいから、それじゃ駄目なんです。泣かせることが守るって言えるのかはわからないけど、あんな顔させるくらいならずっといい。俺は、俺が知らないところで雪がああの顔をするのが一番嫌です」

そこまで一気に喋って、光流は顔を上げて俺の目をじっと見つめてくる。静かな決意がその瞳を覆っていた。

「それに、俺にも雪が必要なんです。だから、このままでいさせてください。将来、ちゃんとけじめはつけますから」

「.....そうか、お前がそこまで言うなら、な」

誰かを守りたいと強く思う気持ちは、俺にも覚えがある。これが光流の、自分の想いも何もかも自覚した上での結論って訳だ。

そして、そのことにどこかで安堵している自分があるのに俺は気がついた。本音を言うと、この二人が別々に暮らすところが想像できないのだ。だがまだ問題はあある。

「でもな、お前がそう思ってることを六花は知ってるのか？」

「.....いいえ」

途端に目を泳がせる。まだ何も伝えてないのだろう。

「お前なあ、うかうかしてると他の男に搔っ攫われるぞ。あいつだってそれなりに美人なんだから」

うっと言葉に詰まる光流を見下ろして、俺はにやりと笑った。

「どうせお前の場合、自分の気持ちに気付いたのはここ一、二年でも、守るってのはかなり前からだろ？ ひょっとして十年越しか？ 一途だなあ」

からかう俺から思い切り顔を背ける顔が赤い。無言は肯定だ。やがて観念したように呟いた。「……………俺らを引き取る前に死に別れた奥さんを想って、ずっと独り身の隊長には負けますよ」

「当たり前だろ」

そう返して光流の頭を軽く小突いた時、しゃっという軽い音と共にカーテンが開いた。出てきた六花に声をかけようとそちらを向いて、俺は言葉を失う。

馬子にも衣装、どころではない。

六花は深紅のドレスを着ていた。無駄な装飾は一切なく、ただ腰の辺りを絞り、そこを境に上下で生地が違う。浅く胸元が空き、剥き出しの肩に柔らかく丈の短い上着をかけて、全体的に体の線に沿った上半身に対し、下は流れるような生地のスカートで、動く度にさらさらと音がする。普段は一つに結わせるだけの髪も綺麗に結び上げ、控えめな髪飾りをつけている。まだあどけなさが残るものの、それすらも一種の魅力に思えた。

だが、ここまで見違えるのは恐らく衣装のせいではなく、本人の心意気だろう。いつもは仕事も仕事なので中性っぽく見せているが、その気になればいくらでも女性らしい美しさを出せるという訳だ。本人にその自覚はないだろうが。

そっと隣の光流に目を向けると、彼は息を詰めて目を見開いていた。明らかに見惚れている。だがそれも一瞬で、次の六花の言葉には俺よりも早く反応した。

「何かおかしい、か？」

どうも無言の俺達の様子を勘違いしたらしい。俺がそう判断した時には光流は立ち上がり、彼女に答えていた。

「いや、いいんじゃないか。あんまり普段と違うんで驚いただけだ」

そう言って彼女の傍に立つと、手を伸ばして少しずれていた髪飾りを直してやる。あまりにも自然な動作にこちらが驚いた位だ。そして俺はふとこの光景に既視感を覚えた。だがその理由がわかる前に、時間があまりないことに気が付いて、二人を急かす。

「そろそろ行くぞ。遅れたら洒落にならんからな」

会場である城の大広間に入ると、一気にその場の雰囲気ざわついた。俺の後に続く二人の容姿に驚いたのだろう。個々の外見はもっと良い者がいるが、並んで引き立つという点でこの二人に勝る組を俺は知らない。

「なんかすごく見られてるんですけど」

光流がぼそりと言う。ここで見られている気がするのではなく、見られていると断定する辺り、さすが俺の部下にして我が隊の副隊長だ。

「目新しい奴が来たんで観察されてるんだらう。とりあえず陛下にご挨拶するぞ」

そう言って王の御前に二人を伴って行く。王も主に六花の両親絡みでこいつらを小さい頃から知っているため、快く迎えてくれる。そこへこの二人の招待主である王女がやってきた。許婚である隣国の第二王子も一緒だ。光流も六花も一時期王女の護衛をしたことがあるので、王女とは俺よりよっぽど親しい。なにやら四人で話し始めたので、こちらは子を眺める親同士という珍しい構図で王と話し始めた。

「大きくなったな、六花も光流も。しかもあの服装だから、入ってきた時一瞬誰かわからなかつ

たぞ」

「あれから十年ですから。実は正装させたのは初めてなので、私もまだ見慣れません」

「……六花は、母親に似てきたな。もっとも、彼女はもう母の顔を覚えてないかもしれないが」
穏やかな表情のまま、悲しそうな声音で王は言った。俺はそれにそっと首を振る。

「覚えてますよ。あれは昔から賢い子でしたから」

そうか、と王は呟き、それから微笑む。

「ああして四人で固まっているのを見ると、昔を思い出すな。六花の両親とお前とお前の妻とで、よくああして喋っていただろう」

「ああ、確かにそうですね。あの頃は、まだどっちも結婚していませんでしたけど」

六花の両親は俺の親友兼戦友で、妻は王御用達のお針子で六花の母の従妹だった。よく四人で集まってはどうでもいいような話に花を咲かせていた。

そんなことを思い出しながら子世代の四人を眺めていると、そこに一人の青年が近づいてきた。王子の側近らしく、二言三言ほど言葉を交わして、一瞬その動きが止まる。すぐに我に返ったようで礼をして下がっていったが、俺はその青年が六花を見つめていたことを見逃さなかった。六花本人は見られたことには気付いていても、その意味はわかっていないようだ。だが光流は理解したらしく、不機嫌そうに眉を寄せる。まあ、忠告はしたからな。

しばらくして王女達が離れ、光流が飲み物を取りに行った際に俺は六花に近づいた。先程光流にした質問を彼女にもするために。

「六花」

「はい？」

「お前、部屋は今のままで本当にいいのか？」

「……なんですか、いきなり」

そうは言ったものの、六花はふっと目を閉じると呟いた。

「今のままだ、いいです」

「……なんでだ？」

さらに問いかけると、彼女はゆっくりと目を開き、視線を下に落とした。

「光は昔からずっと、時々夜中にうなされています。すごく苦しそうでいつも叩き起こすんですけど、夢の内容は全く覚えていないって。そのくせ、目が覚めた後もしばらくは現実感がないみたいで、精神的にもすごく不安定になってて。だから、落ち着くまではいつも傍にしていることにしてるんです。じゃないと、光が夢に引きずられてしまいそうで、現実に戻ってきてくれないんじゃないかって、こっちが怖くなるし。でも部屋が分かれてしまえばそれもできなくなります。あの状態の光を一人にさせるなんて、私が耐えられません。そうしたら、本当に光が何処かへ行ってしまう気がする。だから、今のままだいいです」

それに、私にも光が必要なんです、と六花は呟くと顔を上げる。視線の先には、こちらに向かってくる光流がいた。

俺はその凜とした顔を見て決めた。もうこいつらの関係に関しては口出しすまい。お互いに依存し過ぎではないかとも思うが、きっとこの二人にはそれで調度良いのだ。光流もけじめをつけると言っていたし、この様子だと六花も自分の気持ちには気付いているのだろう。ならば、特に心配することはない。

そう結論付けて、俺は隣に立つ六花を見やり、先程から気になっていたことを聞いた。

「にしてもお前、よくそんなドレス持ってたな。どうしたんだ、それ？」

「ああ、母の形見なんです、これ。まさかこんな所に来る羽目になるなんて考えてもみなかった

から、着る事はないだろうと思ってたんですけどね」

そう言って苦笑する六花の横顔を見て、俺は二人の部屋での既視感と母親に似てきたという王の言葉を思い出した。

そこへ光流が辿り着く。同時に広間の真ん中で軽やかな音楽が流れ始めた。

「お前ら、踊ってこい」

俺がそう言うと、二人揃ってものすごく嫌そうな顔になる。

「曲が何だろうが、振りは全部同じなんだ。お前らならすぐ踊れるようになる」

だから行ってこいと言うと、六花が顔をしかめた。

「隊長は踊らないんですか？」

「俺の相手は後にも先にも妻一人と決めたんだ」

だから踊れない。そう言うと二人は観念したように溜息をつく。しばらく他人が踊るのを見て振りを覚えると、ずっと真ん中まで進み出て踊り始めた。何も考えなくても息が合う二人は、予想通り、特に間違えることもなく踊っている。

その様子に俺はまた既視感を覚える。似ているのだ。光流の正装と六花のドレス、そして自然に寄り添う姿が、今はもういない親友夫婦に。そして十年以上前に逝ってしまった妻と自分に。流石にあそこまで何もかもが揃うことはなかったが。

そこまで考えて俺は目を細める。

光流と六花はそれぞれ、傍にいたいと言った。

—俺も、傍にいるつもりだったのだ。だが、大切な人達がこの世を去る間際、自分はいつもそこにいなかった。

妻は急な病で、俺が仕事に行っている間に。親友達はこの国の要を守ろうと、俺が別の任務に当たっている時に。

いつも後から知って、それがたまらなく悔しく、悲しかった。だから。

—お前らは、そんな思いするなよ

子供は親を、弟子は師を、越えていくものなのだから。

俺を越えて、俺にできなかったことを成し遂げてほしい。

いとしいとしというところ

その少女を見た途端、私の胸は高鳴った。

黒髪を綺麗に結び上げ、深紅のドレスに身を包んだ彼女は、少女のあどけなさで大人の女性美を見事に共存させており、特にその切れ長の瞳は光をはじく黒曜石のようだった。

* * *

とある海に浮かぶとある島国。王国でもあるその国の王城の一角に、軍に与えられた敷地がある。兵の鍛錬場はもちろんのこと、宿舎に食堂、湯殿まで並んでいて、軍という言葉につきがちな殺伐とした印象はあまり感じられない。それは、そこで働く者が男ばかりでない事も起因しているのかもしれない。

「……とはいっても男が断然多いからなあ。この状況に慣れきっているせいなんだろうか」

王の近衛軍でもある精鋭部隊、王軍第一隊の副隊長である光流(みつる)はぼそりと呟いた。彼の視線の先には、隣を歩く一つ年下の幼馴染がいる。光流と同じく第一隊副隊長の六花(りっか)は今年で十六歳。世間一般ではそろそろ嫁入りの話が出てもいい年頃だ。だが本人にその自覚は全くない、ように見える。

「というか、たまに女という自覚すらない時もあるからなあ」

「光(こう)」

愛称で呼ばれて光流ははっと顔を上げた。いつの間にか立ち止まっていたらしい自分を、六花が数歩前で呆れた顔をして見ている。彼らがいるのは鍛錬場の出入り口、つまり仕事場だ。仕事中は愛称を使わないという決め事を彼女が破るのは珍しい。

「さっきからずっと、何をぶつぶつ言ってるんだ。何かあるんなら聞か？」

そう言ってまっすぐ見つめてくる彼女が、自分を愛称で呼んだ訳を光流は悟った。仕事仲間や戦友としてではなく、幼馴染として相談に乗ると言っているのだ。

「……いや、なんでもない。悪いな、雪」

愛称で呼び返して微笑んでみせると、六花は納得がいけないというような顔をした。だがここで正直に、お前の女としての自覚が云々などと言ったら確実に怒るだろう。もしかしたら彼女の得物が収まっている鞘で殴られるかもしれない。それは嫌だ。

「……そうか。じゃ、行くよ光流。あちらさんが待ってるんだから」

……それが問題なんだよなあ、と光流は心の中で独りごちて、さっさと歩き出した六花の後ろを追った。

彼らはこれから、現在この国を訪問している隣国の王子と、その護衛兵を迎えに行くところなのだ。今日は第一隊と王子一行による二国合同の鍛錬を行うことになっている。

その護衛の内の、一人の男の顔を思い浮かべて光流は溜息をついた。彼が先程から独り言を言っている原因となっている男だ。

先日、年に一度の祭に合わせて王主催の舞踏会が開かれた。光流と六花は、王の一人娘、つまり王女たつての希望ということでそこに招かれたのだ。そしてその会場で王女と、彼女の婚約者である隣国の王子と共にいた時、件の男が近づいてきた。彼は自身の主に用があったらしいのだが、六花の姿に目を留めた途端、まるで雷に打たれたかのように固まってしまったのだ。

その男の顔を思い返して、光流は苦虫を噛み潰してゆっくりと味わったような顔をした。あれ

は明らかに、六花に見惚れていた。しかも彼は自分の持ち場に戻った後も六花を目で追っていたらしく、ずっと彼女の隣にいた光流はその視線をひしひしと感じていた。恐らく六花は、視線には気付いていても、その意味まではわかっていなかったのだろう。時々光流にこっそりと、自分の正装に変な所があるかと聞いていたのだから。

なんで気付かないんだ、とは思うものの、気付いてほしくないと願っている自分もいる。それにあの程度で気付く位なら、もうとっくに自分の想いに気付いているだろう。それはそれで困る。

目の前を歩いている、体の線に沿った服を着た、中性的な姿。正装時とは対照的なこの姿が普段の彼女の姿で、自分はその隣にできるだけ長く居たいと願っているから。

「光、視線がうるさい」

くるりと振り返って文句を言う六花に光流は苦笑する。

「お前が前を歩いてるんだから仕方ないだろ」

そう誤魔化して彼女の隣に並ぶと、ぽんとその頭を叩いた。頭の高い位置で一つに結われた黒髪がそれに合わせて揺れる。

「行くぞ。もうすぐあちらさんが見えてくる頃だから、呼び方直せよ」

そう促すと彼女は、自分が遅かったくせに、と呟いた。その不満そうな顔を横目で見ながら、光流は内心で溜息をつく。六花が王軍第一隊の代表として自分達を迎えに来た事を知ったら、あの男はさぞかし驚くだろう。

* * *

王子一行を先導しながら、六花は隣を歩く光流の顔を横目で眺めた。その表情がかすかに曇って見えるのは気のせいではないだろう。

今日の早朝、隊長がいきなり、今日は王子様ご一行と合同練習をやるぞとのたまった。光流の様子がおかしいのは、昨夜突然決まったというその知らせを聞いてからだ。副隊長として迎える行く道すがら、なにやらずっと考え込んでいるようで、ぶつぶつと独り言を呟いたり、こちらをまじまじと見つめてきたり。だが、六花にはその理由がまったくもってわからない。これは十年間付き合ってきた幼馴染としては、かなり珍しい事だった。直球で聞いてもはぐらかされたところを見ると、自分に教えてくれる気はさらさらないらしい。

「どうしたものかな……」

口の中でそう呟いて、六花は前方に視線を戻した。そろそろ鍛錬場が見えてくる。

「あれが我が隊の鍛錬場です」

六花が後ろを振り向いて指差してみせると、彼女のすぐ後ろを歩いていた王子が目を見開いた。

「我が隊のということは、隊ごとに専用の鍛錬場があるのですか？」

御歳十四になられるこの王子は、自分より年上の者には必ず敬語を使う。六花も光流も先日の舞踏会でそれを知っているので、特に驚いたり恐縮したりはしない。

「いえ、隊ごとに分かれているのではなく、第一隊の鍛錬場のみが分かれています。我が隊は王の近衛軍でもあるので、軍の敷地の中でも宮殿寄りに、第二隊と第三隊は城下町の警護が主な仕事ですのでそちら寄りに、それぞれ鍛錬場を設けているのです。何かあった折には、各隊がすぐに必要な場所に集合できるように、と」

歩きながら光流がそう説明すると、王子だけでなく周りの護衛兵達も感心したような面持ち

になった。

「なるほど、合理的なんですね」

王子がそう言うと同時に鍛錬場の中に入る。中では隊の者が整列して待っていた。一番前にいる隊長が口を開く。

「よくぞいらっしゃいました。どうぞ今日は思う存分、ここにいる者達を叩きのめしてやってください」

言葉を飾るということをしていない隊長の率直な物言いに、王子側からも身内からも笑みが漏れる。特に王子は、満面の笑みをその顔に浮かべながら、なんのてらいもなく頭を下げた。

「こちらこそ、最近鍛錬をしていないので皆体がなまっています。よろしくお願いします」

隊の何人かがぎょっとする顔を見ながら、六花はこの少年に感心していた。現国王や次代の王となる王女はその類ではないが、権力にしがみついて威張り散らす者は大勢いる。それは隣国でも変わらないだろう。そんな中この王子は、人を尊敬するという大事なことを知っているようだ。

彼女がそんなことを考えている内に、それぞれの自己紹介が始まった。王子の護衛の中から見覚えのある男が前に進み出る。確か、舞踏会で顔を合わせた男だ。

「海里(かいり)と申します。殿下の護衛長を務めさせていただいております」

何故か真っ直ぐに六花を見つめながら、その男は名乗った。歳は二十歳そこそこだろうか。青みがかった黒髪と同色の瞳が印象的な男だ。名乗った後もこちらから視線をそらさない。六花は居心地が悪くなって少し身じろぎすると、すでに名乗り始めている次の男に目を移した。するとその視線が外されたので、彼女はなんとなくほっとする。

護衛兵達の紹介が終わった。隊長は以前から彼らと面識があるので、次は副隊長である六花が光流の番だ。どっちが先に出る、と目線で問い掛けると、光流は眉を寄せた。面倒臭いとその目が語っている。似たような気持ちだった六花は肩をすくめてみせた。そしてちょっと息を吸い込むと、二人同時に足を踏み出す。

「副隊長を務めております、光流です」

「同じく、六花です」

すっと同時に軽く頭を下げると、護衛兵達の口から驚いたような囁き声が漏れた。

「副隊長？」

彼らの視線は明らかに六花の方を向いている。女が副隊長だなんて信じられないという目だ。本人は予想済みだったので何も言わずに一步下がる。

「こちらの国では女性も軍にいらっしゃるのですね。しかも副隊長だなんて、舞踏会でお伺いした時はびっくりしました」

穏やかな王子の言葉は、これ以上自分の部下達が失礼なことを言わないよう意図したものでしょう。その言葉に隊長がにやりと笑った。

「ええ、やはり数は少ないし、現にうちの隊では六花だけですが、他の隊にも何人か。ですが、六花は軍の中で光流と一位、二位を争う実力の持ち主なんです。私だって、三本に一本は取られます」

またもや驚きの眼差しが六花に集まるが、次の者が自己紹介を始めたのですぐに逸れていった。だが相変わらず、海里の目線だけはこちらに向いたままだ。正確には並んで立っている六花と光流に。何故だろうと考えるがわからない。そっと隣を見ると、光流が複雑そうな顔で見下ろしてきた。だが二人が目線で会話する間もなく、隊長の声が響き渡る。

「よし、じゃあ体をほぐしたら各自で手合せだ。せっかく合同なんだから、ちゃんとお相手しても

らうんだぞ」

「はい！」

各々が散ばって柔軟を始める中で、王子と海里が二人の所へやってきた。

「一緒にやってもいいですか？」

「もちろん」

快く了承したものの、六花は海里が気になった。敵意を向けられていないのはわかるが、何故こちらを見ていたのだろう。すると当の海里が朗らかに話し掛けてきた。結構気さくな人柄らしい。

「ずいぶんお若くようですが、お二人はお幾つですか？」

「俺が十七で、こいつが十六です」

六花が口を開くより早く、光流がさっと答えてしまった。海里はそれを聞いて目を丸くする。

「よく、その歳で副隊長になれましたね。それとも、こちらではそれ位が普通なのですか？」

「…いえ、いくらなんでも前代未聞というか、あり得ないにも程があるというか……」

言葉を濁す光流の後を六花は引き取った。

「私達も隊長に言い渡された時は驚きました。なんでそうなるですか、と二人揃って叫びましたよ、確か」

「あー、言ったな、そんなこと」

うんうんと頷き合っていると、海里は不思議そうかつ、複雑そうな顔をした。

「随分と仲が良いんですね？」

「幼馴染ですから」

六花がそう答えると海里の瞳が輝いた、ように見えた。首を傾げる六花を光流がちらりと見たが、彼女は気付かなかった。

「そういえば、王子様も剣を振られるんですか？」

光流の言葉に細身の王子は苦笑した。

「はい。似合わないと言われるんですが、体を動かすのは好きなんです。それにいくら護衛がいるといっても、自分の身くらい自分で守りたいですし。……そうだ、どちらかに手合せを申し込みたいのですが、相手をしていただけませんか？」

「殿下はこれでも結構お強いので、用心した方が良いでしょう」

海里が楽しそうに笑いながら付け足した。

「私自身は光流殿に申し込みたいのですが、いかがでしょう？」

「わかりました。じゃあ六花、王子様のお相手を」

六花が頷くと、王子はぴょこんと頭を下げた。それを機に四人は二手に分かれる。六花がすれ違ざまに光流を見やると、彼はやけに硬い面持ちをしていた。だが彼女が声をかける前に行ってしまう。

「どうしたんだ、あいつ」

「どうかしましたか？」

思わず呟いた独り言に王子が反応する。六花は慌てて首を振った。

「いえ、なんでもありません。……始めましょうか」

「はい」

そう言って剣を構えて向き合う。六花がじっと待っていると、王子が素早く間合いに踏み込んで剣を振り上げた。ぎりぎりまで引き付けてから、六花は横に一步踏み出す。その足に全体重をかけて体を捻ると、それまで彼女の体があった所に剣が振り下ろされた。かわされて体制を少し

崩した王子の肩辺りを目掛けて、六花は得物である細身の剣を薙ぎ払う。彼は慌てて剣を横にして受けたが、刃同士がぶつかる衝撃に耐えられずに体制を崩した。六花が剣を引くと、王子は体制を直して苦笑する。

「流石にお強いですね、全然適わないや」

「そんなことはないですよ。想像していたより太刀筋がずっと良いし、あの状態で剣を受けれる反射神経も大したものですよ。才能は十分ありますよ」

ただ、王子の動きは確かに素速いが、まだ六花には見切れる程度なのだ。だから引き付ける事も、故意に体制を崩させる事もできる。

「でも、剣を横にして受けては駄目ですよ。それでは衝撃を諸に受けるし、力の強い者が相手だった場合、剣が折れてしまいます。剣は基本的に受け流すものです」

「受け流す？」

六花は頷いて自分の得物を、柄を上にして斜めに持ち上げて見せた。

「こうやって相手の剣を滑らせるんです」

六花がそう言った瞬間、後ろの方でわっと歓声が上がった。何事かと振り返ると、皆自分の練習を止めて一つの方向を見ている。その視線の先には光流と海里がいた。

「……………すごい。海里とあんなに競っている者、初めて見た」

王子は啞然としている。その言葉から察するに、彼の国では海里が一番の武術の使い手なのだろう。

確かに傍目から見て二人の技は競っていた。片方が剣を薙ぎ払えば片方はそれを受け流し、片方が突き込めば片方はすんでかわしている。容易には決着がつかなさそうだ。だが。

「……………違う」

六花は眉を寄せて呟いた。あれは、光流の実力ではない。彼の本来の突きはあんなに遅くないし、薙ぎ払いは間延びし過ぎだ。しかし、だからといって手加減している訳ではない。それは表情からも見てとれるし、そもそも相手に合わせて手加減をするなど彼は絶対にしない。力の差があればそれを見せつけるように、最速で勝負を終わらせる。六花と同じように。それは手加減をして練習する事に、何の意味がない事を二人とも承知しているからだ。実戦で手加減してくれる相手も、していい相手もいるはずがないのだから。

何故だろう、としばらく光流の動きを凝視して、六花は気がついた。彼は、勝負に集中していない。

「あの馬鹿、何を考えてるんだ」

彼女は顔をしかめた。剣を持って相手と向かい合う時に、別の事を考えているなんて冗談じゃない。それはそのまま剣を振るう腕を鈍くする。そうなれば自分はもちろんのこと、こういう手合せの場合は相手も危険に晒してしまうのだ。

六花は齒噛みしながらその勝負が終わるのを待っていた。

* * *

きいん！ という音と共に自分が持っていた剣を跳ね飛ばされて、海里は一瞬呆然とした。すぐに光流が己の剣を首筋に当ててくる。

「参り、ました」

肩で息をしながら切れ切れに言うと、同じく肩で息をしている光流が頷きながら刃を引いた。その途端、緊張の糸が切れて海里は座り込んだ。負けたのは随分久しぶりだ。そう思った時、わ

っと周りからの歓声が聞こえた。その声でようやく、彼は周りで人が見ていた事に気がついたのだ。

目が無意識に、その群集の中から六花の姿を探す。そうしながら海里はしみじみと実感していた。自分は、彼女が好きだ。先日の舞踏会で初めて出会った時は、見惚れながらも言葉を交わすことすらなかった。そして今日、もう二度と会う事はないだろうと諦観していたのにも関わらず、彼女は隊の代表として自分達を迎えに来た。最初の着飾った時の印象とはかなり違ったが、それでも彼女の瞳はやはり美しく、目が逸らせない事は変わらなかった。流石に、軍に属しているばかりでなく、その中で一位、二位を争う実力の持ち主だとは思いついたが。先程王子と手合せを始めたところまでは見ていたが、そこだけを見ても彼女と王子の実力は桁違いだった。

そんなことを考えながら視線を滑らせて、海里は六花を見つけた。なにやら険しい顔をしている。どうしたのだろう。そう思ってその視線の先を追うと、今の今まで自分と戦っていた青年に行き当たった。そのことに、海里の動きが一瞬止まる。彼は慌てて自分に言い聞かせた。馬鹿、あの二人は幼馴染だと、彼女が言っていたじゃないか。仲が良いのも心配するのも当たり前なんだ。自分はこれから頑張ればいい。

なんとか心をなだめて、今度は光流の方を見やる。彼は彼女の視線に気付いていないのか、そちらを見ようともせず苦笑している。苦笑している？ 何故だ？ 彼は勝ったのに。ぼんやりそう思っていると、鐘の音が響いてきた。隊長が大声で告げる。

「よし、これから昼休みにする！ 次の鐘が鳴ったらちゃんと戻って来いよ」

その声を合図に、男達がばらばらと動き出す。海里も立ち上がって、六花の方へ歩き出そうとした。手始めに食事に誘ってみようと思ったのだ。

「光」

静かだがよく通る声が響いた。今まさに向かおうとした相手が呼んだのは誰なのか、海里にはわからない。そんな名前の者はいなかったはずだと思いながら彼女の視線を追って、再び光流に辿り着いた時、彼は金縛りにあったように動けなくなった。二人の気迫に呑まれたのだ。気がつけば、動き出していたはずの男達が皆立ち止まって、事の成り行きを見守っている。

「手合せをしよう」

彼女の言葉を聞いた時、海里は心底驚愕した。昼休みが終わった後にも時間はあるというのに、第一光流は自分と手合せをしたばかりで休みたいだろうに、何故今そんなことを言うのだろう。しかし、六花の声には有無を言わせぬ響きがあった。

「わかった、……雪」

光流はそう答えると、黙って彼女の方へ歩き出した。そしてお互いの間合いぎりぎりの位置で立ち止まり、一度は収めた得物を再び抜く。六花も自分の剣を抜いて構えた。そして少しの間見つめ合っていたかと思うと、ふいにどちらからともなく地面を蹴った。

次の瞬間、海里は自身の目を疑った。瞬き一つの間、二人はすでにお互いの間合いの中に入り、剣を振っている。しかも太刀筋が見えない。かろうじて光の残像が時折見えるだけだ。二人がどんな攻撃や受け方をしているのか全くわからない。だが、ひとつだけわかることがある。彼らは、練習の時には避けて攻撃するはずの急所を確実に狙っている。お互いに凄まじい速さで急所に剣を繰り出し、そして本当に紙一重で相手の攻撃をかわしているのだ。少しでも反応が遅ければ、大怪我では済まないことになる。

海里の背筋が凍りついた。この勝負に比べれば、先程自分が必死になっていた手合せなど遊びのようなものだ。光流が手加減しているようには見えなかったのだが、これを見ればそんなこと

は言えなくなる。

「あー、駄目だありゃ」

突然聞こえた声にぱっと隣を見ると、いつの間にか隊長がいた。どこか呆れたような優しい目で、手合せをしている二人を眺めている。自分もそちらに目を戻しながら、海里は震える声で尋ねた。

「あの二人は、お互いの太刀筋が見えているんでしょうか？」

「いんや、見えてないね。むしろ見ようともしてねえ。あれは刃が向かってくる気配だけを感じて避けてるんだ」

時たま刃のかち合う音が響くが、それ以外はほとんど音もなく二人は動いている。つかず離れずで移動していく様は、舞を舞っている様にも見えた。

「だから駄目だって言ったんだ。動きが舞みたいになってきただろ。あれはあいつらが何も考えてない証拠だ。こうなるともう止められねえ。傷だらけになろうがどうしても、どちらかが剣を落とすまでずっとあのままだ」

ったく、昼飯どうすんだよ馬鹿共が、と文句を言っている隊長の言葉に海里は慌てた。傷だらけになっても止まらないで、剣を落とすまでというのは死や大怪我を意味するのではないだろうか。でなければそれだけ疲労するとか。特に六花は女性だ、傷だらけになること自体痛ましいではないか。

「そうなる前に止めた方がいいんじゃないか……」

「無理だ、そんなことしたらあの均衡が崩れて逆に危ない。それにあんなのいつものことだ、死んだり大怪我したりは絶対はない。俺が十年間面倒みてきたんだ、そんなへまするようには育てちゃいないよ」

だから放っというて昼飯を食いに行こう、と促される。見れば他の者はもうほとんどいなかった。本当に皆慣れているらしい。歩き出した隊長を追いながら、海里はもう一度振り返って二人を見た。

「俺が育てたって、どういう意味ですか？」

あの二人は明らかに隊長の子どもではない。

「ああ、あいつら、十年前に揃って孤児になっちゃったんだよ。で、その時から俺が面倒みてたんだ。六花の親とは親友だったし、ちょうど宿舎の隣の部屋だったしな。今でもあいつらはその部屋と一緒に住んでるよ」

だからあの二人を引き離すのはもうほとんど不可能に近いと思うぞ、と続けられ、海里は赤面した。どうやら彼の想いは筒抜けだったらしい。

「で、でも、恋人って訳じゃないんでしょう？」

「まあ、まだな」

まだということは時間の問題なのか。そんなことを思いながら、結局海里は隊長と共に昼食を取った。そして隊長に頼まれて、光流と六花に昼食を届けることになった。

二人分の握り飯を持って鍛錬場に戻ってくると、すでに手合せは終わっていた。二人は場内の真中辺りに背中合わせで座り込んでいる。そこにちょうど風が吹き抜けて、出入り口に立っている海里の耳に二人の会話が聞こえた。

「全く、お前が敵じゃなくて良かったよ」

「それはこっちの台詞だ。光が敵だなんて考えたくもない」

六花がそう言って、ちょうど頭一つ分身長が違う光流の肩に頭を乗せる。仰向いたその頬に一条の傷ができているのを見て、海里は痛ましさと、それをはるかに上回る嫉妬を感じた。同時に

思い出す。彼らが他の誰も呼ばない名でお互いを呼び合っていたことを。自分が見てきた六花の傍らには、常に光流がいたことを。何故、という想いが湧き上がる。

何故、敵になり得ないと信じ合えるのだ。

何故、自分の顔に傷をつけた男に平気で体を寄せられるのだ。

何故、特別な名で呼び合う必要があるのだ。

何故、恋人でもないのに常に一番近い場所に居続けるのだ。

想いが胸の中で荒れ狂って嵐となる。その感情に身を任せて、海里は歩き出した。すると二人が同時に顔を上げる。それすらも癩に障って、早足で二人の前まで行くと無言で握り飯の包みを差し出した。

「あ、ありがとうございます」

「もしかして隊長に頼まりました？」

だったらすみません、と謝る六花に無言で頷いて、海里は口を開いた。

「なんで六花殿は軍に居るのですか？」

「はい？」

きょとんと聞き返す彼女を見返して、海里は続ける。

「確かに貴女の実力はすばらしいです。でもここは、女性が顔に傷を作ってまで居たいと思える場所だとは、私には思えないのです。それに、私だったら自分の恋人に、いつ大怪我をするかわからない場所に居てほしくはないと思います」

その言葉に光流が顔を強張らせるのがわかった。恐らく彼は自分の意図に気がついたのだろう。が、肝心の六花は困惑気味の表情を浮かべるだけだ。

「はあ……。でも私は貴方の恋人じゃありませんし」

「では、私が貴女を恋人にしたいと言ったら？」

黙って目を丸くする六花を海里は真っ直ぐ見つめる。

「私はあなたをお慕いしております。舞踏会で初めて会った時からずっと」

一陣の突風が吹き抜けていった。

* * *

その日の夜、光流はなかなか寝付けなかった。頭の中で、海里の言葉が反芻している。

「くそっ……」

小さく呟いて、寝台の上に起き上がる。外の空気を吸ったら少しはこの胸のもやが消えてくれるかと、窓に向かう。その時、部屋の中央にかかったカーテンの向こうからかすかな声が出た。光流はその声にはっとすると、ぱっとカーテンを跳ね上げて六花の寝台に駆け寄った。彼女は夢を見ているのか、うなされている。

「雪、雪。起きろ、雪」

呼びかけながら軽く揺さぶると、六花はぼんやりと目を開けた。

「こ……う……？」

「大丈夫か？」

光流はそっと彼女の頬に手を伸ばすと、優しく覆って呟いた。

「悪しき夢、幾度見ても身に負わじ」

これは、この国に古くから伝わる『夢守り』の儀式だ。大切に想う相手が悪い夢を見ませんようにと願う、それだけだ。だがだからこそ、心が生み出す夢を守ることは本当に、大切に大切

に想っている相手でなければできないと言われてきた。そしてそこから、自分の夢を守ってくれる人を『夢の守り人』と呼び、大切な者の代名詞とするようになったという。

光流と六花はお互いに夢の守り人だ。今までずっと、どちらかが悪夢を見れば必ずもう片方がこの儀式を行ってきた。初めて出会った十年前から、変わることなくずっと。

「雪？ おい、大丈夫か？」

彼女の頬に当てていた手が濡れたのを感じて、光流は心底驚いた。六花は滅多に泣かない。これまではどんなに辛い夢を見ても、光流がそんな顔する位なら泣け、と言って、無理矢理泣かすまで絶対に泣かなかった。それが、まじないを聞いた瞬間に泣き出したのだ。驚くなという方が無理だ。

六花は黙っていた。光流が何を聞いても応えない。ただ泣き続けるのだ。

「雪？ どうした、俺に言えないのか？」

そっと聞いても、返事はない。手を当てたままの頬からはどんどん涙が零れ落ちていく。その水滴が頬の傷に流れていくのを見て、光流は顔を歪めた。昼間の海里の言葉が否応なしに思い出される。

—女性が顔に傷を作ってまで居たいと思える場所だとは、私は思えません

あの言葉の意味はきっと二通りある。一つはそのまま軍について。そしてもう一つは、顔に傷を負わせた光流の傍だ。

ふと、彼女が応えない理由の可能性に思い当たって、光流の顔は蒼白になった。震える唇を必死で抑えて、彼は掠れた声を出す。

「雪、お前の夢の守り人は俺だろ」

応えはない。光流は、ともすれば叫びだしそうになる声をゆっくりと言葉にしていった。

「それとも、他に、守り人になってほしい奴がいるのか……？」

本来夢の守り人は、夫婦や恋人同士でなるものなのだ。それを光流と六花は十年前から、「傍にいるから」という理由でやってきた。もし六花にそういう相手ができたら、光流にはどうしようもないのだ。たとえ、光流がずっと六花の守り人でいたいと願っていたとしても。そう思っていた言葉だった。脳裏にはどうしても昼間告白していた海里の真っ直ぐな眼差しが浮かぶ。光流が歯を食いしばったその時だった。

「…な…け…い」

六花が小さく何かを呟いたかと思うと、がばっと跳ね起きた。

「こっ、馬鹿！ 違う、じゃない……」

意味をなさないことを叫びながら、六花は光流を叩こうとしたのか手を振り上げた。その手が、寝台の脇の壁に作り付けられた棚に当たる。その振動によって棚の一番上に置かれていた分厚い本が落ちてくる。それを認めて光流はぎょっとした。当たれば人を殺せそうな程、分厚く角が尖がった本だった。落下線上にいる六花は混乱しているのか気付いていない。

「雪っ！」

咄嗟に抱き寄せると、それまで六花がいた場所にぼすん、と重たい音を立てて本が転がった。その音で我に返ったように六花がおとなしくなる。ほっと息をついた光流は腕の中にすっぽりと収まっている彼女を見下ろした。

「雪、大丈夫か？」

「大丈夫じゃ、ない」

搾り出すようにそう言った六花は、幼子のように光流の服をぎゅっと握り締めた。

「他の人なんて、考えた事もない。光じゃなきゃ、やだ」

それきり黙りこんだ六花を、光流は優しく抱きしめた。いろいろな感情が胸の中を渦巻いているが、とりあえず一番大きいのは、もうしばらくは彼女の傍に居れそうだという安堵だ。そして、不意に既視感を覚えた。いつになく取り乱した六花とその言葉、落下物、そして寝台に転がっている分厚い本。その組み合わせに覚えがある。それらを順番に数え上げて、彼ははっと幼い日を思い出した。

その分厚い本は八年程前に二人で代わる代わる音読していたものだ。最後まで読み終わった時、六花が物語に出てきた騎士を指して、私にもこういう人がいたらいいのにと呟いたのだ。その言葉が何故か癪に障って光流は、じゃあそいつに守り人になってもらえば、と返した。その途端、今とまったく同じ状況になったのだ。確か当時落ちてきたのは裁縫箱で、落ちると同時に針が飛び出してきた。その時も今回も危ないことこの上ない。

「なんだ、俺らってガキの時と同じことしてるのか」

進歩ないな。そう光流が呟くと六花が力なく返事をした。

「じゃあ、もう二度とそんなこと言うな」

どうやら彼女にとって、他の人間が守り人になるというのは禁句のようだ。光流は瞬きを数回して、心の中でぼやいた。

お前それ、ほとんど告白だぞ、わかって言ってんのか。

絶対わかってないよなあ、と溜息をつく。でも、幼馴染としてだとわかっていても必要とされることが嬉しくなってしまう自分がいて、我ながら現金だなと苦笑した。

* * *

次の日、六花は浜辺で海里を見つけた。周りに誰もいないことを確かめて、彼に近づく。「護衛長がこんな所で油を売っていいんですか？」

そう声をかけると、海里は目を丸くした。

六花は彼に昨日の質問の返事をするためにやってきたのだった。

* * *

この胸を一気に高鳴らせた少女は強い瞳を持っていた。その少女は、自分の弱さを見せる相手をすでに定めているからこそ、その強さと保っていられるのだという。

風に吹かれて華となれ

「あ。……しまった」

六花(りっか)がそう呟くと同時に、筆筒の上に載せられていた瓶が、中身をぶちまけながら落下した。中に入っていた小さな白い丸薬があちこちに転がり、その内のいくつかは筆筒と壁の隙間に入ってしまう。そこまで見届けて、彼女は溜息をついた。

「……面倒だな」

散らばった丸薬は剣を磨くための薬品で、彼女の職業—兵士には欠かせない日用品である。決して高価ではないが、安いとは言えない代物なので、一つとして無駄にはしたくない。だから、たとえ彼女の手が絶対に入らない狭い隙間に転がり込んだとしても、なんとかして拾わなければならないのだ。それに。

「拾わなかったら、怒るだろうな」

現在外出中の、同居人である幼馴染の顔を思い浮かべて、六花は苦笑した。彼女と同じく兵士である一つ年上の青年は、剣の手入れがとても好きなのだ。その気になれば、きっと一日中でも磨いているだろう。そんな彼が丸薬を落としたまま放置することを許すはずがない。そもそも、今六花の前にある筆筒は彼のものなのだ。上に載せられている剣の手入れ道具は共用でも、中に入っている物は全て彼のもので、必然的に彼の方がこの筆筒に近づくことが多い。見つかるのも時間の問題だろう。

そんなことをつつらと考えながら、六花はとりあえず他の所に転がった丸薬を拾い集めた。集めた物を瓶に入れ戻し、その瓶を少し離れた場所にある卓の上に置く。そして筆筒を動かしかかった。上に載っている物を落としてしまわないよう、慎重に、慎重に。そうしてやっと手が入る程度の隙間を作ると彼女は丸薬を拾うべく、しゃがみ込む。小さな丸薬を一つ一つ拾い、もうないだろうかと隙間の奥の方に目を凝らす。ついでに手を伸ばして探してみると、何かが指の先に当たる感触がした。丸薬よりも大きくて、平べったい何か。何だろうと覗き込むが、暗がりでもよく見えない。仕方ないので、摘み上げて筆筒の裏から引き出した。

明るい場所で見ると、それは貨幣のようだった。だが、六花はこんなに色鮮やかで不思議な模様をした貨幣を見たことがない。丸くて平べったい鉄に緑の彩色が施され、真ん中には花卉をたくさん持つ紅い花が彫られている。さらにそこに、黒い蝶が羽を広げて止まっていた。綺麗なのだがなんとなく怪しい感じがするその貨幣には、金額がどこにも表示されていない。

「なんだ、これ……？」

しばらくその謎の貨幣を観察していた六花だったが、不意に昼過ぎに親友と会う約束をしていたことを思い出した。もう時間がない。慌ててその場を片付け、筆筒を元通りにする。そのまま彼女は部屋を飛び出した。

「優奈、ごめん、遅くなった」

約束の場所である店の前で待っていた親友に、六花は開口一番謝った。全速力で走ってきたため、少し息が切れている。それに対し、優奈はのんびりと笑った。

「んー、まあ確かに待ったけど、急いで走ってきてくれたみたいだし。別にいいわよ」

それより、と長い銀髪を揺らしながら彼女は店内を指差した。

「早く入りましょう？ 私お腹空いちゃった」

そう言う優奈に頷いて、六花は彼女に続いて店の中に入った。席に着いて一通り注文を済ませると、給仕が持ってきたお茶をすする。ほっと息をつく六花に、優奈が首を傾げた。

「珍しいわね、六花が遅刻するなんて。それに、今日は剣を持ってないみたいだし」

その言葉にはっとして、六花は慌てて自分の腰に手をやった。普段はあるはずの慣れた感触がそこにはない。少し蒼ざめた彼女の様子から勘付いたのか、優奈は目を丸くした。

「まさか、忘れたの？」

「……そのまさか。しまったな、短刀すら持ってない」

普通の一般人は剣を持つことは許されないし、護身用の短刀もよっぽどのことがない限り持ち歩かない。だが六花が所属するのは 王直属の軍、通称王軍で、王の近衛軍から城下町の警護まで仰せつかっている。そのため軍から、たとえ休みの日であろうとも、何かが起きたらすぐに対処できるようにどちらかを持ち歩け、という指導を受けているのだ。規則ではないので、必ずしも守らなければいけない訳ではない。しかも六花が籍を置く王軍第一隊は王の近衛軍という要素が強いので、なおさらだ。それでも彼女にとって剣を持ち歩くことは、もう癖のようなものだった。加えて軍とは別に、彼女にはそれを促す人間がいるのだ。

「あら。帰ったら光流(みつる)に怒られるわね」

幼馴染の青年の名を出されて、六花は眉を寄せた。なんだか今日は、彼に怒られる心配ばかりしている気がする。

「ああ。ばれる前に帰れたら別だけど。大体、光(こう)は心配性なんだ」

そう言うと、優奈が嘖き出した。そのままくすくすと笑っている彼女を六花は訝しげに見やる。

「なんでそこで笑うんだ？」

「だ、だって、六花、文句言ってるくせに、光流のこと愛称で呼ぶ時だけ、すごく優しい目をするんだもの。自分で気付いてない？ 今可愛い顔したって」

「……………知らない」

からかう優奈から顔を背け、さらに顔を隠すように六花はお茶を一口飲んだ。たぶん、自分の頬は赤いだろう。他の人間になら何を言われても受け流せる自信があるのに、この親友に対してはどうもそれができない。いつもいつも、適わないと思知らされる。

そんな思いを知ってか知らずか、優奈は話題を元に戻した。

「まあ、必ずしも何かが起こるって訳じゃなし。起こっても貴女なら対処できるでしょ。光流も貴女も、そんなに気にすることはないと思うけど？」

「うん、まあ。……でも、やっぱりちょっと心もとないな」

「あら、六花は剣がなくても戦えるんでしょう？ 言ってたじゃない、隊長に叩き込まれたって」

「叩き込まれたって言っても、体術は基礎しか知らないんだ。応用が利かないし、やっぱり剣の方が慣れてるから加減もしやすいし。特に一般人相手だと、あんまり傷つける訳にもいかないしね」

そう言って肩を竦めてみせると、優奈はふーんと相槌を打った。

「でも、ならどうして今日は忘れたの？ なんか珍しいこと続きじゃない。何かあったの？」

「うーん、何かあったと言う程の事じゃないけど」

そう前置きして、先程部屋で丸薬をぶちまけてしまった事を話してやる。ついでに謎の貨幣のことまで話すと、優奈は不審そうに顔をしかめた。

「六花、その貨幣、今持ってる？」

「え？　そういえばどこかに置いた覚えがないような……」

そう返事をしながら懐を探ると、件の貨幣はそこにあった。取り出して見せると、優奈はますます顔をしかめる。

「これ、本当に光流の筆筒から出てきたのね？」

「正確には筆筒の裏だけ。まあ、何かの拍子に、筆筒に入ってたものが落っこちたんだと思う」

「そう……」

そう呟いたきり黙ってしまった優奈に困惑を覚えつつも、六花は嫌な予感がひたひたと押し寄せてくるのを感じていた。そこへ注文した料理が運ばれてくる。それを機に、会話は一旦他愛のないものへと移っていった。

しばらく喋り続け、食事も会話も一段落着いたところで、優奈が意を決したように口を開く。

「ねえ六花、さっきの貨幣の事だけど、ね」

「うん？」

やけに言いにくそうにしている彼女を促した六花は、次の言葉に凍りついた。

「それ、遊郭で使われている、特別な貨幣なの」

この王国で言うところの遊郭とは、決して男性が女性の身体を買いに来る所ではない。勿論そういうことも全くない訳ではないが、基本的には芸人が自分のなにかしらの芸を売り、客と談笑する所なのだ。芸人は圧倒的に女性が多く、それを目当てにやってくる客は必然男性が主だが、男性の芸人もいない訳ではない、そうだ。そしてその芸人と関係を持ちたければ、本人の望む金額を払い、さらに直接本人の承諾を得ることが必要となる。といっても、本人が承諾するという事はそちらにもその気があるということなので、言い値はただになる事が多い。そこから発展して結婚する場合も十分あり得る。つまり、世間一般の認識としては、遊郭とは恋愛を目的とする男女の交流場なのだ。

そこでは胡蝶花(こちょうか)という特別な貨幣が使われ、胡蝶花一枚で芸人を一人指名できる。そして関係を持ちたい場合もそれで言い値を支払う。遊郭で何かをしようと思ったら、まずは入り口で自分の目的に見合う量の胡蝶花を買い求めなければならないのだ。

ということをお優奈から聞いた六花は、彼女と別れてからその遊郭とやらを覗いてきた。

本当に入り口から垣間見る程度だったが、そこから見えた芸人達は自分と同じ年代、つまり十代後半から二十代頃までの者が多かった。皆一様に美しい顔立ちをし、華やかな衣装を身に着け、客と楽しそうに談笑している。芸を披露するのは別の場所で行っているらしく、見えなかった。

ただ一つだけわかった事がある。この場所は、六花には縁遠い場所だ。自分には、華やかに着飾って客に笑いかけるよりも、敵を相手に剣を振る方が性に合っている。それで一生治らない傷を負ったとしても、絶対に後悔はしない。女性らしくない事はわかっているし、実際にそう言われたこともある。それでもそれは六花にとって誇りだったし、これからもきっとそうだ。だが

—光流の好みは女性らしい人なのだろうか

軍の宿舎の部屋に戻ってから、六花はごろりと自分の寝台に横たわった。もう日はとっくに落ちたが、光流はまだ帰ってきていない。なんとなく顔を合わせ辛かったので、彼女にはちょうど

良かった。

例の胡蝶花を取り出して眺め、十年間ずっと一緒だった幼馴染の顔を思い浮かべる。これが光流の元にあったということは、少なくとも一回は遊郭に行ったのだろう。そこでどんな女性と会って、何を喋ったのだろうか。理想の人を、見つけたのだろうか。

「ああ、帰ってたのか」

がちやりと扉が開く音と共に、そんな声が聞こえてきた。光流が帰ってきたのだ。六花が慌てて胡蝶花を握り込んだ直後に、彼はひょいと横たわったままの彼女を覗き込んできた。

「どうした？ 気落ちしたような顔して」

「……いや、なんでもないよ。おかえり」

そう言って微笑んでみせると、光流は納得していないような顔をしながら、ただいまと返してきた。それから思い出したように続ける。

「あ、そうだ。雪」

「ん？」

愛称で呼ばれて、起き上がろうとしていた六花はもう一度彼に顔を向けた。

「お前、今日剣も短刀も持たずに出かけただろ」

それはすでに問いかけではなく確認だった。

「……………今帰ってきたばかりで、なんで知ってるんだ？」

「夕方一度帰ってきたんだよ。そしたら剣は卓に置きっぱなしで、短刀も壁にかかったまま。なのお前はいなかった。どっちか持ち歩いて、言われてるし言ってるだろ」

諭すようにそう言う光流からふいと顔を背け、六花は溜息をつきながら言った。

「今日は出る前にばたばたしてて、たまたま忘れただけだ。でも何もなかったし、以後ちゃんと気をつける」

それでいいだろう、と続けると、ぽんと軽く頭を叩かれた。視線を戻すと、光流が苦笑しながらも、やけに真剣な目をしている。

「お前が剣を忘れるなんて初めてなのも、無かったってある程度の事はなんとかできることもわかってる。俺が心配してるのは、剣が無い時に何か起こることじゃなくて、起こった時にお前が無茶をすることだ」

「流石に何も無い時に無謀な事はしない。私だってそれ位考えてるさ。光は心配性過ぎなんだ」

言い返すと、光流はどうだかな、と笑ってくるりと背を向けた。

その、普段通りの言葉や動作が今日はやけに気になって、六花は握り締めていた胡蝶花に目を落とした。光流はいつも、彼女に無茶をするなどと言う。実際に無茶をした時は助けてくれるが、その代わりにとでもいうかのように説教もされる。そして説教の最後には必ず、まるで幼子をあやすかのように、軽く頭を叩くのだ。

彼にとって自分は、心配すべき妹のような存在なのだろうか。そう思えてしまう事自体が切なくて、六花は胡蝶花と光流の背中を見比べる。

どちらにせよ、これは返さなければいけないだろう。

「光」

「なんだ？」

「これ、落ちてた」

振り返った光流に胡蝶花を差し出すと、途端に彼は顔色を変えた。驚きと焦りと、羞恥、だろうか。彼はしばらく目を見開いていたが、やがて視線をそらすと呟くように言った。

「いい。お前にやる」

「いや、私は使わないし、行く気もない」

そう答えて、ほら、と差し出すと、彼は顔を背けたまま唸るように言う。

「お前、それが何か知ってるのか……？」

「胡蝶花、だろ」

即答すると光流は黙り込んだ。相変わらず視線をそらしたままで、胡蝶花に手を伸ばそうとしない。その様子を見ながら、六花はわかっているつもりのことを確認した。

「遊郭に、行ったんだな」

「……一回な」

言いたくなさそうに返ってきた返事に、気分が沈んでいくのを感じる。わかっていたはずなのに、否定されることを望んでいた自分がいたからだ。そんな自分が嫌だったが、もう一つ聞きたい事があった。きっと聞いたらもっと落ち込むだろうが、聞かなければずっと気になったままだろう。そう思ったから、できるだけなんでもない振りを装って、微笑を浮かべる余裕をなんとか作って、その問いを発した。

「楽しかったか？」

六花の問いかけを聞いた途端、光流の目が見開かれ、こちらに向き直る。何かを言いたそうにして、結局またそっぽを向いて、搾り出すように呟いた。

「……………関係、ないだろ」

その言葉に、六花は心臓を貫かれたような気がした。一瞬詰まった息を、ゆるゆると静かに吐き出す。そうして、込み上げてくる想いを必死に抑えて謝った。

「うん、そうだな。……ごめん」

「……別に。それ、やっぱお前にやる」

湯殿行ってくる、と言って、光流は部屋を出ていった。扉が閉まるのを確認して、六花はもう一度横になる。

「馬鹿か、私は」

関係ないだろ、という言葉が頭の中をぐるぐると回っている。確かに、六花には関係のないことだ。

だが、楽しかったと言われた方がまだましだった。

その日から、二人の間に見えない壁が立ちはだかったようだった。仕事でも宿舎の部屋に戻ってからも、いつも通りの日々が過ぎていく。一緒に手合せもするし、軽口も叩き合う。だが以前には無かったぎこちなさが、確かにそこに存在するのだ。

「まいったな……」

仕事の合間、空を見上げながら六花はぼつんと呟いた。そこは王軍第一隊に与えられた鍛錬場で、他の兵士達は皆稽古にいそしんでいる。いつも一緒に稽古する光流も今は別の者と手合せをしていて、六花の周りには誰もいなかった。ちょうど良いので一休みすることにして、彼女は鍛錬場の隅に行き座り込んでいる。そこからは手合せ中の光流の姿がよく見えた。彼の動きをぼんやりと目で追いながら、六花ははあと大きく息を吐き出す。

どうも、光流に関係ないと言われた事が、自分で思っていた以上に効いているらしい。

最近、光流の目を見ることができない。そのことに気付いてから、何度か目を合わせようと努

力はしたのだが、どうしても寸前で逸らしてしまうのだ。そのことがぎこちなさを生み出しているとわかっているが、どうしようもない。光流もそれに気付いているのだろう。彼の方も目を合わせようとしてくれているし、気を使ってくれている。しかしそれすらも、ぎこちなさの原因となってしまうのだ。

このままじゃ駄目だと思う。なんとかしなければ、と。そしてどうすればいいのかも、本当はわかっている。

「喧嘩、すればいいんだよな……」

変に気を使い合ったりしないで、本音をぶつけ合えばいいのだ。今までしょっちゅうそうしてきたように。仲直りの仕方はお互い心得ているのだから、一度喧嘩してしまえば元に戻るはずだ。

だが、今の六花にはそのきっかけが掴めない。自分が何を光流にぶつきたいのかすら、わからなくなっているのだ。

そんなことを俯いて考えていると、目の前に誰かが立つ気配がした。

「六花さん、隊長が呼んでます」

「了解。ありがと」

顔を上げると、最近第一隊に入ったばかりの勇也だった。六花の顔を見るなり、人が良さそうな顔に浮かべていた笑みが曇る。

「どうした？」

不思議に思って聞くと、彼は申し訳なさそうな顔をして六花の頬を指差した。正確にはそこに走る一条の傷を。

「その傷、やっぱり結構目立ちますね。ごめんなさい」

五日前、勇也に剣技を教えている際にできてしまった傷だ。彼が誤った角度に剣を振り上げてしまった時、六花はちょうど横にいた。咄嗟に身を引いたものの避けきれず、頬を掠めてしまったのだ。

「そんなに深くないから、一月もすれば痕も残らないよ。この仕事をしていればこんなの日常茶飯事だし、気にしなくていいよ」

彼女としては事実を言ったのだが、それでも勇也は肩を落としたままだ。

「でも、女性の顔に傷をつけるなんて……」

「だから気にするな。それを言うなら、光流なんて何十回と私に傷を付けてるよ。ま、お互い様だけどね」

仕事中は愛称を使わないという決め事のため本名で名前を出すと、勇也はやっと小さく笑って頷いた。それから思い出したように、あ、と声を出す。

「そうだ、光流さんも呼ばれてるんだ。じゃ、俺呼んできますんで、六花さん、先に隊長の所に行ってください」

勇也はそう言うと、光流の所に駆けていく。それを見届けて、六花も隊長の所へ向かった。

「隣の国から、非常に嫌なお客が来たという情報が入った」

六花と光流が揃うと、隊長はいきなりそう言った。

余談だが、二人は十年前に揃って孤児になり、その後は隊長に面倒を見てもらっていた。故に、この三人の付き合いは長い。

「つまり、犯罪者がこの国に逃亡してきたってことですか？」

光流が聞き返すと隊長は満足そうに頷く。

「ああ、女好きでとんでもない美形の男がな。しかもそいつ、変わった性癖の持ち主で、傷のある女が好きだそう。顔なんか特にな。で、隣国ではそいつに何人も女性が傷付けられてるそう。殺人までは犯してしてないが、怪我を負わされ暴行され、だからな、精神的に病んじまった被害者が多い」

「……最低だな」

六花と光流の声が見事に重なる。これはこれでいつものことなのだが、現状が現状だけに六花は複雑な気持ちになった。

「で、俺達にそいつを捕まえろ、と？」

光流の問いに、隊長が六花をちらと見ながら頷く。

「ああ。隣国からも要請がきてるし、昨日目撃情報も上がってきたしな。できればとっとと片を付けたい」

その言葉で、六花は隊長の視線の意味を理解した。半ば諦めの気持ちで言う。

「じゃあ、私は囷になればいいんですね？」

「ああ。……やっぱお前ら相手だと話が早くていいなあ」

なにやらご満悦の様子で隊長に、光流が慌てた様子で待ったをかける。

「って、六花が囷で、捕獲要員俺だけですか？ 隣国で捕まえられずに逃げてきたって事は、相手はそれなりに腕が立つんでしょう？ 囷ってことは、六花は剣を持ってないし。それはあまりに危険なんじゃ…」

「そうは言っても場所が場所だけに、大勢送り込めないんだ。だからこそ、うちの軍の一番手二番手に行ってもら。それがお前らだ」

お前らで駄目なら、他の誰を送り込んでも一緒だよ。

そうのたまう隊長を見ながら、六花は眉を寄せている光流に言った。

「仕方ないだろ、それが私達の仕事なんだから。間のいいことに、ちょうど今私は顔に傷があるし。囷にはもってこいだ。……で、大勢送り込めないような場所って、いったいどこなんですか？」

最後の問いはもちろん隊長に向けたものだ。それに、隊長はにやりと笑って答えた。

「ああ、遊郭だ」

その日の夕方、六花は遊郭内の奥にある控え室で鏡の前に座り込んでいた。光流は隣の部屋で彼女が着替え終わるのを待っている。

隊長は早々に店の者には話をつけていたらしく、六花と光流は着くなり奥へと通された。そして今、六花は自分には縁遠いと思っていた華やかな衣装を身に纏っている。動く度にひらひらと揺れる長い裾と袖、光沢のある柔らかな布地、そして鎖骨の形を際立たせるように空いた胸元。頭を動かせば、髪飾りがしゃらりと涼やかな音を立てる。普段中性的な格好ばかりしている彼女は、なんとなく落ち着かなかった。

だが、六花が落ち着かない理由は服装だけではない。先程、一番動きやすい衣装は舞子の衣装だ、と説明しながら衣装を用意してくれた芸人の女性が、光流の顔を見るなりはっとしたのだ。光流の方も軽く会釈していた。ということは知り合いなのだろう。

「……綺麗な人、だったな」

そっと呟いて、目の前の鏡に映る自分の姿を見る。舞子の衣装は六花の身体にぴったりと合っていた。自分でも似合う方だと思し、思ったより着心地が良くて、嫌いではない。しかし、鏡の中で一番目立つのはやはり、頬に走る傷だった。軍にいて、中性的な格好をしている時にはほとんど気にしないのだが、こうして見るとひどく痛々しい。軍を辞めたいとも思わないし後悔もしていない。これがあるから今回の任務が成り立つのだとわかってはいるが、少々落ち込むのは事実だ。

小さく溜息をついた時、彼女の後ろにある扉が叩かれた。同時に光流の音がする。

「俺だ。入っていいか？」

「どうぞ」

返事をする、扉が開いて光流が入ってくるのが鏡に映った。

「隊長が、店の裏手に人を回しとくから、捕獲したらそこまで連れてけばいい、後はあがれってさ」

「了解」

「あと、お前が相手する奴、藍水って名乗ってるらしいぞ。藍色の水と書いてらんすい。どうせ偽名だろうけどな」

「そうか」

背後に立った光流が、もの言いた気にじっとこちらを見つめてくる。六花はそれに気付いたが、鏡越しでもやはり目は合わせられなかった。やがて諦めたのか、彼はくるりと背を向ける。そのまま出ていくのかと思ひ、彼女は鏡の中の背中を見つめたが、光流は出ていかなかった。代わりに、そこにどかっと腰をおろす。ちょうど六花と背中合わせになる体勢だ。昔から良くとる体勢であるにも関わらず、背中に触れる温度がやけに懐かしい。そういえば彼との関係がぎこちなくなってから、一度もこの体勢をとっていなかった。そのことに六花は今更ながら気が付く。

「俺はお前がその藍水の相手をしている間、天井の梁の上に隠れてる。店の奴らが頃合を見計らって、周りの客を別の所に連れてくから...」

「私はそれまで藍水の相手をして、お前が出てきやすい状況を作るんだな」

「ああ。……雪、手、出せ」

「え？」

いきなり愛称で呼ばれた意味も指示の意味もわからなかったが、とりあえず従う。すると、掌に小さな紅い実が乗せられた。中が空洞になっていて、口の中で空気を入れて柔らかく噛むと音が鳴るといふ、特殊な実だ。幼い頃、良くこれを鳴らして遊んでいた。

「お前、これ鳴らすの得意だろ。これが合図だ。俺が出るべきだと思った時に鳴らせ。俺は上から見てるけど、お前が鳴らすまでは出ていかない。だからな、雪。危なくなった時もちゃんと鳴らすんだぞ。じゃなかったら、俺は囷のための演技だと判断するからな」

六花の手が一回り大きい手に、紅い実ごと包み込まれた。

「わかった。……でも、よく用意できたな、こんなの」

「そこの庭に生えてたんだ。ちょうど良いから一つ失敬した」

「なるほど、光らしいな」

小さく笑ってから、さっき衣装を渡されると同時に言われたことを思い出した。

「あ、通り名、考えなきゃいけないだった」

「通り名？」

「客の前に出る時の仮の名前、だつてさ。面倒だから、雪に...」

「やめろ、それだけはやめろ」

断固とした響きで遮られたので、六花は素直に別の名前を考える事にする。実は自分でも、光流以外に雪と呼ばれて反応できる自信がない。

「あー、じゃあ、紅子、かな」

「こうこ？」

「そ、紅の子。この実が紅いから」

「.....なるほど」

そこへ、先程の女性が店に出る時間だと呼びに来た。光流とはそこで別れて、六花は明菜と名乗ったその女性の後に付いていく。廊下を歩いていると、彼女に話しかけられた。

「ねえ、貴女、光流君とどういう関係？」

「.....幼馴染、です」

そう答えると、明菜は目を瞬いた。まるで予想と違う答えが返ってきたというように。

「そうなの？あの子、この間来たわ。仕事仲間に無理矢理引っ張られたって感じで」

「そう、なんですか？」

仕事仲間ということは、軍内の若者達だろう。そういえば一度、どこかへ引っ張られていくのを見送った事がある。あの時だったのか。

すると明菜はとても楽しそうに話し始めた。

「ええ。その時、他の人は皆、自分好みの娘を見つけて指名していったのに、彼だけ指名しないの。誰かが胡蝶花を押しつけてたけど、本人はいらんって言っててね。でも、その相手が光流君の相手に私を指名して、どっか行っちゃったのよ。で、とりあえず私はしばらく彼と話してたんだけど、彼、すごく帰りたいような顔してて、他の仲間が自分の相手と一緒に散らばってった途端に、ごめんなさい、帰りますって言って帰っちゃった。その時胡蝶花を私にくれようとしたんだけど、私はほとんど何もしてないに等しかったから受け取らなかったの。代わりに、なんでここまで来て誰も指名しなくなかったのかを教えてもらったのよ。たとえ無理矢理連れてこられたとしても、あそこまで興味も示さないのは何か理由があると思ってね。そうしたら、あ、着いちゃった。ここが大広間よ。じゃあ、続きは後でね」

彼女は途中で話を切り上げると、思い出したかのように続けた。

「ああ、そうそう。店の他の娘達には貴女のこともその、藍水って男のことも話してないわ。誰の口から漏れるかわかったもんじゃないから。でもお客の誘導の方ははなんとかするから、頑張ってるね」

そう言って明菜は大広間の中へ入っていった。その中ではお客の指名を待つ間、芸人同士で喋ってはいけないらしい。入る直前に、六花は光流に渡された実を口の中に含んだ。喋るのに邪魔にならないよう、実の中の空気を抜いて潰しておく。

大広間はだだっ広く、天井も高かった。太い梁が何本も横切っていて、それを伝えれば他の部屋にも行けるようになっている。そのどれかに、光流はいるはずだ。

六花は指名待ちの芸人達に混ざり、入り口近くの壁際の席に着く。少しの間座っていると、周りの人間が皆、自分に目を向けた途端、慌てたように目を逸らすのに気が付いた。恐らく頬の傷を見てだろう。次々に入ってくる客達も同様で、誰も彼女を指名しようとはしない。これは予定通りだ。

そこへ、入り口の方から小さなよめきが聞こえてきた。どよめきは細波のように広がり、ついに大広間にも達する。六花が入り口に顔を向けると、ちょうど一人の男が入ってきたところだ。

その男は、まるで作り物であるかのように整った顔立ちをしていた。自然に見える程度に整えられた栗色の髪、すっと通った鼻梁は高く、形のいい唇は柔らかな弧を描いている。中でも最も印象的なのが、正面から見ると栗色なのに光の加減によって薄い蒼にも見える、不思議な瞳だ。

彼が現れた瞬間、控えている芸人達の雰囲気が変わる。皆、彼に指名されたいと思っているらしく、自身がより美しく見えるよう気を張ったようだった。が、そうやって注目を集めている当の本人はそれに気付いていないのか、のんびりと芸人達を見回していく。一人一人を順繰りに見回していき、その視線が六花の上で止まった。その時彼女は、見開かれた男の瞳に歓喜の色が浮かぶのを見た。そしてその端正な顔立ちと気品の裏に隠された危うさを、確かに感じたのだ。

間違いない、この男が藍水だ。

そう確信した六花の元に、そいつは悠然と歩いてくる。そして彼女の目の前に立つと、柔らかく微笑み、手を差し出した。

「こんばんは。お相手を頼めますか？」

まるでここが町の遊郭ではなく、城の舞踏会であるかのような態度だ。内心でそんな事を考えながら、しかし表には出さずに六花は微笑み返した。

「喜んで」

そう答えて彼の手を取り、立ち上がる。手を引かれて歩き出すと、周囲から嫉妬と困惑の視線が寄せられた。何故そんな傷物を選ぶのだ、という。彼の方は本当に気付いていないのか、単に無視しているのか、朗らかに話しかけてくる。

「お名前を教えてくださいませんか？ あ、失礼、自分から名乗るべきですね。私は藍水と申します。藍色の水と書いてらんすい。貴女は？」

「紅子、と。紅の子どもです」

「紅、ですか！ 色を名前に持つ者同士なんて奇遇ですね。なにか特別な縁がありそうだ」

ひどく嬉しそうに言う藍水に頷いてみせながら、六花は首を傾げた。彼はどうも、大広間から出ようとしているようなのだ。普通の客はしばらく大広間で談笑してから、別の部屋に移動していくのに。

「あの、藍水様、どちらに行かれるのですか？ そちらに向かわれると、大広間から出てしまいますが……」

六花がやんわりと尋ねると、藍水は少し驚いたような顔をして、すぐに破顔した。

「ああ、できれば貴女と二人っきりでゆっくりお話したいと思ひましてね。それに貴女は舞を舞う方のようなだから、ぜひとも拝見したくて。それで、とりあえずあの部屋に向かって歩いていたのですが」

そう言って彼が指差したのは、大広間と天井が繋がっていない部屋への入り口だった。あれでは梁を伝っている光流は入れない。それにその部屋は、歌を披露するための部屋だったはずだ。なので、六花はふんわりと笑ってみせた。

「でしたら、あちらの部屋に参りましょう。あちらには舞を舞うための舞台が整えてありますから」

藍水が向かおうとした部屋とは別の、大広間と天井がちゃんと繋がっている部屋を指差す。明菜にそこに通すようにと指示された部屋だ。わざわざ閉鎖された空間を選ぼうとしたのだから難色を示すかと思ったが、藍水は意外と素直に頷いた。六花としてはもともと談笑の後にその部屋に案内するつもりだったので、余計な手間が省けた気分である。

部屋に入ると、何人かの客と舞子に混じって明菜がいた。予想より早い六花の登場に驚いたようだが、すぐにさりげなく周囲の誘導を始める。が、まだ踊っている舞子もいるので少々時間が

かかりそうだった。

「まだ舞台は空かなさそうですね」

藍水はそう穏やかに言う。そのまま喋って時間を潰すつもりのようなのだ。

「さっきから気になっていたのですが、その傷、どうされたのですか？ もしご迷惑でなければ教えてください」

「これ、ですか。実は、先日、町で暴漢に襲われまして、その時に……」

そう言って頬に手を当て、ついと視線を下げる。もちろん嘘八百だ。

「ああ、これは失礼。嫌な事を思い出させてしまいました。でも、よくご無事でしたね」

申し訳なさそうに詫げる藍水に首を振ってみせ、六花ははにかみながら続ける。

「ええ。……昔、父が冗談半分で私に体術を教えてくれたのです。で、襲われた時に咄嗟に使ってみたら、なんとか逃げる事ができました。この傷も、医者に見せたら一月程で痕も残らず完治するということだったので、命と引き換えにしては安いものだと思っております」

彼女がそう言い切ると、藍水の目が怪しく光った。

「貴女は結構気が強い方なんですね」

「ええ、よくそう言われます」

会話をしながらそっと周囲を窺うと、最後の客が部屋から出て行くところだ。藍水もきっとそれに気付いている。舞台を見る振りをして少しだけ仰向くと、光流がほとんど真上の梁の上にいるのがわかった。

「舞台が空きましたね、では早速……」

六花はそう言って、わざと部屋の奥にある舞台に向かう。すると藍水は彼女の腕を掴み、それまでとは打って変わった調子で囁いた。

「いや、それよりもお前のその傷をもっと見せてくれ。なあ、紅子」

そう言って、彼は伸びた爪で六花の傷をなぞった。爪が触れた場所から痛みが走り、少量の血が流れ出す。

「お、おやめください！」

怯えたように叫んで、六花は掴まれた腕を軸に身体を半回転させた。足さばきと相手の体重を使い、藍水を投げるようにして転ばせる。そして部屋の外ではなく、奥の舞台の上に駆け上がった。投げられた藍水は綺麗な受身を取り、すぐに起き上がる。

「へえ、本当に体術を使えるんだな。ますます気に入った。その気の強そうな顔が名前の通り紅い血に塗れたら、もっと綺麗なんだろうな……」

そう言いながら、ゆっくりと歩いて舞台に上がってきた。その獲物を追い詰めるような目には、狂喜が見え隠れしている。鋭く尖った爪をかざしながら、藍水は楽しそうに笑った。

「俺はさ、気の強い女が大好きなんだ。特にお前みたいに、顔に傷を負っても凜としていられる女がな。その方が何もないよりよっぽど美しいのに、なんで皆わからないのかなあ？」

そう言って迫ってくる彼に合わせて、六花は後進する。背中が壁に当たるとすぐに、目を輝かせた藍水が目の前に立った。彼の爪がゆっくりと持ち上げられる。それを見ながら、六花は口の中の実を素早く膨らまし、噛んだ。

ぴるるるる、という柔らかな音が部屋に響き渡る。

突然の音に目を見開いて固まる藍水の後ろに、光流が音もなく降り立つ。彼はそのまま、鞘に入ったままの剣で藍水の首筋を思いっきり殴り飛ばした。

気絶した藍水を遊郭の裏手に控えていた兵士達に引渡し、六花は舞子姿のまま、その場を立ち去った。正確には光流に引っ張られて、着替える間も与えられずに店を出ることになったのだ。明菜に会いに行く暇もなかった。

「ちょっと、光！ どうしたんだ？！」

ぐいぐいと引っ張られて、そろそろ腕が痛い。そう訴えようとした時、急に光流が立ち止まった。危うくその背にぶつかりかけた六花は抗議しようとしたが、それよりも早く彼に言い渡される。

「雪、ちょっとそこに座れ」

そう言って示されたのは道の脇にある大きな段差だ。そして言うが早いか、光流は無理矢理彼女をそこに座らせる。あまりと言えばあまりな行動に、六花は文句を言おうとした。

「光、なんなん...」

「いいから黙ってる」

光流は彼女の言葉を遮ると、自分もその隣に座り、六花の頭を正面に固定する。まじまじと自分の横顔を見つめる彼が何をしたかったのかに気が付いて、六花は素直に黙ることにした。

光流の指が頬の傷をなぞっていく。藍水の爪とは違い、優しく、触れるか触れないかという程度で。出血量が少なかったとはいえ、再び開いた傷は歪な形のかさぶたに覆われていた。もしかしたら、傷が広がっているかもしれない。きっと彼は、それを確認したかったのだ。なにもこんな所でなくても、という気はするが。

「雪」

「ん？」

静かな呼びかけに応えると、光流は奇妙なことを言い出した。

「お前、傷なんか付けられるなよ。特に顔なんかに」

「は？」

それは軍を辞めろと言っているのか？

思わず振り向くと、光流の目が予想以上に至近距離にあった。そのことに驚いて、また顔を背けてしまう。

「別に軍を辞めろって言いたいんじゃない。ていうか、辞められたらそれはそれで困るんだ。無茶苦茶なことを言ってるってわかってる。でも、他の奴なんかに傷を付けられるな。お前は、女なんだから」

その言葉を啞然として聞いていた六花は、不意に強い怒りが込み上げてくるのを感じた。

「お前が、それを言うのか.....？」

一言口に出すと、もう止まらなくなる。

「昔っから誰よりも沢山、私に傷を付けてきたのは光だろ！？ 一緒に遊んで稽古して手合せして、顔だろうが腕だろうが足だろうが、お構いなしに傷だらけにしてきた奴が何を今更？ 女だから？ それがどうした、今まで女だと思ったこともない癖に！ 私がどう傷付こうと関係ないだろ！！」

これまでまともに見れなかった筈の光流の目を見据えて、一気にまくし立てる。普段ならこれで彼も負けじとまくし立てて喧嘩になるのだが、今日は違った。光流は六花の顔に手を沿えて、真っ直ぐに覗き込んでくる。

「そうだよ、お前に一番傷を付けてるのは俺だよ。でも俺はいいんだ。言っただろ、他の奴って俺が嫌なのは、俺以外の奴がお前に傷を付けることだ。俺はいいんだよ、責任取れるから」

「.....意味、わかんない。何、責任って」

「ずっと前に言っただろ、俺がお前に付けた傷は完治するまで俺が看病するって。俺はそうやって責任取ってきたし、これからもそうするつもりだ」

そう断言する光流に、幼い頃の彼の姿が重なる。確かに言われた。拙い手合せをしていて、文字通り傷だらけになった時に。隊長がぼろぼろになった六花の姿を見て、光流を叱りつけたのだ。その頃は六花自身でさえ、軍に入ろうなんて思っていないで、手合せも遊びの一つだった。だから隊長は怒ったのだ、女の子の体にこんなに傷を付けるな、と。それに対する光流の答えがそれだった。

「俺にはそれができる。でも、他の奴にはきっとできないだろうし、俺自身がさせたくない。なら他の奴が付けた傷も関係なくなんかない。傷付いてるのを見過ごす訳にはいかないから、傷付かないで欲しい。だから、これは俺の我侭だよ」

それから、と彼は続けた。

「俺にとってお前は女だよ。じゃなかったら、責任取るなんて言わないし思わない。ずっとずっと昔から、俺の中でお前は女だ」

そう言う光流を、六花は呆然と眺めるしかなかった。今、すごいことをさらりと言われた気がする。だが、この幼馴染はあまり意識しないでそういうことを言うので、はたしてどこまで深読みしていいものか、よくわからない。

困惑する彼女の顔を見て、光流はふっと微笑んだ。

「まあ、気にすんな。所詮俺の我侭なんだから。それよりお前、やっとなんか俺の目まともに見たな？」

「……あ」

言われてようやくそのことに思い当たる。そういえば、最近ずっと存在していたぎこちなさが消えていた。感情をぶつけたからだろうか。それとも、他に何か理由があるのか。

ふと明菜の言葉が頭に蘇る。

『彼は誰も指名しようとしなかったのよ』

あの言葉も影響しているのかもしれない。そういえば、それには理由があったとか言っていなかっただろうか。

「光、遊郭で誰も指名しなかったのは、なんでだ？」

「……唐突だな、おい。あー、黙秘権を行使する」

今度は彼の方が顔を背けたので、六花は仕方なく立ち上がった。

「じゃあ、戻って明菜さんに……」

「おいこら。それじゃ何のために急いで連れ出したかわからなくなるだろ」

がしっと腕を掴まれて、六花は呆れた。

「そのためだったのか……」

どうやら廊下での会話も彼は梁の上で聞いていたらしい。

「ああ。ほら、わかったらとっとと帰るぞ」

光流はそう言うのと立ち上がり、歩き出す。また腕を引かれながら、六花は前に行く背中を見つめた。なんだか、心なしか呆れられている気がする。何故だろう。

「他なんて、必要ないんだよ」

唐突に光流が呟いた。かろうじて聞き取れはしたが、前後の脈絡もなにもあったものではない。

「いきなり何を言ってるんだ？」

聞いてみると本人は聞こえていたとは思っていなかったらしく、ひどく驚いたような顔をした

。少し焦った様子で、なんでもないと返してくる。気になったが、あまり突っ込んで欲しくさそうなので追求はしない。

風が吹いてきて、着たままの衣装の裾が翻り、髪飾りがしゃらしゃらと音を立てた。なびく裾が柔らかな波形を作り、まるで風と遊んでいるかのような気分になる。たまにはこういう服を着るのも悪くないかな。六花は気まずそうな光流の横顔を眺めながら、ぼんやりとそう思った。

彼の眩きが先の質問への答えだったのだと六花が知るのは、もうしばらく先のお話。

鋼よりもなほ強く

その日、光流(みつる)と六花(りっか)は部屋の大掃除をしていた。

「雪、これは棚の上でいいのか？」

光流が愛称で呼ぶと、六花はくるりと振り向き、頷く。

「ああ。あ、光(こう)、ついでにそこにある緑の箱取ってくれ」

「はいよ」

あと数日で年が明ける。だが、二人の年末の休みは今日だけだ。そして次の休みは、新年を迎えてから十日後である。よって今日の内に掃除を終わらせなければ、部屋が散らかったまま新年を迎えてしまうことになるのだ。

二人が所属する王軍第一隊は、王族の近衛軍でもある。ただでさえ年末年始は皆が浮き足立つせいか、軽犯罪が多発し、普段より軍の出動が多い。加えて新年には国王主催の式典が多数あり、近衛軍として、そちらの警護もしなければならない。若干十七歳と十六歳という若さで副隊長の任についている光流と六花は、それはそれは忙しいのである。

「これか？」

光流が小ぶりの箱を手にとって見せると、六花は頷いて手を伸ばした。しかし、あと少しというところで届かない。彼女は光流との間にあった荷物の山に手をつけて、身を乗り出した。が。

「わっ！」

彼女の手が箱を掴んだ瞬間、支えにしていた荷物の山が崩れた。必然的に、六花も体勢を崩す。

「おいっ！」

光流は慌てて体の向きを変えると、床に叩きつけられる寸前で六花を抱き止めた。ほっと息をつく。

「ったく、大丈夫か？」

「……………悪い」

腕の中で小さくなる彼女を見下ろして、光流は苦笑した。片付け物が増えてしまったが、仕方がない。気にするなど言う代わりに、ぽんぽんと頭を軽く叩いてやる。

その時、視界の片隅に見覚えのない物が映った。今の転倒で六花が取り落とした箱から、何かが見えている。

「なんだこれ？」

訝しげな声に六花が顔を上げた。不思議そうに彼の視線を追うと、納得したように声を漏らす。

「ああ、そういえば見せたことなかったか」

その言葉に、光流はもう一度彼女に視線を戻した。六花は手を伸ばすと、丁寧に箱を拾い上げる。それからその中身を取り出して、光流に差し出した。

それは群青色の石に白い革紐を通しただけの、簡素な首飾りだった。石の形は細長い逆五角形で、小刀を模しているようにも見える。

しげしげとそれを見つめて、光流は再度問いを口にした。

「で、これはなんなんだ？ 付けてたこと、ないよな？」

光流と六花は幼馴染だ。それもただの幼馴染ではなく、十年以上一緒に暮らしているし、大体において共に行動している。こんなものを付けていたら、すぐに気が付くだろう。

「お守り、というか、おまじない、というか……。形見なんだ、お父さんとお母さんの」

普段より低くなった声音に、光流は彼女の顔を盗み見た。少し切なさをはらんでいるものの、その目は懐かしさに細められている。危惧していた暗い影はそこにはない。

「お守りで、形見？」

「そう」

頷くと、彼女は光流の手にあるその首飾りの石を軽く撫でた。その様子が本当に懐かしそうで、そんな風に思い出せる過去があることが少しだけうらやましい。

光流と六花は共に孤児である。光流は記憶喪失となって親元に帰れなくなってしまったといふかなり特殊な理由なのだが、六花は逆賊によって両親を殺された。もう十年以上前の話だ。

「うちの両親は二人とも兵士だったから、お互い何かあれば派遣されるし、いつ死んだっておかしくなかったんだ。だから、離れ離れになる時はお互い、お守りとしてこれを付けていたんだそうだ」

六花はそう言って箱の中身を見せる。そこには同じ首飾りがもう一本入っていた。

「あとは、夢の守人の代わりも果たしていたらしい」

「……なんでそこに夢の守人が出てくるんだ？」

夢の守人というのは、この国に古くから伝わるまじないだ。まじないの言葉を唱えて、大事な人が悪夢に襲われないようにと願う。ただそれだけのものだが、だからこそ、本当にその人を大切に思っていなければ効き目がないとされる。一般的には恋人や夫婦、親子がなる場合が多いため、『ずっと自分の夢の守人でいてくれないか』というのが、婚約を申し込む言葉としてまかり通っている位だ。

「離れ離れになっていたら、夢の守人としての役目が果たせないだろう？」

「そりゃわかるが……」

眉を寄せる光流を、六花がおかしそうに見上げる。

「だから次に再会できる日まで、自分の代わりに悪夢を追い払ってくれるよう、この石に言葉と息を吹き込むんだ。ちなみに効果は絶大らしい」

「……………へえ」

「次にどこかに遠征しなきゃいけなくなったら、貸してやるよ」

無造作に言われた言葉に、光流の思考は一瞬停止した。

出会ったばかりの頃、光流と六花は互いに夢の守人になろうと約束した。別に特別な意味があった訳ではなく、ただ傍にいるから、という理由だけだ。お互い孤児になったばかりで、自分を支えてくれる存在が欲しかった、というのもあったかもしれない。そしてその約束は、同じ理由で今も続いている。

「……いいのか？ 大事な形見なんだろ？」

「別にお前なら構わない。その代わり、ちゃんと返せよ？」

返せ、は生きて帰って来いと同義だ。では、お前なら構わない、とはどういう意味なのか。

問い詰めた衝動を必死に押し殺して、光流は頷いた。どうせあまり考えずに言ったに違いない。

六花は首飾りを箱に戻すと、立ち上がってそれを卓上に置いた。そのまま、崩してしまった荷物の山を片付け始める。

その様子を横目で眺めながら、光流は思案した。そろそろ昼食を取るべきかもしれない。朝からずっと作業しているので、ここで一息入れないと能率も悪くなるだろう。掃除というものは、案外体力を使うのだ。

「……というかこれ、本当に今日中に終わるのか？」

改めて部屋をぐるりと見回して、光流はぼやいた。荷物を崩してしまっただけでなく、あちこち物を移動させているせいで、そろそろ足の踏み場が無くなりそうなのだ。その言葉に、彼の同居人は苦笑する。

「終わるのか、じゃなくて終わらせるんだ。休みは今日しかないんだから。少なくとも私は、このまま新年に突入するのはごめんこうむりたい」

「そりゃ俺だって一緒だ。けど、もう昼過ぎだぞ？」

光流がそう言うと、彼女は目を丸くした。

「え？ 正午の鐘、鳴ったか？」

どうやら時を告げる城の鐘の音は、六花の耳には届かなかっただけでなく、光流はあきれて、彼女の額を軽く小突いた。ついでに髪についていた埃を払ってやる。

「とっくにな。どうする、もうちょっとやってるか？ 俺の方は切りがいいから、飯を買いに行こうと思うんだが」

六花は少し考えるそぶりを見せたが、すぐに光流を見上げて頷いた。

「ここはあと少しだから、食べる前にやってしまうよ。お前が帰ってくる前には終わらせておく」

「わかった。お前の分は何がいい？」

「光に任せる」

あっさり返ってきた返事に、光流は半目になった。

「口に合わないもんを買ってきてても知らんぞ」

「ありえない」

六花は自信満々で即答する。続けて挑戦的に、にやりと笑った。

「十年以上ずっと一緒に食事してきた、私の好みが変わらないとは言わせない。大体、私より私のことに詳しい奴が、今更何を言うか」

「……随分と信頼されてるんだな」

「当たり前だ。それに立場が逆なら、お前だって同じ事を言うだろう」

断言する幼馴染に苦笑しつつも頷いて、光流は床に乱立している荷物を飛び越えた。彼女の言う通りだ。元より彼女の好みを読み間違える気など、毛頭ない。

「じゃ、行ってくる」

「ああ、行ってらっしゃい」

「時が経つのは、早いな」

いよいよ明日から新年という大晦日。光流と六花は城内を歩いていた。これから、明日から始まる式典の警護について、最後の打ち合わせがあるのだ。

六花の呟きに、光流は目を瞬(しばたた)かせた。

「なんだよいきなり」

「いや、もうすぐ十一年になるんだな、と」

「十一年？ ああ、親父さん達が亡くなってからか」

彼がそう言うと、六花は逆にきょとんとした。

「え？ ……ああ、それもあるけど、そっちじゃない。お前と初めて会ってからだ。海で死にか

けている光を発見してから、もう十一年になるんだなあ、と」

「死にかけてるってなんだよ、熱出してただけだろ」

光流が言い返すと、彼女は呆れた目を向けてくる。

「だけなものか。覚えてないのか？ お前、潮が満ちたら沈んでしまう岩に引っ掛かっていたんだぞ。私が見つけれなかったら、確実に海の底だ」

「.....そんなの知らないぞ。俺が覚えているのは、あの時お前が泣いてたってことだけだ」

「それこそ覚えてなくていい。だいたいあの日は...」

「親父さん達の葬式の次の日だったんだろ？ そんなのわかってる。でも、忘れられる訳がないだろ。あれが雪の第一印象だったんだから」

そしてそれ以来、六花が自主的に泣くところを彼は見たことがないのだ。彼女はいつもいつも、どんなに辛くても泣くのを我慢してしまう。負の感情を溜め込むのは心にも体にも良くないし、隣で見ていると心配なことこの上ない。だから光流はそういう時、どうにかして彼女に感情を吐き出させようとするのだ。

「泣き顔が第一印象って、なんか嫌だな.....」

本当に嫌そうに言う六花に光流は苦笑した。

「俺だって、死にかけてたのが第一印象なんだろ？ だったら相子だよ」

それに、彼自身は出会いがあれで良かったと思っている。あの時の泣き顔が六花の傍にいることを光流に決めさせた、と言っても過言ではないからだ。

「年が明けたら、光はもう十八だな」

「そう言う雪だって、十七だろ。.....やっぱ、早いな」

「ああ」

その時だった。

「くせ者っ！！」

誰かがそう叫ぶのが聞こえた。王の書斎の方角だ。光流と六花は一瞬だけ足を止め、その声の余韻が消える前に駆け出した。

まっしぐらに走っていくと、人が怒鳴り合っている声が聞こえてくる。王の書斎に続く最後の曲がり角を曲がった瞬間、人影が吹っ飛ばされてきた。王の護衛をしていた兵士だ。光流はそれをぶつかる寸前で避けると、そのまま兵士が飛んできた方向に向かう。その先には自ら剣を構えた王と、彼に対して剣を振り上げている女の姿があった。

「させるかっ！！」

光流は王と侵入者の間に滑り込むと、今まさに振り下ろされようとした剣を、己の得物で受け止めた。そのまま力で押しやると、相手は間合いを計るように後ろに飛び退る。光流がそれを追うように間合いを詰めると、そいつは何故かにやりと笑った。

「甘い！！」

その言葉と共に、銀色に光る何かが光流の視界を掠める。真っ直ぐ飛んでいくそれは、彼の後ろにいる王に向かって速度を増していく。だが、光流は振り向かなかった。

きいん！ と金属音が鳴り響く。わざと光流のすぐ後ろについて、彼の陰に隠れていた六花が、自分の剣で飛来した小刀を叩き落としたのだ。彼女はその小刀を遠くに蹴り飛ばすと、光流の隣に並ぶ。女は、もう一人いたのか、と感心したように呟いた。

二人の後ろで、王がほうと息を吐く。

「.....光流...六花.....」

「主上、お怪我は」

六花が前を向いたまま声をかけると、王はすぐに落ち着きを取り戻したようだ。

「私は大丈夫だ」

「みつ、る？」

突然、侵入者が呟いた。光流に向けられたその顔は驚愕に彩られている。

「まさか、光に流れると書く、みつるか？」

言い当てられて光流は眉を寄せた。

「何故俺の名前を知っている？」

詰問すると、目を見開いていた女は突然嗤(わら)い始めた。徐々にその声が高くなっていく。

「はははっ、そうか、生きていたのかっ！ あのろくでなしの息子がっ！ ははははは！」

「.....なんだと？」

光流は呆然とした。今、この女は何と言った？ 息子？ 彼自身が忘れてしまった両親を、親元にいた頃の自分を、この女は知っているというのだろうか？

すると女は笑うのを止めて、光流の顔をまじまじと眺めた。

「まさか、覚えていないのかい？ 自分の父親が日野神乃(ひのかみの)伝言者(でんごんしゃ)だったことを。といってもあんな奴、宗主様には忠実でも、我等が日野神様には従わない、ろくでなしだったからねえ」

光流は瞠目した。日野神乃伝言者。それは王の暗殺を謀り、六花の両親を殺した逆賊が属していた一派だ。光流と六花も、腕が立つ兵は先に殺しておけばかりに、狙われたことがある。

「腕だけは確かだからって、息子を人質に取って無理矢理襲撃に向かわせたら、相打ちになっちゃうし。その息子もいきなり海に飛び込んだから、死んだと思っていたのに」

そう言ってふん、と鼻を鳴らすと、王の方を見やる。

「よりもよって、敵方に仕えているとは！ 流石にろくでなしの息子なだけあるね」

そして彼女は、言葉を失う光流の隣に立つ六花にも目を向けた。

「ああ、お前の顔も知ってるよ。母親そっくりだ。十年前、いや、そろそろ十一年か。あの時殺された兵士夫婦の娘だろ？ 皮肉だねえ、親の敵(かたき)の息子が同僚だとは！」

ぐらりと、世界が大きく揺れた気がした。否、揺れたのは光流自身の心だ。

この女の言葉が正しければ、自分の父親は王を庇った六花の母親を殺し、父親と相打ちになったという逆賊ということになる。

なんということだろう。この十年以上、六花に度々両親の死という悪夢を見せて苦しめた元凶が、泣きたいのなら泣けと言うこと以外、彼女に何の慰めも与えられずに歯噛みしていた自分の、父親だとは。

記憶がない自分には、それが真実かどうかはわからない。だが女の『息子が海に飛び込んだ』という言葉は、同じ時期に海辺で発見された自分と合致する。合致して、しまうのだ。

隣に立つ六花の顔を見るのが、怖い。光流が思わず目を瞑った時だった。

「それがどうした？」

凜とした声がある場に響いた。そのどこまでも澄んだ声と、その言葉が持つ意味に導かれて、光流は目を開けた。恐る恐る隣に顔を向けると、そこには六花の毅然(きぜん)とした横顔がある。強い意志を持ったその瞳は、真っ直ぐに目の前の女に向けられていた。

「親が誰であろうと光が、光流が、この十一年ずっと傍にいて、私を支えてくれたことは変わらない。そっちの方が大事だし、それこそが私にとっての真実だ」

大体、と彼女は眉間に皺を寄せる。

「犯した罪はその人自身のものだろう。親が犯した罪を、子供が背負わなければいけない謂(いわ)

れがどこにある？」

「私も同感だ」

六花の言葉に、後ろから王が応じた。

「光流は軍に入隊してからずっと、軍の一番手として、私のために忠実に働いてくれた。今だって、六花と共に真っ先に駆けつけてくれた。父親があの時私を狙った逆賊であっても、そんなものは関係ない。大事なのはどう生まれたのかではなく、どう生きるかだろう。光流は、私の大切な臣だ」

当たり前のように言い放つ二人の言葉を、光流は黙って聞いていた。何かを言うことなど、できなかった。

「はん。それはそれはお優しいですこと。でも、このままじゃおかないよ。そいつは私らにしてみれば裏切り者なんだから。子供だったからって、何を知っているかわかりやしない。もっとも、今は忘れているみたいだがね」

女はそう言うと、ふいに身を翻して背後にある窓から飛び出した。見ていた三人はぎょっとする。ここは城の最上階なのだ。飛び降りて助かる高さではない。だが、窓に駆け寄った六花はすぐに首を振った。

「駄目だ、いない」

分が悪いと悟って退却したのだろう。

彼女はそう言って己の剣を納める。光流ものろのろとそれに倣った。衝撃で、まだ頭がぼんやりとしている。自分がどうするべきなのか、わからない。

「光」

はっと顔を上げると、いつのまにか六花が目の前に立っていた。いつになく真剣な顔をしている。華奢(きゃしゃ)な手が伸びてきて、両手で顔を挟まれた。

「さっき言ったことに、嘘なんかない。虚勢だって張ってない。だから気に病むな。そんな顔、しなくていい」

「.....雪」

呟くように名前を呼ぶと、彼女はしょうがないなという顔をした。その瞳に映る自分の顔は、ひどく情けない。

「ほら、しっかりしろ、王軍第一隊副隊長光流。泣き言は帰ったらいくらでも聞いてやるから、今は仕事に専念しろ」

ぱあん、と小気味良い音を立てて、両の頬を叩かれた。物理的な痛みにも、ようやく光流の思考がまともに働き出す。と、後ろからくつつつという笑い声が聞こえた。

「主上.....？」

六花が訝しげな顔をして主君を見やる。光流も振り向くと、王はどこか嬉しそうに目を細めた。

「いや、六花も光流も大きくなったなあ、と。幼い頃から知っている私は今、父親の心境だ」

「.....はあ」

今しがた命を狙われたばかりだというのに、随分と緊張感のない感想だ。なんと返していいのかわからず顔を見合わせる光流と六花に、王は朗らかに声をかけた。

「では六花の言う通り、仕事をするとしよう。会議室に行くぞ。そろそろ物音を聞きつけた者が来るだろうしな。吹っ飛ばされてしまった哀れな彼は見たところ気絶しているだけのようだし、その者達に任せるとしよう。きっと目覚めたら、彼が状況の説明もしてくれるだろう」

倒れている兵士を指してそうのたまうと、この国の主は軽快に歩き出す。臣下の二人は、素直

にそれに従った。

とんとん、と扉を叩くと、すぐに返事があった。

「隊長、光流です」

「ああ、入れ」

了解を得て扉を開くと、そこは上司にして育ての親である隊長の私室だ。そしてこの部屋の主は、その筋骨隆々とした体を揺り椅子に押し込んで揺れていた。光流はその様子に目を細める。それは六花と共に世話になるようになった頃から変わらない、見慣れた部屋の見慣れた光景だ。

「連日の式典の警護、お疲れ様です」

とりあえず声をかけると、隊長はにやりと笑った。

「そりゃお前もだろう、光流。まあ、それも今日で終わりだ。やっと休めるな」

「そうですね」

「当ててやろうか？」

「はい？」

唐突な言葉に目を見開くと、隊長はどこか諦めの混じった目を向けてきた。

「お前が今日のこの時、この部屋に来た理由だよ。軍を出るって言うんだろ？」

「……なんで…」

それきり言葉が続かない光流を見て、隊長は溜息をついた。

「言ったのは俺じゃない。六花だ。あいつが言ってきたんだよ。きっとお前は行ってしまおうってな。父親の件でぐるぐる悩んで、このままじゃここには居られない、とか思ってそうだって。そして行くなら副隊長としての、式典警護の任務が終わった後だろう、と。……その顔は凶星だな」

今度こそ光流は絶句した。完璧に読まれている。いくら幼馴染で、同じ部屋に住んでいるからと言ったって、これはもう反則じゃないだろうか。

「六花には伝えずに行く気だったのか？」

「……………それも雪が言ったんですか？」

「まあな」

今朝見た彼女の顔を思い浮かべて、光流は小さく溜息をついた。物言いたげな顔をしていたのは、気付いていたからか。それでも何も言わなかったのは、止めても無駄だとわかっていたからだろう。

光流は下を向いて、ぽつりと呟く。

「俺、何にもしてないですよ」

無言で続きを促してくれる隊長に甘えて、彼は続けた。

「雪は、気に病むなと言ってくれました。自分の両親を殺した奴の息子に対して、親がどうかは関係ない、ずっと傍にいてくれたことの方が大事だって。だから俺は、あいつの優しさに報いたいんです。でも考えてみたら俺、ガキの頃からずっと、自分の記憶を取り戻す努力を一切してないですよ。そんなことよりあいつの傍に居ることの方が、俺にとっても大事だったから。でもたぶん、薄々気付いてたんです。思い出そうとしないのは、思い出したくないことがあるからだって。雪は両親の死をちゃんと受け止めて生きているのに、それは逃げなんじゃないかと思ったんです。このままじゃ、俺はあいつの優しさに甘えるだけになるんじゃないかって。それで

いいのか、大晦日からずっと、考えてたんです」

そこまで喋ってから、光流はようやく顔を上げた。

「俺は、雪の優しさに甘えるだけの存在にはなりたくありません。たとえ雪が許しても、俺自身がそんな自分を許せない。俺は昔、雪を守ると決めました。けどそれは、あいつにすがって生きていくためじゃない。俺はいつだって、あいつと対等でありたいんです。だから明日、ここを出て、あいつの傍を一度離れて、自分の記憶を探しに行こうと思います。きっと雪の傍に居ると、居心地が良すぎて、ずるずると甘えてしまいますから」

だから許してください、と頭を下げる光流に、隊長は静かに尋ねた。

「帰ってくる気はあるのか？」

「.....なにもかも思い出して、ちゃんと自分の中で整理が付いて、それでも雪の傍にいたいと思えたら、たぶん。我ながら勝手だと思えますけど」

でも、その時雪がもう誰かと一緒になっていたら、潔く身を引きます。

そう苦笑してみせると、隊長は呆れた視線を寄こした。

「なんつーか、お前らって、相手の事は無茶苦茶鋭いくせに、自分に向けられる感情には本っ当に鈍いよな」

「は？」

きょとんとする光流に、隊長は苦々しげに言う。

「六花はお前のことを待ち続けるぞ。ずっとな」

言葉に詰まる光流に、隊長は饞別(せんべつ)だと真新しい財布を投げて寄こす。受け止めると、それはずしりと重かった。

「それがわかってても行くって言うのなら行け。でもな、頼むからあの子を不幸にしてくれるな。お前自身もな」

お前ら二人共、俺が育てたんだからな。

その言葉に、光流は黙って頭を下げた。

その夜、光流は普段と同じ時間に寝台に入った。そこへするりと、六花が潜り込んでくる。彼は驚いて声を上げた。

「雪？」

悪夢を見た訳でもないのに、彼女がこうして潜り込んでくるのは六年ぶりだろうか。その前はずっと一緒に眠っていたのだが。

「いいだろう、たまには。前はずっと一緒に寝てたんだし」

そう言ってさっさと枕に頭を乗せる彼女を見て、光流は内心複雑になった。どんなに慣れていると言っても、自分は一応男なのだが。たまにどちらかが悪夢を見たりすれば、今でも一緒に寝たりもするが、それでもこの警戒心の無さはどうなのだろう。

だが、そこまで考えてはたと気が付く。

それももう、今日で最後だ。そして彼女はそのことを知っている。光流が最後まで言う気がないということも含めて。

「仕方ないな」

わざと大げさに肩をすくめてみせて、光流も横になった。

慣れ親しんだぬくもりがすぐ近くにある。それだけで、こんなに安心する。恐らくこの先、どん

なに探しても、そんな存在に出会えることは二度と無いだろう。

「光」

こてん、と彼の肩に六花の頭が当たった。首を巡らせれば、彼女の後頭部が見える。光流は感情を抑えきれなくなって手を伸ばした。そっと彼女を抱き寄せると、六花も彼の胸に額をすり寄せる。そのまま、お互いにしばらく何も言わなかった。

沈黙を破ったのは六花の方だった。

「前にもこうして寝たな。あの時は、どっちが夢見たんだっけ……？」

「さあ？ でも確実に一回じゃないから、どっちもじゃないか？」

「そう、だな……。なあ」

「うん？」

「私の夢の守人は、お前だ」

虚を付かれて、光流は目を見開いた。沸々と、胸にわき上がる感情がある。この期に及んでそう言ってくれることが嬉しくて、そしてどうしようもなく切なかった。

「ああ」

「私の夢の守人は、光、お前だ」

「ああ。そう、だったな」

再度告げられた言葉に、今度は必死に感情を押し殺して答える。本当は、過去形になどしたくない。この場所を他の誰かに奪われることが、昔からずっと恐れていたことだった。

それでも、今の自分は彼女の傍に居るべきではないと思う。自分はまだ、過去とちゃんと向き合っていないから。

六花が今、どういう顔をしているのかはわからない。明確な言葉は何一つ伝えていないから、謝ることもできない。だから代わりに、光流は力を込めて彼女を抱き締めた。六花が苦しくないように優しく、強く。

このぬくもりを忘れることなど、決してありはしない。それだけは、伝わってくれば良いと願った。

夜明け前。光流は六花と十一年暮らした部屋を後にした。持ち物は扱い慣れた剣と、隊長からの餞別と、寝袋だけだ。野営の仕方は軍で散々学んだし、路銀は日雇いの仕事でも探して適当に稼ぐつもりだった。体力にだけは自信がある。

まずはどこに行こうか、と考えて、六花と最初に出会った海辺に向かった。今の己に残る一番古い記憶はそこなのだ。その前の記憶に繋がる手がかりはなくても、最後に見ておこうという気になった。

歩きながらも自然と、部屋に残してきた六花が思い浮かぶ。

光流が起きた時、彼女は恐らく起きていた。起きていて、狸寝入りをしていてくれたのだ。

その顔を見てふと、せめていい夢を見て欲しいと思った。自分が言わなければ泣くことすら我慢しようとする彼女に、誰もいない部屋で悪夢を見て欲しくない。だがそこでまじないを唱えるのもおかしな気がして、迷った挙句に、彼女の額に唇を落としたのだ。本当に触れるか触れないか程度だったので、目を閉じていた六花は何をされたのかわかっていないかもしれないが。

その後、部屋を出る時も彼女は寝返り一つ打たなかった。戸口で振り返って、「行ってくる」と呟いた声にも、反応はなかった。その様子に、少しだけ感心してしまった位だ。それでもあれは狸寝入りだった、と胸を張って言える自分もどうかと思うが。

「……結局、言えなかったな」

ぽつんと呟いた時、目的地が見えた。水平線が赤くなり始めている。そろそろ夜明けだ。

砂浜まで歩いて、そこで肩にかけていた寝袋をおろした。その拍子に、手が胸を掠める。

「え……？」

こつん、と何か硬い物が手に当たった。慌てて服の中に手を突っ込んでみると、出てきたのはあの首飾りだった。ずっと肌に当たっていたせいで、石の部分が温かくなっている。いつ首にかけられたのだろう、全然気が付かなかった。

まじまじとそれを見つめて、光流は低く呟いた。

「あの、馬鹿野郎……」

—ちゃんと返せよ

笑って告げられた言葉を思い出す。

これで、六花の元に帰らなければいけない言い訳ができた。できてしまった。だってこれは彼女の両親の形見なのだから。自分はこれを貸されただけなのだから。そう言い訳をする相手は、他の誰でもない自分自身だ。

石の部分を目の前にかざすと、昇り始めた太陽と重なった。もしかしなくてもこれには、六花の言葉と息が吹き込まれている。戻ってこいという想いが込められている。

光流は今更ながらに痛感した。幼馴染や同僚という、六花との関係を表す他の言葉はどれも、ずっと彼女の傍にいる理由にはなってくれない。唯一その役目を果たしてくれるのは、夢の守人だけだったのだ。

六花はそれがわかっていたから、昨夜あんなことを言ったのだろう。

—私の夢の守人は、光、お前だ

あの言葉とこの首飾りをもってして、彼女は自分達の関係を持続させたのだ。少なくとも彼が首飾りを返しに行くまで、二人がお互いの夢の守人であり続けるように。

光流はふっと目を閉じて、空を仰いだ。出がけに見た、六花の寝顔を思い出す。

あの時本当は、『さようなら』と言うつもりだったのだ。が、戸口で彼女を振り返った時、その言葉がどうしても言えなかった。喉の奥に絡み付いたまま出てこなくて、結局いつもと同じ、『行ってくる』と呟いたのだ。

行ってくる、は別れの言葉ではない。

まだ、六花との繋がりは切れていないのだ、と。この首飾りが、そこに込められた想いが、強靱な鋼の糸よりも強く、自分達を繋いでいてくれる気がした。

望みと希の狭間にて

初めて出会ったのは十一年前。海辺で倒れていた彼を、文字通り拾ってきた。

その頃の自分は、悲しみを押し殺して平気なふりをすることだけは上手かったのに、彼はそれを見て、呆れたように言ったのだ。

「俺といる時だけでいいから、泣きたい時は泣け」

お前は雪なんだから、温めたら溶けるだろ。なら、俺が温めてやる。

* * *

草木も眠る丑三つ時。とある王国の王軍の敷地内。その宿舎の一室で、十七歳の少女が目覚めました。

目を開ければ、そこは勝手知ったる自分の部屋だ。

部屋のほぼ中央に置かれた卓と二脚の椅子、少し広めの部屋を真ん中で二分するためのカーテンに、今自分が寝ている寝台。それらを一つ一つ確かめるように眺めた後、六花(りっか)は向かいの壁に寄せられた空(から)の寝台に目を留めた。誰もいない寝台は、きちんと整えられたままである。

「……夢、か」

そう呟いて、彼女は溜息をついた。

「まったく、夢に出てくる位ならさっさと帰って来い」

ぼやいた文句は、ここにはいない空の寝台の主に対して向けられたものだ。十一年間共に暮らしていた幼馴染の青年が出て行って、もう三ヶ月になる。そして、彼が今どこで何をしているのかを知る術を、彼女は持ち合わせていなかった。

しばらく空の寝台を睨みつけていた六花は、もう一度溜息をつくとも目を閉じた。

窓から見える空はまだ夜明けが遠いことを示している。昨夜は遅くまで起きていたから、体はまだ睡眠を要求していた。ついでに言えば今日は休日、朝早く起きる必要はどこにもない。

そこまで条件が揃っているにも関わらず、彼女はなかなか寝付けなかった。ただぼんやりと、今見た夢の内容を思い返している。

無意識のうちに、手が胸元に下げられた首飾りを握り締めていた。飾り石の冷たさがひんやりと心地良い。

その石をのろのろと顔の前に持ってきて、六花は目を細めた。口をついて出たのは古くから伝わる、悪夢を払うというまじないだ。

「悪(あ)しき夢、幾度(いくたび)見ても、身に負(お)わじ」

そう呟いてから、彼女はふっと苦笑した。どうしてこのまじないを唱える気になったのか、自分でもわからなかったからだ。今し方まで六花が見ていた夢は、決して悪夢ではない。

第一、このまじないは唱えた本人ではなく、悪夢を見ないで欲しいと願う対象者に対して効力を発揮するものなのだ。その名も夢守(ゆめもり)というこのまじないにおいて、互いの夢を守る者同士を夢の守人と呼ぶ。

己の夢の守人でもある幼馴染を思い浮かべて、六花は不意に泣きたくなった。理由は特にない。強いて言うのなら、今まで見ていた夢が優しすぎたのだ。

三ヶ月前までそうだったように、彼が隣にいて、他愛のない軽口を叩き合っている。ただそれ

だけの、ずっと見ていたいような、幸せな夢だった。

だがそれでも、六花は泣けなかった。泣かないのではない、泣けないのだ。声をあげて泣いてしまえば、少しは気が紛れるとわかっている。それなのに、何かが涙をせき止めているかのよう、瞳は乾いたままだった。

「光(こう)の、馬鹿野郎」

手の甲で目を覆って、六花は呻くように呟いた。彼が行ってしまってから使っていなかったその愛称は、今でもしっかりと口に馴染み、応える者のないまま消えていく。それが無性に腹立たしかった。

「六花、今、手空いてるか？」

六花が所属する王軍第一隊の隊長がそう言って彼女の部屋を覗き込んできた時、彼女はちょうど卓の上に重ねた手紙の数々とにらめっこをしているところだった。

「あ、はい。空いてると言えば空いてますけど。……何かあったんですか？」

六花は若干十七歳だが、女だてらに第一隊の副隊長の任に就いている。これでも剣の腕は軍内で一位二位を争う実力者だ。そのため、軍の方針についての話し合いに呼ばれることもあれば、少人数の特殊任務に当てられることもある。

今回もその類かと思ったのだが、隊長は首を振った。

「ああ、仕事の話じゃない。部下にじゃなく、養い子に頼みがあるんだ。……どっちにしろ、一人欠けてるがな」

最後の言葉に、六花は黙って肩をすくめた。

同じく副隊長の任に就いていた幼馴染も六花も、この隊長に育ててもらった孤児だ。親代わりとしても上司としても、突然出ていった彼を心配するのは当然である。

「で、頼みって何ですか？」

聞き返すと、隊長は少し困ったような顔をした。

「もうそろそろ客が来る予定だったんだが、ちょっと城に行かなきゃいけない用事ができてな。俺が戻ってくるまで、その客の相手をして欲しいんだ。そんなに長くはかからないと思うんだが……」

その言葉に六花は首を傾げた。己の責務を第一に考える養い親の信条を、彼女はよく知っている。普段ならば客を待たせたりせず、次に会う約束を取り付けて帰すはずだ。

「誰が来るんですか？」

そう聞くと、隊長は苦笑してみせた。

「女房のお袋さんだ。お前も昔会ったことがあるだろ？ 遠いところをわざわざ来てくれるというのに、仕事だからと帰す訳にはいかんからな」

なるほど、と六花は納得した。

隊長の妻は六花達が隊長に引き取られる前に病で亡くなっている。だがその母親は至って元気で、若い内からやめとなってしまった義理の息子をなにくれと気にかけてくれているのだ。定期的な手紙のやり取りはもちろん、時々自家製の果実酒を送ってくれたりもする。六花が彼女に会ったのは過去に一回きりだが、優しい人という印象を受けた。

確かその時に貰った焼き菓子が美味しくて、素直にそう告げたらとても喜んでくれたっけ。六花がそんなことを考えていると、隊長が不意に真剣な顔をして言った。

「大丈夫か？ 無理強いはしないから、具合が悪いなら休んでてもいいぞ」

一瞬、何を言われたのかわからなかった。それが顔に出たのだろう、彼女の養い親は呆れたように付け加える。

「お前、顔色悪いぞ。体調が悪いんじゃないのか？」

「いえ、全然」

全く自覚がなかったのだが、試しに自分の頬に手を当ててみる。確かに普段より体温が低い気がした。が、それだけだ。体がだるい訳でも、どこかが痛む訳でもない。

そう告げると、隊長は眉を寄せた。

「じゃあ、疲れが溜まってるとか、寝不足とかか？ でなけりゃ、何かあったとか」

「.....そんなにひどい顔してますか？」

「だから言ってるんだ。本当に自覚がないのか？」

その言葉に頷いて、六花は考え込んだ。昨日からの記憶を辿ってみるが、思い当たることは何もない。

すると、隊長が思いついたように言った。

「じゃあ、昨日悪い夢でも見なかったか？」

その問いに、一瞬だけ瞳が揺らぐのを感じた。だが努めて明るく言い返す。

「.....確かに夢は見ましたけど、悪夢なんかじゃないですよ？」

泣きたくなる程に優しい夢は、悪夢とは呼ばない。

その答えに隊長は少しの間黙っていたが、やがて静かに問うてきた。

「それ、光流(みつる)が出てきたか？」

幼馴染の名前を出されたので頷くと、隊長は深々と溜息をつく。あの野郎、と呟くのが聞こえた。

「泣かすなって言ったのに.....」

「はい？」

意味がわからず聞き返すと、こっちの話だと片手を振られた。

「それより六花、その卓に載ってる手紙の山、もしかして全部恋文か？」

「.....よくわかりましたね」

最近やたらと貰うんですよ、と苦笑してみせると、隊長は真面目な顔で言った。

「その内の誰かに、返事をしたのか？」

「する訳ないじゃないですか」

自分にそんな気がないのは、隊長だって知っているはずだ。

卓の上に目をやって、六花は顔をしかめた。

「でも、どう処分したらいいかわからないんです。一応目は通したんですけど、捨ててしまうのは申し訳ない気がして」

「そうか。.....じゃあ、光流の寝台の上にでも積んでおけ」

大真面目に言い切った隊長の顔を見返して、六花は目を瞬かせた。

「寝台の上に、ですか？」

「ああ。あの馬鹿が帰ってきた時に、一番に目につく所に置いといてやれ」

隊長はそう言うと、客の件、頼んだぞ、と言い置いて出て行ってしまった。

隊長の義理の母親は、その名を理穂という。絶えず口元に優しい笑みを浮かべた、小柄な女

性だ。

六花が宿舎の玄関口まで迎えに出た時、理穂はその脇に生えている大きな木を見上げていた。

「理穂さん？」

何と呼ぶか迷った挙句にそう声をかけると、彼女はぱっと振り向いた。そうして嬉しそうに破顔する。

「まあまあ。六花ちゃんね？ 大きくなったわねえ。私が年を取るはずだわ」

にこやかにそう言う理穂だが、外見は六花の記憶にある姿と全く変わっていない。年齢はすでに七十に近いはずだが、傍目にはせいぜい五十過ぎにしか見えなかった。立ち振る舞いも年寄りじみたところはなく、きびきびとさえしている。

「お久しぶりです。理穂さんは変わってませんね」

六花がそう言うと、理穂は悪戯っぽく笑った。

「前みたいにおばあちゃんでもいいわよ。実際に孫みたいなものなんだから」

「……こんなに若々しい人をおばあちゃんなんて呼べませんよ」

「あらあら、嬉しいことを言ってくれること」

楽しそうに笑う理穂の荷物を預かって、六花は彼女を宿舎内へ案内した。

「光流君は武者修行に行っちゃってるそうね。会えなくて残念だわ」

階段を登りながら、のんびりとそう言う理穂に、六花は曖昧に笑って頷いた。

おそらく隊長からそう聞いたのだろう。王にも軍の人間にも、光流がいなくなった理由は隊長が武者修行に送り出したから、と説明してある。そうすることで隊長は、軍内での彼の扱いを脱隊ではなく、公休中としたのだ。

そんなことを思い返しながら、他愛のない理穂の話に相槌を打った時だった。次の段に踏み出した足に体重をかけた途端、六花は足を踏み外した。

「……っ」

慌てて手すりに掴まってその場にしゃがみ込み、なんとか転落は防いだ。が、その代わりに、手に持っていた荷物を取り落してしまった。それは階段の下まで転がり落ち、中に入っていた紙包みや瓶をそこら中にばらまいてしまう。

「す、すみません！」

慌てて立ち上がり、階段を駆け下りようとした六花を、理穂はやんわりと押し留めた。

「大丈夫よ、あの瓶はこれ位で割れるような柔な物じゃないし、お菓子はしっかり包んであるから。それより、貴女の方が心配だわ。顔色が真っ青よ。具合が悪いんじゃない？」

隊長と同じことを言われて、六花は言葉に詰まった。先程までなら、そんなことはないと言った。だが、現に今階段を踏み外したばかりだ。抜群の運動神経を持つ彼女にとって、階段を踏み外すこと自体、初めての経験だった。自然、返事も歯切れの悪いものになる。

「体調は悪くない、と思うんですけど」

「じゃあ、何か精神的に辛いことがなかった？ 悪い夢を見た、とか」

これもまた隊長と同じ質問である。六花も同じように答えた。

「夢は見ました。けど、悪夢じゃありません」

「本当に？」

理穂はこれ以上ない程真剣な目で、六花の顔を覗き込んだ。とっさに彼女が答えられないでいると、とりあえず階段に座るように促される。六花が手すりに体を預けるように座り込むと、理穂はその正面に腰を下ろした。それから優しく尋ねられる。

「それ、どんな夢だったの？」

「優しい、夢です」

そう答えてから、六花は言葉を探した。

「すごく、温かくて、懐かしくて……、目が覚めたら泣きたくなかった位、優しい夢でした」

「……そう。それは、残酷な夢ね」

「残酷、ですか？」

聞き返すと、理穂は困ったように笑って頷いた。

「だって温かくて懐かしくて優しい夢なのに泣きたくなるのは、それが現実には叶わないとわかっていることだからでしょう？」

その言葉に六花は息を呑んだ。その通りだ。あれが二度と戻らない日常であることを、彼女は嫌という程知っている。そんな六花を見つめながら、理穂は続けた。

「確かに悪夢ではないけれど、残酷な夢だわ。特に貴女みたいに、泣くのを我慢してしまう人にとっては」

そう言って理穂はその小さな両手で、六花の頬を包み込んだ。年季の入ったその手はとても温かくて、六花はそっと目を伏せた。

「別に、我慢してるつもりはないんです。ただ、泣けないだけで」

「それは、貴女を泣かすことができる人が行ってしまったから？」

静かに問われた言葉に、六花は目を見開いた。理穂は相変わらず、困ったような優しげな顔で笑っている。

「……なんで、知って…」

「前に来た時、光流君本人から聞いたのよ。俺はあいつを泣かせるために傍にいるんだって。俺が泣けて言わなきゃ、あいつは泣くのを我慢するから、俺が泣かせるんだって言ってたわ」

息を詰めた六花を見て、理穂は大きく溜息をついた。

「だから、手紙で光流君を武者修行に出したって読んだ時、おかしいと思ったのよ。あんなに小さい頃から、泣くのは大切なことで、自分がいなきゃ貴女は泣けないんだってこともわかってた光流君が、いくら上司兼養い親の命令だからって、貴女を残して、いつ戻れるかもわからない旅に出るかしたら、ってね。それなら軍を辞めるって言い出しかねない位の気概を、あの時の彼は持っていたし、手紙によると、それを捨てずに育ったようだったから。それなのに光流君が旅に出たのだとしたら、それは彼自身に、貴女の傍にいられない理由ができたからじゃないかと思ったの。……違う？」

六花は黙ってのろのろと首を振った。理穂の推論は正しい。

「そう……」

理穂はそう呟くと、まるで幼子にするように、六花の頭を優しく撫でた。それからこりと笑う。

「お部屋に行きましょか。今日はね、新作のお菓子を焼いてきたの。息子が帰ってくるまで、女同士でのんびりお茶してましょ？」

「……はい」

隊長の部屋に着くと、六花はとりあえず理穂自家製のお茶を淹れた。そうして、新作だという焼き菓子を広げる。

「へえ、面白い形ですね。なんていうお菓子ですか？」

六花がそう聞くと、理穂は悪戯っ子のように笑った。

「これはね、いんてぐらる、っていうのよ」

「……はい？ いんてぐ……？」

きょんととして問い返すと、理穂はますます笑みを深める。

「いんてぐらる。元は外国の言葉なの。どういう意味かはよくわからないんだけど、響きが気に入って、思わずつけちゃった」

そう言ってぺろりと舌を出す彼女は、どう見ても七十近い老婆には見えない。

どうしてこの人をおばあちゃんなどと呼んだのか、と幼い頃の自分に疑問を抱きながら、六花はいんてぐらるを一つ手に取った。小指ほどの細長い菓子を口に入れると、焼き菓子特有の香ばしさとほど良い甘さが広がる。その中に、何か別の香りが混じっていた。どこかで嗅いだことのある香りだ。

「……お酒？」

「あら、よくわかったわね。他の人は皆、果物かって言うのに」

その言葉で、六花はこの香りの元が何であるかに思い当たった。

「これ、いつも隊長に送ってる果実酒ですよ？」

「ええ。あれの、うんと濃いものを使ってるの。それだけで果物の甘味が強いから、お砂糖は入れてないのよ」

へえ、と頷いて、六花はもう一つ手に取った。口に入れようとして、寸前でその手が止まる。

「どうしたの？ 口に合わなかった？」

正面に座った理穂に優しく尋ねられて、六花は慌てて首を振った。

「すごくおいしいです。ただ、……たぶん、あいつも好きな味だろうから、食べさせてやりたいなあ、と」

そうは言っても、いないものはどうしようもない。

そう肩をすくめてみせる六花に、理穂は一瞬考え込む仕草をした。そしてふっと真剣な顔になると、真っ直ぐにこちらを見つめてくる。

「ねえ、六花ちゃん」

「はい？」

「光流君は帰ってくると思う？」

「帰ってはきます」

即答すると、理穂はにこりと笑った。

「じゃあ光流君が帰ってきたら、また作って持ってくるわ。その時は連絡頂戴ね」

事も無げにそう言うと、自身もいんてぐらるに手を伸ばす。その様子を眺めながら、六花は苦笑した。

「聞かないんですね。なんであいつが出ていったのかも、なんで帰ってくるって断言できるのかも」

そう言うと、理穂は微笑みながらちょっと首を傾げた。

「そりゃ、気にならない訳じゃないけどね。でも、一番聞きたかったことは聞いたから」

おかしいと思ってるのに、ごまかされたままなのは好きじゃないの、と理穂は続けた。

「だから、他のことは貴女が話したいと思ったら話せばいいわ」

彼女の言葉を聞いて、六花は溜息をついた。前髪を掻き揚げながら、ぼそりと呟く。

「なんか、理穂さんって、そこはかたなく隊長に似てますね……」

「そう？」

「本当に血が繋がってないのか、疑いたくなりますよ」

きょんとする理穂にそう頷いて、六花はお茶をすする。そして短く息をつくとおもむろに口を開いた。

「十一年前に私とあいつが孤児になった理由、隊長から聞きました？」

ずいぶんと唐突な問いだったにも関わらず、理穂は驚くことなく、のんびりと答える。

「確か、光流君は記憶喪失だったのよね。自分の名前しか覚えてない、七歳の男の子を、六歳だった貴女が拾ってきたって聞いたわ」

そこで言葉を切ると、理穂はお茶をすすった。

「貴女のご両親はその二日前に、王に襲いかかってきた謀反人と相打ちになったそうね。自分がその場にいれば、そんなことにはならなかったのに、みすみす親友夫婦を死なせてしまったって、あの子が嘆いてたわ」

あの子というのは隊長のことだろう。その呼び方がおかしくて、こんな時なのに六花は思わず吹き出してしまった。

そんな彼女に驚いたのだろう、理穂が目を見開く。

「どうしたの？」

「ごめんなさい、でも、あの隊長が、あの子なんて呼ばれるのは、聞いたことなかったから……」

まだくすくすと笑い続けている六花に、理穂は、確かにと頷いてみせた。

「今のあの強面(こわおもて)に、あの子っていうのは合わないわね。でもうちの娘が彼を初めて家に連れてきた時、まだどっちも十五歳だったのよ。あの頃を知ってるから、ついね」

でも、と彼女は続けた。

「それを言うなら貴女達だって、他の人には全く通じない愛称を使ってるじゃない。光流君が光で、六花ちゃんは雪、だったかしら？」

「よく覚えてますね」

今度は六花が目を見開く番だった。彼女は今日、理穂の前で一度もその愛称を使っていない。ということは、彼女がそれを聞いたのは以前会った時のただ一度だけ、それも何年も前のことなのだ。大した記憶力である。

すると理穂はくすりと笑った。

「だって、かなり印象的だったもの。最初に聞いた時、何を言ってるのかわからなくて、しばらく考えてたのよ。どっちも音だけだと、元の名前に掠ってもないじゃない」

その通りである。幼馴染と出会った当初を思い出して、六花は目を細めた。

「あいつは、最初に名前の読み方を教えてくれなかったんです。だからむりやり読もうとして、でもできなくて最初の一文字を取ったんです。あの字でみつるなんて、六歳児には絶対読めません」

断言する彼女に理穂は、大人でも読めるか怪しいと請け合った。

「でも、それは六花だって同じじゃない？ 光流君も読めなかったから、適当に名前を付けたの？」

「いえ、あいつは最初、音しか知らなかったんです。後から、どういう字を書くんだって聞くから書いてみせて、雪って意味なんだって教えたら、そっちの方が呼びやすいつて……」

「それでずっとそのまま？」

「はい」

微笑みながら頷いて、六花は俯いた。ぽつりと呟く。

「敵(かたき)の子同士、だそうです」

「え……？」

目を丸くする理穂をちらっと見て、六花は苦笑した。

「私の両親と相打ちになったっていう謀反人が、あいつの父親なんだそうです。その人が所属していた組織の、たぶん過激派に属する人がそう言ってました。腕が立つから、わざわざ息子を人質に取ってまでして襲わせたのに、結局相打ちになってしまったって。しかもその時の息子は海に飛び込んで逃げ出して、拳銃の果てに王軍なんかにいるって、私達二人を前にして嗤(わら)ってました。それが三か月前の話です」

まったく、何の冗談かと思いましたがよ、と六花は明るく言ってみせる。愕然としていた理穂はやや間を置いて、彼女にしては珍しく、ためらいがちに口を開いた。

「だから、光流君は行ってしまったの？ 敵の子同士だから、一緒にはいられないって……？」

が、六花はこれを一蹴(いっしゅう)した。

「それは違います。そもそも、そんなことで一緒にいられなくなるようなら、十一年も二人で一つの部屋に暮らせる訳がありません」

六花と光流は隊長に養ってもらっていたとはいえ、彼と共に暮らしてはいなかった。二人の部屋はもともと六花の家族の部屋で、隊長の部屋はその隣だ。

隊長にはもちろん仕事もあったから、三人でいるよりも、光流と二人きりでいる時間の方がはるかに長かった。そしてその間、自分達は仕方なく一緒にいた訳では決してない。

喧嘩はしょっちゅうだったし、お互い相手に対して遠慮なんかしなかった。それでも傍にいたくないと思ったことはなかったし、逆に離れることには強い抵抗を感じていたのだ。それは光流も同じだったようで、事実、成長するにつれて周りから「部屋を分けるべきじゃないか」と再三言われるようになって、絶対に首を縦には振らなかった。

いつだって隣にいたことが当たり前で、傍にいただけで安心できた。他の何が変わっても、それが変わる事などありはしない。

そう言い切る六花に、理穂は不思議そうな目を向けた。

「じゃあ、どうして光流君が出ていく必要があるの？ 変わることが無いのなら、今まで通り一緒にいればいいじゃない」

その言葉に六花はゆるゆると首を振った。

「それだけなら、そうかもしれませんが。でも、今のままじゃいけないって、あいつも私も気付いてしまったんです。……あいつには、七歳より前の、私と出会う前の記憶がないから」

それはつまり、彼自身の家族の記憶を何も持ち合わせていないということだ。そして光流はおそらく、それを思い出すことを無意識に避けていた。そのことを、父親の話を持ち出されて初めて自覚したのだ。

「たぶんあいつは、それを逃げだと思ったんでしょう。私には家族で過ごした思い出があって、その上で変わらないと言い切れる。けど、自分はそうじゃない。何もかも思い出した上で同じように言い切れなければ、過去を受け入れたことにはならない。なのに、それができないまま一緒にいれば、その気はなくても私に甘えることになるだろう、って。そう思った以上、もう今まで通りではいられません。でなければ、私達は対等でいられなくなります」

そして片方が相手に引け目を感じるようになれば、結局は一緒にいられなくなるのだ。

「だからあいつは、自分の過去を探しに行ったんです。ここに、……私の傍にいたんじゃ、きっと無意識に、今まで通りにしようとしてしまうから」

そう言うと、理穂はそう、と溜息をついた。

「光流君がそう言ったんなら、確かにちゃんと帰ってくるでしょうね」

だが、六花はこれにも首を振った。

「いえ、あいつは何にも言いませんでした。それどころか、私には出ていくことすら言わずに行きましたよ」

理穂が今度こそ絶句する。その顔を見つめて、六花は微苦笑を浮かべた。

「だから、あいつが絶対帰ってくるって言える理由は他にあります。でも、今言ったことが間違っているとは思ってません。何も言わなくても、あいつの顔を見てればそれ位はわかります。伊達に十一年間、幼馴染をやってた訳じゃありませんから」

「………そんなの、普通の幼馴染にはわからないわよ」

理穂はそう言って、深々と息をついた。

「じゃあ、どうしても光流君が帰ってこなきゃいけないように、なにか仕組んだってことかしら？」

その問いに頷いて、六花は首から下げていた首飾りを摘んでみせた。

「この首飾り、同じ物がもう一つあるんです。それをこっそり持たせました」

「こっそり？」

「はい。出ていく前の夜、寝てる間に首にかけたんです。結構軽いので、服の中に入れておいたらばれないかな、と」

「でも石でしょう、それ。冷たいから、気が付くんじゃない？」

「ええ。だから、ずっと手に握って温めてました」

なるほどね、と理穂は頷く。それから、でも、と眉を寄せた。

「その首飾りだけで、帰ってこなきゃいけない理由になるかしら？」

「なりますよ。これ、両親の形見なんです」

理穂はまた目を見開いた。滅多なことでは動じないであろう人なのに、今日は驚かせてばかりだと、六花は少しばかり申し訳なくなる。それでも話してしまうのはたぶん、彼女に聞いてもらいたいからだ。

「夢守のまじないって、あるじゃないですか」

「……ええ」

「うちの両親は二人とも兵士だったので、お互い何かあれば派遣されたし、いつ死んだっておかしくなかったんです。まあ、それがこの仕事ですから」

同じく兵士である彼女は、それを身をもって知っている。

「でも離れ離れだと、相手の夢を守ることができないじゃないですか。自分の守人が悪夢を見ている、傍にいなければそれに気づいてやることすらできないんですから。だからうちの両親は、自分の代わりに悪夢を追い払ってくれるよう、この首飾りの石にまじないの言葉と、自分の息を吹き込んで、お互いに渡していたそうです」

ちなみに効果は絶大だそうですよ、と冗談めかして言うと、理穂は呆れたように頭を押さえた。

「それは確かに、返しに来なきゃいけないわね。そんな大事な物を、知らない間に身に付けてたんだから」

「ええ。そのまま自分のものにするなんてこと、あいつの性格じゃ、まずできません」

「でも、よかったの？ 大切な形見を持たせてしまって。彼にその気がなくても、旅の途中で失くしたり壊したりしてしまう可能性だってあるのに……」

心配そうに問う理穂の顔を見つめて、六花は力なく笑った。

「いいんです、あいつが帰ってくるのならそれで。どうせ私の夢の守人は、生涯あいつだけですから」

「……貴女達、そんな関係だったの？」

理穂が啞然としたのも無理はない。

夢守は、本当に相手を大切に想っていなければ効かないとされるまじないである。そのため夢の守人は、恋人同士や夫婦になるのが通例なのだ。

しかし、六花は半ば苦笑、半ば自嘲の笑みを浮かべて、首を振った。彼らの場合はこれに当てはまらない。

「いいえ。守人になろうって約束したのは出会ったばかりの頃で、夢を守る人以外の意味は全く知らなかったんです。知った頃にはもう、どっちかが悪夢を見たら、もう片方がまじないを唱えるのが習慣になってて、実際に効果もあったから、止める気もありませんでした」

だからまあ、半分位は成り行きなんですけど、と言いながら、彼女は首飾りを握り締めた。

「それでも、私にとって、夢の守人はあいつだけなんです。他の人なんて考えられません」

ほとんど呟くようにそう言うと、六花は首飾りから手を離した。その手をすっかり冷めてしまったお茶に伸ばす。そんな彼女をまじまじと見つめていた理穂は、ゆっくりと口を開いた。

「ねえ、六花ちゃん。一つ聞いていい？」

「……なんでしょう？」

「光流君に、会いたい？」

六花は虚を衝かれて、思わず動きを止めた。理穂は構わず続ける。

「記憶を取り戻した光流君が、貴女の知っている彼じゃなかったとしても、会いたい？ 彼が、もう貴女と一緒にいられないと言っても？」

その問いに、六花は黙って微笑んだ。

人を変えるのは時の流れだけではない。それより、何を経験したかの方がよほど重要な場合もある。

そして光流が無意識に封じ込めていた記憶は、明らかに負の要素を多大に含んでいた。でなければ、普通は記憶が欠けていることに不安を覚えて、思い出そうと躍起になるはずだ。そんな記憶が、思い出した彼自身に何の影響も及ぼさないということはまずないだろう。もしかしたらそれは、六花と共に過ごした十一年間の中で培った全てを覆してしまうかもしれない。

理穂が言いたいのはそういうことなのだ。

それでも、会いたいと思うのか。

それは六花にとって愚問だった。

「私と出会う前のあいつに何があったか、私にはわかりません。でももし、あいつが過去を受け入れきれずに自棄(やけ)になっていたら、それで自分自身を見失っているようなら、その時だけは一発ぶん殴ります」

それだけ答えた六花に、理穂は満足そうに笑いかけた。

「あら、じゃ、おばあちゃんとしては、ぜひとも孫の喧嘩を止めに来なきゃね。その時には、いんてぐらるをいっぱい焼いてきましょう」

「……だから、誰がおばあちゃんなんですか」

そう言い返すと、六花はお茶を淹れ直すために立ち上がる。その顔色は、先程よりもずっと良くなっていた。

隊長が帰ってきた後、六花は自室に戻ってきた。おかえり、と言ってくれる人のいない部屋はがらんとしている。彼がいないと、部屋が広すぎて落ち着かない。帰ってきたという気がしなかった。

「……」

思わず、光、と口にしようになって、六花は慌てて口を塞いだ。口にしてしまったら、必死で押し殺している想いが溢れて、そこから動けなくなってしまう。

目を閉じて、大丈夫だと自分に言い聞かせた。同時に昨夜見た夢を思い出す。

もう、愛称を呼べば必ず返事があると、この先もずっとそのままなのだと、信じていたあの頃へは戻れない。それは叶わぬ希(のぞみ)だとわかっている。

それでも、光流はいつか必ず帰ってくるだろう。その後の行動を決めるのは彼自身だが、確実にあと一度は会えるはずだ。ならば、その日ができるだけ早く来ることを当分の望みとしよう。

そう心に決めて、六花は目を開けた。

ふと、卓に山積みにされた恋文が目に入る。同時に隊長の言葉を思い出した。

自分の涙を凍りつけたままなのだ、これ位の意趣返しは、してしかるべきだろう。

そう考えて、六花は恋文の山を光流の寝台にぶちまけたのだった。

忘れ得ぬ人に告ぐ

その日の空は、どんよりと曇っていた。どこまでも色彩を乏(とぼ)しくさせるその空の下で、その二色だけは色褪せることなど、知りもしないようだった。

* * *

「出たぞ、山賊だ！」

後方からの叫び声に、光流(みつる)ははっと気を引き締めた。山の中の一本道を登っていた隊商が動きを止める。それに合わせて彼は剣の柄(つか)に手をかけ、周囲に目を走らせた。が、道の両側に鬱蒼と茂る木々の間に人の気配はない。馬を駆る蹄(ひづめ)の音も、大勢の人間が押しかけてくる足音も聞こえてこない。山賊が出たにしてはあまりにも静かで、光流は眉を寄せた。

町から町へと、大量の商品を抱えて移動する隊商にとって、山賊は天敵だ。特に、光流が今護衛士を務めているこの隊商は規模が大きく、動員している馬車の数も半端ではない。襲われてしまえばその被害は計り知れないため、腕の立つ護衛士を十人以上も雇っているのだ。現に今までも数回襲われかけたが、その全てを撃退してきた。護衛士達はその度に、それぞれが声を出してお互いの位置を知らせ合い、協力して敵と戦ってきたのだ。

それにも関わらず、先程の叫び声の後は何も聞こえない。仲間を呼ぶ護衛士の声も各馬車を御している商人達の声も、剣戟(けんげき)の音すらもだ。

最前列にいた光流は後方をじっとうかがっていたが、すぐにこれでは埒(らみ)が明かないと判断した。山道が曲がりくねっているせいで、隊商の後方は木々に隠れて見えないのだ。このままでは何が起きたのか、全くわからない。すると同じことを考えたのだろう、隣に並ぶ馬の上から、この隊商の責任者が声をかけてきた。

「光流、ちょっと様子を見てきてくれ」

「はい」

幸い、最前列には手練(てだれ)の護衛士がもう一人いる。光流が持ち場を離れても、雇い主の命が危険にさらされる事はないだろう。

そう考えて、光流は隊商の後方へと身を翻(ひるがえ)した。何台もの馬車の脇を風のような速さで駆け抜ける。だが、いくばくも行かない内に何かが彼の前を横切った。

最初はそれが何なのか、光流にはわからなかった。真紅の疾風が目の前を吹き抜けていったかのように見えたのだ。が、風に色などある訳がない。慌てて足を止め、それが向かった方向へと目を向ける。そうして光流は目を見開いた。

そこに、赤い女がいた。年の頃は二十代の後半だろうか。その背中で、腰まで流れる真紅の髪が揺れている。まとっている服は黒一色なのに、その髪のせいで赤という言葉しか浮かばない。

その女は光流の横に止まっている一際大きな馬車の御者台に音も立てずに飛び乗り、着地とほぼ同時に御者の首筋を手刀で打った。たったそれだけで、御者はあっけなく気絶してしまう。彼にはきっと、何が起きたのかもわからなかっただろう。

そして女はくるりと振り返ると、光流の姿を認めてにやりと笑った。

「へえ、少しは骨のありそうな奴がいるじゃないか」

そんな物騒な言葉が終わらない内に、女の姿が視界から消える。そう思った時にはもう、光流は本能的に横に飛び退いていた。その直後、それまで光流の身体があった空間を銀色の刃が切り

裂く。女の手握られた剣は、そのまま返し手で光流の首へと襲いかかってきた。光流はもう一度、今度は後ろに飛び退いてその攻撃を避けると、自らも剣を引き抜く。

そして次の瞬間、相手の懐へと一気に飛び込んだ。心臓目がけて剣を突き出すと、女はその切っ先を己の剣身で絡め取り、そのまま跳ね上げる。完全に跳ね上げられる前に光流は剣を引いたが、剣筋の乱れを殺すことはできなかった。そのわずかな隙間を狙って、女が喉元に真っ直ぐ剣を突き込んでくる。だがその切っ先が突き刺さる寸前で、斜めに払った光流の剣が女の首筋を捕らえた。

両者の動きがそこで止まる。どちらも急所と刃の距離は髪一筋あるかないか。少しでも身じろぎをすれば、自分も相手も無事では済まない。

その体勢のまま、二人はしばし睨み合った。実力はほぼ互角。

自分よりも目線の低い相手を睨みつけながら、光流は内心で驚嘆していた。

今年で彼は十八歳になるが、その長いとは言えない人生のほぼ三分の二を剣の修練に費やしてきた。驕(おご)りでも何でもなく、自分の実力を正確に理解している。そして、現在の自分と互角以上に戦える人間を、彼は今まで一人しか知らなかった。長年軍に所属していた者相手でも、ここまで苦戦したことはない。

さて、どうしたものかと思案した。一度相手から離れなければ何も進展しないが、下手にこの均衡を崩す訳にもいかない。

すると、同じように険しい目でこちらを睨みつけていた女が、何を思ったのか、突然面白そうに瞬きをした。

「お前、結構いい男だな」

「.....は？」

一瞬、何を言われたのか理解できなかった。間違っても今この状況で、大真面目に言うことではない。

光流が剣から手を離して、頭を抱えてしまいたい気分になっていると、いきなり横から誰かが吹き出す音がした。次いで、楽しそうな笑い交じりの声がかげられる。

「口説くにしても状況を考えろよな、ひいろ。彼氏がものすごく困ってるぞ」

男の声だった。その声に、光流と向き合っている女が平然と応える。

「別に口説いてる訳じゃない。事実を言ったまでだ」

そう言いながら、女は実にあっさりとして剣を引いた。そのまま剣を鞘に収めてしまう。今まで激しく戦っていたのが嘘のような態度だ。

相手が得物を収めたのに、いつまでも刃を突き付けている訳にもいかない。そう思った光流は自分も剣を収めると、そこで初めて女から視線を外し、声がした方向に目をやった。

先程女が御者を昏倒させた馬車の屋根に、冬の海のような濃い青色の髪をした男が一人、座っていた。女と同じ黒服の彼は、悠然と足まで組んで完全に見物状態だ。

だが、くつろいでいるかのようにさえ見えるその男には、気配というものがほとんどなかった。存在感がない、というのとは違う。むしろ、いることに気が付いてしまえば嫌でも意識してしまう程、存在感は強い。だが、普通の間人が自然と発しているはずの気配が、ものの見事に殺されているのだ。

どう考えても、ただの山賊にできることではない。そもそもこの二人は本当に山賊なのだろうか、と光流が考えていると、女の声が耳に飛び込んできた。

「整った顔立ちをしてるし、頭もそれなりに切れそうだし、何より強い。十分いい男の条件を満たしてるじゃないか」

「だから、面と向かってそういうことを言うのを、口説いてるって言うんだ」

女はいつの間にか、男が座る馬車のすぐ脇に移動していた。その隣に男が飛び降りる。

「なんだ、妬いてるのか？ 珍しい」

「馬鹿言え。それこそ、厳然たる事実を述べてるだけだぜ」

「それを言うなら、私が年下に興味がないこと位、知っているだろう」

聞いていて、今度は本当に頭を抱えてしまった光流である。いったいどうして、そういう話になるのだろう。

それにしても、と無理矢理意識を切り替えて、光流は周囲の様子をうかがった。男と女は特に声を殺すこともなく、普通に喋っている。周りにも聞こえているはずだが、他の隊商の人間がやってくる気配はなかった。それどころか、他の人間が動いている物音もまったくしない。先程の女の手際の良さといい、男の気配の消し方といい、もしかしたら、隊商側の人間で意識があるのはもう自分だけなのかもしれない。もしかしたら、隊商側の人間で意識があるのはもう自分だけなのかもしれない。

とりあえず、自分達の隊商を襲ったというのは、この二人で間違いがなさそうだ。その割には、積み荷に手を付けようとする訳でもないのが不思議だが。

光流がそんなことを考えている間にも、不審な男女の場違いな会話は続いていた。

「へえ、そりゃ初耳だ。俺が知ってるのは、あんたの好みは腕の立つ、いい男だってことだけだぜ」

「じゃあ覚えておけ。私は年下は好みじゃない。特に、こんな十も下の男はな」

「そりゃ良かった。あんたが誰を好きになろうと別に構わないが、流石に友達の息子が口説かれるのは困るからな。本気だったらどうしようかと思ったぜ」

聞くとともに二人の会話を聞いていた光流は、その言葉に顔を上げた。今、何か聞き捨てならないことを聞いた気がする。

女の方も流石に目を見張っていた。

「なんだ、知り合いなのか？」

「ああ。……お前、光流だろ？ 親父にそっくりだ」

後半は光流に対する問いかけである。が、親しげに笑いかけられても、光流は答えるところではない。目の前が、ぐらぐらと揺れているようだった。

「……………ともだち？」

「ああ。友達って言うにはちと年が離れてたが、俺はお前の親父を友達だと思ってたし、向こうもそう思ってたはずだぜ。俺のこと、覚えてねえか？」

軽い調子で語られる男の言葉に、光流は冷や汗をかいていた。口の中がからからに乾いてくる。

沈黙を肯定と取ったのか、男はうーんと首を傾げた。

「小さい頃よく遊んでやってたんだけどな。まあ、最後に会ったのは六歳の時だったから、仕方ないと言やあ、仕方ないか。……そうだ、これ見てもわかんねえか？」

そう言って男が差し出したのは、二振りの妙に反りの深い、片刃の剣だった。鍔(つば)はなく、剣身が直接柄に繋がっている。その柄には、細やかな模様が彫り込まれた銀の装飾が施されていた。

その二振りの剣を見た瞬間、光流はこめかみに強烈な痛みを覚えた。周囲の音が遠ざかり、どくどくと、頭の中で脈打つ音が反響する。堪らなくなっって額を片手で押さえた。

知っている。自分は確かにこの剣を知っている。そして、これとほとんど同じ、唯一柄の装飾の色だけが違う、もう二振りの剣を。その剣を、まるで己の腕のように操っていた人を知って

いる。

思い出すな、と頭のどこかで声がした。世界がぐにやりと歪む。

「...い、おい、どうした？」

急速に暗くなっていく視界の中で、男が驚いたように近づいてくるのがかろうじて見えた。が、そこまでが限界だった。頭から真逆様に暗闇に落ちていくような錯覚と共に、光流の意識は途切れてしまう。自分の胸元に下がる首飾りを掴んだことすら、自覚していなかった。

夢を見た。

森の中で、二人の男が手合わせをしている。反りの深い剣を目にも留まらぬ速さで操りながら、お互い楽しそうに笑っていた。二人の男の内、片方はまだ少年のあどけなさが残る青年、もう片方はそれより十は年かきの成人男性だ。自分はいつも、邪魔にならない所で二人の手合わせを見ていた。流れるような動きで技を競い合う、二人の姿を見るのが好きだった。

あの人はどんな人だったろうか、と考えながら、光流はぼんやりと目を開けた。近くでぱちぱちと、火が燃える音がしている。誰かが焚き火をしているらしい。白い煙がゆらゆらと、木々の間から見える星空へと昇っていく。

「おう、気が付いたか？」

かけられた声にのろのろと顔を向けると、焚き火の向かい側に座った男と目が合った。ん、と首をかしげてみせるその表情が、夢に出てきた青年とよく似ている。

この男は誰だろうかと考えかけて、光流ははっとした。倒れる前の記憶が一気に蘇ってくる。彼は慌てて身を起こした。

辺りを見回してみると、そこは森の中だった。木々の間にぽっかりと空いた空間に、野営をしているらしい。日はとっくに落ちていて、光源となるものは焚き火の炎しかなかった。

そこまで確認して、光流は男の方に視線を戻した。自分が倒れたのは隊商がいた山道だ。それなのにこんな所にいるということは、気を失っている間にこの男に連れてこられたからに他ならない。なぜそんなことをしたのか、と思った。しかもこの男はどうやって判別したのか、ご丁寧に、隊商の馬車に積んであった光流の荷物まで持ってきているのだ。

すると、彼の疑念を感じ取ったのだろう。男はひょいと肩をすくめた。

「友達の息子が目の前で突然倒れたら、放っとく訳にはいかないだろ。あの女も反対しなかったしな」

「.....その人は、どうしたんですか？」

その場にひいろと呼ばれていた女性はいない。父の友人だと名乗った男と光流の二人きりだった。

「たぶん、そろそろ戻ってくるぜ。お前がいた隊商の所に行ってるからな」

「.....何をしに、ですか？」

ぐっと警戒を強めた光流に、男はにやりと笑ってみせる。

「心配すんな、ただの様子見だ。俺達は誰も殺しちゃいねえよ。だが、襲われた時に護衛士が消えたとあっちゃ、お前が疑われるからな。一応、気絶してる責任者っぽい奴に置手紙を握らせてきはしたが、何を言い出すかわかったもんじゃない。どうなってるか、あいつが様子を見に行ってくれてるんだ」

「.....ちなみに、その置手紙にはなんて？」

「『護衛士を一人頂いていく。決して本人の意思ではなく、我々が無理矢理黙らせ連行するので、本人を責めてくれるな』って書いていた。まあ、向こうの人間を全員気絶させてるのは事実だから、お前もそうだったんだと思ってくれるさ」

飄々(ひょうひょう)とそうのたまう男に、光流はあえて沈黙を返した。それは、かなり楽観的というか、希望的観測をし過ぎではないだろうか。とりあえず、自分はかなり危うい立場にいるようだ。護衛士の仕事は評判が良くなければ入ってこない。山賊の仲間だなどという噂を立てば最悪だ。ちゃんと次の仕事が見つかるだろうか。

そう考えているのが顔に出たのか、黙りこくっている光流の顔を面白そうに眺めていた男が、付け足すように言った。

「あ、それから、俺達は山賊じゃないからな」

「……じゃ、いったい何なんですか？」

「盗賊だよ」

あっさり返ってきたその返事に、光流は脱力しそうになった。

「……何が違うんですか」

「全然違うだろうが。山賊は山の中でしか働かないから、山賊っていうんだ。それに盗賊は盗賊でも、俺達は合法的な盗賊なんだぜ」

いったい何をどうしたら、盗賊が合法的な職業になるのだろう、と光流が眉を寄せていると、男はふいに顔を森に向けた。

「ああ、帰ってきたな」

その言葉につられて、光流も男が見ている方向に目を向ける。足音も聞こえなかったが、すぐに木々の間の暗闇から女が姿を現した。暗い所にいたせいか、焚き火の炎を眩しそうに見る彼女に、男が声をかける。

「おかえり。どうだった？」

「ただいま。隊商側の奴らがちょっとあれこれ言ってたけどな、本店の方にちゃんと言ってきたから問題ない。念のために明日根回しに行くが、護衛士達は揃って、光流がそんなことする訳ないって主張してたから、噂の方も大丈夫だろう」

女はそう言うが、何が大丈夫なのか、光流にはいまいちわからない。しかし男はそれを聞くと、軽く頷いて微笑んだ。

「そうか。ありがとな」

「別に、たいしたことじゃないさ。……ああ、目が覚めたのか」

女はそこで初めて、光流が起きていることに気が付いたらしい。大丈夫かと尋ねられて、彼は黙って頷いた。倒れはしたものの、身体に異常がある訳ではないのだ。

そう告げると、女はそうか、と小さく笑った。そうして焚き火の傍まで来ると、男の隣にすくと腰を落とす。それから、ふと思い出したように光流に顔を向けた。

「そういえば、まだ自己紹介してなかったな。私はすみれ、この男、ぐんじょうの妻だ」

「……………つま？」

思わず聞き返してしまった光流である。妻ということは、目の前の男女は夫婦ということになる。だがその言葉は、この二人が昼間交わしていた会話とあまりにもかけ離れている気がした。光流が確認するように男に視線を向けると、男の方も平然と頷き返す。

「こいつは俺の女房だよ。ちなみに俺の名前は隼人(はやと)だ」

そう言ってから、彼は妻の方を向いて真顔で注意した。

「でもな、ひいろ。そう言う時は、ちゃんと本名で自分の亭主を呼ぶもんだぜ？」

「よく言う。自分だって一度も呼んだことがない癖に」

「当たり前だ。すみれなんて儂げで可愛らしい、楚々(そそ)とした名前、似合わなさ過ぎて呼ぶ気になれるか。そんだけ赤い髪にその気性なんだから、あんたは緋色で十分だ」

「だったらお前だってその青い髪なんだから、群青でいいだろう。隼人なんて普通な名前、似合っていないのはそっちの方だ」

そんなことを言って、二人は睨み合う。

光流は突如として勃発した言い争いに啞然としていたが、ふいに妙な既視感を感じて吹き出した。突然笑い出した彼に、果てしなく続きそうだった痴話喧嘩が止まる。

「なんだ？」

すみれに不思議そうに尋ねられて、光流は慌ててすみませんと謝った。

「なんか、似てると思ったら、つい……」

「誰に？」

「……俺と、俺の幼馴染に」

「それは女の子か？」

「はい」

答えながら、光流は小さく苦笑した。

自分達もお互い愛称で呼び合っていた。よくどうでもいいことで口論して、でも心のどこかでそれを楽しんでいた。それは傍から見たらこんな感じだったのか、と思ったのだ。

そう言うと、すみれは驚いたように目を瞬かせる。

「それで、ただの幼馴染だったのか？」

光流はさらに苦笑した。それは彼女と一緒にいた頃にもよく言われた言葉だ。

それにはそれで色々事情があるのだが、さてどう説明しようか、と光流は首をひねる。すると、隼人がくつつつと笑いながら、すみれの頭をぽんと叩いた。

「率直なのはあんたの良いところだが、初対面であんまり野暮なことを聞くなよ。やっと警戒心を解いてくれたところなんだからな」

彼の言葉に、光流は初めてその事実気が付いた。いつのまにか、この二人を警戒する気が失せてしまっている。二人の勢いにすっかり吞まれてしまっていたせいでもあるが、いくらなんでも早すぎだろう、と彼は自身を叱責した。こんなにほのぼのしていても、片割れが父の友人でも、相手は一応、隊商を襲った敵なのだ。

が、その敵であるはずのすみれは、夫の言葉に素直に頷いている。

「それもそうだな。悪かった」

光流に対して律儀に謝ってから、彼女はもう一度隼人の方を向いた。

「ってことは、まだ思い出してもらってないのか？」

「ああ。俺の名前を聞いても、全くの無反応だしな」

「あ、いや、それは……」

思わず声を上げてから、光流は口ごもった。思い出したくても思い出せない理由を言うべきか迷ったが、仕方ないと覚悟を決める。父の友人が相手ではとても話しにくいだが、話さなければいけないことでもあるのだ。

「実は、……俺、七歳から前の記憶が一切ないんです」

普通はこう言うと、大抵の人間は啞然とした後、ひどく気まずそうな顔をする。だが、この二人はちょっと違った。

すみれは軽く目を見開きはしたものの、すぐに納得したように頷く。

「記憶喪失か。なるほど、それで最後に会ったのが六歳じゃあ、覚えてる訳がないな」

それに対して、隼人の方は何やら難しい顔をしている。少しの間、黙って光流の顔を凝視していたが、やがて諦めたように溜息をついた。

「……なら、お前は自分の親父のことも覚えてないんだな？」

それはすでに、問いかけではなく確認の口調だった。その言葉に、すみれが驚いたように夫を振り返る。

「群青？」

その問いかけには答えず、隼人は真っ直ぐ光流を見つめている。その視線を受けて、光流はほろ苦い笑みを浮かべた。やっぱり、この人は知っているのだ。

「はい」

頷くと、隼人は額に手を当て、もう一度大きく溜息をついた。それから頭をがしがしと搔き、自分の顔を見つめている妻に顔を向ける。

「……昴(すばる)は、光流の親父は、十一年前に死んだはずなんだ。あいつが所属していた組織の、過激派の連中に無理矢理、謀反の刺客として向かわされたとかでな」

感情の見えない、淡々とした声音だった。すみれはそれに、静かに問い返す。

「謀反ということは、その組織の親玉に剣を向けたのか？」

「いや。……その方がまだまじだったかもな。少なくとも、それならあいつは絶対に死んだりしなかった。あの組織に、あいつに敵う使い手なんていなかったからな。剣を向けた相手は、この国の王だ。そこで、王の護衛と相打ちになっただけ」

あいつと互角に戦えるなんて、流石に王様の部下には優秀な奴がいるもんだと思ったよ。

隼人はそう言って肩をすくめた。そしてすみれから視線を外すと、今度は光流に目を向ける。「当時七歳だった息子はその時、その過激派に人質として捕まっていた、昴が死んだって報告が入った途端に海に落とされて殺された、って聞いてたが。どうやら、命は取り留めてたみたいだな」

穏やかにそう言われて、光流は思わずうつむいた。

「……その代わり、それまでのことは全部忘れてしまいました。俺が覚えてるのは、砂浜に倒れてたっていうことだけなんです。何かを思い出そうになると、すぐに頭痛がして、何も考えられなくなってしまって……。その話も、ついこの間、初めて知りました」

知ってるだけで、全然思い出せないんですけどね、と溜息をつくように言って、光流は顔を上げた。

「……にしても、ずいぶん詳しいですね？」

そう問いかけると、隼人はにやっと、いたずらっぽく笑った。

「おう。裏社会の情報網をなめるなよ」

だがそのすぐ後に、けどな、と険しい目付きになる。

「その頃の俺は、まだそっちの世界に片足を突っ込み始めたばかりの、ほんの若造だったからな。いきなり消えた友達を探す手立ても見つけれねえで、たったこれだけの情報を集めるのに一年近くかかっちゃった」

眉を寄せて呟くように喋る隼人の顔を、光流は黙って見つめた。裏社会のことはよく知らないが、入った直後の一年やそこらで欲しい情報を全て集め切ることは、決して簡単ではないはずだ。この人にとって、自分の父親はそれだけ大事な存在だったのだと思うと、どんな言葉を返せばいいのかわからなかった。

すると、それまでずっと二人の会話に耳を傾けていたすみれが口を開いた。

「じゃあ、光流はそれからずっと王軍にいたのか？」

「え……？」

突然の問いに、光流は言葉を失った。今まで一度も、自分は軍という言葉を使っていない。それなのに、いきなり王軍にいたと断定されてしまった。これは驚くなと言う方が無理だろう。

しかし、すみれはむしろ不思議そうに首を傾げる。

「王軍にいたろう？ それも、かなり長い間。だったらその軍の人間に拾われたんだろう、と思ったんだが。違うのか？」

「いや、それは、そうなんですけど……」

言葉に詰まってしまった光流に、隼人が苦笑しながら助け船を出してくれた。

「緋色、光流が言ってるのは、なんで王軍にいたことを知ってるのか、ってことだ。ちなみに俺も聞きたいな。なんで知ってるんだ？」

その問いに、すみれはああ、と頷いた。

「知ってたんじゃない、わかったんだ。光流の剣筋は、やけに無駄がなくて綺麗だったからな。どう考えたってそこら辺で剣術を習ったり、ましてや喧嘩で強くなったりして身に付くようなものじゃない。あれは型をきちんと身に付けた上で、経験を積んだ人間にしか描けない筋だ。そこまでちゃんと型をやりこませるような場所は、王様直属の王軍位しかないだろう、と思ったんだ」

地方の軍は実践力第一で、訓練中も型にはそれほどこだわらないからな。

事もなげにそう言い切ったすみれを、光流は啞然として見つめた。彼女の隣では隼人が感心したように腕を組んでいる。

「相変わらず、なんでそんなことって言いたくなるようなことを知ってるな。いったいあんた、俺と会う前は何をしてたんだ？」

「別に、そんな大したことはしてないぞ？ ただ、地方軍も王軍も、訓練を一回覗かせてもらったことがあるだけだ」

「……だから、いったい何をどうしたら、一般には絶対非公開の訓練を覗く機会ができるんだよ」

ほとんど呆れたように首を振る隼人に、光流も大賛成だった。が、すみれはそれには答えずに、ちょっと微笑んで話題を変える。

「それよりも、そろそろ寝た方がいいんじゃないか？ 月が、もうずいぶん傾いてるぞ」

彼女の言葉に、隼人は追及を諦めたようだ。はあ、と溜息をつくとき、光流に目を向けた。

「そうだな。じゃあ光流、明日は色々話してもらおうから、覚悟しとけよ」

「は？」

思わず問い返すと、彼は楽しそうに微笑んだ。

「ずっと死んだもんだと思ってた友達の息子が、実は生きてたんだ。どんな風に育ってきたのか、大いに気になるじゃねえか。特に、その幼馴染の彼女のこととかな」

光流がうっと言葉に詰まると、隼人はにやにやしながら続けた。

「じっくり聞いてやるから、隠すんじゃねえぞ？ お前が気になってる、合法的な盗賊ってのがどういうことなのかも、ちゃんと教えてやるからさ」

「じゃあお前、その年で王の近衛軍の副隊長だったのか？」

箸を口に運ぶ手を止めて、隼人が目を丸くする。光流はそれに黙然と頷いた。

彼らが今いるのは、町中の小さな屋台だ。屋台の店主がもくもくと料理を作っている目の前に並んで腰かけ、その店自慢の汁そばを食べているところである。

ちなみに、すみれの姿はない。光流が朝起きた時にはもう、一人先に出立していた。光流が起きのを待っていたらしい隼人によると、昨夜言っていた根回しとやらをしに行ったらしい。

「王軍はもともと実力主義で、腕の立つ順で隊が別れてる位なんですけど、まあ、その筆頭とも言うべきがうちの隊長で……。実力は十分なんだから構わないだろう、後進を育てることも重要だ、とか言って、上にかけてあったらしいんです。その代わり、通常は一人しかいない副隊長の任を、俺と六(りっ)花(か)の二人にやらせるからって。俺達だって、あの人に就任式でいきなり指名されて、啞然としましたよ。辞退を申し出ても、もう決まったことだからって取り合ってくれないし」

我が育ての親ながら、流石にあの時は正気を疑いました。

その時のことを思い出しながら、光流が半目になってそうぼやくと、隼人は面白そうに唇を吊り上げた。

「……つまり、お前もお前の幼馴染の六花ちゃんも、軍の中で一位二位を争う実力者だったってことか。その話ぶりじゃ、自分の養い子だからって鼻屑(ひいき)するような人じゃなさそうだしな」

光流は頷いて、溜息をついた。鼻屑をするどころか、五年前に最年少で軍に入った自分達に一番厳しくあたったのが隊長だった。周りの兵士達が、まだ子供なんだからと言うことすら許さなかったのだ。軍に入って剣を振るう以上、年齢に関係なく大人と同じ扱いをするべきだというのが彼の主張だったし、光流も六花もそれを当然と受け止めていた。そして、軍に入るずっと前から隊長に剣の使い方を教わっていた彼らは、他の兵士達の実力をすぐに追い抜いたのだ。

「なるほどな。道理であの女がいい男だと断言する訳だ。剣を持ったあいつが手加減できない男なんて、滅多にいないからな」

しみじみと言う隼人に、光流は苦笑した。この夫はどうやら、妻が見ず知らずの男を手放して褒め称えても口説いても、一向に気にならないらしい。それどころか、それを面白がっているような節がある。褒めるのはともかく、口説くのはどうかと思うのだが。

「すみれさん、本当に強いんですね。そんなに強い女性がいるとは思いませんでした」

光流がそう言うと、隼人は、六花ちゃんの他に、だろと冷やかした。

「まあな。あれでお嬢様だったっていうんだから、世の中絶対間違ってるよな」

いや、間違ってるのはあの女自身か。

そんな、とてもその夫とは思えないことを言う隼人を、光流はぽかんと見つめた。

「おじょう、さま？」

「ああ。あの女の実家はそれこそ、この国で一位二位を争う大商家でな。あいつはそこの長女なんだよ」

そう言って挙げられたその商家の名は、国内のあちこちに支店を持つ名門店だ。おそらくこの国の人間なら、誰もが知っているだろう。

今はあいつの兄貴が店を切り盛りしてるんだけどな、と隼人は続けた。

「最初に会った時、俺はただの泥棒だったんだが、驚きを通り越して呆れたね。なんでこんな女がこんな家にいるんだってな」

「……そもそも、どうしてそんな所のお嬢様とただの泥棒が出会ったりするんですか。貴方なら、盗みに入っても見つかったりしなさそうなのに」

光流の言葉に、隼人はなにやら深刻に頷いてる。

「そう、そう思うよな。だがな、答えは簡単だ。あの女が依頼人だったからさ」

「依頼人？」

「ああ。俺は昔から、盗むことそのものを面白がってはいたが、特に何かを欲しいと思ったことはなくてな。もっぱら人に頼まれて盗み出してくるのが仕事だったんだ。まあ、依頼してくるのは基本的に裏の人間ばかりだったけどな」

そりゃそうだろう、と光流は心の中で突っ込んだ。まっとうな人間は盗みを依頼したりなんかしない。

「でだ。ある時、匿名で依頼の手紙が舞い込んできたんだ。しかも変な内容でな。とりあえずこの商人の屋敷に來い、そこで落ち合って、指示したものを盗み出して欲しい、みたいなことが書いてあった。わざわざ標的の屋敷の中で落ち合うなんて妙な話だと思ったんだが、面白そうだったんでな。行ってみたら、あの女が待ってたんだ」

そこまで黙って聞いていた光流は首を傾げた。自分の家から、何を盗み出せというのだろう。すると隼人は、そんな彼を見てにやりと笑った。

「ますます変な話だろ？ 自分の家から盗み出せ、なんて。その家にいるんだから、欲しいものがあるなら自分で取ってくりゃいいのにな。でもな、確かにそれは、あいつ自身じゃできないことだった。盗み出すよう依頼されたのは、あの女自身だったんだ」

光流は思わず、飲んでいたお茶を吹き出しそうになった。けほけほと咳き込んでいる彼を無視して、隼人は続ける。

「その時あいつは、親に決められた結婚の一ヶ月前だった。花嫁修業とかで、一日中部屋に閉じ込められててな。家の中を移動するのも、必ず誰かが付き添って、自由に歩けない状態だった」

「.....それが嫌だから、連れ出してくれ、と？」

「いんや。だったら俺は引き受けたりなんかしなかった。第一、それだけならあいつは勝手に自分で逃げ出すさ。そうじゃなくて、泥棒の仕方を教えてくれって言うんだ。一ヶ月後に結婚する前に、この家の人間としてやっておかなきゃいけないことがあるからって。まったく、何の冗談だと思ったね」

「ていうかそれ、冗談以外の何物でもないじゃないですか.....」

どうして商家の人間としてやらなきゃいけないことが泥棒なんだ、と光流が頭を抱えると、隼人はまったくだ、と頷いた。

「それを冗談じゃなくて本気で言ってるところが、ある意味、あの女のすごいところなんだが。あいつが言うには、だ。あの位の規模の商家になると、部下が多すぎて、ちゃんと目が行き届かないのが一番の悩み所らしい。本店にいる連中はともかく、支店の連中となると、どんなにしつけても、裏で何かやる奴が必ず出てくるんだってな。そんなにしょっちゅう視察に行く訳にもいかないし、だからといって報告される帳簿の中に、怪しい数字があるのを見過ごす訳にもいかない。だが、確たる証拠もないのに下手に問い詰めたら、今度はそれが噂となって流れちまう。あそこの店は、証拠もないのに従業員を疑うような店なんだって、非難されるそうだ。だからその証拠を探すために、各支店に泥棒に入りたいって言うんだ。なんでも、その時期に妙な帳簿が続出してたらしくてな。これ以上、親が困るのを黙って見ているのは嫌、でも人任せにするのも嫌だから、自分でやりたいんだとのたまいやがった」

とんでもねえ話だよな、と彼は笑う。

「俺が、泥棒に入ったって家探しなんかできねえぞって言ったら、そんなのわかってる、ときやがる。泥棒に入られたってことが、本店の人間が家探しする理由になるから、それでいいんだと

。適当に店を荒らして、一番盗りにくい物、つまりその店の中で一番高価な物だけを盗めば、被害を確認するために本店の人間を派遣できるんだってな。その時に証拠が見つければよし、見つからなければ、それで終わりでもいい。だから自分をここから盗み出して、弟子にしてくれって頼まれた。一ヶ月後にはちゃんと戻ってきて、親の言う相手と結婚しなきゃいけないから、できるだけ手早く教えてくれとさ。その心意気は評価してもいいと思ったから、俺は手を貸すことにしたんだ」

随分と無茶苦茶な話だ。冷静にそう判断した光流を尻目に、でもなあ、と隼人は首を振った。「そうは言ったって、たった一ヶ月で、あちこちに散らばってる支店全部に入らなきゃいけないってんだから、事細かに教えてる暇なんてある訳がない。しょうがないから俺はあいつと一緒に、標的の店に次々と入り込んだのさ。誤算だったのは、あの女は思ったよりずっと、泥棒に向いてたってことだな」

「そりゃ、音も立てずにあれだけ素早く動けるんなら、向いてるんでしょね」

そう呟いた光流に頷いて、しかもだ、と隼人は続ける。

「剣も相当使えるからな。もし見つかったら、相手がちゃんとこっちを確認する前に、殺さずに気絶させることもできるときだ。つくづく、とんでもない女だと思ったよ。このままどっかの嫁として静かに暮らすだなんて、もったいないと思う位にな。それでも、あいつが決めたことなんだから、俺には口出すつもりなんか毛頭なかったんだが。あんなこと言うから予定が狂っちゃった」

「あんなこと？」

「楽しい夢を見させてくれて、ありがとう。明日は家に戻るっていう日の夜にそう言ったのさ。それだけなら別に良かったんだが、その後で、でも夢は覚めるものだからな、って小さく呟いたのが聞こえたんだ」

あいつは聞かせるつもりなんかなかったんだらうけど、それがいやに沈んだ声に聞こえてな。

隼人はそう言って前髪を掻き揚げた。

「あそこでそれに気付いってしまったのが運の尽きだな。別れた後もなんとなく気になって、その結婚式の日の朝に、屋敷に行ってみたんだ。もちろん見つからないようにな。それで初めてあいつの許婚(いいなずけ)を見た瞬間に、こりゃ駄目だと思ったね」

「駄目って……」

目を見開く光流に、隼人は肩をすくめてみせた。

「どう見ても良いとこのぼんぼんって感じなんだ、これが。あの女を生粋のお嬢様だと信じ込んでいるのさ。どこに目を付けてるんだと思ったら、周りの連中も皆その調子だ。あの女は自分の本当の性格も剣の実力も家族以外の連中には隠して、ずっとその名の通り、董(すみれ)みたいなお嬢様として振る舞ってたらしい。しかも、一人でいるところを見計らって会いに行ったら、もう二度と剣を持たないって言い放ちやがった。一生、夫を陰から支えて、慎ましやかに生きる。大商家の娘は本来そういうものだから、自分はこの家に生まれてしまったんだから、とさ」

冗談じゃねえよ、と呟く隼人の目が心なしか据わっている。

「どんな人生を選ぼうが、それはあの女の自由だ。でもな、あの時のあいつには選択の余地なんかなかった。自分の力で道を切り開くことすら、最初から諦めていた。その結果が、あいつらしく生きられないことだなんて、馬鹿馬鹿しいにも程がある。そう思ったから、俺はあいつを盗むことにしたんだ」

「……………それは、駆け落ちって言うんじゃない……？」

しかも結婚式の当日にだ。

「言うだろうな」

あっさり頷いて、隼人は腕を組む。

「別に、俺はあいつが欲しかった訳じゃない。ただ、どう考えたって誰かの物になっていいような女じゃないのに、あんな坊やの所有物にされちゃうのが許せなかっただけだ。それでも、初めて自分から盗み出したと思った相手だからな。盗んだからには責任取るしかないだろうと思って結婚した。ちゃんと、あいつの親の許可は取ったけどな」

それで許可を出す親の顔を見てみたい、と光流は痛切に思った。

「よく、許可が取れましたね……」

「あの親にしてあの娘あり、ってことだ。これから先、あの一カ月間みたいに、時々支店に泥棒に入ってくれっていう条件付きだけどな。どうやらあの一カ月で、金を着服してた奴らを一扫できたらしい。で、あの女と一緒に、そこが怪しいって支店や隊商に襲うようになったら、どっから聞きつけたのか、他の商店からも依頼が来るようになってな。持ち主に頼まれるんだから違法にならない、合法的な盗賊の出来上がりって訳だ」

わかったか？ と尋ねられて、光流は力なく頷いた。あり得なさ過ぎて突っ込む気にもなれないが、この夫婦に限っては真実なのだろう。

「……凄まじい馴れ初めですね」

光流が額を抑えてそう呟くと、隼人は俺もそう思う、と苦笑した。

「まあ、俺達にはそれ位が調度良いんだろうよ。……で、お前は？」

「はい？」

光流が顔を上げると、隼人は呆れたように眉を吊り上げてみせる。

「はい、じゃねえよ。六花ちゃんの話、まだ聞いてねえぞ。どんな子なんだ？」

「どんなって言われても……」

光流はしばらく目を泳がせていたが、やがてはあっと溜息をついた。

「……十一年間、ずっと一緒に暮らして、隊長に育てられた幼馴染です。歳は俺の一つ下で、剣の腕は俺と同じ位で、まあ、それなりに美人ですね。男勝りで、よく無茶をして、俺のことはよく気が付く癖に自分のことには無頓着で、しょっちゅう泣くのを我慢して、俺が泣けて言わなきゃ泣けなくて、……どうしようもない位お人好しです」

「お前、さり気なく惚気(のろけ)てないか？」

隼人の突っ込みに、惚気たのはそっちでしょうと切り返す。

「俺のは単なる事実です。……両親の敵(かたき)の息子に、それがどうした、そんなことより十一年間ずっと一緒にいてくれたことの方が大事だ、なんて言う位のお人好しですよ」

光流がそう言うと、隼人の顔色が変わった。数回瞬きを繰り返した後、なるほどな、と溜息をつく。

「そりゃ、相当のお人好しだ。ってことはその子の両親が、あの時の王の護衛だったのか。……お前がそれを知ったのはつい最近だと言ったな？」

「……去年の大晦日だから、ちょうど三ヶ月前ですね。俺と六花が主上といた時に、例の組織から十一年ぶりに刺客が来たんです。そいつが言い残していきましたよ。……俺が覚えてなくても、その話は嘘じゃないってわかるような状況で」

嘘だったらよかったですけどね、と呟いた光流は、いきなり隼人に頭をかいぐり回された。

「ちょっ、何するんですか！」

「いや、なんとなく。で？ お前はなんで出てきたんだ？ 副隊長の任務を放り出して、そこまで言ってくれた六花ちゃんを置いてまでして」

隼人は卓上に頬杖をついて、器用に首を傾げる。それを横目で見ながら、光流は視線を落とした。

「記憶を、昔のことを思い出すための手がかりを、探しに来たんです。十一年前を覚えてるあいつと、覚えてない俺じゃ、負うものが違いすぎるから。ちゃんと思い出して向き合わなきゃ、俺はあいつに甘えるだけになると、思ったんです」

ふーん、と隼人が相槌を打った。

「ま、事実だわな。……ああ、だから護衛士してたのか？ あれなら隊商に付いて、あちこち回れるからな」

「ええ。そのうちに、何か手がかりが見つからないかと思ったんですけど……」

光流の言葉に、隼人はふんふんと頷く。

「で？ 三ヶ月旅をして、何か思い出したのか？」

「……昨日、貴方の剣を見た後に夢を見ました。たぶん、父と貴方が、森の中で手合わせしているところの」

そう言うと、隼人はそれはそれは嬉しそうに笑った。

「上出来だ。そういうのはちょっと思い出すと、後は芋づる式に出てくることが多いからな。…
…にしてもお前、愛されてるな」

「へ？」

唐突な言葉に光流はきょとんとした。その彼の胸元に下がる首飾りを、隼人は指差す。

「それ、六花ちゃんからもらったんだろ？ お前、昨日気を失ってる間中、ずっとそれ握って、時々うわごとと言ってたぞ。雪って六花ちゃんのことだろ？ なんて言って渡されたんだ？」

光流は沈黙を返した。そんな彼を、隼人はにやにやと笑いながら眺めている。そこへ、突然前方からしわがれた声がかかった。

「夢守(ゆめもり)のまじないだな」

屋台の店主である。光流はぎょっとした。そういえば、どんなに声を潜めてもこの距離では会話が筒抜けになってしまうのだ。すっかり失念していた。が、隼人は動じることなく、逆に聞き返している。

「夢守？ それって、恋人を悪夢から守るとかいう、あの古いまじないか？」

「ああ。昔、それと同じ首飾りを下げてる娘に会ったことがある。その子は自分も恋人も兵士で、離れ離れになることが多いから、自分の想いを首飾りに託して、相手に持たせてるんだって言ってたな。もう、二十年位前の話だ」

「……それ、たぶん、あいつの母親です」

もうどうにでもなれ、という気分で光流がうめくように言うと、隼人はへえ、と声を上げた。

「いつ戻るかもわからない男に、親の形見をやったのか。ただの幼馴染に対してすることじゃないな」

「……いえ、借りてるだけです。ちゃんと返せって言われました」

そう言った途端、隼人がぽかんと口を開けた。一拍置いて盛大に吹き出す。

「それ、絶対に帰ってこい、ってことじゃねえか。お前、本っ当に愛されてるんだな」

そう言ってひとしきり笑った後、隼人は楽しそうに付け足した。

「じゃあ、とっとと思い出して、さっさと彼女の所に戻らなきゃな。女にそこまでさせて帰らなかったら、男がすたるぜ？」

彼の言葉に、料理を作りながら店主が含み笑いをした。

「それに関しては、てめえも人のこと言えないだろうが。嬢にあんな啖呵(たんか)を切らせたんだ

からな」

光流が驚いて店主の顔を見ると、店主は自分の手元を見つめたまま続けた。

「この男が嬢を嫁にするって連れてきた時だ。俺がこいつに、本当に幸せにできるのかって聞いたら、嬢がその必要はないって言い切ったんだ。そんなことをしてもらわなくても、私はこの男の傍にいられば勝手に幸せになれるからってな。聞いたら、自分の親にも同じことを言って結婚の許可をもらったって言うじゃないか。あんな見事な啖呵、そうそうお目にかかれるもんじゃない」

「……わかってるさ。だからちゃんと一緒になったじゃねえか。けど俺だって、まさかあんなことを、胸を張って言われるとは思ってもみなかったんだ」

惚れられてるのは知ってたけどな。

平然とそうのたまってから、隼人は目の前にいる店主を指差して、光流に言った。

「言い忘れてたが、俺の親父だ」

絶句している光流に、店主はにやりと笑いかける。顔は全然似てないのに、そうやって笑うと確かに親子だった。

「で、親父。うちの女房がどこにいるか知ってるか？ あいつ、宿は町に着いてから決めるから、ここに言付けてくって言ってたんだが」

「ああ、山羊亭だ。その坊主の分の部屋も取っておくって言ってたな」

「……あいつ、本当に好きだな」

隼人はそう呟くと、一人意味のわかっていない光流に説明してくれた。

「山羊亭っていうのはその通りを真っ直ぐ行った所にある宿だ。山羊をいっぱい飼ってるから、まんま山羊亭。あの女はなんでか、山羊が好きなんだと。おかげでこの町に来ると、いつもあの宿に泊まる羽目になる。わざわざ町に着いてから決めるって言うから、今日は違う宿にするのかと期待したんだがな」

俺は山羊乳はあんまり好きじゃないだが、とぼやく彼に、父親の声がかかる。

「惚れた弱みだ、諦めろ」

「先に惚れたのは向こうだぜ」

隼人はそう言って立ち上がった。彼に促されて、光流も立ち上がる。

「じゃあな、親父」

「ああ。次は孫の顔を見せてくれると嬉しいんだが」

「子連れで盗賊はできねえよ」

そう笑いながら屋台を出る隼人に続いて、店主に会釈しながら光流も屋台を出る。その途端、目の前にいた隼人にぶつかりそうになった。

「わ！ 急に立ち止まらないでください！」

そう抗議すると、隼人は笑いながら目を細めた。

「気付かないお前が悪い。にしても光流、お前、でかくなっただな」

「……そう言う隼人さんの方が、俺より背高いじゃないですか」

「まあな。けど、六歳の時に比べたら断然でかいからな。名付け親としては嬉しい限りだ」

黙って見返せば、たった一日で見慣れてしまった、にやりとした笑顔がそこにある。

「父親が昴なんだから、その息子は流れ星。でも流星じゃ呼びにくいから、流れる光で光流。そう名付けたのは、何を隠そう、十二歳だったこの俺だ」

「……本当に流れ星だったんですか」

光流が思わずそう言うと、彼の名付け親は不思議そうな顔をした。

「あいつが、小さい時に俺は流れ星だって言ったんです。だから、願い事を叶えてくれって……」

「へえ、六花ちゃん、いい感性してるな。今度ちゃんと紹介しろよ。お前が彼女の所に帰ったら、遊びに行ってみようから」

歩き始めながらそう言う隼人に、光流は軽い頭痛を覚えた。

「……本気で言ってるんですか？」

「当たり前だ。そうだ。なんだったら、お前らに子供の名付け親になってもらおうか」

「……子連れで盗賊はできないんじゃないんですか？」

「あいつの実家に預けるなり、やり方は色々あるさ。嫌なら別にいいが」

「……………考えておきます」

そう返事をする、隼人は満足そうに微笑んだ。光流はその笑みを見て、敵わないなと溜息をつく。

彼にそう思わせたのは、覚えてる限りでは人生で三人目だ。出会ったばかりのこの名付け親の他に、厳しいながらも優しく見守ってくれた育ての親と、置いてきてしまった誰よりも大切な幼馴染。

そしてもし、全てを思い出すことができたなら、おそらくそこにもう一人加わるだろう。あの人もきっと、自分にそう思わせる人だった。なんとなく、そんな気がした。

失くした記憶を取り戻そうとする度に襲ってきた頭痛は、今はもう感じない。

そう告げたら、目の前を歩く青髪の男はよしよし、と頷いた。

「そりゃきっと、ほんの少しでも思い出せたからだ。……どんなに辛くても、思い出したくないことでも、忘れちゃいけない、忘れることなんてできないものが、誰にだってあるからな」

それがあるから、人生は面白いんだろうよ。

どんなことでも面白がりそうな男を見やっ、光流は疑わしげに問いかけた。

「隼人さんにも、そんなことがあるんですか？」

「当たり前だろう。お前よりずっと長く生きてるんだからな」

そう言うものの、それが何なのかを教えるつもりはないようだ。

隼人は宿に着いても表から入らず、裏手へ回る。すたすたと歩くその後ろに付いていっていると、ふいにその背中が止まった。

「ったく……」

前方から聞こえた、それまでとは打って変わった優しい声音に、光流ははっと息を呑む。そっと前を覗き込んでみると、少し離れた所に山羊と戯れている真紅の髪の女性がいた。

隼人はまたすたすたと歩き出すと、彼女に近付いて声をかける。

「根回しは終わったんだろうな、緋色」

「誰に向かって物を言っている、群青」

そう切り返すすみれは、少しだけ眩しそうに顔を上げた。

「もちろん、俺の女房にだ」

隼人はそう不敵に笑うと、片手を差し出す。

その様子を離れた所で眺めていた光流は、首飾りをもてあそびながら空を仰いだ。目を閉じれば、鮮やかに思い浮かぶ人がいる。

雪に会いたいな、とぼんやりと思った。

髪をここまで切ってほしい、と頼んだら、親友は絶句してしまった。

いくら何でも短すぎると反対する彼女に、軍の仕事をするには邪魔なんだ、と言いつくをする。

「でも、今までずっと、肩より下までは伸ばしてたじゃない」

「今まではな。けど、もう邪魔なんだ。自分で結うのは面倒だし、あんまり上手くできないし」

「.....貴女、その理由は女の子としてどうかと思うわよ」

「仕方ないだろう？」

そう言って笑ってみせると、親友はあきらめたように深々と溜息をついた。

そう、仕方ないのだ。

今までずっと結ってくれていた彼は、もういないのだから。

* * *

かんかん、と木槌を打つ音があちこちから響いている。

「六花(りっか)、そっちの天幕張るの手伝ってやれ。あいつらだけでやってたら、日が暮れちゃう」

「はい」

隊長の言葉に苦笑しながらも頷いて、自分の天幕を張り終えた六花は隣の天幕へ、正確には天幕を張ろうとして悪戦苦闘している仲間達の元へと向かった。

今彼女達がいるのは、人里離れた森の中だ。六花の属する王軍第一隊は、野営訓練という名目で本拠地である城下町を離れて、この地に遠征に来ていた。

「大丈夫か？」

声をかけると、何故か天幕を裏返しに張ろうとして失敗していた彼らはぱっと顔を上げた。

「ふ、副隊長。.....すいません全然大丈夫じゃありません」

「だろうな。裏返しじゃ張れる訳がない」

溜息をつきながら六花がそう言うと、彼らはぼかんと口を開けた。そしてぎょっとしたように自分達の手元を見下ろし、慌てて直し始める。どうやら、裏返しだということに気付いてすらいなかったらしい。

「まったく何やってんだお前ら。六花よりもずっと長いこと軍にいるくせに」

六花のすぐ後ろに来ていた隊長が、あきれたように声を上げる。実力だけじゃなく、こんなところでも負けてどうするんだと額に手を当てている彼に、六花は曖昧に笑って応えた。

今年十八歳になった六花は軍に入ってまだ六年目だ。だが、軍に入るずっと前から毎日剣の鍛錬を積んでいたこともあり、入隊してたった一年で、彼女は王軍の精鋭部隊である第一軍に配属された。そしてさらに二年後には、史上最年少の副隊長に任命されている。実力だけなら、軍の中で彼女と張り合える者はこの隊長とあと一人しかいない。

いや、あと一人いた、と言うべきだろう。六花と同じく副隊長の任を負っていたその青年が軍を出て行って、もう一年になる。

あいつは今どこにいるんだろうな、と六花が遠い目をした時、くしくも天幕を張り直していた一人が同じことを言った。

「俺達が史上最年少の副隊長達に敵う訳ないじゃないですか。特に今、武者修行に出てる光流(み

つる)さんなんか帰ってきたらどれだけ強くなってるか、考えたくもないですよ。あの人、今どこにいるんですか？」

そう言って彼は六花に顔を向けてきたが、彼女にはさあ、と首をひねることしかできない。

「連絡一つよこさないからな。私にはわからない」

「え、知らないんですか!？」

そう驚きの声を上げたのは、同じ天幕を張っていた勇也である。彼は六花と同じ十八歳で、隊の中でも三人しかいない同年代として、六花や光流と仲が良かった。

声に出したのは彼一人だが、周りの者達も皆一様に作業の手を止めて、啞然としている。どうやら六花の返答がよほど意外だったらしい。

「じゃ、じゃあ、隊長は？ 隊長も知らないんですか？」

「ああ、知らないな。そもそも、本当に強くなったと実感できるまで帰ってくるなって言ったのは俺だからな。あいつのことだ、生真面目にそれを守ってるんだろよ」

平然とそうのたまう隊長に、勇也が不安そうな目を向ける。

「でも、それじゃあ、生きてるかどうかもわからないんじゃ……？」

旅をしていれば、山賊に襲われる可能性も何かの事件に巻き込まれる可能性も高くなる。どんなに実力があっても、多勢に無勢でどうしようもないという場合もあるだろう。それを心配しての言葉だったのだろうが、口にしてから勇也はざっと青ざめた。そんな彼に苦笑して、隊長は六花を振り向く。

「勇也はこう言ってるが、お前は光流が生きてると思うか？」

「……連絡がないって言ってるのに、なんでそれを私に聞くんですか」

「そりゃお前、連絡なんかなくても、お前にはわかるだろうと思うからさ。一つ違いの幼馴染同士、お互いに関する勘は百発百中なんだろ」

お前達二人を育ててきたこの俺が、そんなことも知らないと思うなよ。

育ての親ににやりと笑いかけられて、六花ははあ、と溜息をついた。そうして、どこかすがるような目をしている仲間達に肩をすくめてみせる。

「少なくとも、私は生きてると思う。三ヵ月位前に一度、何かあったみたいだったけど、命に別状はないはずだ」

「な、何かって……？」

「流石にそこまではわからないな。ただ、なんとなくそんな気がした」

「でも、生きてるんですよね？」

「私の勘が正しければな」

六花のその言葉に、隊員達はほっと息をついた。その様子を横目で見ながら、隊長がくつくと笑う。

「まったく、勘だけでそこまで言えるんだからな。たいしたもんだ」

そう言って、いつの間にか周りに集まってきていた隊員達に、作業に戻るよう指示を出す。そして彼らが再び天幕にとりかかったのを確認すると、隊長はちょいちょいと指を動かして、六花を招き寄せた。六花が近づいていくと、低い小聲でそっとささやかれる。

「六花、気付いてるか？」

何のことは聞かなくてもわかった。

「ええ。……見られてますね」

「ああ。今のところは、何かを仕掛けてきはしないだろうがな」

平静を装いながらそう言う隊長に、六花は小さく頷いた。

野営地から少し離れた所に、こちらをうかがっている気配がある。上手く気配を殺しているので隊員達の半数以上は気付いていないだろうが、勘の良い者なら気付いているはずだ。

ざっと周囲を見渡してそう判断すると、六花はかすかに眉を寄せた。

今回の遠征の名目は野営訓練である。が、実はそれは世間一般に対する建前で、本来の目的は王から直々に下った勅命にあるのだ。

曰く、「この一年間、日野神乃伝言者(ひのかみのでんごんしゃ)という宗教組織が謀反を企み、国王に対して何人が刺客を放ってさえいる。そこで、大事にならない内に日野神乃伝言者の宗主及び幹部を捕らえ、組織を解散させよ」と。

今までに放たれた刺客達は、すぐに退却した最初の一人以外、全て捕らえている。謀反の事実を知っているのは王本人とごく少数の重臣達、そして王の近衛軍でもある王軍第一隊の面々のみだ。公になっては政務に支障をきたし、民衆に動揺が広がる、と王が緘口令(かんこうれい)を敷いたからである。そしてそれ故に、できるだけ早急かつ隠密に対処しなければならなかった。

それでも最初の刺客が放たれてから一年もかかってしまったのは、日野神乃伝言者の本拠地の場所がわからなかったからだ。この宗教団体は名前だけは有名だが、その実態は謎に包まれている。捕らえられた刺客達は、自分達が所属する組織について、何一つとして口を割ろうとしなかった。

今回、その本拠地がこの森の奥にあるという情報がようやく手に入った。そこで事情を知り、なおかつ精鋭部隊である王軍第一隊に出動命令が下ったのだ。

が、いくら野営訓練を装っているといっても、当の日野神乃伝言者はこちらの本来の目的に気付いているだろう。視線の主はおそらく偵察だ。

これだけ気配を消すのが上手い連中ばかりだと厄介だな、と六花が考えていると、隊長がふいに呟いた。

「まあ、こんなにでかい捕りものは何十年振りかだからなあ」

「……はい？」

六花は思わず聞き返してしまった。いったい何に対しての感想なのか、まったくわからない。

しかし疑問符を浮かべている彼女の反応に、隊長は逆に驚いた顔をした。まじまじと六花の顔を見つめて、ああ、と納得したような声を出す。

「そうか、光流がないからか」

「……だから、あんまり話を飛躍させないでください」

唸るようにそう言った六花に、隊長は悪いな、と苦笑した。

「いや、いつもはあれだけで大抵通じるから、なんで通じないのかと思ってな。そういや、俺が話を飛躍させてお前がわからない時でも、光流には通じてたから解説しなくて済んだんだよな、と。逆に光流に通じてない時は、お前がわかってることが多かったし。……ほんっとに、うちの養い子達はでこぼこだよなあ」

「……なんですか、そのでこぼこって」

「一人ずつだと、できることとできないことに差があるが、二人揃うと補い合って、ほとんど完璧ってことだ」

「……つまり、二人そろって一人前って言いたいんですか？」

六花が額を押さえながらそう言うと、隊長はちょっと違う、と言って笑った。

「一人前とかそういう話じゃない。誰にだってできないことはあって当然だが、お前らの場合、見事にそれを補い合ってるからすごいよなってことだ。いくら幼馴染で十一年一緒に暮らしてたからって、普通そんなことにはならないだろ」

そこで言葉を切ると、隊長はすっと表情を引き締めた。

「でだ、俺がさっき言ったのはあいつらの様子のことだ。謀反人の捕り物なんてそうそうあることじゃないから仕方がないが、皆緊張しまくってるだろ」

そう言って彼は隊員達を指し示した。示されるままに彼らへと目をやった六花は、確かにと頷く。

普段の野営訓練では、いくらなんでも天幕を裏返しで張ろうとするなどという、初歩的な過ちを犯す者はいない。彼らは皆、軍の中で実力を認められたからこそ、第一隊に入ってきているのだ。もちろん、野営訓練をしたことがない者など一人もいない。だから、たかが天幕張りに手間取っている今のこの状況は、極めて異例なのだ。

「俺としては、一番平然として見えるのがお前っていうのがちょっと意外なんだけどな」

そう言った隊長に、六花はちらと笑ってみせた。

「仕事に私情を持ち込むなって教えたのは、隊長じゃないですか」

「それはそうだが、な。……親の敵(かたき)だぞ？」

その言葉に、六花は軽く目を伏せた。

十二年前、今の王が即位したばかりの頃にも一度だけ、刺客が放たれたことがある。その時の首謀者も日野神乃伝言者だった。そして、その日の王の護衛が六花の両親だったのだ。

「……ええ。両親の敵で、私の両親と私の幼馴染の父親を相打ちにさせた、大本ですよ」

放たれた刺客が光流の父親だった。六花達がその事実を知ったのは一年前。十二年ぶりに送られてきた、最初の刺客の言葉によってだった。

光流は十二年前、事件の直後に記憶喪失の状態で見つけられ、孤児として隊長に引き取られたのだ。そしてそのまま、同じく隊長に引き取られた六花と共に育てられた。だから彼はずっと、自分の親のことを何も知らなかったのだ。

「まあ、嫌がる父親を刺客として向かわせるために、七歳の息子を人質にとったっていうんですから、ある意味あいつにとっても親の敵って言えるかもしれませんが……」

でもあいつが今ここにいたって、同じ反応をしますよ。

そう微笑む六花に、隊長は溜息をついた。

「そうだろうな。……でもな、六花」

その声が少しだけ低くなった気がして、六花は目を瞬いた。そんな彼女を見て、彼女の養い親は苦笑する。

「光流がここにいたら、少なくともお前にそんな顔をさせたりはしなかったと思うぞ。あんまり溜め込むな」

目を見開く六花に、まあ他の奴にはわからないだろうけどな、と隊長は続けた。

「お前はすぐに感情溜め込むし、平気なふりするのも得意だが、逆にあいつはそれを吐き出させるの、やたらと上手かったからなあ。……ったく、あの馬鹿、今頃どこで何してんだか」

心底あきれているというような口調に、六花は力なく微笑んだ。手が無意識に、胸元に下がる首飾りの、透き通った群青色の石をもてあそぶ。俯くと、肩に付かない位置で切りそろえられた髪がはらりと頬にかかった。

一年前、事実を知らされた直後に光流は軍を出て行ってしまった。武者修行というのは、隊長が後付けした対外向けの方便にすぎないのだ。だから本当は、ちゃんと帰ってくるかどうかもわからない。帰ってきてほしいと、思うけれど。

「一応、あいつが一度は戻ってこなきゃと思うように仕掛けをしておいたので、いつかは帰ってきますよ。……たぶん」

自分に言い聞かせるようにそう言うと、ぼんぼんと隊長に頭を軽く叩かれた。

「別にお前と一緒にいたくなくて出ていった訳じゃない。少なくとも、本人は俺にそう言ったからな」

「……………わかってます」

六花は小さく呟くと、一瞬だけ瞑目した。工作中だ、と自分に言い聞かせて、沈みそうになる気持ちを切り替える。そうして軽く息を吐き出すと、いつもの笑顔で隊長を見上げた。

「じゃ、そろそろ夕飯の支度に取りかかりましょうか。天幕張り、終わったみたいですし」

「……ああ、そうだな」

その夜、見張りの当番に当たっていた六花は、夜が更けた頃に天幕の外に出た。前の当番の者と交代して、所定の位置につく。

その途端、彼女はむ、と眉を寄せた。今、何かを感じた気がする。が、昼間感じたような視線ではない。なんだろうか、と神経を研ぎ澄まさせて、彼女はさらに渋い顔になった。

野営地の外に複数の偵察がいる、気がする。だが、それはほとんど直感に近い。本当にかすかな気配が、時折ふっと現れて、すぐに消えてしまう。どんなに注意深く気配を探っても、それが人間の放つものだという確証が持てないのだ。いるとしたら、昼間の偵察とは明らかに質が違う者達だ。

「日野神乃伝言者って、実は戦闘集団じゃないだろうな……」

思わずそう呟いた六花に、同じく見張りに当たっていた勇也がおずおずと声をかけてきた。

「あの、六花さん」

「ん？」

目を向けると、彼はひどく言いにくそうにささやいてくる。

「あの、俺の気のせいかもしれないんですけど、今、偵察されてませんか？」

その言葉に、六花は目を丸くした。自分の他にもそう感じている者がいるとは思わなかったのだ。現に、他に三人いる見張り達は何の反応も示していない。思わず笑みがこぼれた。

「流石、その歳で第一隊に入ってくるだけのことはあるな」

「いや、それは六花さんに言われても…って、え、じゃあ、やっぱり……？」

思わず半目になってから目を丸くして、と表情をころころ変える勇也に、六花は重々しく頷いてみせた。

「たぶんだけどな。でも、私もほとんど直感だ。まあ、偵察はどうせされるものだから、あまり気にしない方がいいぞ」

一番困るのはこちらの実力と動向を知られることだから、とりあえず今は気付かないふりをしていると、勇也は黙って頷いた。心持ち硬い表情をしつつも持ち場へと戻る彼の背中を、六花は真面目だなどと感心しながら見送る。

その時だった。

一瞬だけ、それまでとは明らかに違う、慣れ親しんだ気配を感じた。

「え……？」

嘘だ、と思った。その気配の持ち主を、六花は確かに知っている。だが、ここにいるはずがないのだ。彼は一年前に、行ってしまったのだから。

しかし即座に否定してしまうには、六花はその気配を知りすぎていた。

まさかと思いつつも、何気なさを装ってその気配がした方へと顔を向けてみる。その方向には

鬱蒼と生い茂った木立と、それらが作り出す暗闇しかない。もしそこに誰かがいても、篝火に照らされた場所に立つ六花には見えるはずがない。

それなのに、目が合った気がした。

彼女がそう思ったのと同時に、その視線の主は完璧に気配を消してしまう。

だが、それだけで十分だった。

六花はすぐに野営地内へと目を戻した。勇也を含めた他の見張り達は皆、今の気配にも彼女の動作にも気付いていない。後には、視線を伴わない別の気配が時折、点滅するように感じられるだけだ。

彼女はその後、夜が明けるまで一度もそちらに目を向けなかった。ただ黙って立ったまま、辺りが明るくなるのを待っていたのだ。

夜が完全に明け、森の中まで日が差し込んでくると、起き出した隊員達が朝食の準備を始める。その頃になって、六花はようやく動き出した。夜中に感じていたかすかな気配はもう全く感じない。そのことを確認してから、彼女は先程の視線の主がいたと思われる場所に足を踏み入れた。

あの視線の主が彼ならば、何かあるかもしれないと思ったのだ。何故ここにいるのか、ここで何をしていたのかを、六花に知らせるための何かがある。

一見すると何もなさそうな、ただの森の地面を眺めてみる。しばらくそうしていた彼女の目が、ある一点で止まった。そしてその瞬間、六花は盛大に顔をしかめた。思わず毒づいてしまう。「……あの、馬鹿。よりもよって、こんなもの残すな」

そこにあったのは、小さく盛られた土の山だ。小動物でも簡単に作れてしまいそうなその山は、しかし何者かによって全体が軽く踏みつけられていた。自然にできたものに見えるように。それでいて、特定の人物が見れば自分がそこにいたとわかるように。

六花は大きく溜息をつく、足でその山を蹴飛ばし、地面を平らにした。

そこに、隊員の一人の声がかかる。

「副隊長、朝飯ですよー」

「ああ。今行く」

彼女はそう答えると、もう一度地面を一瞥してから野営地へと戻った。

「隊長、ちょっとお話が」

朝食後の小休止の時間に六花が天幕を訪ねると、隊長はこの森の地図と睨めっこをしているところだった。

「んー？」

生返事をして顔を上げた彼は、六花の表情を見て驚いた顔をした。

「どうした、そんな怖い顔して。何かあったのか？」

「ええ、大ありですよ」

不機嫌さを隠そうともせずそう答えながら、六花は隊長に近づいた。作戦会議の場でもあるこの天幕は、他の天幕と比べて格段に広いのだ。内緒話をするには、できるだけ近くにいた方がいい。

「光流がいます。この近くに」

小声でいきなりそう告げても、彼女の育ての親は取り乱したりしなかった。何度も瞬きをして

、静かに問い返してくる。

「確証はあるのか？」

「昨日の夜、あいつの気配を感じました。ついでに視線も。一瞬だけでしたけど、あの気配を間違えたりなんかしません」

「……だろうな」

他の奴なら疑うが、お前が言うんじゃないかと頬を掻く隊長に、それから、と六花は続ける。

「さっき合図を見つけました。昨日気配を感じた所に、です」

そう言うと隊長は、ほおと目を丸くした。

「どんな合図だ？」

「小さな土の山を作って、それを軽く踏みつけたものです」

「……そりゃまた、ずいぶん簡単な合図だな。ちなみにその意味は？」

「信じてるからなんとかしろ」

「……………何を？」

「知りませんよ」

答えながら、六花はどさりと乱暴な仕草で隊長の隣に座り込んだ。気分がささくれ立っているのが自分でもよくわかる。

あの気配を感じた後、ずっと考えていたのだ。彼が今までどうしていたのか、どうしてここにいるのか。そして、これからどうする気なのか。

本当はすぐにでも木立に分け入ってしまいたかったが、あの視線がそれを拒否しているような気がした。その理由もなんとなくわかったから、六花は朝が来るまで待ったのだ。それなのに残された合図は、信じているからなんとかしろ。これでは、怒るなという方に無理がある。

「昨日、あいつの気配と一緒に、妙な気配も感じました。恐らく日野神乃伝言者の偵察でしょうが、勇也以外は誰も気付いてないと思います。私もほとんど直感に近かったので」

「へえ、お前が直感でしか捕らえられなかった気配に、勇也が気が付いたのか」

隊長はそう言って満足そうに頷くと、てことは、とその調子で続けた。

「光流は今、日野神乃伝言者にいるのか」

「みたいですね。たぶん今日中に何か仕掛けてきますよ」

六花がそう言うと、隊長は黙って問いかけの視線を向けてきた。それに軽く肩をすくめてみせて、彼女は前髪をかきあげる。

「あれはそういう合図なんです。山全体が踏みつぶされていたら、事を起こすのは今日、半分だけなら明日。それ以降なら別の合図を使います。……何をやる気か知りませんが、それに対して私に何かをしろと言ってるんですよ、あの馬鹿は」

まったく、せめてもう少し情報を残してくれればいいものを。

半目になってそう呟く六花に、隊長はあきれたように苦笑した。

「まあ、一年間音沙汰無しだったくせに、いきなりそんなこと言われたら頭にくるわな。……にしてもお前ら、よくそんな合図決めてたな？ 他にも何かあるのか？」

「ありますよ。子供の時に遊びで作ったのがたくさん」

彼女がそう言い終わるとほぼ同時に、天幕の外でどよめきが起こった。

「……来たみたいですね」

「ああ」

そこへ、勇也が興奮した様子で駆け込んでくる。

「隊長、六花さん。光流さんが帰ってきましたよ！」

心底嬉しそうな彼に促されて、六花は天幕の外に出た。そしてすぐに、仲間達に囲まれている青年の姿を見つける。彼の方も、六花を見つけて破顔した。

「六花」

彼がそう呼んだ途端、周りに群がっていた隊員達はざざっと身を引いた。みるみるうちに、青年と六花の間に一本道ができる。

自分達はただの幼馴染なんだからそんな気を使わなくてもいい、と六花は抗議したくなかったが、それは言っても始まらないだろう。そんなことより、今現在森の中から向けられている視線に気付けるようになってくれた方が、副隊長としてはよほど嬉しいのだが。

次に何が起こるのか、と興味津々の彼らの視線を物ともせず、青年は真っ直ぐ六花に向かって歩いてくる。そして彼女の目の前で立ち止まると、すっと膝を折った。その拍子に、彼の胸元で群青色の透き通った石を飾った、簡素な首飾りが揺れる。瞠目している彼女を尻目に六花の右手を取ると、ひざまずいた彼はその手の甲に優しく口付けた。そうして顔を上げると、光流は優しく笑う。

「ただいま、六花。待たせて悪かったな」

その言葉を聞いた瞬間、六花は心に決めた。

あとで絶対、一発ぶん殴ってやる。

* * *

「おかえり、光流」

そう言って笑った六花の顔を見て、光流は顔が引きつりそうになるのをなんとか堪えた。

怒っている。ものすごく怒っている。

怒らせるだろうとは思っていたが、予想するのと実際に目にするのでは訳が違う。特に、六花が綺麗に笑ってみせながら怒っている時は要注意だ。

他の誰にもこの笑顔の恐ろしさはわからないだろうなと思いながら、光流は立ち上がる。さりげなく周囲に目を向けると、案の定だ。恐らく今までこんな風に笑う六花の笑顔など見たことがなかったのだろう隊員達は、揃って啞然としている。中には顔を赤くしている者までいた。それを見ながら、世の中には知らない方がいいこともあるもんな、と心の中で呟いて、光流は六花に目を戻した。

「髪、ずいぶんばっさり切ったんだな。おかげで一瞬、誰だかわからなかった」

そう言うと、六花はひどいなと笑う。その反応を見て、光流はほっと安堵した。よかった、合図はちゃんと通じている。

「で？ お前の方はどうだったんだ？」

目的語のない六花の問いに、光流はさらりと答えた。

「ああ、日野神乃伝言者の偵察のことか？ 安心しろ、しっかり探ってきたから」

「偵察？ 光流さん、武者修行に行ってたんじゃないんですか？」

周囲から上がったその問いに、光流は目を瞬かせて六花の方を見た。すると、その意を汲んだ彼女が説明をしてくれる。

「お前が突然行くことになったから、隊長が皆にそう説明したんだ。陛下からはできるだけ内密にって言われてたしな」

「……なるほど」

自分が出て行ったことは、そういう扱いになっていたのか。ということは、自分の名前はちゃ

んと隊の名簿に残っているということだ。

「なら、色々やりやすくなるな」

光流は口の中でそう呟くと、改めて六花の方を向いた。

「ここにいるってことは、陛下から勅命が下ったんだろう？ さしずめ、宗主と幹部を捕らえてこいってところか？」

「ああ」

「じゃあ、偵察の報告をしたいのだが、いいか？」

「それは私に聞くことじゃないだろう」

彼女がそう答えた時、その後ろから声がした。

「俺は別に構わないぞ」

「隊長……」

「よう、元気そうだな、光流」

そう言っただけでやっと笑った隊長に、光流は頭を下げた。

「お久しぶりです、隊長」

「ああ。で、何がわかったって？」

「はい。日野神乃伝言者は明日の夜、ここに奇襲をかけようとしています」

光流がそう言うと、隊員達の表情ががらりと変わった。それを横目で見ながら、彼は続ける。

「だから、明日の朝、こっちから奇襲をかけるべきだと思います」

「ほお。で？ そこまで言うからには何か策があるのか？」

隊長の言葉に、光流は一枚の地図を取り出した。その場に広げて、周りの隊員達にも見るように促す。

「これが日野神乃伝言者の本拠地の見取り図です。ここに一際大きな、宗主の屋敷があります。こっちがその入口で、ここが裏口。扉が全然違うので、どっちがどっちは見ただけでわかります。裏口の方には罫がいくつか仕掛けてあるので、ここから入るのは難しいですね。鍵が特殊なので、窓から入るのも難しいと思います。入口から攻めるべきでしょう。この屋敷の扉の鍵は錠前です」

そこまで説明して言葉を切ると、光流は顔を上げて隊員達を見回した。

「日野神乃伝言者の信者は、だいたいが宗主の屋敷にいる。幹部連中もな。でも、いたとしても戦闘能力は大してない。奴らは大半がやたらと目がいい連中だが、逆にその目に頼りすぎて、気配を感じるということをほとんど知らないんだ。俺が知ってるお前らの実力なら、簡単に勝てるはずだ」

そう言って、今度は六花に目を向ける。

「でだ、宗主の屋敷じゃなく信者用の屋敷にいる連中は、宗主の屋敷にいる連中に比べて戦闘能力が高い。駆けつけてこられるとかなり厄介だ。その代わり数が少ないから、そっちの連中は六花、お前が足止めしろ」

「六花さん一人で、ですか？ それはいくらなんでも危険なんじゃ……？」

そういぶかしげな声を上げた勇也に、光流はにやりと笑ってみせた。

「うちは少数部隊だから、できるだけ宗主の屋敷の方に人員を割きたいんだ。心配するな。俺も後から行く」

「後から？」

首を傾げた彼に、軽く頷いて説明してやる。

「俺は今、向こうの部下の振りをしてるからな。いきなり消えたら怪しまれる。だから、明日の

朝になるまでは向こうにいなきゃいけないんだ。まあ、ここに来てる時点で相当怪しいから、その頃には監視が付いてるだろうが、お前らが来たら騒ぎに乗じてそいつらをまける。そうしたら、六花の助太刀に行く。こいつの実力なら、それまでは持たせられるはずだ。だから、宗主の屋敷の方はお前らに任せるぞ」

そう言ってから、光流は隊長の方を向いた。

「……と、俺の作戦はこんな感じなんですけど、いかがでしょう？」

すると、隊長は楽しそうに目を細めて頷いた。

「まあまあだな。足りないところは俺が後で詰めとけば、それでいけるだろう。じゃあ、宗主の屋敷の方は俺が指揮を執るから、副隊長二人はしっかり働けよ」

「はい」

光流と六花の声がそろそろ。一年ぶりのその返事に、周りの者が目を和ませるのがわかった。

「じゃ、俺はそろそろ戻ります」

「ああ。気をつけろよ」

そう言って見送ってくれる隊長に会釈をして、光流は野営地に背中を向ける。そこに、六花の声がかかった。

「光流、お前、剣はどうした？」

彼女の言葉に、隊員達のはっとしたように光流の腰を見る。そこに、いつも彼が愛用していた長剣の姿はない。その視線を感じながら、光流はひらひらと手を振った。

「ああ、屋敷に置いてきたんだ。下手に持ち歩くと怪しまれるからな」

そう答えて歩き出す。野営地から出る直前にちらりと六花に目をやると、それはそれは恐ろしい目で睨まれた。

光流が宗主の屋敷に戻ると、すぐに屋敷の主からお呼びがかかった。宗主の部屋に赴くと、扉の向かいの壁側に置かれた大きな椅子に、初老の男が座って待っていた。彼は光流の顔を見るなり、にたりと笑う。

「おかえり、光流。物見の者に聞いたよ。うまく話してきたそうじゃないか」

その言葉に、光流は黙って頭を下げた。そこに、男の楽しそうな声が続く。

「奴らも思ってもみないだろうなあ。信頼している副隊長が、まさか自分の親と幼馴染の親を相談ちにさせた、この日野神乃伝言者に寝返ったなどと。十一年も共に過ごしたというのに、こんなに脆い結び付きしか持てていなかったとは、夢にも思わないだろうよ」

そう言って高らかに哄笑すると、男はにやりと唇を釣り上げた。

「明日の朝、奴らが乗り込んできた時にはこちらはすでに臨戦態勢に入っておる。そんなのは奇襲でも何でもなし。しかも奴らに伝えた戦力分布も屋敷の構造も、もともと誤ったもの。混乱した集団ほど、潰しやすいものはないからな。まさに、飛んで火にいる夏の虫ってところだな」

「はい」

「まあ、多少の被害は出るだろうが、あの目障りな王軍第一隊を壊滅できるのなら、安いものだ。あいつらさえいなければ、王の首を切るなど赤子の手をねじるよりも容易いからな。……よくやったな、光流」

「ありがとうございます。では……」

光流が言いかけると、日野神乃伝言者の頂点に立つ男は、機嫌良さそうに頷いた。

「ああ、約束通りお前の監視を外し、お前を信者と認めてやろう。だが、剣は返さんぞ」

「十分です」

そう頭を下げると、光流はその部屋を出た。

薄暗い屋敷の中をぶらぶらと歩きながら、今までずっと付いていた監視の気配が離れていくのを確認する。そうして自室に戻ると寝台に座って、そのまま日が暮れるのを待っていた。

「……よし」

完全に辺りが暗くなった頃、光流はようやく立ち上がった。周囲に人の気配がないのを確認して、窓からこっそりと抜け出す。そして気配を殺し、数少ない灯りに照らされた所を避けながら、森に向かって走り出した。森に入ってからはずいぶん遠回りになる道を選んで、軍の野営地を目指す。ひたすら走り続けていると、急に周りの木々がひらけ、天幕がいくつも張られた広場に出た。

そこには何の灯りもなかった。篝火一つ焚かれておらず、人が動く気配もしない。しんと静まり返っている。

そんな中で闇に慣れた光流の目は、一つの日幕の影に溶け込むように立つ人影を捕らえた。腕を組んで、こちらをじっと見据えている。その人影に、光流は静かに歩み寄った。

「雪」

小さく呼びかけると、愛称で呼ばれた六花がにこりと微笑む。そして次の瞬間、光流は頬を拳で思い切り殴り飛ばされた。

「……つつう」

笑顔を見た瞬間に殴られると直感したので、なんとか歯を食いしばることに成功した。が、それでも目がちかちかする。不意打ちで喰らっていたら口の中が切れるどころか、完全にふっ飛ばされている。

「……雪、お前なあ」

「平手だったら音が響くだけだろう。みぞおちは勘弁してやったんだ、ありがたく思え」

拳はないだろう、と言おうとした矢先に先手を打たれて、光流は沈黙した。彼女にみぞおちを殴られたら、まず間違いなく意識はない。

「……ちなみに、何が一番怒ってるんだ？」

「全部に決まってる。一年ぶりに戻ってきたのに気配しか寄りこさないであんな合図を残した挙句に、よりによって一番面倒臭い通訳させて、しかも事情は全く話さない。これが怒らずにいられるか」

「悪かった。けどな、雪」

「監視がずっと付いてて、あれしかできなかつたんだろう。それくらいわかってる。それでも、腹が立つものは腹が立つんだ」

「……悪かった」

「ああ。……ほら」

もう一度謝ると、六花は一振りの剣を差し出してきた。野営訓練の際に準備される予備の物だ。光流はそれを受取って、改めて彼女を見つめた。

「じゃあ、もう皆行ったんだな？」

「この状況を見ればわかるだろう。今頃、森の中を進軍してるはずだ。信者達の屋敷に向かってな。すれ違わなかったか？」

「ああ。こっちがいきなり動き出したのに驚いて、偵察の連中が慌てふためいて戻るだろうと思ったから、遠回りしてきたんだ。そいつらと出くわしたら、ここには来れないからな」

そう答えて、光流は歩き出す。その後を、六花が当然のように付いてきた。その気配を感じながら、光流は彼女に問いかける。

「あれ、すぐにわかったか？」

「当たり前だ。一年離れてただけでわからなくなる程、浅い付き合いをしてきた覚えはない。わざわざ髪を切ったからわからないだのと嘘ついて、確認するな」

文句を言いながらすぐ横に並んだ幼馴染を見て、光流はそっと微笑した。六花ならそう言ってくれるだろうとわかっていた。

この言葉を聞いたら宗主は、簡単に裏切れる程に自分達の関係は脆いと言ったあの男は、何と言うだろうか。

宗主の言う通り、光流が隊員達に向けて話したことは嘘ばかりだ。何一つとして、正確な情報はない。

だが、最初から間違っているとわかって聞いている人間がいたら。さらにその者が、何がどう違っているのかを理解し、そこから正確な情報を導き出せたら。状況はがらりと変わる。そして王軍第一隊には、それにうってつけの人間がいる。だからこそ、光流はあんなことができたのだ。

「皆、すんなり納得してくれたか？」

「ああ。偵察されているのがわかっているあの状況で、天幕にも入らずに作戦会議なんかやる訳ないからな。お前が帰った途端に、隊長に通訳しろって言われたよ」

光流は昼間、ひざまずいて六花の手の甲に口付けた。それは普段なら決してしない行為だ。忠誠を尽くすことを誓うその行為を、共に戦う存在である彼女にする訳がない。

絶対にやるはずのないことをする。それが光流と六花の間では、これから話すことの意味を逆さまにして聞け、という合図なのだ。何をどう逆さまにするかは、お互い経験で知っている。

「向こうからの奇襲はない。明日の朝は今日の夜、一番大きいのは宗主の屋敷じゃなくて信者の屋敷。その入り口と裏口の位置は逆で、その二つは見分けがつかない。罾が仕掛けられているのは入り口の方で、窓から入るのは簡単。屋敷の扉の鍵はかんぬき。信者の大半は盲目で、基本的に宗主の屋敷にはいない。幹部連中がいるのも信者の屋敷。宗主の屋敷にいる数少ない信者は僅かな気配だけで相手を検知できるから戦闘能力が異常に高く、その他の信者達はそこまでじゃないが、戦うことはできる。何も言わなかったその他の屋敷には誰もいない。だから、とにかく敵の数が多い信者の屋敷には隊長と皆が、宗主の屋敷には私達が行く。お前はさっき嘘の報告をしたことで仲間と認められて監視が外れたから、宗主の屋敷に連れていくために私を迎えにきた。わざわざ私だけを残したのは、私とお前の二人だけじゃなきゃいけない理由があるから。剣を持っていないのは、その宗主とやらに取り上げられたから。……これでよかったか？」

一応、という風に確認してくる六花に頷いて、光流は苦笑した。

「お前が幼馴染でよかったよ」

「私はいい迷惑だけだな」

そう言って六花は溜息をついた。

「お前があんなことするから、あの後大変だったんだぞ。皆、同じ首飾りして、あんなことして、やっぱりそういう関係だったんですねって言って、ただの合図だって説明しても聞きやしない」

「あー、やっぱりな。でも、あれしか思いつかなかったんだ」

「まったく、全部終わったら、お前もちゃんと否定しろよ」

その言葉に、光流はしばし口をつぐんだ。

「……否定、しなきゃ駄目か？」

「……………しなかったらどうするつもりなんだ？ 光(こう)」

呼ばれた愛称には、あきれと困惑の響きが含まれている。それを理解しながら、光流は続けた。

「事実にすればいい」

そう言った途端、六花の足がぴたりと止まる。それに合わせて光流も足を止め、黙って見つめてくる彼女を見返した。

本当はこんな状況で言うべきことではない。全部終わってから言うつもりだったのだが、なんだか今言わなければもう言えない気がした。だからまた怒られるのは覚悟の上で、光流は口を開いた。

「俺は、お前の夢の守人なんだろう？」

「何を今更。だからこそ、その首飾りを貸したんじゃないか」

彼女の返事に、光流はわかってると頷く。

この国には夢(ゆめ)守(もり)という、古くから伝わるまじないがある。夢の守人というのは、大切だと思う相手が悪夢に襲われないように祈り、その夢を守る者という意味だ。そして光流と六花がしている首飾りは、守人同士が離れ離れになる時に、自分の祈りを託して相手に持たせるための物なのだ。

「貸されたというか、気付いたら持たされてたって感じだったけどな」

「それはお前が私に何も言わずに、勝手に出ていこうとしたからだ。面と向かって渡したら、絶対に置いていっただろう」

「当たり前だ。大事な両親の形見を、持って行ける訳ないだろ」

そう言った瞬間、六花の瞳が一瞬だけ揺れたのを光流は確かに見たと思った。こんな暗闇でもそんなことがわかってしまう自分に苦笑する。

「勘違いするな。嫌だった訳じゃない」

むしろ、嬉しかった。両親の形見を知らない内に貸されたら、返しに来ない訳にはいかない。それだけで、彼女がいる場所に帰る理由になる。何も言わずに出ていこうとしているのに気付いて、それでも六花は自分を繋ぎ止めようとしてくれた。そのことが、本当に嬉しかったのだ。

「なあ、雪。夢の守人は、夫婦や恋人同士でなるものなんだろう？」

「ああ。……私達の場合は、違ったけどな」

「そうだな。俺達は、ただ一緒にいるからってだけで、十一年も守人をやってたからな」

そう言いながら、光流は十二年前を思い出す。あの頃は本当に小さくて、夢の守人に特別な意味があることなど知らなかった。ただ六花に悪夢を見て欲しくなくて、お互いに守人になろうと約束をした。悪夢を見ても、いつも泣くのを我慢してしまう彼女を守りたかった。

あれから状況は色々変わってしまったが、その想いだけは今も変わらず、この胸に宿り続けている。だから。

「俺が、これからもお前の夢の守人でいたいって言ったら、お前は どうする？」

「……………つまり？」

「俺と結婚してほしい。……て、こら、剣を抜こうとするな」

剣の柄にかかった六花の手を、光流は慌てて押し留めた。この距離で彼女に切りかかられたら、かわせる自信はない。すると、とことん据わった目で六花に睨みつけられた。

「言うに事欠いて、なんでそんなことを今この状況で言うんだ！ 自分が言ってることの意味、ちゃんとわかってるのか！？」

「わかってるに決まってるだろ。勝手なことを言ってるのも承知の上だ」

「なお悪いだろうが！」

押し殺した声でそう叫ぶと、六花は俯いてしまった。

「それに、記憶はちゃんと取り戻せたのか？」

打って変わって呟くように続けられたその言葉に、やっぱりばれてたか、と光流は苦笑した。一年前、彼が旅に出た目的は、失くしていた七歳以前の記憶を取り戻すことだった。他でもない六花の傍にいたかったから、彼はそうしなければならなかったのだ。

「ちゃんと思いだしたさ。親父のことも、十二年前に何があったのかも。十一年も封じてただけあって、いい思い出ばかりじゃないが、親父のことは、思い出せて良かったと思ってる。その親父が十二年前に殺されたんだって実感も、やっと湧いた」

「そう、か」

「ああ。でもな、雪。それでもやっぱり、俺はお前の傍にいたいと思った。だから言ってるんだ」

一年前、お互いの親が殺し合った直接の敵同士だと知らされても、六花はそれが一緒にいられない理由にはならないと言ってくれた。そんな改めてわかった新事実よりも、それまで共に過ごした十一年間の方がよほど大事だと言ってくれたのだ。だが、いくら傍にいたいとお互いが言っても、両親のことを覚えている六花と、覚えていない光流とでは背負っている覚悟が違いすぎる。それではいつか、光流自身がそのことを負い目に感じて、一緒にいられなくなる日が来てしまう。

そう思ったから、光流は自分の記憶を探しに行ったのだ。自分で思い出すことを避けてきた記憶を取り戻してなお、六花の傍にいたいと思えたら。その時は、彼女に求婚しようと決めていた。六花に言わなかったのは、いつ帰れるかどころか、帰れるかどうかすらわからなかったからだ。待っていてくれとは、絶対に言えなかった。

たった一年で全てを思い出せたのは、むしろ僥倖(ぎょうこう)だ。

「雪、お前、昔言ってたよな。夢の守人が夫婦や恋人でなるのは、心が一番近い相手じゃなきゃ夢を守れないからだって。俺は、誰よりも近い場所でお前の夢を守りたい。お前が泣きたいのに泣けない時は、泣けて言える場所にいたい。他の男に、その場所を譲りたくないんだ」

今更お前以外の誰かに、夢を守ってもらおうとも思えないしな。

そう言って、光流は俯いたままの六花に手を伸ばした。

「別に、今すぐ答えろなんて言わない。今言わなきゃ、言いそびれるような気がしたから言っただけだ。帰ったら聞くから、考えておいてくれ」

頭を優しく撫でると、彼女は小さく身じろぎをした。

一年前まで彼が毎朝結っていた髪は、すっかり短くなってしまっている。その感触が新鮮で、光流は目を細めた。六花がどんな髪型をしようとして、見間違ふことはあり得ないし、どうこう言う気もない。だが、女性の髪は長いものと相場が決まっているこのご時世に、ずいぶん思い切ったことをしたものだとは思ふ。

しばらくそうしていると、六花はゆるゆると顔を上げた。何とも言えない複雑そうな表情のまま、ぼつりと呟く。

「仕事中に、そんなの考えられるか」

「ああ。悪いな」

こればかりは反論の仕様がなかったので素直に謝ると、六花は今までの雰囲気や断ち切るように大きく溜息をついた。

「じゃ、もう行くぞ。ただでさえ隊長達の方が先に出てるんだからな。走らなきゃ間に合わない」

「ああ、そうだな」

その直後、それまでの会話の余韻すら残さずに、二人は同時に走り出した。障害物が多い森の中を、ほとんど同じ速度で一気に駆け抜けていく。

「攻め入る合図は？」

少し前を走りながら光流がそう聞くと、六花は何故か、ふっとおかしそうに笑った。

「あれだ、あれ」

「……まさか」

「そう、そのまさかだ」

「まじかよ。……ああ、こっちだ」

そんな会話を交わしながら、光流は日野神乃伝言者の本拠地が見える所まで六花を導く。足を止めたその場所からは、ごくごく小さな村のようにになっているその地がよく見えた。今はまだ、静寂に包まれている。二人は一本の木の陰に隠れ、気配を殺しながら息をついた。無声音で会話をする。

「ここでいいのか？」

「ああ。あれが宗主の屋敷だ」

そう言って光流が指差した先にあるのは、周りの建物と比べて大きくも小さくもない屋敷だった。一番これといった特徴がないことが、特徴といえば特徴である。その屋敷を眺めながら、六花は眉を寄せた。

「この連中は本当に皆、目が見えないのか？」

「全員、じゃないけどな。宗主と物見って呼ばれてる数人はちゃんと見えてる。でも、他の奴は全く見えてない」

「いったいどうしたら、そんな盲目の信者ばかり集められるんだ？」

「違う」

彼女の言葉を否定して、光流は顔をしかめた。

「奴らは最初から見えない訳じゃない。信者になる時に、目が見えなくなる薬を飲むんだ。それが信者の証しだからな」

「な……」

言葉を失った六花の顔を見て、光流は頷いた。

「今の日野神乃伝言者はそういう教えを説いてるんだ。人間は生まれついた時は無垢なのに、成長するに従って悪に染まるのは、世間で悪い物を見ているのが原因だ。なら、見えなくしてしまえばいいってな。そのせいで、ほとんどの信者はこの森から出ようとしない。ただ毎日、最低限生活に必要な動作と、運動と称して戦いの練習をしているだけだ。宗主の屋敷にいるのは見えなくても気配を感じるだけで、自由自在に動けるようにまでなった奴らだから、時々夜の偵察に使われてるけどな。それに対して物見は刺客とか偵察とか、外に派遣するための人間だから、目が見えてなきゃいけない。もうここまでくると、立派な戦闘集団だな。で、宗主の目が見えたままなのは、あえてこの世の悪を見続けるため、だそうだな」

「……無茶苦茶だな」

六花はそれだけ言って、息を吐きだした。それから光流の顔を見上げ、真剣な顔で問うてくる。

「で？ お前はなんでここにいたんだ？」

「捕まったんだ。三ヶ月前に」

光流がそう答えると、彼女は目を見開いた。三ヶ月前、とその唇が動く。

「俺は奴らに狙われてたらしい。ほら、あの刺客が言ってただろ。子供だったからって、何を知ってるかわからない裏切り者だって。俺一人を捕まえるために、手練を十人以上送り込んできたからな。流石に太刀打ちできなかった。まあ、宗主がきまぐれを起こして俺を殺さなかったから、捕まった後は大人しくしてたけどな。ここで調べたいこともあったし」

「調べたいこと？」

首を傾げた彼女に頷いてみせる。

「なんで親父が日野神乃伝言者にいたのか、知りたかったんだ。俺が思い出した親父は、ちゃんと目が見えてたからな」

「……それで、何かわかったのか？」

「ああ。親父が所属していた日野神乃伝言者は、十二年前のあの時に乗っ取られたんだ。今の宗主が率いる、過激派の連中に。それまでは、人の良心をどうしたら伸ばしていけるかを説く宗教だったらしい。親父が刺客にされたのは、単に剣の腕が過激派の連中よりも強かったから、だそうだな」

「そうか。……大丈夫か？」

「ああ。私情を交えずに仕事できる位には、自分の中で整理は付けたつもりだ。お前だってそうだろう」

そう答えて、光流は微笑んでみせた。

「それにここにいれば、そのうちお前達に来るんじゃないかと思ったんだ。この一年間、次々刺客を送ってたって話だったからな。捕らえるなら、できるだけ情報が多い方がいいだろう」

そう思ったから三ヶ月間、宗主に従順なふりをして、屋敷のあちこちを探っていたのだ。

そこまで話すと、光流は目の前の村に目をやった。会話をしながらも耳を澄ませていたのだが、何も聞こえてこない。

「……合図、遅いな」

「いや、もうちょっとかかるだろう。偵察を混乱させるために、大幅に遠回りして行くって言ってたからな」

「………そういうことは、もうちょっと早く言え」

じゃあ、こんなに急いでくることもなかったんじゃないかと光流が言うと、六花は首を振った。

「駄目だ。ほら」

彼女はそう言ったかと思うと、何かの固形物を彼の口に押し込んできた。ぎょっとした光流は条件反射でそれを噛み砕く。そうして首を傾けた。

「……菓子？」

「ああ。お前、今日ろくに食べてないだろう」

六花にそう言われて、初めてそのことに思い当った。そういえば、朝から何も食べていない。それどころじゃなかったのだ。

「……よくわかったな」

「そんな顔してる。ったく、どんな状況でも食事だけはきっちり取れって、隊長に教えられただろうが」

だから食べると小さな布袋を差し出されて、光流は素直に従った。様々な形をした菓子の一つを口に入れる。

「これ、なんだ？ 軍の携帯食じゃないよな？」

「ああ。うまいだろう？ 理穂さんの特製携帯食で、雑穀と木の実を砂糖と蜂蜜で絡めて、固め

焼きしたもの、だそうだ」

「理穂さんって、隊長の奥さんのお母さん、だよな？」

「そうだ。ちなみに形ごとに使ってる木の実と蜂蜜の組み合わせが違って、全部で二十四の名前が付いてる。今お前が食べたのはあるふぁだな。その前に食べたのがおめがだ。あとは、ペーた、がんま、でるた、いぷしろん、ぜーた、いーた、しーた、いおた、かっぱ、らむだ、みゅー、にゅー、くしー、おみくろん、ぱい、ろー、しぐま、たう、ゆぷしろん、ふぁい、かい、ぷさい、だ」

「……お前、よくそれ覚えられたな」

「まあな」

どうやら、彼女は自分にこれを食べさせるために急いだらしい。

大人しく菓子を口に運びながら、光流はあることを思い出した。

「ああ、そうだ。雪、帰ったら頼みがあるんだが」

目線だけで問うてくる彼女に、怒るなよ、と前置きして続ける。

「寝袋にでかい穴が空いたから、繕ってほしい。たぶん、俺の剣と一緒にあの屋敷のどこかにあるはずだ」

「……何をしたら、そういうことになるんだ？」

「三ヶ月前に襲われた時、盾に使った」

いきなりで剣を抜いてる暇がなかったんだ、と言うと、六花は深々と溜息をついた。

「お前に剣を抜かせないってことは、相当だな。これから戦う奴ら、皆そうなのか？」

「俺達が行く方はな」

「……私達だけで平気か？」

「ばらばらに動かなければ、な。逆に味方がお前以外にもいたら、俺は勝てる気がしない」

「……心しておこう。で、一つ聞きたいんだが」

「ん？」

「わりと何でもできるくせに、なんで裁縫と掃除はからっきし駄目なんだ？」

あきれたようにそう言う彼女に、光流は半目になって言い返した。

「何を今更。だいたい、掃除はお互い様だろ。どっちかだけでやろうとして、片付いた試しがないじゃないか。それに俺に言わせれば、あんな細かい作業ができるくせに自分の髪が結えないお前の方が不思議だ」

「別に、全く結えない訳じゃない」

「かろうじて一つにまとめられるだけだろうが。……まさか、それで髪を切ったのか？」

そのことに思い当って聞くと、六花は押し黙った。沈黙は肯定だ。光流の方こそあきれてしまった。

「雪、お前な……」

「仕方ないだろう」

六花がふいと、すねたように横を向いた。そのまま続ける。

「どうしても慣れなかったんだ。光がいない日常は、私にとって日常じゃないんだから」

「でも、一年だぞ？」

「お前が行った三ヶ月後には、諦めて切った」

つまり三ヶ月間は、自分でやろうと努力をしたらしい。光流は溜息をついた。そんな彼を横目で見上げて、六花がぽつりと呟く。

「お前がまた毎朝結ってくれるなら、伸ばす」

わかったよ、と光流が苦笑した時、村を挟んだ向かいの森から鴉の鳴き声がした。その声に、二人はぱっと顔を上げる。

「……ずいぶんうまい奴がいるんだな」

「ああ」

鴉は夜鳴いたりしない。あれは人の鳴き真似だ。光流と六花が昔作った、夜用の突撃開始の合図である。

「なんだってこれなんだ？」

「何かないかって隊長に聞かれたから、教えたんだ。まさか採用されるとは思わなかったけどな」

そう言いながら、二人は走り出す。目的の屋敷に近づきながら、光流はちらりと六花を見やった。その視線を受けた彼女は、おかしそうに微笑む。

「さっきの返事、もうしたからな」

「……………は？」

光流は慌てて先程の会話を思い返してみた。明確なことは言われていない。が、思い当たることが、ないでもない。

「……お前それ、ずるくないか？」

思わずそう言うが、彼女は澄ました顔だ。

「ちゃんと言ってほしいんなら、次の手合わせで私に勝つんだな。私は自分より強い男でなきゃ、男として認めない」

その言葉に光流は何とも言えない顔で沈黙した。それでは世間一般のほとんどの男性が、彼女に男として認められていないことになる。

千九百五十二勝、千九百五十二敗、六引き分け、という一年前までの結果を思い出して、彼は深々と溜息をついた。

そんな会話の間に、二人は屋敷の壁に走り寄って、ぴたりと張り付く。そこに、もう一度鴉の鳴き声が響いた。

「行くぞ、光流。これ以上仕事に私情は」

「持ち込まない。もう十分だ。こっちだ、六花」

仕事用の呼び方に戻して、二人は屋敷内に侵入する。暗い廊下をいくらも行かない内に、目の前に数人の人影が立ちはだかり、あっという間に二人を取り囲む。そのうちの一人が叫んだ。

「くせ者！ 火を付けたのはお前らか！」

その言葉に二人は顔を見合わせた。

「火？ そんなものは知らないぞ」

「まさか、火事か？ ……面倒なことになったな」

「ああ。騒ぎに乗じて、宗主が逃げやすくなる」

そう言いながら、光流と六花は背中合わせになった。この体勢が二人のいつもの立ち位置だ。お互いの存在を感じながらも、それぞれ違う方向を向いていられる。体の中で一番無防備な背中では、唯一何の疑いもなく預けられる相手に任せればいい。

「お前の剣と寝袋も探さなきゃな」

「だな」

小声でそう言って、切りかかってきた相手をそれぞれ違う方向に避けて剣を抜いた。相手は目が見えない分、気配を察するだけで動くことができる。だがその代わりに、今目の前にいる者が敵か味方かを判断するために、向かい合った直後の一瞬だけはどうしても動きが止まって

しまう。

対する自分達はとりあえず、お互いの気配を間違えることだけではない。だから、その一瞬が勝負の分かれ目だった。

「よ、し。行くぞ」

「ああ。どっちだ？」

「こっちだ」

相手を動けなくさせた後、流石に肩で息をしながらも二人はまた走り出す。

一年ぶりのはずなのに、お互い取る連携はそんな気配を微塵も感じさせない。

以前と変わらない位置を走り続けられることが、どうしようもなく嬉しかった。

この想い、違えることなく（光流7歳、六花6歳）

ざざあという波の音で目が覚めた。重たい瞼を開けるとぼんやりと誰かの顔が見える。誰だと問いかけようとして、彼女が泣いている事に気がついた。ほとんど無意識に呟いていたのは違う言葉。

「...なんで、ないて、る？」

でも、答えを聞く前に目の前が真っ暗になってしまった。

長い長い夢を見ていた。なつかしくて温かくて、とても切ない。そんな夢だった。

はっと目を開けると見知らぬ天井が飛び込んできた。それまで見ていた夢が跡形もなく消えてしまう。ここはどこだろう、俺はどうしたんだっけ.....？

「あ、おきた？」

突然聞こえた声に驚いて、思わずぱっとそちらに顔を向ける。その途端目の前がぐらりと揺れてものすごい吐き気がした。必死でそれをやり過ごして、改めて声の主を見る。それは自分と同じ位の少女だった。

.....でもたぶん彼女の方が一つは年下だろう。ということは六歳か。

そんなことをやけにぼーとした頭で考えていると、その少女はぱっと立ち上がって駆け出した。

「たいちょうよんでくる！」

そう叫んで部屋を出て行く。.....タイチョウってなんだ？ その前に今の少女はいったい誰だ？

答えの出ない問いを頭の中でぐるぐる回しているうちに扉が開いて、先の少女が一人の頑強そうな男性を連れて入ってきた。この人がタイチョウだろうか。その男性は少女に何か言って彼女を外に出す。そしてこちらに向かってきた。ひょいと顔を覗き込んでくる。近くで見ると優しそうな目をしていた。

「まだ顔色が悪いけど、だいぶましになってきたな。俺が言ってる事わかるか？」

頷こうとしたらまた目眩が襲ってきたので、口で答えることにする。

「わかる。あんたがたいちょう...？」

男性は軽く目を見開くと、苦笑交じりで頷いた。

「リッカが呼んでいるのを聞いたのか。そうだな、役職名だが隊長でいい。お前、なんて名前だ？」

俺の、名前は.....。

「みつる」

「みつるか。どういう字を書くんだ？」

「ひかり、に、ながれる」

「光に流れる...？」

不思議そうに言うと、隊長は紙に何か書いて俺に見せてきた。『光流』と書いてある。

「これでいいのか？」

そうだとすると、隊長は可笑しそうに自分で書いた俺の名前を眺める。

「これでみつる、か。リッカといい、お前といい、変わった名前同士なのは何かの縁か.....？」

隊長の言っている意味はよくわからない。わかったのはリッカというのが人の名前だということだけ。おそらく。

「リッかって、さっきのやつのこと？」

「ああ。あの子がお前を海で拾ってきたんだ。感謝しとけよ。ってそうだ、お前どこの子だ？この辺じゃないよな？　なんで海なんかで倒れてたんだ？」

ああそうだった、俺は、……あれ？　俺はどこにいたんだ？　なにをしてたんだっけ？

必死で思い出そうとしているのに、目が覚める前のことは何もわからない。自分が何者なのかも、今までどうやって生きてきたのかも。どんどん混乱して泣きそうになる俺を見て、隊長はぽんぽんと俺の頭を叩いた。

「わからないなら、いい。かわいそうに、全部忘れちゃまったのか。でもま、名前だけでも覚えてたんだから上出来だ。ほかになんかわかりそうな事あるか？　自分の歳とか」

歳は、さっき少女を見て一つ下で六歳、と思ったから……。

「…たぶん、ななさい」

「七歳か。その歳にしちゃ賢いな、お前。…リッカも六歳にゃ見えない時があるけど、な」

やっぱり六歳だったんだと思った途端、ものすごく眠くなってきた。隊長がゆっくり寝ろとか言ったような気がしたけど、もう俺にはわからなかった。

次に目が覚めた時、部屋には何かを抱いた少女と呆れ顔の隊長がいた。人間の次は犬かよ、という隊長のぼやき声が聞こえる。どうやら少女が抱いているのは子犬らしい。

さっきよりもずっと気分が良くなっていたので起きあがってみる。すると二人がこちらに気がついた。隊長が寄ってきて俺のおでこに手を当てる。

「よし、熱は下がったな。今何か食う物持ってくるから、待ってるよ」

そう言って彼が出ていくと、今度は少女が子犬を抱いたまま寄ってきた。

「だいじょうぶ？」

「……だいじょうぶ」

そう答えると、そっかと少女は笑った。そして、さっき俺が答えられなかった質問をしてくる。

「ねえどこからきたの？　おとうさんやおかあさんは？」

「………わかんない」

「え、わかんないの？」

そのきょんとした顔と不思議そうな声が嫌で、どうしようもなく腹が立った。俺だってわからないのが不思議だし嫌だし悲しいのに、何も知らない幸せそうなお前がそんな顔するな。それだけで俺はこいつが嫌いになった。

「なまえなんていうの？」

それは答えられる質問だったけど、嫌いな奴とは口をききたくない。だから無視して部屋を見回す。部屋の壁際に俺が寝ている寝台、その向かいの壁際にはもう一つの寝台と筆筒(たんす)らしき物、あとは真ん中に机と、椅子が三つあるだけだった。扉は俺が足を向けている方の壁に、窓はその向かいの壁にある。

そうやって部屋の様子を確認していたら、少女はさっきよりも語気を強めて同じ質問をしてきた。やっぱり答えたくない。でも答えないとずっと聞かれ続ける気がする。それも嫌だ。何か方法はないかと辺りを見回してみる。すると、先程隊長が俺の名前を書いた紙が机の上に乗って

いるのが見えた。とっさにそれを指差す。

「あれにかいてある」

そうしたら少女は素直にその紙を見にいった。だが、読めなかったらしい。

「え、こう...な...? ちがうよね。こう.....? ねえ、これなんてよむの?」

こちらを向いて聞いてきたけど、答える気なんかない。こんな奴に名前を呼ばれたくない。けど、彼女は俺が答えないとわかると頬を膨らませて呟いた。

「いいもん、こうってよぶから」

.....全然違う。掠ってすらない。でも訂正する気も起きなくて、放っておくことにした。そこへ、何かが入った皿を持って隊長が入ってくる。

「おい光流、粥でいいか、ってお前らなに揃ってむくれてるんだ?」

この時俺の名前はわかったはずなのに、結局彼女はずっと俺を光(こう)と呼び続けた。

二、三日すると俺は随分元気になって、自由に動き回れるようになった。その間に隊長はいろいろな事を教えてくれた。

俺は海であいつ(リッカとかいう少女)に拾われてから五日間ずっと眠っていたこと。ここはある程度の大きさの島国で王国であるということ。その国の王に仕える軍は実力順に一隊、二隊、三隊——という風に分かれていて、隊長は第一隊の隊長であるということ。今いるのは第一隊の宿舎で、この部屋はあいつの家族の部屋だったということ。

そして一番意外だったのは、彼女の両親はついこの間死んでしまったということだった。

「普通なら親が死んだなんて六歳じゃ受け入れられないことだろうに、リッカはちゃんと理解して自分の力で生きていこうとしてるんだからすごいよな。しかもあの歳で自分にできることとできないことがわかってるみたいで、こういう事は自分じゃできないからお願いします、って頼みに来るんだから、感心する」

隊長はそんなことを言っていた。だから俺はなんとなくあいつの様子を観察してみた。そして、ますますあいつが嫌いになった。

その前は幸せそうな奴が、って思って嫌だった。でもよく見たら、泣くのを我慢して無理して笑っているように見える。今はそれが嫌だ。泣きたいなら泣けばいいのに、我慢して泣き笑いみたいな顔をする。見ててなんだかいらいらする。そんな顔見たくなかった。だから嫌いだ。

けど周りの人には笑っているように見えるらしい。前より元気はないけど、ちゃんと笑えてるって、隊長まで言っていた。あれのどこがちゃんとした笑顔なのか、俺にはわからない。我慢しているように見えるのは俺だけなんだろうか。いや、もう一匹、あいつが拾ってきたらしい子犬にはそう見えるみたいだった。いつも彼女を笑わせようとしているようにしか見えなかったから

動き回れるようになると、隊長が俺に剣の稽古をしないか、と言ってきた。

「いい運動になるし、体も心も強くなるぞ」

だけど俺が答える前にあいつが声を上げた。

「つよくなれるんなら、わたしもやりたい」

隊長は驚いたようだったが、わかったと承諾した。そして俺に、どうすると聞いてくる。俺も体を動かしたいし、強くなりたいと思う。でも。

「やってもいいけど、そいつといっしょはやだ」

本人の目の前で言い切った。

「いじわる！！」

「だっておれ、おまえのこときらいだもん」

「わたしだってこうなんか、すきじゃないもん！」

「だったらいいだろ、ばか！」

「ばかはそっちでしょ！ いいもん、わたしも光とはやりたくない」

まあまあ、と止めに入った隊長は困ったように溜息をついた。

「お前らなあ…。……よくそれで同じ部屋に住んでられるな」

そう、俺は結局この嫌いな少女と一緒に住むことになったのだ。なんでも孤児同士で一緒にいてくれるといろいろ助かることもあるし、お互い寂しくないだろうという周囲の考えと、あいつ本人の希望によるらしい。俺も一応意見を聞かれたけど、今更移るのも面倒で、それでいいと答えてしまったのだ。そして俺達はほとんど毎日喧嘩している。そうじゃない時は彼女は子犬と遊び、俺はそれをこっそり観察しているか、考え事に耽っているというのが最近の日常だ。

結局剣の稽古はあいつが早朝、俺が夕方と分けてやることになった。隊長にはもちろん仕事があるので、その合間というところの時間になるらしい。一緒にやってくれると俺も楽なんだけどな、とぼやいていた。ごめん隊長、けど嫌なものは嫌だ。

俺はあいつが稽古をしている時はまだ寝ていたし、起きていても絶対見に行ったりはしなかったけど、彼女はいつも俺の稽古を子犬と一緒に見ていた。でなきゃ近くで遊んでいた。聞いたりしないからわからない。でも何か理由があったのかもしれない。

ある日、隊長は仕事が長引いているのか、なかなか来なかった。いつもの場所であいつは子犬と遊んでいて、俺はそれを眺めながら隊長を待っていた。するといきなりそこに、体の形や毛色の子犬とよく似た大きな犬が走りこんできた。母犬らしきそいつは子犬を目指して来たらしかった。が、一緒にいたあいつを見事に跳ね飛ばしてしまった。突然過ぎて俺は呆然とそれを見ていることしかできない。幸い地面が柔らかい所だったのでたいした怪我もなかったようだが、彼女も何が起こったかわかっていないようだった。

そこへ、一人の少女が走ってきた。たぶんあいつと同じ年だろうと思われる彼女は、とても慌てている。どうやらこの犬の飼い主らしい。座り込んだままのあいつに駆け寄ると自分も座り込んで謝った。

「ごめんなさい！！ だいじょうぶ？ けがしてない？」

「……うん、へいき」

あいつがそう言って笑ってみせると、その少女はほっと安堵の表情を浮かべた。そんな彼女にあいつは問い掛ける。

「もしかしてこのこ、あなたのとこのこ？」

そう言ってあいつが指差したのは、子犬の方だった。それに少女は頷く。

「うん。さんぽしてたらいきなりいなくなっちゃって、ずっとさがしてたの。あなたがみつけてくれてよかった。」

そっかと呟いて、あいつは一瞬ものすごく寂しそうな顔をする。でも次の瞬間には笑って子犬を撫でていた。

「よかったね、おかあさんにあえて」

「うん、ほんとにありがとう。あ、そだ。わたし、ゆうな。あなたは？」

「りっか」

「りっか、ね。ね、こんどうちにおいでよ。このこみつけてくれたおれいしたいし、いっしょにあそぼうよ」

「うん、いいよ、ゆうな」

そう言って笑い合うと、ゆうなは犬二匹を連れて去っていった。その後姿を見送るあいつに近づいて尋ねてみる。いつもの俺なら、絶対に自分から話し掛けたりしない。でも、今は妙に気になってしまったから。

「いいのか？ いかせちゃって」

あんなに仲良くしていたのに。そう思ったから聞いたけど、なんとなく、なんて答えるかわかってしまった。

「...いいの。だって、おかあさんといっしょのほうがいいにきまってるもん」

ほら予想通り。でも思ったたよりずっと寂しそうな、いつもより泣きの方が強い泣き笑いの顔で言うから、どうしていいかわからなくなってしまった。なんか俺が泣かせたみたいで居心地が悪い。でもやっぱりこいつは泣かないから、泣けばいいのにとも思ってしまう。

とにかく別の顔をさせたくて必死に話題を探した。

「なあ、りっかってどんなじかくんだ？」

苦し紛れに、隊長に名前を聞かれた時からずっと不思議だったことを聞いてみる。そうしたら驚いたような顔をして、笑った。

「そっか、おしえてなかったっけ」

そう言って近くに落ちていた木の棒で地面に『六花』と書きつける。

「ゆきっていみなんだよ」

「.....なんでむつつのはなでゆきなんだ？」

「はなじゃなくてはなびらだよ。ゆきのけっしょうって、むつつのはなびらでできたはなみたいでしょ。だからゆきのことをりっかっていうんだよ」

「ふーん。.....じゃあおまえ、きょうから雪な」

「え？ なんでそうなるの？」

「だって雪のほうがよびやすいし。おまえだっておれのこと光ってよんでるんだからいいだろ」

あいつ、雪は納得してないみたいだったけど、俺は勝手にそう決めた。その時隊長の姿が見えたから、俺は雪の手をつかんで駆け出した。

その夜はとても寒かった。俺はなかなか寝つけなくて何度も寝返りを打つ。そこへ、おずおずという風に雪が声を掛けてきた。

「光、おきてる？」

どうやら彼女も寒さで寝つけないらしい。昨日までなら無視しただろうけど、さっきの泣き笑いの顔が頭から離れなかった俺はすぐに返事をした。

「おきてるけど.....、なに？」

「そっち、いっていい？」

一瞬何を言われたかわからなかった。つまり、一緒に寝ていいかってことか？

「.....なんで？」

わかりきっていてもそれしか返せない俺に、雪は当たり前のように言う。

「だってさむいんだもん」

「おまえ、雪なんだからへいきだろ」

無茶苦茶なことを言っていると自覚しつつ言ってみると、彼女はむくれたように呟いた。

「それをいうなら、光はながれぼしじゃん」

「は？」

「だってみつるって、ひかりにながれるでしょ。ながれるひかりっていったら、ながれぼしじゃん。……だから、おねがいかなえてよ」

絶句するとはこういうことか、と七歳にして悟ってしまった気がする。自分の名前の意味なんて考えたことなかった。記憶をなくす前だってそうに違いない。……でも、今の雪の言葉であることを思い付いたから、言ってみることにする。どうせ俺だって寒いんだし。

「雪がおれのねがいごとかなえてくれるならいいよ」

「……なんですよ。ゆきっておねがいかなえないじゃん」

「おれのはゆきになれってことだからいいの。だからこっちこい」

そう言ったら、雪はよくわかんないとか言いながらもこっちに来た。布団に入ってきた体を捕まえると、これでもかって位冷たかった。

「え？ 光？」

「…おまえ、ほんとに雪だな。すげーつめたい」

「……光はあったかいね。ねがいてなに？」

「……なけ」

「へ？」

「雪はあっためたらとけるだろ。あっためてやるからとけてなけ」

目を見開いている彼女の、自分より一回り小さい体を強く抱きしめる。

「おまえ、いつもがまんしてるだろ。なかないようにって」

「……だってないたら、みんなしんぱいする」

それを聞いてああそうかと納得する。俺はこいつが嫌いなわけじゃなかったんだ。俺がこいつの泣き笑いを見ていつもいらいらしていたのは。

「おれはがまんしてるのみるほうがしんぱいな。おれといるときだけでいいから、なきたいときはなけ。……あっためて、やるから」

もう、あんな顔見たくない。だから、こいつの涙を止めている原因は雪みたいに溶けてしまえばいい。俺は腕の中でゆっくりと涙を流し始めたこの少女を守りたいと思った。

——雪はおれがまもる

それが俺の最初の誓いだった。

さながら風のごとくに（光流7歳、六花6歳）

あるのどかな日の昼休み。軍の稽古場の片隅で昔話が語られたきっかけは、勇也(ゆうや)の一言だった。

「お二人がはじめて手合わせをしたのはいつですか？」

* * *

それは今から十年前、六花(りっか)が六歳、光流(みつる)が七歳の時だった。共に孤児である二人は自分の身を守るためという名目で、王が抱える軍の第一隊の隊長、つまり軍の中で一番の実力者に武芸の手ほどきを受けていた。そして、ある程度技の型が整ってきた頃のこと。

手合わせをすることになったきっかけは隊長不在時での会話だった。

「なあ雪、こういう『かた』って、じっせんで本当に使えるのか？」

素振りをしてながら問いかけてきた光流に、六花はあきれたように答える。

「...光(こう)、そういうことは、たい長に聞いてよ」

雪、光というのは六花と光流、それぞれ二人だけの呼び名だ。

六花の言葉の後、隊長の言葉が聞こえたような気がして二人とも黙り込んだ。

「鍛錬と実戦は別物だからなあ、覚えておくのに越したことはないが、実戦ではそんなことにかまってられないな」

おそらく、そういうことは経験してみなければわからないのだろう。

沈黙の後、二人はどちらともなく得物である木刀を構えて向かい合い、相手の隙をうかがってみる。地面を蹴ったのは同時。先に振り下ろしたのは光流の方だった。カンッ！！ という高い音が響き、攻撃を受け流した六花が横に飛びのく。今度は彼女が光流に攻撃を仕掛けて避けられる。確かに型のことを考える余裕はなかった。夢中になって同じようなことを繰り返していた二人は、近くまで来ていた大きな影に気がつかなかった。

ゴンッ！！ という鈍い音が二回響き、二人は頭を押さえてしゃがみこんだ。おもいきり鉄拳を喰らったのだ。そして喰らわせた当の本人、隊長はあきれたように溜息をついて言った。

「目の前の相手に気を取られ過ぎて、すぐ横まで来た敵に気が付かんでどうする。だいたい寸止めの技術もないうちから手合わせなんてするな、馬鹿者」

正論なので言い返せない二人である。そんな二人を尻目に隊長は持っていた荷物から何かを取り出した。そのまま二人に突きつける。「.....え？」

「...なに？」

反射的に受け取ってしまった二人はそれが何であるかを認識した途端、揃って目を輝かせる。それは小ぶりの剣だった。

「まだ早いかもしれんが、慣れておくのに越したことはないからな、そんなに鋭くはないが、刃がついているんだから気をつけろよ」

「「はいっ、ありがとうございます！！」」

よしよしと隊長が頷いていると、そうだ、と光流が声を上げる。

「たい長、たたかっている、あい手の後ろにいくにはどうしたらいいんですか？ それが一番あい手に、こうげきができそうなんだけど」

六花も答えを聞いたような顔をしている。隊長は腕を組んだ。

* * *

そこまで話を聞いたとき、隊長が六花と光流を呼びに来た。なんでも誰かに稽古をつけてやれ、とのことらしい。二人は「じゃあな」と言って行ってしまった。残された勇也は、風のように駆けて行った二人の後姿を見つめる隊長に聞いてみた。相手の後ろにまわるなんてことができるのか、と思ったからだ。

「...という話を聞いていたんですけど、なんて答えたんですか？」

すると、隊長は「何でそんな話」と言いながらも懐かしそうに答えた。

「それをするなら風くらい速くならんとな、ってな」

* * *

目を輝かせる二人に苦笑しながら、不可能を意味する言葉を口にすると、予想外の返事が返ってきた。

「じゃあ風になる！！」

隊長は目を見開いた。が、子供たちは無邪気に答えたのだ。

「だってそうすればできるんでしょう、だったらできるようになるまでがんばる、な、雪」

「うん」

* * *

「へえ、じゃあ宣言通りになったんですね」

「ああ」

感嘆の声を上げる勇也と共に隊長はかつての子供達を見やる。そこには見本のため手合わせをしている六花と光流の姿があった。成長するにつれ、隊一すばやく動くことのできるようになった二人は、ほかの者の目には風のように見えるのだ。

猫と本屋とめだかの塩焼き（光流7歳、六花6歳）

拾ってきた子猫を抱き上げて、七歳の光流は一つ年下の六花に愛称で呼びかけた。

「なあ、雪」

「なに、光？」

「こいつ、こんなちいさいはじゃ、ふつうのさかな、たべれないんじゃないかな」

「あ、そうかも。じゃ、うらのかわにいるめだかくらいなら、たべれるんじゃない？」

「でも、どうやっていきてるめだかを、おれたちでりょうりするんだよ」

「.....ろうそくでやくとか？」

「でも、ろうそくにものをちかづけちゃいけないって、いつもいわれてるじゃないか」

「だって、あんなにちいさかったらきれないから、やくしかないじゃん。やいて、しおかけたら、たべれるんじゃないかな」

「あー、しおやきってやつか。でもやっぱり、ろうそくでやくのはまずいんじゃないかな」

「じゃあ、どうするの？」

「うーん、と。あ、そうだ。ほんやのおじさんにきけば、わかるんじゃないかな」

「ほんやのおじさんって、いつもかいものによったときによる、ほんやのおじさん？」

「そう。あのおじさん、いつもじのよみかたとか、けいさんのしかたとか、おしえてくれるじゃん。まちでもひょうばんのものしりだって、いってたし」

「そういえば、なにかわからないことあったら、とりあえずあのひとにきいてみればいって、いわれたよね」

「うん。だから、きっとあのおじさんなら、めだかのしおやきのしかたもしってるよ」

「そうだね。じゃ、ねんのために、このこもつれていって、きいてみよう」

「めだかもつかまえて、もっていったほうがいいよな」

「うん」

まだ乳飲み子の子猫と、容器に入った生きためだかを連れてこられた本屋のおじさんが困惑するまで、あと一時間。

その心は誰がために（光流15歳、六花14歳）

青い空にちらほらと白い雲が浮かんでいる。明るい光を放つ太陽は確かにそこに出ているのに、その雨はいきなり降り出した。

「雪、走るぞ！」

自分の一歩後ろにいる幼馴染にそう声をかけて、光流(みつる)は走り出した。彼に少し遅れて、愛称で呼ばれた六花(りっか)も走り出す。抱えた紙袋が濡れない様に庇いながら、二人はしばらく無言で走っていた。

次第に強くなっていく雨足を避けるため、道に寄り添うように建つ東屋に走り込む。備え付けである木の台に紙袋を置いて、彼らはほっと息をついた。

「なんだってこんな時に振り出してくるんだ……」

げんなりした光流がそう言うと、濡れた前髪を掻き揚げながら六花が苦笑した。

「天气に文句言ったって、どうしようもないだろう？」

「そんなことわかってる」

彼女のもっともな意見に、それでも言いたくなるんだ、と彼は憮然とした。

この二人が初めて出会ったのは八年前、光流が七歳、六花が六歳の時だった。記憶喪失で海に流れ着いていた光流を、六花が拾ったのだ。

その六花も当時すでに両親を亡くし、彼女に残されていたのは家族で住んでいた軍の宿舎の一室のみ。六花は変わらずそこで寝起きをしていたが、当然幼い孤児が一人で暮らしていける訳がない。彼女は隣室に住む、父の親友だった王軍第一隊隊長の世話になっていた。光流はそこに転がり込むことになったのである。それは偏に、一人を世話するのも二人を世話するのも変わらない、むしろまとまってくれてた方が気が楽だ、と隊長が応じてくれたからだ。

その代わりとでも言うように、隊長は二人に毎日剣の稽古をつけた。彼らは当たり前のようにそれを受けながら育ち、そして当たり前のように、去年王軍に入隊したのだ。

今日は久々の休みを利用して、二人で買い物に行った。その帰りにこの雨に降られたのである。

「天気雨だからすぐに止む。どうせこの後何もないんだし、のんびり待ってたっていいじゃないか」

なだめるように言う六花に肩を竦めてみせて、光流は紙袋の隣に腰掛けた。彼に習うようにして、六花も紙袋の反対側に腰掛ける。そうしてしばらく、無言で雨を眺めていた。

「なあ、光(こう)」

「ん？」

愛称で呼ばれて光流は視線を向けるが、六花は雨に目を向けたままで続けた。

「なんで一昨年、入隊試験受けなかったんだ？」

唐突な質問だった。言葉に詰まった光流に目を向けて、六花は苦笑交じりに言う。

「別に私に合わせなくても良かったのに」

王軍入隊試験の受験資格は十三歳からだ。光流はそれを十四歳で受けた。六花の言う通り、一

つ年下の彼女に合わせるために。

「……わかってんだったら聞くな」

そう言って目を背けた彼に、六花は困ったような顔を向けた。

「そうじゃなくて。なんでわざわざ私に合わせたのかを聞きたい」

どうせ次の年には受けるのだから、先に受けてしまっても構わなかったのに。そう言う彼女にちらりと視線をくれて、光流は言った。

「いいだろ別に。俺がそうしたかったんだ」

「だからなんで」

「なんでも」

そう言って押し黙った彼を六花はじっと見つめていたが、やがてあきらめたように視線を逸らした。

それを確認して光流はそっと苦笑する。

言える訳がない。お前を一人にしたくなかったからだ、などと。

彼が入隊して隊務に出してしまえば、六花は一日の内の長い時間を以前家族と暮らした部屋に一人で過ごすことになる。今でも時々両親の葬式の夢を見ては飛び起きる彼女を知っている身としては、たとえ一年だけでもそれは避けたかった。本人が知ったら絶対に、そんなの平気だどっと受けに行けと怒っただろうが。

それが表向きの理由である。隊長にはそう説明したし、確かにそれも本心だ。

だが本当はもう一つ、隊長も知らない理由がある。そして実は、光流にとってこちらの方が大きかった。

出会ってすぐの頃、滅多に泣かない彼女の泣き顔を初めて見た時に決めたことがある。一雪を守る。泣くのを我慢しないように、笑っていられるように、お前の身も心も守る。

光流は己自身にそう誓ったのだ。そしてその誓いは今なお彼の心の一番奥に、決して違えられないものとして残っている。

だが入隊する時期がずれれば、傍にいられる時間が減ってしまう。さらに王軍は実力順で隊が分かれ、仕事の内容も違うのだ。実力が同程度でも所属期間が一年も違えば、同じ隊になれる可能性は低い。危険が常に伴う隊務で別々の仕事をしていけば、守ることは難しい。

自分の手が届かないところで六花に何かある、それが光流が一番嫌だったのだ。

「……結局俺が、一緒にいたかっただけなんだよな」

小さく小さく呟いた言葉は、雨音に消されて彼自身の耳にも届くことなく消えていく。

ふいに雨音に紛れて、六花が呟く声がした。

「……嫁入りだな」

「は？ ……嫁入り？」

いつの間にか自分の思考にどっぷりと浸かっていた光流は、耳に引っかかった言葉にぎょっとした。慌てて顔を上げると、六花は立ち上がって空を見上げている。日の光を受けながら降る雨はきらきらと光り、幻想的な雰囲気醸し出す。

「狐の嫁入り。こんな風に太陽が出てる時に雨が降るのは、狐が嫁入りをしているからだ、昔の人は考えたそう。確かに不思議な景色だから、そう考えたのもわかる気がするな、と。…どうした？」

説明をしながら振り返った彼女は、光流の呆気に取られた顔を見て不思議そうな顔をした。問われた光流は、はっと我に返るとしどろもどろに言葉を探す。

「い、や…、……なんでも、ない」

そして彼は誤魔化すように立ち上がり、きょとんとしている六花の隣に並ぶ。だが次の瞬間、空に目を戻した彼女が発した言葉に凍りついた。

「誰の元に、嫁ぐんだろう……？」

傍から見れば無邪気なだけのその言葉は、しかし光流が今しがた押し込めたばかりの戸惑いを引きずり出し、なおかつ増長させるのに十分なものだった。

彼は今の今まで、自分の幼馴染も将来結婚するであろうということを、一度も考えたことがなかった。将来のことなど、どうすれば彼女を守れるかと、本当にそれしか考えていなかったのである。そこに六花本人が発した『嫁入り』という言葉。本人としては天気雨の別名を呟いただけでも、主語を聞き取れなかった光流にはまさに青天の霹靂だったのだ。

そして彼は今更ながら、彼女が今年で十四だということに思い当たった。十四といえば、そろそろ年頃、あと二、三年もすれば結婚すらできるのだ。女だてらに軍に属していることなどが、そういうものの妨げになるとは思わない。六花が日に日に女らしくなっていくのは、共に暮らしている自分が一番よく知っている。狐でさえ嫁ぐのだ。本人が剣一筋に生きるとでも決めない限り、彼女が嫁がない訳はない。

そのことに、光流はようやく気付いたのである。

無言で空を見上げている六花を横目で見ながら、彼は心の中でそっと問いかけた。

—あとどれだけ、俺はお前の傍にいられる？

出会ってから今までの八年間、ずっと一緒にいた。自分にはそれ以前の記憶がないから、実質生きてきた時間のすべて、といっても過言ではない。そしてそのほとんどで、六花を守るという自身の誓いに忠実に行動してきた。彼女のためではない、自分のためだ。だが、これからは。

六花がこの人と定める人物が現れれば、今まで自分がやってきたことをほぼすべて、その者が行うことになる。傍にいるのも守るのも、自分ではなくなるのだ。

そこまで考えて、光流は自分の心臓が不穏な音を立てたのに気付く。同時に感情のうねりが怒濤のように押し寄せてきた。

—そんなの嫌だ。

彼女の傍にいるのは、守るのは、自分だ。今更他の奴にこの役目を渡せるものか。

思わず息が詰まるほどの感情の荒波は、彼に自分の想いを自覚させるには十分だった。そして自覚した途端に、感情の波は静かに引いていく。

「ああ、そうか……」

どうしてこんな簡単なことに気付かなかったんだ。いきなり納得したように呟いた光流に、六花は訝しげな声を上げた。

「光、さっきからなんか変だぞ。大丈夫か？」

そう言って見つめてくる彼女の瞳はどこまでもまっすぐだ。その中にゆれる心配と疑念を正確に読み取って、光流は苦笑する。

六花にとって自分は幼馴染だ。きっと、今の今まで自分がそう信じてきたように。ただお互いにかなり依存している自覚があるので、おいそれと離れることはまずできない。それは彼女も感じているはずだ。ならば、むやみに想いを伝えてこの関係を崩すことはしない。彼女も、そして自分も、そんなことは望んでいないのだから。

「ちょっと考え事してただけだ」

「そんな挙動不審になるまで、いったい何を考えていたんだ？」

間髪いれずに返ってきた質問は予想通りで、思わず付き合いの長さを感じてしまう。だから今後もそれが続くことを願い、光流はこう答えた。

「いつか、教えてやる」

幼馴染という枠を越えても平気だと思えたら、必ず。

「ああ、雨上がったな。雪、帰るぞ」

空の様子を確認した光流は、紙袋を抱えて歩き出す。慌てて追ってくる六花は、彼の隣に並ぶと念を押した。

「絶対だから、な、光」

「わかってる。……雪」

「ん？」

「……なんでもない」

離れる気なんて最初(はな)から無い。ただそれが今日を境に、離さないという意志に変わっただけだ。

その手に適う価値なれば（光流17歳、六花16歳）

ぐらりと足元が揺れる。あ、やばい、と思った時にはもう遅かった。

がっしょん！！ どたん！！

「つつう……」

凄まじい勢いで床に叩き付けられて、俺は衝撃で息を詰まらせた。頭をかばったせいで、背中を諸に打ち付けたのだ。冗談抜きで、ものすごく痛い。

なんとか衝撃をやり過ごして、上体をゆっくりと起こした時、誰かが廊下を走ってくる足音が聞こえた。はっと顔を上げるのと、部屋の扉が音を立てて開くのがほぼ同時。

「勇也っ!？」

血相を変えて飛び込んできたのは、俺が所属する王軍第一隊の副隊長、光流(みつる)さんだった。そのすぐ後ろに、同じく副隊長である六花(りっか)さんもいる。おそらく物音を聞いて駆けつけたのであろう二人は、椅子と一緒に床に転がっている俺を見て啞然とした。目を見開いた六花さんが尋ねてくる。

「……何やってるんだ？」

「……え、えーと、あそこにある紙みたいなもの、わかりますか？ あれを取ろうとしたんですけど……」

俺はそう言いながら、天井の端の部分の指差した。この状況を作り出したとも言える元凶は、どうしてかそこに張り付いている。

光流さんと六花さんの視線は天井に向き、その真下に置かれた椅子、さらに床に倒れた椅子と俺自身に向けられ、最後にお互いの顔へと移っていった。

あまりにもぴつたりと揃ったその動きはそのまま、一つ違いの幼馴染という二人の付き合いの長さを表しているのだろう。

床にへたり込んだまま、そんなことをぼんやり考えていると、光流さんがこちらに向き直った。腰に手を当てて苦笑している。

「つまり、椅子を重ねて、その上に立とうとしたら、均衡を崩して落っこちたってことか？」

「……はい」

その通りなのだが、言葉にするとなんとも情けない。そう思って肩を落とした俺に、光流さんは首を傾げた。

「そりゃ、椅子と椅子を重ねりゃ崩れるだろ。梯子が持ち込めないのはわかるが、なんでせめて卓と椅子にしなかったんだ？」

「うっ……」

正論だ。言葉に詰まっていると、彼はさらに追い討ちをかけるようなことを言う。

「たしかに、こんなに物がたくさん載っているんじゃ動かすのも一苦労だが、そもそもなんで、他の場所は整理整頓されてるのに、これだけこんなことになってるんだ？」

そう言って彼が指差した先には、様々な物が雑然と積み上げられた卓がある。

ぐうの音も出なくなった俺を見て、六花さんが苦笑しながら相棒の腕を叩いた。

「光(こう)、あんまり苛(いじ)めてやるな」

「雪、こっちはさっきのでかい物音を聞いて、何があったかと大慌てで走ってきたんだぞ？ 少しは嫌味くらい言わせろ」

お互いを愛称で呼びながらそんな会話をしているが、二人の目は笑っている。本気で言ってな

いのは明らかだ。俺はほっと息をついて立ち上がると、同じ年頃の上司達を改めて見つめた。

「お騒がせしてすみません」

そう頭を下げると、気にするなと肩を叩かれた。それより、と彼らの視線がまた天井に向けられる。

「あれ、なんなんだ？ お前が貼ったのか？」

「だったら取ろうだなんて思いませんよ。今さっき気が付いたんです」

いつから貼ってあったのかはわかりませんが、と言うと、光流さんと六花さんは顔を見合わせた。

「勇也が知らないってことは、前に住んでた人か？」

「じゃないか？ 紙の色からして、だいぶ古い物みたいだけど……」

俺達が住んでいるのは、第一隊に与えられている王軍の宿舎だ。城内にある三階建ての建物で、俺は二階の一番隅の一人部屋をもらっている。ちなみに隣と真下は空き部屋なので、先程の騒音の被害はないはずだ。被害にあった光流さんと六花さんは、俺の部屋の真上にあたる家族用の部屋に、二人で暮らしている。

夫婦以外で同年代の男女が共に住むことは、普通ならありえない。だが、本人達曰くただの幼馴染であるこの二人は例外中の例外だった。なんでも、光流さんが七歳、六花さんが六歳の時に、二人は揃って孤児になってしまったそうだ。そこで、隣の部屋に住む隊長に面倒を見てもらうという理由から、六花さんの家族が暮らしていた部屋に二人で置かせてもらったのだという。そして、成長して軍に入り、史上最年少である十七歳と十六歳の副隊長となってからも、彼らはそのままそこに住み続けているのだ。

そんな訳で、出入りがそれなりにある宿舎の元住人についても、二人は結構詳しいらしい。

「ここはずっと空き部屋だったからな。前に誰かいたのは四年位前か？」

「ああ。たしか前の前の副隊長じゃなかったか？ 結婚していて、街中にも家があったのに、なぜか休暇の時以外はここに住んでいた変わり者だ」

「あー、そういえばいたな、そんな人」

そんなことを言いながら、二人はその紙の真下に移動した。置いてあった椅子をどけて、光流さんが屈み込む。その肩に六花さんが手をかけたのを見て、俺は慌てた。

「え、あの」

「ああ、取ってやるから」

当たり前のようにそう言って、六花さんがひらひらと手を振る。光流さんが後を続けた。

「その卓の上を片すより、こっちの方が早いだろ」

その会話の間にも、六花さんが光流さんの肩にひょいと跨(またが)り、肩車状態になる。無駄なく筋肉の付いた彼の身体は、彼女を乗せたまま何の苦もなく立ち上がった。

「届くか？」

「大丈夫」

六花さんはそう答えると、天井に張り付いた紙に手をかけた。糊で張り付いていたようで、紙はぱりぱりと軽い音を立てながら剥がれていく。破かないよう丁寧に剥がし終えた彼女は、手を伸ばしてその紙を俺に渡してくれた。

「はい」

「あ、ありがとうございます」

礼を言って受け取ると、六花さんはにこりと微笑んだ。そんな彼女を見上げて、光流さんが首を傾げる。

「雪、お前、体重増えたか？ 前よりちょっと重い気がするぞ」

その言葉に俺はぎょっとした。普通そんなことを女性に言おうものなら、言われた方は烈火のごとく怒り出す。第一、六花さんは決して太ってなどいない。それどころか、しなやかな筋肉が付いた体つきは華奢と言ってもいい程だ。だが俺の予想を裏切って、彼女は首を捻っただけだった。

「そうか？ おかしいな、食べる量も運動量も変わってないはずだけど……」

「知ってる。もしかして背が伸びたんじゃないか？」

そう言いながら彼女を肩から下ろして、光流さんは頭一つ分違う幼馴染を見下ろした。ぽんとその頭に自分の手を載せる。

「ああ、やっぱり伸びたな」

「……その割には目線が変わってない、というか、どんどん遠くなってないか？」

「そりゃ、俺だってまだ伸びてるからな。それに、これ位差があった方がちょうどいい」

そう言う光流さんの背は、通常の男性平均よりずっと高い。六花さんは六花さんでその男性平均程の身長だ。無論女性の平均身長など、どこ吹く風である。

そんな平和な会話を聞きながら、ちょうど二人の中間の身長である俺は苦笑した。いつものことだが、仲が良い。どうしてこれで恋人同士じゃないのだろう、と思いながら、手渡された紙を広げてみた。かさこそと音がして、古い紙特有の匂いが鼻をつく。そうして、書かれていた言葉を読んで、俺は絶句した。

「どうした？」

ぴしりと固まった俺に疑問を持ったのか、光流さんと六花さんが会話を中断して、横から覗き込んでくる。明らかに子供が書いたであろう、下手くそな平仮名で書かれた言葉に、二人はすぐに眉を寄せた。

「……やきりんごは」

「せいぎだ……？」

なんだそれ、とその顔に書いてある。光流さんが顔をしかめた。

「俺は少なくとも、そんなことは隊長に教わらなかったぞ。それとも、街では違うのか？」

「俺だって聞いたことありませんよ」

街育ちの俺がそう答えると、六花さんが肩をすくめる。

「たぶん、この子の親が焼き林檎が好きでそう教えたか、この子自身の大好物が焼き林檎だったんだろう。でもだからって、正義っていうのは言いすぎだな」

「にしても、なんだってこんなものがこの部屋の天井に……？」

背の高い二人が肩車をしなければ届かなかったのだ。子供にはどうしたって届かない場所である。

俺がそう言うと、光流さんも六花さんも首を振った。どんなに宿舎やその住人に詳しくても、人の部屋の内情までは知らないのだ。

「ま、考えても仕方ないだろうよ。それよりも勇也、お前、それをどうにかした方がいいんじゃないのか？」

それ、と光流さんが指差した先を目で追うと、そこには俺と一緒に落下した椅子があった。三本あるその足は、内の二本が見るも無残に折れてしまっている。よほど打ち所が悪かったらしい。

「ああっ、しまった……」

思わず声を漏らして、俺は慌ててその足の断面を見てみた。が、どうやってもくつつきそうに

ない。

「それはもう、新しいのを買うしかないだろうな」

六花さんにそう断言されて、俺は肩を落とした。

「ですよね……」

はぁ、と盛大に溜息をつく、光流さんが気の毒そうに提案してくる。

「買いに行くなら、今日行った方がいいんじゃないか？ まだ昼前だし、明日からはまたしばらく仕事だぞ？」

彼の言う通りだ。壊れた椅子の復旧を諦めて、俺はよいしょと立ち上がる。行くなら早い方がいい。そう思って出かける準備を始めようとしていたら、何を思ったか、六花さんがこんなことを言い出した。

「行くなら私達も一緒に行こう」

その言葉に光流さんが頷く。

「そうだな。ついでに、その卓の上を片付けるための棚でも買ったらどうだ？ 持つの手伝ってやるからさ」

平然とそんなことを言う二人に、俺はまた慌てた。

年頃こそ同じものの、相手は剣の腕では軍の一番手二番手を務める王軍第一隊副隊長。尊敬する大先輩だ。そんな人達に手伝わせるのは、いくら何でも気が引ける。

「そんな、お二人の手をこれ以上煩わせるなんて……」

そう言うと、光流さんが呆れたように笑った。

「ああ、そんなの気にするな。それから勇也、前から言ってるが、別に敬語じゃなくたっていいんだぞ？ 歳は同じなんだし、第一今日は休日だ」

「そういう訳にもいきません」

光流さんも六花さんも事あるごとにそう言うが、相手はあくまで上司であり先輩である。それにこれは二人の実力に対する、俺なりの敬意の表し方なのだ。

そう言い張ると、六花さんがおかしようにしながら付け足した。

「でも、どうせ私達も午後から買い物に行く予定だったんだ。ついでだと思ってくればいい」

そこまで言われては否と言えない。俺は恐縮しながらも、ありがたくその申し出を受けることにした。

街に繰り出した俺達は、まず手始めに大きな商店が建ち並ぶ通りへ出た。

この街で買い物ができる場所は、日用品や大物家具を取り扱う商店が並ぶ通りと、食料を売る屋台が並ぶ通りとに分かれている。

「お二人は何を買うんですか？」

俺がそう尋ねると、光流さんと六花さんは困ったように顔を見合わせた。何と答えるべきか、迷っているようにも見える。買う物を聞いただけなのに、何をそんなに迷うことがあるのだろう。そう首を傾げた俺を見て、六花さんがうーん、と唸った。

「カーテンに使う大きな布、って言っても、たぶん想像つかないだろうな」

そう言われて、俺はますます首を傾げた。

カーテンは、窓にかけて外から中が覗けないようにするための布だ。それなら、そのまま窓にかけられる状態になった物が、その辺にいくらでも売っているはずである。それなのに、わざわざ

ぎ布を買うとはどういうことだろう。

その疑問が伝わったのだろう、光流さんがやっぱりな、と苦笑した。

「俺達が言ってるカーテンってのは、窓にかけるもんじゃないんだ。うちの部屋、来たことあるだろ？ その時に、壁に寄せてある、垂れ幕みたいなのに気付かなかったか？」

そう言われて思い出した。たまたま用事があったって訪ねた時に、かなり大きな垂れ幕が壁に寄せられているのをたしかに見たことがある。何に使うのだろうと思ったが、立ち入った事を聞く訳にもいかないと考えて、あえて何も聞かなかったのだ。

「あれで部屋を二つに分けるんだ。せめて着替えの時と寝る時はそうしろ、それが二人で暮らし続ける条件だって、俺が十二でこいつが十一の時に隊長に言われてな」

「その時にかけた布に、昨日大穴をあけてしまったんだ。流石にあれじゃ、使い物にならないからな。新しい布を買いに来たんだ」

二人の言葉に、俺はなるほど、と頷いた。いくら幼馴染でも、年頃の男女である。そういう工夫はちゃんとしている訳だ。

それに彼らの部屋は家族用なだけあって、俺の部屋の二倍以上の広さがある。その広い部屋を二分するのだから、普通のカーテンでは小さすぎるのだ。きっと大きな布を買ってきて、自分達で作るのだろう。

それにしても、と俺は目を瞬かせた。

「大穴をあけたって、昨日いったい何があったんですか？」

聞いた途端に、二人は揃って気まずそうな顔になる。

「.....ちょっと、な」

「まあ、色々.....」

この人達にしては珍しく歯切れの悪い返事だ。聞いてはいけないことだったのだろうか、と俺まで気まずい気分になってしまう。

そうこうしている内に大きな手芸店を見つけて中に入った。店にある一番大きな布を出してもらって、それを眺めながら光流さんと六花さんが考え込む。

「これだけあれば、大きさは足りるな」

「ああ。あとは素材と柄か。.....これなんかどうだ？」

「それだと、また昨日みたいなことがあったら破けないか？」

「.....もう、あんなのやりたくないんだが？」

「俺だってやりたくないさ。でもまた、五年やそこらで付け替えたりするのは面倒だからな。できるだけ丈夫な方がいいだろう」

「それもそうだな」

じゃあこれか？ というような会話をしている二人の背を眺めながら、俺は半ば啞然としていた。この二人の幼馴染らしからぬ言動には慣れてきたつもりだったが、まだ足りなかったようだ。どうやら彼らは、この先五年以上一緒に暮らすことに何の疑問も抱いてないらしい。どうしてそれで、ただの幼馴染などと言うのだろう。

そう思っていると、店員らしき女の子がこそっと話しかけてきた。

「あの、あのお二人はどういう関係なんですか？」

「.....ただの幼馴染、だそうですが」

「あれで、ですか？」

目を見開く彼女に頷いて、ああでもないこうでもないと言い合っている光流さんと六花さんに目を戻す。

「若夫婦にしか、見えませんよね？」

ぼそりとそう言ってみると、女の子は力いっぱい頷いた。

「だとばかり思っていました。それにしても、流石に若すぎると思ったんですけど……」

背後でそんな会話が交わされているとは夢にも思っていないだろう二人は、どうやら気に入る布を見つけたらしい。会計を済ませると、待たせたな、と声をかけてきた。俺はそれに首を振って、一つ提案をする。さっきから、腹がぐうぐう鳴っているのだ。

「あの、家具屋に行く前に、昼飯にしませんか？」

「でさあ、うちの親父はもともと優秀な兵士だったらしいんだけどさ」

背後から聞こえてくるそんな声を聞くとともにしに聞きつつ、俺は目の前に並んで食事している光流さんと六花さんを眺めていた。こうして見ていると、目鼻立ちの整った、ただの男女にしか見えない。この食堂にいる者は誰も、この二人が軍内でも語り草になる程の兵士だとは思わないだろう。

もう一人、語り草になっている人を思い出して、俺は二人に尋ねてみた。

「お二人は隊長に育てられたんですよね？ 隊長って、軍以外ではどんな人なんですか？」

「んー、軍にいる時とあまり変わらない気がするけどな。何事に対しても豪快で、自分の信念に忠実な、食えない狸親父だよ」

褒めているのか、けなしているのか、わからないことを言いながら六花さんが笑った。その隣で光流さんが頷く。

「俺達は何しても、とやかく言わなかったが、人様に迷惑をかけるようなことだけはするな、とは事あるごとに言われたな。それでいて、叱る時には怒鳴りつけるんじゃなく、何が悪いかを延々と言い連ねていくんだぜ？ あれは怖かったな」

そう言いながら叱られた時のことを思い出したのか、光流さんは顔をしかめてみせる。延々と説教する隊長を想像して、確かにそれは怖そうだ、と俺が頷いた時だった。

「でもよお、その光流と、六花、だっけ？ そいつらって、そんなに強いのかねえ？ 俺達と大して変わらねえ歳だっていうじゃねえか」

「じゃあ軍に入ってから、まだ三年かそこらだろ？ それで第一隊の副隊長だなんて、納得いかねえよな」

「実は俺らより弱かったりして」

後ろからそんな会話が聞こえてきて、俺は思わず声を上げそうになった。後ろを振り向こうとしたが、それを光流さんに止められる。

「いい、言わせておけ」

でも、と反論しかけたが、当の本人達は平然とお茶をすすっている。特に気にもしてないらしい。もしかしたら慣れているのかもしれない。それでも俺が苦い顔をしていると、光流さんが苦笑交じりで何かを言おうとする。が、次に聞こえてきた言葉にその動きが止まった。

「たしかそいつらって、第一隊の隊長に育てられたんだろ？ あれじゃね？ その隊長が、我が子可愛さに無理矢理昇進させたとか」

「俺が聞いた話では、そいつら、軍隊一般中等教育終了証ももらってないらしいぜ」

「え、それって第三隊から第二隊に上がる時にもらうやつだろ？ じゃ、実は第二隊に上がる実力もないところを、親の七光りで上がったってことかよ？ とんでもねえ親だな」

そう言ってけたけたと笑う声を聞きながら、俺は冷や汗をかいていた。目の前に座る二人の雰

困気が先程と一変してしまっている。完全に据わった目で、光流さんがぼそりと呟いた。

「あいつら、第二隊の奴らだな」

「ああ、でもまだ第三隊から上がったばかりってところだろう。紋章が新しい」

六花さんがついと目を細めて返事をした。

王軍は実力順に上から第一隊、第二隊、第三隊に分かれている。第一隊は王の近衛軍でもある精鋭部隊だが、第二隊と第三隊は城下街の警護に当たる隊だ。制服は特にないが、軍の人間は常に帯剣して歩くよう言われているし、第二隊、第三隊では街中での勤務中は紋章をつけることが義務付けられている。軍の人間であるかどうかはすぐにわかるのだ。

「馬鹿馬鹿しい。あの実力主義の隊長が、そんなことをする訳ないだろう」

光流さんがそう吐き捨てるように呟いた。その隣で六花さんが黙って頷く。自分達が侮辱されたことは気にならなくても、養い親が侮辱されたことには相当腹を立てているらしい。

たぶん、自分達のことを悪く言われても怒らないのは、彼らの心情を慮ってのことだろう。

通常は入軍したら、まず第三隊に配属される。それから実力が評価されれば上の隊に上げられるし、評価されなければずっとそのままだ。特に、第一隊と第二隊の間には、大きな実力の開きがある。そのため、俺のように十代で第一隊に上げられる者も稀なのだ。光流さんや六花さんのようにその副隊長になるなど、はっきり言って前代未聞だ。

それがわかっているから、後ろで騒いでいる青年達の言い分もわからなくはない、と二人は考えたのだろう。だが、それと隊長が非難されることは話が別だ。

それに、と俺は密かに溜息をついた。そんなことは、光流さんと六花さんの実力を知らないから言えるのだ。実際にこの二人が剣を振るうところを見れば、絶対にそんなことは言えなくなる。軍の一番手二番手の称号は、決して飾りではない。

どうするつもりなのかと思っていると、六花さんが何食わぬ顔で店員に勘定を申し出た。驚いている俺を尻目に会計を済ませると、光流さんと六花さんは並んで歩き出す。その時、件の青年達の一人が大声で叫んだ。

「うるせえ、焼き林檎は正義なんだよ！」

聞き覚えのありすぎる言葉に、立ち上がりようとしていた俺は固まった。どうやら仲間の一人に、こんなに暑いのになんで焼き林檎を食べているのか、とからかわれたらしい。その言葉は仲間達は大いに受けて、笑いの渦が沸き起こっている。

その横を、光流さんと六花さんは何でもないかのように通り過ぎようとした。が、その際に六花さんが立ち止まり、軽く背伸びをすると光流さんの耳に何かを囁く。光流さんがそれを受けて、ちらりと青年達の方に視線をくれた。それからまた六花さんに向き直ると、柔らかく笑って歩き出す。そのまま食堂を出て行ってしまった。

その様子を見ていた店員が、思わず、というように微笑むのが見える。微笑ましい、恋人同士の仕種だと思ったのだろう。事情を知らなければ、俺だって間違いなくそう思った。

とにかく二人の後を追おうと、俺は立ち上がる。食堂を出る直前にこっそりと振り向くと、件の青年達が色めき立っているのがわかった。

「悪い、勇也。家具屋に行くの、もうちょっと待ってくれ」

先をゆっくりと歩いていた二人に追いつくと、開口一番に光流さんにそう言われた。

「たぶん、そろそろ今の奴らが追いかけてくるだろう」

「ああいう奴らは、目の前であんなことをされると馬鹿にされたと感じるらしいからな」
傍から見ればどこにでもいるような男女の仕草には、そんな狙いがあったらしい。向こうから喧嘩を吹っかけさせようというのだ。

思わず、お好きにどうぞ、と言いたくなってしまふ。周りからどう見えたかは知らないが、二人の背中からはこれ以上ない程の怒気がにじみ出ていたのだ。今だって、かもし出す雰囲気はそれはそれは恐ろしい。この二人を相手にしようという青年達が気の毒になってさえる。

「お前は手出ししなくていいからな」

光流さんがそう言い切るのと同時に、俺達は人気のない路地に入った。その途端、後ろから声がかかる。

「おい、てめえら」

「さっき俺らに眼(がん)付けただろ」

その声に振り返ると、先程の青年達が五人立っていた。まだ十代の後半だろう彼らは、皆帯剣し、第二隊の紋章を付けている。

それを眺めながら、俺はこっそり、邪魔にならない場所へと移動した。助太刀に出ていく気は全くない。手を出すなど言われたのもあるし、この程度の連中に我が隊の副隊長が負けるはずもないからだ。

その光流さんと六花さんはというと、青年達の言葉に同時に溜息をついている。

「まったく、第三隊で何を教わってきたんだか」

「ああ、これじゃその辺のごろつきとまるで変わらないな。仮にも軍の人間なのに、嘆かわしい」

自分達で焚きつけておいて、平然とそんなことをのたまう二人である。

「なんだとお!？」

「どこの隊の奴か知らねえが、覚悟しやがれ!!」

いきり立つ青年達に光流さんがにやりと笑ってみせた。

「ああ、しょうがねえから、練習相手になってやるよ。いいか、喧嘩じゃねえぞ。練習だ。軍の人間同士の喧嘩なんて馬鹿馬鹿しいにも程があるし、後始末も面倒だからな」

実に白々しい。この二人は血こそ繋がっていなくても、明らかにあの隊長の子供だと、俺は変なところで感心してしまった。それにしても、第二隊に入ったばかりの兵士に第一隊の副隊長が揃って稽古をつけてやるなど、ずいぶんと気前のいい話である。

が、そんな事とは知らない青年達はますます眉を吊り上げた。

「この、偉そうに……!」

「てめえら、何様だよ!？」

今度は六花さんが大変艶やかに微笑んでみせる。

「名前を聞くなら、まず自分から名乗るのが礼儀だろう？」

その言葉に青年達が次々と、自分は王軍第二隊の何々だ、と誇らしげに名乗る。どうだ、恐れ入ったか、と言わんばかりの彼らに、俺は傍から見ていて苦笑した。

ふんふんと彼らの名乗り上げを聞いていた二人は、それが終わると同時に自分達も名乗り上げる。

「王軍第一隊副隊長、光流」

「同じく副隊長、六花」

それを聞いて青年達はぎょっとした。さっきまでさんざん悪口を言ってけなしていたが、史上最年少の副隊長の噂は彼らの中に染み渡っているのだろう。が、それでも先程自分達で下した結

論に自信があったらしい。こいつらに勝てれば自分達の強さが認められる、という思考が、ありありとその顔に浮かんだ。

「で、どうする？ 一人ずつ来るか？ それとも一斉にかかってくるか？」

どっちでもいいぞという風に、光流さんが投げやりに聞く。それを聞くや否や、青年達は二人を取り囲んだ。どうやら一人ずつかかっていく程の勇氣はないようだ。五対二であれば、確実に勝てると思ったのだろう。

次々と抜剣していく青年達を眺めながら、光流さんと六花さんは背中合わせになった。理由は知らないが、複数の敵を相手にする時には必ず、彼らは背中合わせになるのだ。

「さて、じゃあ、みっちり教育してやりますか」

「ああ」

そう言いながらも、剣を抜こうとはしない。構えることすらせず、ただ立っているだけだ。その様子に、青年達の方が動揺する。

「どうした？ かかってこいよ」

光流さんにそう促されて、我に返ったらしい一人が気合いを上げながら剣を振り上げた。それを合図に、他の四人も一斉に襲い掛かる。が、光流さんも六花さんも呆れたように肩をすくめただけだ。それから、ぱっと身を翻す。その先は目で追うのも一苦労だった。

「動きが遅いっ！」

そう言いながら六花さんは一人の剣を避けると、剣を握るその手に手刀を叩きつける。その衝撃でそいつが剣を取り落とすと、すぐさま罵声が飛ぶ。

「たったこれだけで剣を取り落とすな！」

そう言ってそのみぞおちに拳を叩きこむ。それだけで、そいつはあっけなくくずおれた。

「ぼーっとしてんじゃねえ！」

そう叫ぶ声に目を移すと、光流さんが別の青年を相手にしている。その相手は、彼にいきなり間合いを詰められて動きが止まってしまっていた。

「自分の間合いと相手の間合い位、瞬時に判断しろ！」

その言葉と同時に、その青年もみぞおちを殴られてうずくまった。

その後も、残りの青年達に向けて二人の罵声が飛ぶ。

「振り上げが大きいぞ！」

「肩に変な力が入ってるぞ！」

「避けられたら、すぐに剣を返して切りかかれ！」

「動きを止めるな、やられるぞ！」

「痛みをひるむな、殺されたいのか！」

「剣を落としたり、素手でも戦え！ 諦めるな！」

その『練習』は、実にあっけなく終わった。五人の青年達は皆、地面にのびて動けなくなってしまったのだ。

「お見事」

傍観者を決め込んでいた俺は、本心からそう呟いた。光流さんと六花さんは一度も剣を抜かずに、己の拳だけで彼らを戦闘不能にしてしまったのだ。あんなに叫びながら立ちまわっていたくせに、息一つ切らしていない。

「まったく、口ほどにもない」

光流さんがそう呟いて、前髪を掻き揚げる。その隣に並んだ六花さんが頷いた。

「第三隊の隊長は、よくこんなのに軍隊一般中等教育終了証を渡したな」

それから俺の方を振り向くと、それまでの険しい顔が嘘のように、人懐こい笑顔を浮かべる。
「待たせたな、勇也」

「いえ、お疲れ様です」

こちらも笑って応えた時、ようやく体を起こした青年の一人が震える声で叫んだ。

「あ、あの、すみませんでした！！」

それに呼応するように、他の青年達からもばらばらと謝罪の言葉が発せられる。ようやく、自分達はとんでもない相手に喧嘩を売ったのだと理解したらしい。しかも知らなかったとはいえ、食堂の中では大変失礼なことを言って笑い物にしていたのだ。

先程怒り狂う二人を見てしまったため、なんと答えるのかと俺の方が身構えてしまったが、光流さんも六花さんも相手を叩きのめしたことで気が済んだらしい。光流さんがふっと笑った。

「俺達は別に謝られるようなことはしてないぞ？ 頼まれて、稽古をつけただけだからな」

その言葉に、青年達の顔がぱっと輝く。実際にその強さを目の当たりにして、史上最年少の副隊長達を改めて尊敬したらしい。現金な奴らだ。

「はい、ありがとうございます！」

そう頭を下げた彼らの一人に、六花さんがふと目を留めた。食堂で、焼き林檎は正義だと豪語していた青年だ。

「お前、もしかして孝太さんの息子さんか？」

何の話かわからずに、俺がきょとんとしていると、光流さんがにっと笑って教えてくれた。

「孝太さんってのは、お前の部屋に住んでた元副隊長だよ」

「え、じゃ、あの紙を張り付けたのは……？」

「あいつだろうな」

その焼き林檎好きの青年は、六花さんの言葉に驚いたように声を上げている。

「父をご存じなんですか？」

「ああ。小さい時、よく可愛がってもらった。怪我で引退されてからは全く会えてないけれど。お父さんによろしく伝えておいて欲しい」

「はいっ！」

その青年はまだ何か話したそうだったが、六花さんはくるりとこちらに向き直った。

「よし、じゃ家具屋に行こうか」

「そうだな。延々と待たせたんだから、帰りに何か奢ってやるよ」

そんなことを言い出した光流さんに、俺は焦って首をぶんぶんと振る。

「い、いえ、そんな……」

「遠慮するなって。ほら、行くぞ」

そう言ってさっさと歩き出した二人の後を、俺は慌てて追いかける羽目になった。

翌日の夕方。用事があって王軍第一隊隊長の部屋を訪れた俺は、そこで思わぬ来客を目にした。昨日の青年五人組である。

目を丸くする俺に、隊長が笑いながら事の次第を説明してくれた。

なんでも、六花さんに声をかけられた焼き林檎好きの青年が、家に帰って彼女の言付けを父親である孝太に伝えると、どうしてその二人に会ったのかと聞かれたらしい。第一隊と第二隊は働く場所が違うため、めったに遭遇することがない、ということを知っていたからだろう。そこで

その日の経緯を説明すると、途端に孝太の雷が落ちた。五人とも集められ、延々と説教された挙げ句に、隊長に謝ってこいと送り出された、というのだ。

「怪我で引退しても、そういうところが孝太は全く変わってないな」

と、隊長はなにやらご満悦だ。彼は別に怒る気もないらしい。

するとその場にいた青年の一人が、恐る恐るという風に口を開いた。

「あの、この期に及んでこんなことを聞くのもどうかと思うんですけど、光流さんと六花さんが、軍隊一般中等教育終了証をもらってないっていうのは……」

「ああ、本当だぞ」

あっさりと言った隊長に、俺は仰天した。青年達も声が出ない様子である。そりゃそうだ、あれだけ実力があるのに、しかも今現在第一隊に所属しているのに、もらっていない訳がない。

そう思ったのだが、隊長がおかしそうに笑った。

「なんだ、勇也も聞いたことないのか？ あいつらはそもそも第三隊に所属していたことすらないんだ。もらえるはずがないだろ？」

その言葉に、俺は自分の耳を疑った。そんなことはありえないはずなのだ。

そう言うと、隊長は笑いながらその理由を説明してくれた。

王軍に入るには、入軍試験を受ける必要がある。十三歳以上なら誰でも受けられる試験だ。が、そこで審査された身体能力やとっさの判断力が基準に足りていなければ、その場で落とされる。そこでは、それまで剣を握ったことがあるかはともかく、とりあえずやってみろ、と言わんばかりに、教官相手に手合わせもさせられるのだ。

「その手合わせに、あいつらは揃って教官に勝っちゃったんだな。その教官だって手加減していた訳じゃない。むしろ全力だったそうなんだが、それまでずっと軍の第一線で働いていた兵士に、たった十四と十三のガキが勝っちゃったんだからな。教官も驚いて、あいつらを第三隊に入れる訳にはいかないって言って、第二隊に入れたんだ」

もしそこで第三隊に入れてしまえば、周りとの実力の差がありすぎてしまうというのだ。

「でもな、一年経たない内に、今度は第二隊の隊長が俺に泣きついてきた。お宅の養い子達は強すぎる、第二隊にいても宝の持ち腐れだ。それにこのままじゃ周りの兵士が、あんな子供に負けたと落ち込んで、使い物にならなくなってしまう。引き取ってくれ、ってな」

それで、あいつらは入軍一年足らずで第一隊に入ってきたんだ、と隊長はお茶をすすりながら語った。

「で、しばらくしたら、怪我した孝太の後に副隊長の任に就いていた奴も、引退するって言い出したからな。どうせなら実力もある若いのを育てようと思って、あいつらを副隊長にしたんだ」

「はあ……」

ずいぶんと壮絶な経歴である。俺は改めて、光流さんと六花さんに感嘆した。

呆然とその話を聞いていた青年の一人が、心ここにあらずといった感じで呟いた。

「いったい、いつから剣を握っていたら、そんな風になれるんでしょう……？」

すると、隊長はなぜか苦笑した。

「俺が引き取ったのとほぼ同時だから、十年前だな」

ということは、光流さんが七歳で六花さんが六歳の時だ。そのことに思い当って、俺は愕然とした。いくらなんでも早すぎる。普通なら、どんなに早くても十歳にならない子供に剣を持たせたりしない。

「それはまた、早い、ですね……」

これまた呆然としていたもう一人の青年が呟くと、隊長は、まあな、と言った。

「やってみるか、と持ちかけたのは俺なんだが、二人ともやたらと食いついてきてな。しかも、俺は剣を振る型しか教えなかったのに、気が付いたら自分達で手合わせして遊んでた」

「遊んで、ですか……？」

俺が問い返すと、隊長が重々しく頷き返す。

「あの頃のあいつらにとっては遊びだったんだ。俺が仕事から戻ってくると、よく二人揃って傷だらけで眠りこけてたよ。おかげで、しょっちゅう傷の手当てをさせられた」

そう言われて、顔も腕も傷だらけの小さな二人が、仲良く寄り添って眠っているところを呆れ顔の隊長に揺り起こされる、という光景がありありと脳裏に浮かんだ。たしかに、あの二人ならやりかねない。

「今でもよく、休みの日に手合わせしてるぞ。あいつらの辞書には、余暇って言葉はないらしい」

隊長がそう言って溜息をついた時、部屋の扉ががちゃりと開いた。

「あれ？ お取り込み中でしたか？」

そう言って小首を傾げたのは、たった今まで話題に上がっていた六花さんである。まさに噂をすればなんとやら、だ。

彼女の腕には氷と果物が入った大きな器が抱えられている。

「いや、大丈夫だ。それより、なんなんだ？ その氷」

隊長に問われて、六花さんはにこりと微笑んだ。

「今日は暑いから、久しぶりに親子で夕涼みでもしようかと思ひまして。今、光がこれを取り分ける皿を取りに行ってます」

「じゃあ、人数追加だ。ここにいる全員分の皿を用意してくれ」

「え……」

隊長の言葉にぎょっとする。流石に親子水入らずの邪魔をする気はない。それは青年達も同じ気持ちだったろうが、六花さんはあっさり承諾してしまった。

「わかりました」

そう言って抱えていた器を卓の上に置くと、身を翻して部屋を出ていってしまう。すぐに光流さんと共に戻ってくるだろう。

その背を啞然と見送っていると、隊長が俺に向かってにやりと笑った。

「俺はえこひいきをするつもりはないからな。その手に見合う評価はしてやるよ」

突然そんなことを言われて、俺は一瞬、何を言われたのかわからなかった。何度か瞬きをした後、見込みはあるのだから頑張れ、と言われていたのだとようやく気が付く。

「はい、頑張ります」

そう答えると、隊長は満足そうに頷いた。

「おう、せいぜい励んで、あの二人をとっとと追い抜かすんだな」

いやそれは無理です、と喉まで出かけた言葉を、すんで飲み込んだ。自分で決めつけてしまえば、できることもできなくなってしまう。そう教えてくれたのは、まぎれもないあの二人だ。だから、代わりに心に決める。

いつか絶対、あの二人と互角に戦えるようになろう。そしてそれができたら、その時初めて、以前から言われていたように敬語を改めよう。

それが俺にとって、自分で自分に下す正当な評価だと、そう思った。

だからそれまでは何を言われようと、どんなに呆れた顔をされようと、このままでいさせてもらおう。

そう決めると、俺は立ち上がった。

「二人で運ぶのは大変でしょうから、手伝ってきます」

そう言って隊長の部屋を出ると、俺は尊敬する先輩のもとへと駆け出したのだった。